

---

# 巫女舞闘伝ののか一閃

ふるうつ盆地

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

巫女舞闘伝のか一閃

### 【Nコード】

N0722H

### 【作者名】

ふるつつ盆地

### 【あらすじ】

あなたはまだ、本当の巫女を知らない。十人の巫女が織り成す、驚天動地な本格舞闘巫女ノベル、ここに開幕！世にはびこる数多の巫女をぶっちぎり、萌えない巫女は、よく「燃え」る！

第一帖 神器一転く御山の姫の奇勝か絶望く 巻（前書き）

この小説には、『巫女』ばかり出てきます。

この小説には、『魔法』は出てきません。

この小説には、『吸血鬼』は出てきません。

この小説には、『男性』がほぼ、出てきません。

この小説には、『百合』がほんの少し、香る可能性があります。

この小説には、『巨大ロボ』は出てきません。

この小説は、『異世界ファンタジー』ではありません。

この小説の主題は、『日本』です。

## 第一帖 神器一転、御山の姫の奇勝が絶望、壱

十六歳の誕生日の朝に、

「あなた、実は……」

なんて、神妙な顔つきで、両親に出生の秘密を激白されたい需要って、いまだに健在なのかしら？

ま、今から思い返せば、私も大人気げなかったってというか、  
「う、うそでしょ？」

やめてよ、そんな、冗談だって言うて！

私、私は、お父さんとお母さんの娘だもん！ 実の親なんか知らないもん！」

くらいの反応を両親が期待していたであろうことを気づいていながら、

「あ、うん。やっぱり？」

人間、真実を目の当たりにすればするほど、平坦な反応しかできないなあ、というか、心情的には（何を今更……）な呆れの方が大きかったわけで。

ほら、状況証拠が完全にそろっていて、絶対にこいつが犯人って読めちゃった推理小説に、それでも期待するのは実行犯の裏側の真犯人だったり、驚天動地の動機であるわけで、そういうのはあらかじめストーリーに巧みに練りこまれて初めて活きる代物なわけ。

なのに私の場合は、証拠が揃いまくったあげく、足りなかったのが両親の告白くらいだったっていう状況を数年経ていたわけで……

どんなに面白いラブコメも、主人公二人の気持ちが固まっちゃうとマンネリ化するよねえ、というか、本当だったら感情的に盛り上がるはずの場面を、「あ、やっとなの？」と冷めた対応しかできなかったのは、決して私の性格のみに起因していたわけではないということ、強くここに主張するものである。

というかなあ。物心ついた子供が初めて両親以外の社会に触れる

ときに、何がカルチャーショックって自分が同年代の友達と感覚を共有できないってことを、肌身を持って知らされるのが一番精神的に来るのであって、

『世間一般の日本人には、カミ様は見えない』  
という現実、それはそれは幼い私の無垢な心に、深々と突き刺さったのでありますよ。

考えてみれば物心つく前から地元の神社を遊び場にしていて、カミ様たちとごく当たり前にスキンシップしている様を神主さんたちに見せつけては、やれ神童だ、やれ巫女さんだとチャホヤされて喜んでいた私は、その時点でおよそ、普通なんていう範疇を大いに逸脱している。

おまけに忘れもしない六歳時、

「へい、その美少女さんよ。うちの固くてふっとい神剣、ちよつと握ってみいへんか？」

「いやっ！」

「……アイスあげるから」

「はあげんだっつ？」

そんな安易な理由で契約を交わしてしまったのが、実は地方では有名なご神体を有する神社の宮司さん相手だったわけで、以降今日まで十年間、それはそれは立派にでっかい神剣を携えて、夜はパトロール、祭じゃ神楽舞と、八面六脾の活躍をしてきてたりするわけですよ。

その上、同い年の巫女見習い三人とチームを組んでのパトロールは、靈的にやばげなスポットを回っては御払い、もしくは神剣で散らすっていう程度の、どっちかと言えば地域住民の皆様から温かく見守ってもらう方が比重の高いお手伝いのはずが、蓋を開けたら人に害なす気満々の、妖怪とか悪霊との丁々発止な本気戦闘<sup>マシバトル</sup>。

神楽舞にしても、私の場合は奉納するべきカミ様たちからあれやこれやと演技指導や声援を受けながらで、特に中学入学以降は色気が足りねえ、乳見せろや、発育悪いぞ、な罵詈雑言にフェイズシフ

トしゃがって、カミ様と本気口論するような、職業巫女歴十年目のベテランですらあるわけで。

それはつまり、少なくとも学校区の皆様にとっては、月見里家の野乃華ちゃんと言えは、

「ああ、稲田姫神社の巫女さんの、いつも御払いしてくれる……」  
十中八九は即答される有名人。

おまけに私、幼少のみぎりから事なかれ主義とは無縁な上に、神社で褒められまくって有頂天だったから、

「……神様が見えるとか言う、ちよつと変わった子ね」

と、実に清濁のバランス取れた噂を背負って愛想笑いを凍りつかせること数年来。

自分がいかに世間の規格からズレた存在かを自覚してからは多少おとなしくしたものの、それでも、見えて話ができる存在を無視するなんて私のプライドが、というか、生活環境丸ごと全部、八百万のカミ様たちに囲まれた状態で実行できるはずもなく。

ああ、うん。ちよつと話脱線するけど、カミ様って、本当に八百万は下らない。

見えない人に私の視界を説明するのは苦勞するけど、まあ、万物にカミが宿るって昔の人の信仰は、単に事実を語っていただけだつて、認めざるをえないほどに。

と言つても、見えないだけで存在しているなんていうのは当たり前で、細菌やウイルスだつて、小さすぎて見えないだけで、そこそ地球上成層圏から超深海まで、ミツチリと存在しているわけで。

片や人間に何が見えるかって翻ると、可視光線っていうごく限られた範囲の電波しか見えないのが実情なのよね。

赤外線も紫外線も、見える動物にとっては『可視』なわけで、携帯電話の電波もデジタルテレビの電波も、ミリ波だろうがX線だろうが、波長が異なるだけで『電波』であることには変わらない。だったら逆に言えば人間って、ごく限られた範囲しか『見えない』生き物っていう風に、考え方をグルリと反転させたのが二年ほど前。

つまり、見える私が変わるんじゃない。

見えない他の人たちの方が（両親含む）劣等なんだっ！と、決して口外できない結論にすら到達してしまうほど、私の視点はカミ様に覆われているのよね、主に発酵食品とか。

そして実はカミ様たちは、電波を透過する物質で出来ていて、そういう存在まるごと全部を『霊』と呼ぶなんてことを知ってしまったのが、中学校入学直後くらい。

そんな余分な知識で私の特殊世界観を更に補強し、一般人との見えない壁を絶望的に厚くしてくれたのは、日本全国から稲田姫神社を訪れた巫女さんたちなわけで、これはもう、嗅ぎつけたのか嗅ぎつけられたのか、類は友を呼んでイタイ世界を更に深く強固にしようという、恐怖の脱一般化スパイラル。

お見合いと称して神社に呼び出された私は（最初は本当のお見合いかと緊張したけど、今まで全員同年代の巫女さんだったという笑えないオチ）、カミ様が実在しているなんていうのは巫女業界では当たり前の話で、ただ世間一般には情報封鎖しているだけなのよ、という知らなくても生きていける裏業界の常識ばかりに詳しくなり…… そうして自ら、更にタイプに嵌りはじめた、第二次性徴期。

まあ、生まれた頃からカミ様としゃべって遊んで、小学一年生から神剣振り回して巫女やって、おまけに神社じゃVIP待遇なんていう幼少期を過ごしたら、誰だって普通の生活に馴染めなくなるよね、実際。私自身、自分がどうしてカミ様が見えるのかを、知りたくて知りたくて、時間が許す限り図書館に通いつめて片っ端から関係ありそうな知識を読み漁ってたし。おかげで、学校の勉強レベルは超越しちゃって、気がつけば成績優秀優等生〃ガリ勉お嬢の孤高人生まっしぐら。

とまあ、普通の学校生活から見ればかなりイタイ思春期初期であったわけだけど、私の場合には数多のカミ様と地域住民と、敵意丸出しの妖怪らに構われてきた背景があったわけで、自分的には相当充実した人生を、真っ直ぐ素直に歩いてきたつもりなんだけど、知れ

ば知るほど、無視できなくなった疑問が一つ。

『なんで、私の両親があの人たちなの？』

片や、カミ様とタメ口で談笑する娘。

片や霊のレの字も知らない両親。

子供の頃は些細だった違和感も、知れば知るほど不気味に膨らんで、『ひよつとして、私は、両親の子供じゃない？』なんていう可能性を思いついてから、『いや、私があ両親の娘なはずがない！』の確信に行き着くまでの所要期間は、約半年。それが長いか短いかは置いておいて、私としてはとづくに覚悟を決めていた話題を、わざわざ十六歳の誕生日の朝まで温存していた両親の激白とは、

「あなた、実は、高天原たかまがはらの神様の娘なの」

……嘘をつくならせめて、「橋の下に捨てられていた赤ん坊なの」くらいの方が清々しいというか、むしろ両親の正気を疑ってしまうような内容に、逆に信憑性を感じてしまったのが運のツキ。ま、高天原なんて単語を日常会話でサラリと交わす家庭じゃなかったし。

「で、何か生活変わるの？」

「いや、今のところ、特には。お前が家出したいなら別だが」

「嫌だよ。お父さんが、娘を路頭に迷わせて喜ぶ、どSだっていうなら別だけど」

「……お前なら、路頭に迷う前に神様たちが保護してくれそうだけどな」

そんな会話を交わしたのが、今からほぼ一ヶ月ちよつと前。

盛夏を過ぎ、残暑をしのいで、やってきました味覚の秋。日差しは和らぎ、街中の和菓子洋菓子屋さんのPOPに『新栗入荷』の文字が躍り、世界が真っ黄色に染まって見えてくる、甘くて幸せな、『野郎ども、冬眠準備だ脂肪を増やせ』とばかりにスイーツが輝いて見える季節の到来でして。

実はいまだに、「私、神様の娘なんだって〜」なんて、カミングアウト出来ていませんが。

ただ一人の例外を除いて。



と言うかその一人は、私的に特別扱いを通り越して、全人類的に存在そのものが例外なんだけど。

私と一緒にじゃないと姿が見えないし。

十年前から姿変わらないうし。

おまけに私の出生の秘密を、知ってて黙ってやがったし。

神の樹と書いて読みは>みき<。無垢で繊細だった私の舌を、他のアイスクリームでは満足できなくしてくれた呪いの契約時から、神剣を握った時のみ姿が見える変な力ミ。

出会った頃は年上で、今じゃ私の肩くらいの背丈しかない、十歳くらいのお団子頭の少女な外見。

ただし中身は変態で、私の初恋の始まりから破綻までくらいならとにかく、最後のおねしょ記念日から自分でも分からなかった初潮の傾向、スリーサイズの変遷、体重の増減まで知り尽くした、神剣握れば自動でスキャンな、プライバシー保護法で訴えるぞこの野郎的ノーデリカシー存在なわけで。

考えてみれば、一年三六五日、十年三六五二日。よっぽど体調不良の日以外は、盆と正月こそ書き入れ時で、毎日のように神剣を握って悪霊退散をしていたのだから、神樹という子は、幼馴染み兼パートナー兼弱みを握った倒すべき敵。もし何か事があつたら、全てに優先して神樹をイレースすることを、私は万の力ミに誓っている。それにしても、なあ。どうして私が生まれた頃から神社で遊んでいたのかって、本当の理由を知ってしまったら、そりゃ大事にされるわなあって、納得してしまふ。

交友関係の八割が神職関係者で、おまけにその内九割九分が女性って言うのは、青春真っ盛り、人によつては年中発情中の女子高生一年目として、その灰色具合はどうよ？ って自問自答もしたくなるけど、真正正銘の神様の子供を、なるべく手元に置いておいて、俗な世間に染めさせたくなかつたらうなあ、という事情は、なんとなく分かる。つか、宮司さんはじめ神社の偉い人にはカミングアウトする必要もなく、私の出生を知っていて温かい瞳で見守ってくれ

ていたわけだろうけど。

言えよ。

話せよ。

隠すなよ。

そりゃ、普通とは違うよ。

カミ様くらい見えても当然だよ。

そりゃ全国から巫女さん寄ってくるよ。

でも何が腹が立つって、そうやって私を見世物にしてた宮司さんたちに、一番むかつ腹が立つわけで。

最初から知っていれば、十年も無駄に悩むこと無かったのにさ。

でも不思議なのは、カミ様たちは、私のことを知らない風な事なだけでねえ。

それにお見合いで知り合った巫女さんたちも、私の『カ』は知っていて、『秘密』の方は知っていなかったのかもしれないし。

その辺り、一回両親を問い詰めたけど、具体的に誰がどこまで知っているかは不明らしい。毎日一緒にパトロールしてる三人の巫女さんも、私の『見える』部分は羨ましがってくれるけど、それが出生の秘密に由っているってことは、知らない風だったし。

両親の激白から一ヶ月。

一体誰が真実を知っていて、誰が私を騙していたのかを見極めようと、観察眼を通常の三倍くらいに鋭くしているつもりだけど、今のところ両親と神樹、それに稲田姫神社の宮司さんたちくらいしか該当者が見つからないっていうのは、実はそれ、もの凄い極秘扱いされているって事なんだろうか？

まあ、下手に世間に知られたりしたら、珍獣扱いだしなあ。

だとして、私の本当の両親って、一体、誰？ というか、何？

出生証明書も、病院の保育器で寝ている写真もあるっていうことは、母さんのお腹を痛めて生まれてきたのは確実なわけだし。だからといってこのご時世、トイレに入ってる時に便器から秘所を突かれてご懐妊、なんて事、さすがに、ねえ？

という、一難去つてまた一難。私の悩みは止めどなく。

とりあえず、普通に女子高生は出来ないだろうなあ、という諦観の極みにたどり着いた十六歳の秋に、稲田姫神社の宮司さん呼び出されて、告られた使命。

「今から、あなたたちに、殺し合いをしてもらいます」

そ・う・き・た・かっ！

## 第一帖 神器一転、御山の姫の奇勝が絶望、式

そもそもその日、私が稲田<sup>なだ</sup>姫神社を訪れたのは、サラリーマンが毎朝出社するのと同じ理由……その日にその場で仕事があったからで。

平日の朝、ホワイトデニムにチエックのパーカーを合わせて自転車にまたがった私は、堂々と学校を休む理由を持っていた。

今では日本国民の一分、おまけにその内八割が高齢者となつてしまつたとはいえ、ちよつと前までこの国は、それこそ百年ほど前までは、世界に胸を張って誇れる、農業国家だつたのだ。

神社という神社に課せられた使命は、春先の種まきに際して、山の神を勧請して田畑に加護を願い、秋の収穫を祝つて、山の神に恵みを供えて感謝の気持ち盛大に表わすこと。

あまたの神事のごとくが実りへの願いを発端として、そうして田畑に生き、種まきと生育、収穫に休耕というサイクルを延々と回し続けてきた二千年以上。

農作という、天候に左右され、見えないほど小さな病原菌に悩まされ、地震台風雷竜巻火山に洪水、一撃必滅どんでん返しな天災の恐怖がつきまとう生業だからこそ、見えざる神に祈り、天の怒りを鎮めんと多くの命が失われてきた、素朴にしてその実、神任せも同然な、気まぐれに振り回されることを是として来年に期待しよう、な、呑気な気性。

実際に天下を動かし、文字という記録を残してきたのが公家なり武士であるから騙されてるけど、そういった記録って、日本書紀しかり、ほとんどが自分に都合の良い事しか書かないもので……日本人の国民性というか遺伝子は、絶対に田畑を耕す農民根性が根底だよなあ、と、兼業巫女なんてしながら実際にカミ様たちと戯れている私の目には映るわけで。

見渡す限りの黄金の原を自転車で疾走しながら、切り割く大気は

むせかえるほどの田園臭。案山子<sup>かかし</sup>が猫耳つけてる現代風を、たわわに実って頭を垂れる稲穂の群れを、ど田舎負け組と笑わば笑え。都会暮らし高層ビル勤めがどれだけおしゃれでスマートだろうと、その皮をひん剥いて血肉と内蔵をあらわにしたら、ここに実る日本米が活きていない細胞なんて一体どこにあるというのか。日々の代謝の結果三カ月ターンで作り変わるが人の身ならば、結局口から入って胃腸で消化したものが原材料なわけで、日本人なんて、その大半が米で作られた米造人間<sup>まいぞうにんげん</sup>であると言い切っちゃって何が悪い？

年に一回、そんな気持ちで農道を突っ走るのは、我が勤め先の稲田姫神社もまた、その名に恥じない広大な田園の豊作豊穰を司る由緒正しい社なわけで、初穂を神様に奉納する伝統的な神事に欠かせないのが、神剣『七星剣』を振るう巫女舞なのですよ、これが。

と言っても、馬鹿に出来ない神の国、ニッポン。

神事という厳粛な行為に際して、前日からの泊り込みによる精進潔斎は最低限。それこそ昔は一週間かけて、下界の穢れを祓い清めて神事に臨んだというのだから恐れ入る。

そんなことを小学生から続けてきた私は、どこで回路を間違えたのか、学校生活よりも神事を優先する、反社会的思考を身につけてしまっていて、

「おっはよ、望<sup>のぞみ</sup>」

「あ、野乃華、はよっ。おっかれさん」

早朝から白衣緋袴、誰が決めたか竹箒、な幼なじみの巫女さんを見つけて挨拶する。

「叶と珠恵も？」<sup>かなえ たまえ</sup>

「うん。今頃、磐堺<sup>いわさか</sup>の紙垂<sup>しで</sup>付けじゃないかな」

望、叶、珠恵の三人は、私が神剣の舞手となった十年前から一緒にお祓いをしている、生粋の巫女さん見習いだ。校区が違うから夕方にししか会えないけど、放課後の友達って特別なもので、生死の境を何度もさまよった巫女手伝いを今まで続けられたのも、三人がいたお蔭と言っほかない。

挨拶もそこそこに望と別れ、山中へと続く石段の脇で自転車を降りると、長年登りなれた階を、リズムよく駆け上がる。

階下のとあわせて二つ目の鳥居をくぐれば、そこが神苑、稲田姫神社が心臓部。もともと山肌を平らげて境内とした神社だから、四方を囲むのは手入れをされた森林で、砂利を敷かれた空間には、手水舎から拝殿、社務所、斎館までが配置の妙で広々と並んでいる。ちなみに、稲田姫神社はその名にそぐわぬ、百々山（せもやま）そのものを神奈備（なび）と尊ぶ神社であって、御山そのものが神様で本殿な古代式。そして斎場にして神楽舞を奉納する仮設舞台は、一般に禁足地として、境内から更に登った山中に、人知れず設けられる。

ま、だから私が巫女舞を踊っているって言っても、誰も見るこゝが出来ないのよ、普通は。神様だけに魅せる、お礼の気持ちなわけなんで。

ただ長年の疑問なのは、なんで稲田姫なんて人格称を神社の名に戴いているのに、肝心の祭神はその姫じゃないのかなあ、というか、それらしいカミ様を見たことないって事なんですけど。

と、忘れちゃいけない。

私は手水舎で浄めると、『伊佐利』と名付けられた御神木に、い  
の一番に駆け寄った。

「おはようございます」

『彼』こそが掛け値なしに、稲田姫神社のナンバーワン。樹齡五百年とも言われる巨木は、実際には立ち枯れて切られた株から何度も蘇ったつていう伝説の持ち主で、『彼』の言葉を鵜呑みにするなら、神代から葦原中国を見守ってきたなんていう大法螺吹きだ。あの意味では『彼』こそがこの神社の祭神で、だったら普通に伊佐利神社でいいじゃんと思いつながら、そうならなかった事情を、何度問い合わせても教えてくれない、けちなお方。

そしてそんな守り神の足元にこそ、私の相棒にして愛すべからざる秘密保持者、神樹（みき）は鎮座ましましている。

見上げるほどの宝倉（たからぐら）に直立に収められているのは、神劍『七星劍』

。恐れ多くも、というより、大胆不敵で厚顔無恥にも程がある、聖徳太子が所持していたという宝剣と同じ名前。それ以上に、製作者と意匠考案者の頭の悪さを確信するのは、幅三十センチ、長さ二メートル、重さは優に百キロ以上っていうその造形で。

初めから展覧のみが目的で、拝観者の心理的充足感と、盗難防止を両立させるために持ち運び激難な馬鹿でかい置物を作ったっていうのなら、まだ分かる。

けど七星剣が開放型の宝倉に収められているのは、有事の際にすぐに取り出せるようにという実用的な配慮のため、実際に私は毎日持ち出しているわけだし、今日と明日は神事にも用いるのが必定の、言わば日用神具。

さあ、ここで問題です。

普通に持ち上げるだけでも難しい百キロ以上の大剣を、私はどうやって、振り回しているのでしょうか？

一、幼少時代から筋トレの鬼で、折り曲げた腕の筋肉の盛り上がりだけで割り箸を折れる鋼鉄の女だから。

二、七星剣専用のクレーンが開発されていて、それを操縦しているから。

三、七星剣に選ばれた巫女さんの時だけ、剣の力ミ様が下から支えてくれるから。

はい、そこ、呆れない呆れない。

実際私だって、馬鹿なこと言ってるなって思っているんだから。

そう、正解は三番。

周りからどう見えるかはともかく、実際に持ち歩いている私には、竹刀程度の適度な重さしか伝わってこないんですよ、これが。

そういった能力だけは、神剣の面目躍如だね。見た目はとても剣に見えないんだけど。

今、私の目の前にあるものを視覚的に説明したら、今まで神剣として築かれたイメージが轟音をたてて崩れていくであろうことは、想像に難くない。というか、神剣目当てで神社に来た人は例外なく、

そのあまりの姿に愕然として、憤然として、ガツカリという表現以外ではそぐわない顔で神社を後にするのが日常でして。

石段登って鳥居を抜けて、宝倉を御神木の脇に見つけた瞬間、その瞳に映るのは真つ白な棒状の物体。五十メートル離れても見えるその白さは、神剣と言つ響きと相まって、自ら光り輝く神聖な存在をビシビシ感じさせてくれて、期待は否が応にも右肩上がり。

逸る心を抑えて手を清め、参道の端を歩きながら拝殿前を横切つて、近づくにつれて明らかになるディテールは、呪布と呪符にてグルグル巻きにされた、直線部分が驚くほど見当たらない長方形。

更に近づいて、もう触れるほどの距離になると、期待は一気に落胆に変わり、それがおよそ剣という言葉に集約されたあらゆる機能を持つていないことが白日の元に浮き上がる。

布と紙で偏執的に覆われた真つ白な刀身は、それが何重に巻かれているのかも判断できないほど膨れ上がり、凸凹になった表面は、およそ『切る』という性能を感じさせない複雑かつ柔らかな稜線を描いている。

言うなればそれは、『白くて長くて重い棒』という表現が一番しっくりくる外観であり、余すところなく包まれた本体は、本来の鋼のラインが全くわからないほどの着膨れ。身体のラインが分からなくて許されるのはグレンデのスキーウェアくらいなもので、神剣と聞いて胸を高鳴らせて来てみれば、不器用な子が指先に巻いた包帯の塊といった方がピッタリくる代物だったのでは、ジャロに通報されても文句言えない。

ま、それはそれで、ずっと外気にさらされているにも関わらず全然汚れが見えなかったり、巻かれている布と紙に切れ目が存在しないメビウスの環だったり、実は不思議で未知な素敵装飾なんだけど、剣じゃないよねえ、剣じゃ。

「起・き・ろ」

「ほえ？」

剣のくせに寝てるんじゃないよ、全く。



「のの姉っすか。今日はまたこんな日中から」

蹴った。刀身を。

「痛いっす……心が」

「私は爪先が痛いわよ。寝ぼけてないで、とっとと神事の準備するわよ」

眼前、七星剣を抱きしめてグッスリ寝ていた神樹が、芸細なことにワザワザ「ん〜」と身体を伸ばしている。といっても、見えるのは私だけ。ちなみに神域に入ってからずっと、描写していないだけで、BGMではカミ様たちがペチャクチャずっと騒いでいるのが私の日常。ま、年に一度の初穂奉納だしね。奉納なくても同じだけで、神樹を引きずって向かうは社務所。

着替えとみそぎのシーンは割愛して。

浴びる水の冷たさに季節を感じるのは和の骨頂だけど、年々冷たさが和らいでる気がするのには、地球温暖化世代ならでは。

浴衣の着付けも知らないくせに、巫女服だったら目を瞑っても大丈夫。最後に両袖を握ってウンと引っ張れば、ピンと皺が伸びて、シャンとやる気充填！

秋晴れのすがすがしい朝に、胸を一杯開いて大気を吸えば、細胞の隅々まで行き渡るキリリと冴えた神気が旨い。

「いつてきます」と神事用具を掃除している近所のおばさんたちに断って、神樹を担いで向かうは山中。

百々山の中腹から見下ろす田園風景は、まるで金色の獣が伏して寝息をたてている様。大地が全身で喜びを発しているのを横目に楽しみながら、神職関係者しか知らない道を登っていく。

百々山はいわゆる禁足地で、狩猟も採集も伐りだしも戒められている、人里に接しているのに稀有なくらいの他界。目指す斎場までの目印は一切なく、下草と枝を掃ってあるだけの森の中を、時には這うようにして登っていかなくちやならない。時々物音がするのは人間に反応して逃げていく小動物たちで、物怖じせずにはしゃぎっぱなしなのは、久しぶりに姿を見せた私を歓迎するカミ様たち……

私にとって、静けさなんて望むだけ無駄なのよ。

そうやって二〇分も登り続けて、視界は断りもなく、ポツカリと晴れ渡った。

麓からは見えない絶妙な角度で、その大岩は、中腹に張り出して  
いる。宅地換算で、およそ二〇畳。遮るものなく空を望む清々しさ  
は、なるほど、ここの他に神事を執り行うに相応しい場所はない。

「宮司さん、おはようございます。叶、珠恵、おっはよ」

すでに大岩の四方には榊が飾られ、三人は榊と榊を繋ぐ荒縄に、  
紙垂と呼ばれる折り紙を取り付けている最中だった。

私も舞手としては、舞台の様子や広さを確認しておきたい。三人  
の作業を手伝いながら、私は自分が舞う姿をイメージしていた。下  
界からは見えず、山頂を臨んで行う神楽舞。気の早いカミ様たちが  
囃し立てる中、斎場準備はつつがなく完了し、気がついたら太陽は  
中天に差しかかっている。どうりで、額が汗に濡れてくるわけだ。

神事全体の準備としては、それでもまだ五割といったところ。午  
後からは拝殿周辺の掃除を始め、神田で初穂を刈り取る用具も揃え  
なくちゃいけない。今ごろは近所のおばちゃんたち（含む母）が集  
まって精進料理を作ってくれているはずで、屋台こそ並ばないもの  
の、戦国江戸明治大正、そして大戦を挟んで昭和をもくぐり抜けた  
伝統は、なかなか大して、地元に根ざして全員参加の大所帯。それ  
こそ戦前はこのお祭りに合わせて男も子供も総動員で稲刈りに突入  
していたっていうから……日本人って集団活動大好きだなあ……と  
感慨深い。

ま、その風習が形だけでも残っている稲田姫神社は、格という意  
味では周辺市町村でもずば抜けている。神剣目当て、だけでなくて  
も、年末年始の初詣シーズンは、地元女子高生の稼ぎ時！ なくら  
いには盛り上がる。そんなわけで、昼食会場たる社務所にはそれな  
りの大広間があるわけで、総勢五十人ほど（内八割おばさま）も集  
まれば、その姦しさは殺人級。情け容赦も呵責もなく、弾幕のごと  
く飛び交う噂話はそのことごとくが本来特秘事項で門外不出。およ

そプライバシーなるものの萌芽など、女という性には定着のしようがないことを改めて実感させてくれ……って、どうでもいいけど、せめて下ネタやめろっ！ 生々しいからっ！ 納得しちゃうからっ！ 私らまだ夢見てるからっ！

そうして、おいしい食事も味が分からないくらいの緊張を強いられて、さて午後の作業にとりかかろうと、ここまでは、確かに、例年通りだったのだ。

私と望、叶、珠恵の四人が斎館で、明日の本番の舞の準備を始めてさえいれば。

なのに、

「なに、それ？」

望の手には金属バット。

「間違えてない？」

叶の手には符帳と筆。

「冗談、だよな？」

珠恵すら、両手に鐸を持っていけば、それは夜のパトロール、悪霊退散用のいわば戦闘準備であって、最後に二人の巫女を引き連れて現れた宮司が、ひきつった笑顔でのたまったわけですよ、日常を木っ端微塵に破壊する、爆弾発言ってやつを。

「今から、あなたたちに、殺し合いをしてもらいます」

「はい？」

当然、私の頭脳は容量オーバー。にも関わらず、望たちの表情は沈痛に黙したままで、初見の中学生らしき二人の巫女は、そっくりな顔に喜と無を浮かべて、まるで計画通りと言わんばかりの動揺皆無。

って、ちょい待ち。じゃ、今の状況に順応できていないのって私だけ？ それって、なんて空気読め？ 頑張れ私！ 取り乱さずに乗り切れ私！

「質問がありますっ！」

「……普通、私の説明が先だと思っただが」

よしっ、イニシアチブ、ゲット！

「終了条件は？」

戦闘続行不可能でもオーケー？

その二人もメンバーなんですか？」

畳みかける。

追い詰める。

「えっと……」

目が泳いだっ！ 畳み掛けるっ！

「はい、か、いいえで！」

「無茶言うなっ！」

どうせ、拒否権は認められないんだろうから、せめて質問ぐらいこっちのを吞ませなきゃ、割にあわない。

「目的は？」

ていうか、いきなり言われても、いきなりじゃなくても、私は誰も殺したりなんてしない！

それとも、これが、今年の神事なんですか！？」

長い沈黙の末、

「……そうだ。これが今年の、強いて言えば来年に向けての、避けられない神事なんだ」

認めた。

なら、仕方ない。これが神事で、私は七星剣の巫女なのだから、………だったら、質問の答えを、教えてください」

覚悟を、決めた。

事情くらい、あとで神樹から嫌ってほど聞かされるだろうから。

## 第一帖 神器一転、御山の姫の奇勝が絶望、参

かくして、なんびとも踏み込まぬ百々山ももやまに、私たち四人は夕方から潜むことになる。

時間無制限。戦闘続行できる最後の一人となれば勝ち。七星剣の使用許可は降り、ただし、私以外の誰かが勝利した場合は、神剣の巫女の権利と義務を余さず勝利者に譲与すべし。

神事開始までの待機時間で、私はだいたい把事情を並べて、分析をし終えていた。ま、主に神樹の知恵を拝借したわけだけど。

曰く、二十年に一度開催される、全国規模の舞闘神事の出場選手の選考会であると。

曰く、月見里野つきみさと乃華ののかという部外者を百々山代表とするには、相応の理由もしくは客観的な実績が必要であると。

曰く、中学生の双子の巫女は、単なる好奇心に加え、神宮からの指示もあって来訪したらしいと。

そして何よりもふざけているのは、望、叶、珠恵の三人を含む、荒事専門の舞闘巫女組織があつて、所属巫女は戦乙女いくさおとめと呼ばれていること。

加えて、稲田姫神社いなだひめが戦乙女にとっては十指に数えられる聖地で、七星剣が、戦乙女を代表する十人の巫女でないと扱えない、百々山最強巫女の象徴だったってことだ。

「機嫌、悪いっすよね」

「まあね」

どんな言い訳を並べられても、御立腹は当分収まれない。

「でも、拒まないんすね」

「……まあね」

そう、私は、晴天の霹靂に対してパニックに陥っているわけじゃない。

ただ、憤りが収まらない。すべてを知っていて黙っていた神樹みきに、

望たちに、宮司たちに。こんな切羽詰まったギリギリまで、あんな悲痛な表情で私から目を逸らすくらいなら。

言葉よ。

話せよ。

隠すなよ。

それが美点なのか汚点なのか、それとも単なる諦めなのか、私は『否定しない』という点に関して、どんな突拍子のない話でも、一理あれば頷いてしまえる。子供の時から自分の話を信じてもらえなかった反動か、それともカミ様が見えるっていう現実が、日常を逸脱しすぎているからか。

そう、私は、戦乙女が存在とかそういう背景は、それが実在するというのなら、すぐに信じて呑み込める。それを、きちんとした場で、順を追って説明されていれば、なんの抵抗もなく受け入れられる女なんだ。

仲間外れにされた。

許せないのは、その一点。

十年に及ぶ長い長い嘘を、見抜けなかった私が迂闊と言ったら終わりだし、自分の存在から七星剣まで含めて全部、今日の説明で綺麗にピツタリ合点がいつてしまったのだから、まったくヒントが無かったわけでもないと思う。今から思い返せばってポイントはいくつも浮かんでくるし。

でも、さ。

「信じてたのに」

「すみません」

「まだ、何か隠してるわけ？」

「ええと、まあ、いろいろと……」

「はあっ!？」

さすがに声が裏返る。認めるポイントはそこなわけ？

いや、追及はやめよう。今はとにかく、望たちをなんとかしないと。バトルロワイヤルにポーズはかけられないけど、要するに勝ち

残っちゃえば問題ない。その上で、今夜目一杯、相手が悲鳴をあげるまで根掘り葉掘り聞き出せば言いだけだから。

だから、この怒りは糧。薪。燃料。この一時の激情にでも身を任せなければ、理に叶っていないようがいまいが、友達を七星剣でぶん叩くなんて出来そうもないから。

「神樹」

「はひ？」

怒られる覚悟だったろう神剣にかけられた肩すかしな声音に、しかし私は、静かな殺意を乗せて、

「全力でいくよ」

「は、はひっ！」

この十年の集大成を、今、両手に握りこむ。

人間、魂と肉体に綺麗に分離ができるって言ったなら、笑うだろうか？ なおかつ、普通の生活の中で、自分の魂と肉体をキッチリ区別して認識できる、なんて言ったら。

まあ、結論から言っちゃうと可能なんだけどね。

肉体を自動車に例えれば、魂はドライバー。普段は融合と言うほどピッタリとくっついていてから意識しないけれど、時に肉体が負傷していたり疲労過多の場合、心はやる気なんだけど身体が言うこと聞かない、なんて事もあるでしょ？

そんな時は魂の支配度を上げてやって、普段使っていない潜在筋肉を導入、回復を度外視して活動限界まで到達することも可能なんだけど、まあ、一般人にはオススメしない。

そういう訓練は物心ついた年から始めないと、いつでも好きな時に魂を介して、肉体を戦闘態勢に移行できるレベルには到達しないから。

そして私も、望、叶、珠恵も、たぶん戦乙女って呼ばれる巫女さんは全員、それを可能にしている。むしろ、そうやって肉体の性能

を引き上げて完全制御下に置かない限り、悪霊被いなんて危険な仕事、返り討ちに遭うのがオチだ。

魂<sup>たま</sup>。

霊に属し、肉体と結合して操り、主に「意識」として認識される、人を霊<sup>じゆ</sup>処<sup>じゆ</sup>たらしめるモノ。同時に、それはカミと同じ性質を持ち、肉体から解放されればカミにすら成り得る存在。

けれど普通に生活するばあいには、そんなに考える必要のない…  
…うっん、違う。西洋科学文明の唯物合理主義の勢いに押し出されてしまっただけで、その実、根源にして犯してはならない普遍の真実こそが魂<sup>たま</sup>であり、だからこそ、昔に比べて最近の日本人がおかしくなっただけという、根本の原因とも言え…その魂を、私は今、鋭く研ぎすましていた。

指先の、表皮直下の毛細血管までを意識して、私は魂を全身くまなく行き渡らせる。

子供の頃から感じていた違和感。

どうして私の身体は、思うより一拍遅れて動くんだろっつていう悔しさ。

それこそが、幼い時は魂と肉体を個別に意識している何よりの証拠なのに、成長という名の取捨選択は、違和感を取り除くために、一拍遅れることを前提として忘れ去ってしまうのか。

そして、その違和感を意識して初めて開かれる、肉体支配の扉。

生命の神秘。霊界の門。

今、私は意識する。

七星剣を振るうことを。

暮色に染まる山中を、全速力で駆け抜ける持続力を。

私を狙って集まってくるであろう、望と叶と珠恵の気配を。

魂の、力。

魂が本来、肉体を制御する力。

カミの、チカラ。

神力<sup>じんりき</sup>。



今こそ、それが全身に満ち溢れる。

「のの姉」

「なに？」

「その、ボクがこんなこと言うのもなんですけど……」

「……安心して。私は、誰も、恨んでないから」

「え？」

「これが、私の運命なら……」

そう。私の心は、凪いでいる。

この『今』が来ることを、私はどこかで、予感していたんだろう。  
あるいは、私の魂が。

運命。

その言葉を知ってから、私は何度も何度も、その意味を問い続け  
てきた。

私がかみ様を見られるのも。

そのせいで友達と打ち解けられないのも。

七星剣と出会った事も。

望たちと夜の悪霊被いに精を出したことも。

どうして、そんな普通とかけ離れた生活なのか。

どうして、私がそうなのか。

ある書では、運命とは、すべて決められた道筋だと、逃れられな  
いからこそ運命だと説いていた。

ある書では、人生には選択肢など無い。選択肢に見せかけた何か  
を選ばされ続ける一本道だと。

ある書では、人は死んで再び赤子へ戻り、そうして延々と同じ道  
程を繰り返す、既知のループなのだ。

ある書では、運命とは、己の命をどう『運ぶ』かの違いであり、  
己の望む結末へ向かうための試練なのだ。

そのどれもに一理あり、しかしそのどれもが、私の疑問を溶かす  
に値しない、言葉遊びに過ぎなかった。

だって、人は決まってしまう。

生まれた時代。

生まれた国。

生まれた家。

両親、兄弟。

経済情勢。

遺伝子で決められた身体機能。

環境に左右される知能指数。

天から授けられた才。

先天的な欠落、障害。

それは、誰にも覆せない『運命』。

私が、高天原の神様の娘であることも。

稲田姫神社の近くに預けられたことも。

七星剣も。宮司さんも。望、叶、珠恵も。

すべて私の意の及ばない偶然。

選んだ結果でなく、与えられた条件。

だからやっぱり、運命は、ある。

それを認めた上で、私には、勝ち得た答えが胸にある。

抗わないと。

嘆かないと。

悔やまない。

恨まない。

立ち止まらない。

逸らさない。

それが生れ落ちた瞬間から遺伝子に刻まれた予言だろうと、魂が導いた人生のチェックポイントだろうと、必ず通らねばならない避け得ぬ試練であるならば。

乗り越える。

全速で。

たとえ最善でなくても。

逃げず、怯まず、立ち向かう。

結果的に、それが一番、近道だと思っからこそ。

私は、魂を、神力を、砥ぐ。

今日という日を。

宮司の言葉を。

望、叶、珠恵とのこの闘いが、私の『運命』であるならば。

「ただ、こなすと。そう、決めたから」

迷わず、臆さず、目を開け。

その未知を既知へと変えて、月見里野乃華の魂が、真に神の娘のモノならば、この程度の試練、乗り越えられぬはずがない。

やるべきことがあるならば、ましてそれが、やらずに済まない事ならば……乗り越えられない壁が立ち塞がらないのが、運命というもの。数多の壁を越えてきたからこそ、私は言い切る、信じ込む。

越えられない試練は、あり得ない。

死すならそれが、運命だ。

あらゆる試練は、次の試練の糧であり、延々と越え続けるがこそ、人の道。

望、叶、珠恵には悪いけど、私と神樹の絆を今、ここで断つ気はサラサラない。

だから、全力で舞う、この神事。

「神樹、一番近いのは？」

残光はまだ、山肌を赤く染めている。

かろうじて足元から周囲が見える明るさで、神事は、百々山全域を舞台に行われる。

文字通り、多数の峰を持つ百々山は、その広さも半端じゃない。

けれどその実、地図で見るその姿は、四方をグルリと田畑に囲まれているという、見事なまでの独立峰。それもそのはずで、戦後の地質調査の結果、百々山は全体で一個の岩石であることが、立証されている。

故に、その地肌は硬く、その傾斜は厳格。本来なら夜に立ち入るべきでなく、迂闊に踏み込めば、現地人でも遭難する危険がある。

だからこそ、誰にも邪魔されない舞台だと、選ばれたんだろう。

稲田姫神社、最強の巫女を決める舞。その発案自体は馬鹿馬鹿しくも、望たちがそれを受け入れていた以上、私も参加せざるを得ない。

「叶姉が一番近いっす」

「なるほど」

空に光が失われれば、この山に真に闇が訪れる。そうなった場合、己と相手を見極めるは、裸眼じゃない。いかに霊を識り、相手の魂を知覚するか。

そういった意味では、三人の中でもっとも霊眼に長けているのは、叶だ。恐らく私の行動は既に、彼女に把握されているだろう。

「距離を正確に報告して」

だったら、やりようがある。

私は両脚を意識して、峯へと通じる坂を、跳ぶが如き勢いで登り始めていた。

叶は、符術に長けている。文字により符に力を与え、霊をもつてそれを操る術だ。彼女の符には硬化と切断の加護が宿り、それを知覚できる範囲で自由に操ることが出来る。つまり、

「真上！」

「やらしい！」

一度彼女に捕捉されれば、死角から襲い来るは鋭い刃。かろうじて七星剣で防ぐも、紙とは思えない衝撃が両肩にのしかかる。

「五〇〇！」

「ったく、索敵範囲が広いつて！」

愚痴も言つてられない。立ち止まれば一方的に戮られる。そういう躊躇はしない女だ、叶という戦乙女は。一〇年の悪霊退散で、お互いの行動原理はほぼ把握しあっている。あとはいかに、本気を出すか、だ。相手を軽く見た方が、負ける。

「神樹、行ける？」

だから、こつちも奥の手だ。

「気をつけてくださいっす」

賭けに出る。リスクを負って。

私の魂を読んで迫る符を、紙一重で避け続け。ただ、ひたすら距離を取る。いくら彼女の霊感が優れているとは言え、その範囲は無限じゃないはず。下手に逃げて珠恵か望に挟み撃ちにされたら最悪だけど、神樹の報告を信じる限り、まだ他の二人と対面する危険はない。

だから、全力で、跳んだ。突如逃げ足を増した私を訝るも、叶に選択肢は多くはない。追うか、諦めるか。そして彼女が私の動きをトレースし始めた時点で、彼女の攻撃範囲が有限で、それが六〇〇を境に急激に精度が落ちるという弱点がハッキリする。ま、逆に言えば、六〇〇以内じゃ近接しない限り、格好の的ってわけだけど。

「追ってきなさいよ」

まだ、足りない。私は、山頂目指して跳び続ける。叶もまた、攻撃を完全に停止して、私の捕獲に全力を注いだ。それもそのはずで、彼女の魂は、持久戦には向いていない。符を操るには相当の精神力が必要で、範囲が広がれば広がるほど、魂の疲労は比例する。彼女の攻撃は、確かに正確で強力だ。遠距離戦では、狙い違わず急所を貫く、最強のスナイパーになれる資質がある。

けど、それも短時間ならば。魂の許容量が少ないため、一日に操れる符の上限数が、必然的に決まってしまう叶。

だからこうして逃げ続ければ、自滅は必死。普段は冷静沈着、眼鏡をキラリと光らせて、蓄えたる知識から導き出される最適策で一撃必殺の省エネ戦法の彼女も、相手が予測範囲内で動いている限りの話。一端叶の予想を裏切ること成功すれば、彼女のポーカーフェイスは一瞬で焦りと不安と恐怖に歪み、そうしてパニックに陥った彼女の行動は、徐々に精細を欠き、選択の幅を狭めて、いつも自信満々でド壺に嵌ってしまうんだ。

こっついう風に。

「野乃華っ？」

私の目の前に、叶の驚愕。

「取った！」

五〇〇メートル先にいたはずの標的に背中を取られた衝撃から、立ち直る隙は与えない。私は、可能な限りの弱さで、叶の胸を薙ぎ払った。

「あっっ」

そのまま、七星剣の自重で、叶を地面に押し付ける。

「ど、どうして……？」

当然の質問に、

「ゆーたいりだっ」

「いつの間につ！」

「いや、やれるかなあ、と思ったら、出来ちゃって」

そう。叶が索敵しているのが私の『魂』であるなら、本体から離脱しても、叶には気付けないんだ。そうして一直線に距離を取り、彼女が私の本体のそばを通りかかった瞬間、離脱から一瞬で戻って立ち上がった。

ただ、それだけの、無謀。もし彼女に見破られていたら、無人の本体が、追い詰められた靈魂が、一方的に切り刻まれていたに違いない。

「……負けた」

「おつかれ」

本当、叶を最初に降参させられたのは幸運だ。これで、珠恵や望と対峙しているときに、背中からバツサリ漁夫の利を持っていかれる恐怖とオサラバできる。

「さって、あと二人だな」

望と珠恵。

迎え撃つ私の身体は、ようやくウォームアップが終わったばかりだ。

「一姫、脱落」

「早っ」

一方、稲田姫神社の境内では、双子の中学生巫女が、野乃華たちの神事を監視していた。

安倍晴、明。一四歳、中二。同じ面形、同じ黒髪ながらも、その瞳の輝きと背中を下ろした髪の長短から、受ける印象は正反対というほどに異なって見える。

片や晴。両腕を組み、闇に吞まれつつある神体山を見上げ、休む間もなく妹に話しかけ。

片や明。両手で巨大な球を抱え、その表面に映し出される光点の行方を凝視し、姉の言を放置。

「つたく、学校休んでまで仕事に来てさ。もっと派手な舞鬨を期待してたんだけど、ねえ」

「無い」

「だいたいこの時期まで御瑞姫がみずき決まっていなくて、どんな間抜けよ、ねえ」

「そね」

「ああ、もうっ！ いっそのこと、私が参戦しちゃ駄目かな、ねえ」  
「無理」

「……明さ、せめて二文字以上、喋ってくんない？」  
「や」

「減った！ 減ったよ！ つか、減らすなよ！」  
「……」

「止めて。その目、止めて。私を貫いて背景だけ見るような、そん

な貫通眼いらなから」

彼女たちは京都から、この神事のためにわざわざ派遣されていた理由がある。

戦乙女の舞闘には、時には死が付きまとう。カミに触れる巫女が、時にカミに憑かれ、人外の力で暴れだすことがある。その時、同程度の戦乙女では、相手を止められない。最悪、人里に逃亡されれば、民間人に被害が及ぶ。

そういつた非常事態のための、晴と明だ。彼女たちは戦乙女でありながら、戦乙女を超えている。それは、明が両手に抱えている、球状の神器が物語る。

かんだから  
神宝。

高天原で作られ、葦原中国を平定するために用いられたと伝えられる、神話の存在。全部で十種ある神宝を操ることが出来る巫女は、一時代に一〇人のみ。

その位、御瑞姫。全戦乙女の頂点に立ち、根の国、黄泉国から侵略してくるカミを滅ぼす役を負う、世に忘れられし守護者たちだ。

そう。豊芦原瑞穂国は、大八島国は、太古から女に守られている。時に為政者に疎まれ、存在を秘匿されながらも、カミなる存在と対し、天の下を平けてきたのは、歴代の御瑞姫をはじめとする戦乙女たちに他ならず。

そして、晴、明はおるか、今この瞬間、百々山を舞台として行われている神事こそ、稲田姫神社が保管する十種神宝の一つ、七星剣を操るに値する御瑞姫の選抜であり、野乃華、望、珠恵のいずれかが、御瑞姫として、天下の平和を担う運命を背負うことになるのだ。「しっかし、あれ、七星剣？ どこが神剣なんだかね。ミイラみたいでだっさいし、実際、神宝らしい活躍、全然してないじゃんか、ねえ？」

「吾が……」

前触れなく、明が言葉を紡いだ、

「ひゃえ？」



「神剣なり」

直後だった。晴が横を向いた、その一秒にみたぬ時で、明の身長が、およそ四倍に膨れ上がったのは。

「あ、明？」

冷静に目を凝らせば、それが錯覚であり、明の背後に突如そびえ立った黒影が、本来なら見慣れたものだど、晴にも分かったはずだが、

「明っ！」

何が起こったのか、判断が追いつかぬ速度で、それは黄金の光をまとい、闇夜の山中へと一跳躍で消えていった。

「明っ！」

妹を道連れに。決して、逆らわぬはずの人形の、

「まさか、暴走？」

秋の日は地に隠れ、他界たる禁足地を、真に闇が呑み込もうとしている。

逢う魔が刻は、既に過ぎ。

夜の山は、魍魎の縄張りだ。

「行くしか、ないよね」

幸い、周囲に見とがめる人影は無く……晴の両手には、異形の拳銃が二丁。

「仕方ないもん、ねっ！」

今、歡喜の弾丸と化して、安倍晴は漆黒のカーテンを、怖じもせず潜り抜けていく。

第一帖 神器一転、御山の姫の奇勝が絶望、肆

ビックリした。

例えるなら、安全ピンを引き抜いた手榴弾が、投げる前に手の中で暴発した感じ。

いやもちろん、そんな経験した事ないけど、今、私は背中を大木にしたたかに打ちつけて、まだお星様が回っている頭で、目の前の光景をなんとか理解しようかと奮闘中。

七星剣が、浮いている。

琥珀色の風が、内側から、猛烈な勢いで噴き出していて、刀身を覆っている布や符を、吹き飛ばさんと暴れている。生まれて初めて見る、鋼色の七星剣の輪郭。

片や布や符も、千切れまいとポンポンに膨れ上がり、必死で風に抗っていた。私の目に映る両者の力比べは、拮抗。光と風は止むを忘れて、木々をしならせ、木の葉を舞い上げ、巫女服の袖と裾が激しくめくれて喧しい。

かなえ 叶を降伏させて、さて次の準備と急いでいた私は、崖の上でいきなり、文字通り爆発した七星剣に吹き飛ばされて、からくも崖際の椎の大木に受け止められた……全身打撲の鈍痛という対価を払ってでも方向が悪かったら、木々のすき間をランナウェイ、そのまま虚空へミラクルダイブだったんだから、命よりは安い買い物だったと喜ぶべきで。

で、何？

何が起こったの？

みき 神樹からは何の警告もなく、今も彼女との回路は途切れたまま。

そんな私の疑問を無視して、さらに七星剣は展開する。それまで全方向に噴出していた琥珀色の霞が、数本の光の柱のように集束し、と思いきや、それらが空中でねじ曲がって、私に向かって全力で来やがった！

「はっつ！」

あわてて両腕でガードするも、覚悟していたダメージ皆無。

その代わり、巫女服の周囲を、まるで霞の衣を着せられたみたい  
に、琥珀色に輝く粒子が覆い尽くしていた。

さて、野乃華。ここが勝負どころよ。

狂った方が楽だと思っけど、まだまだ踏ん張って分析してみよう。  
ここは百々山<sup>ももやま</sup>。今は神事。七星剣が暴発して神樹が消えて、かわ  
りに何かか吹き出て、私を求めて巻き付き中。

って、ちょ、ま、やん。

考える間もなかった。光の手は、ひとしきり私の身体を嘗め回し  
たかと思つと、次は裸にせんと、その指先を端に絡めてきたのだ。

魂の。

「いや、待って」

頭では、分かる。肉体と魂は別だつて。だからつて今、この光の  
手がやるうとしていることは、私の魂を肉体から剥ぎ取るうつてい  
う行動で、うわっ、本当に爪先から、魂が剥がされていく。視える。  
気持ち悪い。

「つて、こいつ！ やめろっ！」

抗う。けど私の魂は光の手に雁字搦めにされて、意図が肉体へと  
伝わらない。その間にも、爪先から魂が、音もなく逆剥ぎされてい  
く。

『奮えよ』

野太い声。多分、カミ。この光の主。すなわち、七星剣の。

『弾けよ』

一瞬、私の魂が数ミリ分、肉体から弾かれた。さっきの幽体離脱  
とは全然違う、外部からの霊的介入。

本当にヤバイ。既にくるぶしまで剥がされた魂。

「やめろつて、言つてんでしょうが！」

意識を向ける。本気で抗う。全意識を足元に集中して、捲られよ  
うとする魂の、強度を上げる。得体の知れないカミとの、気合の勝

負。ここで気が負けたら、体ごと乗っ取られる！

『湧き立たせ』

魂の表面が波打ち始める。それを意地で押さえつける。相手の意図が肉体の乗っ取りなら、齧りついてでも離れてなんてやるもんか。『燃え上がらせ』

更に、魂に加わる力が増す。こなくそつ。男は時に強引が華つて言うけど、今の乙女にや選択権つてもんがあんのよ。処女に未練はないけどさ、花の一六、ピチピチ乙女。脱がす男くらい、自分で決めるわっ！

『煮え立たせ』

うわっ、強烈な波動きた。つうか、神樹！いつまで遊んでるつもりよ！あんたもカミの端くれなら、自分の刀身くらい自分の意地で制御なさい！

『己が身に流れる熱き血潮に従え』

既に暴風圏内。バタバタと脈打つ魂は、いつ吹き飛ばされてもおかしくないくらい、たった一点で肉体と繋がっている。逆剥ぎされ、ひっくり返った魂の、それでも首筋だけには、必死で歯を立てしがみつく。これでも一六年、さつき一瞬離れたけれど、寄りそってきた愛着がこの身にやある。どこの誰だか知らないけど、不意打ち力づくで清い身体を乗っ取るうたなんて、

『その御魂、解放せよ！』

「「やなこつた！」「」

瞬間、神樹の声が聞こえた。

直後、光の手が消えていた。

バチンツと盛大な音を立てて布と符が元通りに七星剣を包み込んで、グサツと百キ口超の塊が地面に刺さる。

私は、慌てて魂で身体を覆いつくした。

両手両脚の指先まで、蘇ってくる感覚。

ああ、やっぱりこの場所が一番落ち着く。

すぐ真横には七星剣。管理者であるはずの神樹が、せえせえ息を

弾ませて、四つんばいで凹んでいる。

「もう、大丈夫なの？」

「すみません」

「二度と、ないよね？」

「善処します」

「そう、願いたい、わっ！」

倒れている暇はない。ズブズブと自己嫌悪の墓穴に沈んでいきそうなる神樹を、私は両手で引き抜いて尋ねる。

「望か珠恵は？」

そう、まだ、神事の最中だ。一体何が起こったのか、その分析はすべてが終わってからの良い。

「反応が……四つ！ いや、二つ、消えて……」

神樹の感じている気配が、柄を通して私にも感じられる。見知らぬ神力が二つ。よく知った神力が二つ。今、前者と後者が交錯して

……望と珠恵が、散った。

「そう来たか」

事情は分からない。生死すら不明。現状で分かることは、悪意を持った存在が二つ、百々山を徘徊しているってということだけで、

「神樹！」

「はい！」

「予想会敵場所を」

「……磐堺、齋場、神楽舞台っす」

「仇、討つわよ」

「はい！」

悪いけど、今私、相当ご立腹だからね。手加減できると思うなよ、  
闖入者！

「のの姉」

現場にたどり着いたのは、私の方が先だった。夜はなお濃くなり、

下界の光が届かない斎場は、質量を感じるほどに闇が重い。

「ちよつと待って……そう、良かった。ありがとね」

いつもはうつとうしいカミ様たちも、こういう時には役に立つ。百々山中のカミを動員して、聞き出したのは望と珠恵の生存。とりあえず、ホツと一息。ついでに聞き出したのは、二人を倒した相手の特徴で……こちらは、私の予想を半分満たして、半分は度肝を抜いた。

一人は確かに、宮司が連れて来た、あの中学生の巫女の片割れ。けど、もう一人の方が、

「巨人？」

三間二尺と言えば、六メートル弱。いくらなんでも、人間ではあり得ない。んじゃ何？ 妖怪？ 隻腕という以外には有効情報は得られなかったけど、現在地から近いのはその巨人の方だと皆が言う。「あとは、見てのお楽しみみてか」

そして、かくりよ霊世からうつしよ顕世へ覚醒する。カミとこうして話すのは、楽しいけれどハイリスク。小学生の時なんて、何度電柱やガードレールに激突したとか。意識をしつかりこちらに向けて、

「お待たせ。で、なんだって？」

神樹のシリアスは不気味だけど、事態が事態だけに笑えない。

これから対峙するのが六メートルの偉丈夫だっていうなら、尚更七星剣には期待してしまう。全く、どこで歯車噛み違えたか、今日の午後は異常がいっぱいだ。大きな岩が山肌を落ちるように、一旦転がらだしたら速度と威力は増す一方。乗ってる私は、目を回さないだけで精一杯。パニック&ちゃぶ台返しは、したいし楽しだし魅力だけれど、仮にもこちとら剣の巫女だ。悪霊退治が生業ならば、百々山を賑わす二人の振る舞い、見て見ぬするには目に余る。

「このままじゃ、の姉に、勝ち目はないっす」

「このままじゃ？」

「このままじゃ」

「んじゃ……」

言葉を選ぶ。

「どんなままなら、勝てるわけ？」

神樹は、戦うと決めた私を止めなかった。勝算がゼロなら、望たちが倒された時点で、退却を宣言するのが当然の義務にも関わらず。つまり、七星剣には、まだ私が知らない機能がある。もしくは、相手を倒す奇策がある。だったら神樹、

「可能性があるなら、とりあえずやってみるわよ」

「じゃ、のの姉。ボクと合体してくださいー！」

ガッタイ？

「合身のほうが好みっすか？」

いや、違うないし。ていうか、七星剣と合体？ それって何？

七星剣がバラバラに分裂して、私の身体に鎧みたいにくつつくの？

「変なこと考えてますね？」

「変なこと言うからよ」

「絶対、その想像間違ってますから」

「じゃ、何？ そのでかくて長くてぶっつい白いのを、私の中に無理矢理挿入しようってか！」

「悪化した！ のの姉のボクに対する信頼が手に取るように分かるくらい悪化した！ 違いますから！ 肉体的な意味じゃないですから！ 魂の、合体ですから！」

「魂の？」

「です」

「どっやって？」

「百聞は一見にしかずっす」

瞬間、私の魂は肉体から分離。

って、早っ。何？ さっきあれだけ抵抗したのが嘘みたいに剥がれてるよ。綺麗サツパリ後腐れなし。てか幽体離脱って、やりすぎると癖になったりするわけ？

「違いますから！ のの姉がボクを信頼してくれてるからっすよ」

スルリと、そりゃもう滑らかに、神樹が私の思考に横入り。

「つかあんだ、なに勝手に私の身体に取りついてるのよ」

「のの姉は、ボクの上に乗ってください」

「はあ？ 二人羽織れって？ そんなことでき」

言う間もなく、私の魂は肉体に吸い寄せられていた。神樹をサンドイツチして。指先を感じる。指は曲げられる。ちよつとだけ、間に神樹を挟みこんでいるのが違和感だけど、まあ、全身タイツを着込んで、その上から服を着ているような感覚。慣れたくないけど、慣れれば多分、大丈夫なんだろう。

で？

「これが？」

「神寄っす」

「かみより？」

「カミを、羽織るってことっす」

「それって、イタコが霊を憑依させるのと違うの？」

「目的が、全然」

「……なんで光ってるの？ 私」

「それが、神寄の光なんすよ」

落ち着いて見れば、周囲がほのかに黄色く照らされている。さつき七星剣から噴き出ていた色にも似てるけど、あっちはもつとキラキラしてたな。

「神樹の、神力しんの光ってわけ？」

あてずっぽう。

「大正解っ！」

マジっすか？

とりあえず、七星剣を握ってみる。相変わらずミイラみたいにグルグル巻きで、今はもう、引っ張っても切っても、解けそうにない、二メートルの鋼の平棒。

「特に、変化ないけど？」

強いて言えば、手袋越しに握っている感じ。

「舞闘ぶとうれば、一目瞭然っすから！」



語呂わるっ！ けど、まあ、

「お客、来ちゃったしか」

リハーサルどころか、レクチャーの時間すらなし。昼間に一生懸命飾りつけた斎場に、招かれざる巨人がほら、訪れようとしている。のの姉っ！」

奇妙な偶然か、出来すぎた必然か。三間二尺の巨人が七星剣の神楽舞台に、大気を震わせ落ちてきた。振動は、ない。その素材がやたら軽いのか、それとも未知の重力制御か、フニャフニャな関節なのか。

「巨人、ね」

黄金の霞に覆われた、六メートルの『人形』が今、立ち上がる。見上げるほどの巨軀。だいたい二階建て一戸分。

「頭で分かっても、実物はやっぱりデカイわ」

真なる闇。その中にあるとなお、光り輝く隻腕の巨人は神々しさをたたえていた……その黄金の輝きに、デジャヴを覚えなかったならば。

「神樹、あれって」

「ノーコメントでお願いしまっす」

「……後で怖いわよ、後で」

全身、触れれば刺さるような鋭い外装。その素材が何かは分からないけど、表面は、普通の金属光沢ではありえない光り方をしている。でも、一番気になるのは、まとっているその霞。ついさっき、七星剣の刀身から吹き出ていたのと同じ神力の輝きで、

「来ます！」

「見りゃ……」

分かる、と同時にその拳は降り下されて、私の胴ほどもある暴力の固まりから、私は反射的に……跳びすぎていた。

「ちよ、これって」

ほんの一メートルのつもりが、実際には五メートル以上。標的を外したことを不思議がっているように、ギシギシと、謎の巨大人形

の頭部が、私の位置を捜している。

「神寄の力つす」

「聞いてないわよ!」

「聞かれてないつすよ!」

さつて、落ち着け、野乃華。人形の大きさも去ることながら、自分の身体の反応速度と筋力の大幅アップの方が、現状では致命的になり得るから。ここは斎場。つまり大岩の上。避けすぎたら、投身自殺になっちゃうよ。

「じゃ、聞くけど……受けられると思う?」

あの拳。

「……」

答えるよ。

「……」

ま、良いか。もたなかつたら折れるの神樹だし。

「!」

巨人が向き直る。

両脚を大きく開いて待ち構える。

巨大な一歩が寄ってきた。

七星剣を握りなおす。

見下ろす人形。

交錯する視線。

ギリギリと、巨大な右腕が振り上げられる。馬鹿の一つ覚えか、相手が小娘と思って油断しているのか……ま、普通はあんなの一発くらえばペシャンコだわな。

「神樹っ!」

後方へ、神剣を大きくふりかぶって、

「碎けるっ!」

スタートは同時だった。

隕石の如く、容赦も感情もない空からの一撃と。

地を這う如く、相手の足元を狙って跳びだした踏

込み。

破碎される神楽舞台。

振り回される七星剣。

知覚できない速度で大気を切り裂いた神剣が今、火花を上げて、人形の脚に喰らいつき、インパクトツ！ 全身を反動が駆け抜ける。硬い。弾かれる。相手の脚を軸に、七星剣を振り抜いた動きは私を、人形の背後へと運び飛ばした。

「うわっ、と、とう」

崩れるバランスに反射的に身体が回転し、たたらを踏むも何とか着地成功。見上げる視線の真ん前には、例の巨人の背中が……白い？

「のの姉っ」

黄金の霞が消え去った巨人が、糸の切れた操り人形のように、足元からコキコキと関節を折りながら、見る見るコンパクトになっていく。

「……勝った、の？」

「……ですか、ね」

待つこと一分、動きなし。

恐る恐る七星剣の切っ先でチョンチョンしてみるけど、

「反応、しないね」

「縛り上げますか？」

六メートルあった巨体を？

「却下。それに……」

まだ、お客さんが残っている。宮司さんが連れてきた、双子中学生の片割れが。嫌らしく笑ってた短髪か、無言能面を貫いてた黒髪ストレートの方が。

ドミノのように連鎖的に襲ってきた苦難も、試練も、ようやく次でお開きか。

全く、ひどい一日だよ。聞き出さなきゃいけない事が山ほどあって、何から吐かせればいいのか検討が済まない。

やっと、一息。ためいきついたら幸せ逃げるけど、さすがに肩が

凝るわよ、これ……と、巨人との一戦を終えて、ホツと肩を回したならば、シユカつと、熱線が一瞬、私の頬を掠めて過ぎた……って、おいおい。

頬に触れる……火傷したのか、ちよつとだけヒリる。血が出てないのが嘘みたいに。

「あれ？ うつそ。茶吉尼たきに、やられちゃってるじゃん」

私の右頬に銃弾（仮）を掠めさせた張本人が、森の中から、全く悪びれていない様子で出てきた。その発声源に首を向ける、私の動きの方がまるで人形のように……こいつ、何故撃った。

「ふうふうふうふうん」

双子の片割れの短髪……その両手に握られている、真四角な箱状物体。けどその一方は真つ直ぐ伸ばされた右腕の延長線上にあつて、その箱の短い方の側面には、見る者を無意味に不安にさせる真つ暗な九ミリ内径の穴が、私に向けられていて、

「あなたが、暴走した茶吉尼を、黙らせたつてわけね？」

その物騒な物体を、私に向けて黙つて発砲したのが、あんたか。

「とりあえず、お礼を言うべきなのかな。あたしは晴きよい。安倍晴あへつて言うんだ。今回はこつちのミスでね、妹の人形が暴走しちゃつてさ。ま、あたしが止めるつもりで追いかけてたんだけど、その途中で稲いな田だ姫ひめの巫女さんには襲われるし、散々な目にあつたけど、まあ、茶吉尼を圧倒できるだけの巫女さんが、稲田姫さんに居て良かったよ、本当」

んじゃこつちも、望と珠恵のお礼と、茶吉尼とか言う人形の落とし前、つけた方がいいのかねえ。

「の、のの姉？ とりあえず、落ち着いて」

何よ神樹。私は落ち着いてるわよ。これ以上ないほど冷静よ。クル！ むしろコウルド！ 思考は冷たく、肉体は熱く。復讐するなら無慈悲じゃないと。

「ええと、野乃華、だつたっけ？ 聞いている？」

「……一つ、聞いてもいいかな？」

「何？」

「外した？ それとも、外れた？」

この後の展開を決定付ける、クリティカルな質問に対して、晴と名乗った少女は言った。

「やっぱ、普段からしつかり手入れしないと駄」

最後まで聞き取れなかった。

私が一足で、肉薄したから。

七星剣を振り上げて！

「ひいいひいいひいいひいいひいいひい！」

神樹が泣く。関係ない。振り抜いた先には、予想通り、

「クールだなあ」

晴の姿が跳んでいる。

「でも、嫌いじゃないよ」

笑顔を浮かべて。

金色の霞を纏って。

両手の拳銃（仮）をこちらに向けて。

「初めまして、始めましょう、か！」

二丁の銃口が光った瞬間には、私は森へと抜けていた。樹皮に食い込む銃弾二発。甲高い、木のカミの絶叫。着弾点は、一瞬前の私の頭部と心臓部。

こいつ、殺る気か！

「あれ？ また外れた？」

冗談じゃない。そんだけ精密射撃しといて、よく言っよ。つていうか、

「彼女も七星剣の手先？」

「ノーコメントで」

「しばくぞ、後で！」

拳銃を撃たれた事を、嘆いている暇はない。遠距離射撃なら、叶の符でも体験してる。ただ厄介なのは、

「ねえ、あれも、神寄って言うの？」

「間違いなく、神寄っすね」

「じゃ」

「めちゃんこ、強いつす」

戦力的に、五分か不利。いや、得物から言っても、狂いつぶりから言っても、圧倒的に相手が上か。幸い、森の中は障害物が一杯。晴の銃弾が、叶の符みたいに追尾性能もってたら最悪だけど、とりあえず、戦略的に正しそうなのが、

「一時撤退!」

付き合ってらんないわよ!

そりゃ宮司さんは、「殺し合いをしてもらいます」言っただけさ、それって言葉の綾であって、実際にはそうじゃなくても良いつて確約させたじゃん。なのに、頭部と心臓かよ。洒落にならんわ。そもそもこの神事、望、叶、珠恵がリタイヤした時点で私の勝利だし、あの人形はおまけとしても、何が悲しくて、拳銃持った獵姫に追いかけれなきゃならないのよ。

嘆きたい。投げ出したい。ど平日のゴールデンタイムに、巫女服着込んで夜の山を逃げ回るなんて、そんな同年代中コンマ数パーセントの希少価値、いらさないから。

逃げる、とにかく、射線から。

こんな極限状態で、何を呑気な、と思うけど、私は実際この逃避行を、わずかでも楽しいと感じ始めている。

危ないなあ。そこまでDMな自覚は無いんだけど、ひよっとしたら何厘かの割合で、自分の中に苦境で感じる回路があるのかもしれない……けど、今の楽しみは、そういう快感レベルの話ではなくて、

「跳べるっす!」

「はいよっ」

あまりにも思い通りに動く、肉体に、だ。

星明かりさえ届かぬ初秋の闇の底、人間の都合なんてお構いなしな自然林の中で、全長二メートルの長物携えながら、なぜ全力疾走が可能なのか?

神寄は、思いを現実に変える力だ。

私の、こうあれかし、という願望を、神樹というフィルターが実現可能な出力として肉体にインサート、足りない身体能力を文字通り神の力で補って、私は五メートルくらいの崖を、一跳躍で飛び越える。

「捲けた？」

「全然だめっス」

「こっちはホームなのに」

「相手のカミが悪いっスよ」

逃げても逃げて、背後にピッタリと追いついてくる着弾と、撃たれた木々や岩たちの悲鳴。

これだけ跳んで走って、息切れしない肉体には感謝するけど、埒があかないのもまた事実。なにか、反撃の狼煙をあげないと。

「神樹、しばらく肉体預けても大丈夫？」

「はい、って、何をするつもりっすか？」

「電話！」

言ったそばから、私は肉体制御を神樹に任せて、もう日常動作並みの気安さで、幽体にて離脱した。

携帯電話が電波を利用した誰にでも扱える電話なら、特性と鍛錬は必要だけど、霊波を利用して直接魂同士で交信することが、実はできる。俗に言えばテレパシーだけど、双方が霊の扱いに長けていないと会話が成立しないのが、一般普及しない最大原因。基本料金も通話料も無料なのにな。ま、メール機能もないけどね。

「叶っ！ 二丁拳銃ぶっ放つ巫女なんてアリなの！」

「の、野乃華っ！ 今どこ？ 何？」

「人形倒して、馬鹿娘と鬼ごっこ！」

「茶吉尼を倒したっ？ 二丁拳銃って、晴の方じゃない。珍しく猫かぶってると思ったら、やっぱり暴れやがったのね、あの狂姫。」

野乃華、御瑞姫相手に、馬鹿正直な正面衝突じゃ勝てないわ

「分かってるから霊話してんのよ」

言いあう間にも、晴の放った弾丸が、背後の空間を突き抜ける。

神樹を信用しないわけじゃないけど、落ち着いて談笑できるほど人間できてないから、

「助けて！」

「合点。私たちも、奇襲されて泣き寝入りなんて、稲田姫の沽券に  
関わるからね」

身体に戻る。肉の重さとありがたさを知る。闇を切り裂いて風に  
乗り、意外に複雑な山の地形に感心しながら、それが逃亡速度を遮  
っていることに舌打ちもする。

「野乃華っ！ 受け取って！」

霊話から数分、叶の声と同時に、それは地を這うようにして現れ  
た。

私の周囲をグルリと取り巻く、十を下らない白い符の壁。

「防弾性能を付与した特別版！」

「でかしたっ」

「でも、気をつけて。彼女の弾は、実霊二種類あるから」

「りょーかいっ！」

私の周囲を守れ、という単純な命令においては、叶との距離が関  
係ない符のシールドは、急停止した私の動きに、遅滞なく同期する。  
普段は辟易する叶の粘着質な几帳面さも、こういう場面では感謝感  
激貞操進呈ものだわ。

「反撃、開始っ」

「イエスマム！」

それまでとは逆行、晴に向かって地面を蹴る、全力で！ 一瞬の  
虚をつく間に稼いだ距離に、それでも驚愕的な反応速度で迎え弾が、  
放たれる二発。一発は符が防衛、お餅のような粘りで弾丸を呑み込  
んで、衝撃を完全吸収したけれど、もう一発は符を、

「貫通したっす」

「霊弾か！」

右肩を掠める。魂がちぎれる。血は出ないけど、精神的な苦痛は



免れない。一瞬だけど、右手との接続が切断され、

「つくそ！」

それでも肉薄、唐竹割一閃。上方からの重力加速度も加味した一撃は、重い衝撃を伴って、甲高い音を周囲に響かせた。威力が足りなかったのか、相手が化け物なのか。両手の拳銃をクロスして、七星剣の重量を受けきった中学生が、笑ってんじやないよ、この野郎。「そうそう、これこれ。このくらいの刺激がなきゃ、御瑞姫<sup>みずき</sup>同士の舞闘って言えないよね」

ありえない。押し返される。

慌てて跳び退った私に、容赦なく襲い掛かる銃弾、四発！ 思わず七星剣を盾にするけど、叶の符が二枚減って、一発は刀身に激突、もう一発が刀身をすりぬけて、

「くうっ」

神樹が私ごと、豪快に魂を捻った。見た目に気持ち悪いけど、なら抵抗を感じずに、心臓部分を弾丸が通り抜けていく。でも、泣き言ってる暇はない。折角ここまで詰めた距離。格闘戦に持ち込めば、いくらなんでも拳銃じゃ、

「はっ！」

気合が乗った一撃を、足元スレスレに叩き込む。こっちの攻勢を、むしろ喜んでいいのか、彼女はあえて距離をとらずに跳び越えて……両手の拳銃を、叩きつけてきた！

それを、反射と呼んでいいのか分からない。でも瞬間、私の肉体は、私と神樹という二つの魂の制御を振り切って、『自分の意思』で晴の攻撃をスウエーした……紙一重で。

「んなっ！」

胸元を走った一瞬の熱と、続いて痛み出した裂傷が、何が起こったのかを想起させる。一瞬の確認。切り裂かれた胸元。もし、私の胸がもう一ランク大きかったら……その傷口は、おそらくパツクリと肉を見せていたに違いない……違いないんだけど、喜んでいいのか、それは。

そして、見る、異常の解答を。晴の両手に握られている拳銃の、その側面にキラリと光る、刃の存在を。

「銃剣……」

「そそそ、ま、ここまで近接されること、滅多にないけどね」

私も神樹も見落としていた隠しだねを、私の身体は見破っていたというのか……それとも、一六年かけて培った直感が、何かを視界の端に捉えていたのか。肉体には肉体の意地があるっていうか、そりゃ、馬鹿な魂に操られて、勝手に斬られちゃ、嫌だろうしね、私の身体も。

に、してもだ。

ミドルレンジじゃ鴨撃ちで、ショートレンジに持ち込めば超近接で切りつけるってか。ニメートルっていう大剣が間合いの私とは、見事に被らないキャラだわ。ま、そんなだけ、相手との距離の駆け引きが、勝負を一方的に決めちゃうってことで、

「ほら！ ほら！ ほらっ！」

当然、彼女の間合いから、簡単には脱させてくれないわな。

防戦一方。かわす、受ける、受け流す。こんなことになるくらいなら、真面目に体術勉強しとけば良かった、なんて後悔したって意味がない。大きく跳び退けば当然、銃声っ！

叶の符が減っていく。有効間合いのイニシアチブは向こうが握りっぱなし。と、思っていたら、

「ちよっ、何よ、これ」

予想外の援軍が、晴の足首をつかんでいた。地面から突如生えだした土の手首と、下草製の縄型罟が、彼女の足首から絡み付いて、みるみる膝下まで這い上がっていく。

『ののか！』

『ののか！』

『ノノカ！』

『野乃華！』

『ののか！』

『ノノカ！』

『ののか！』

『野乃華！』

『ののか！』

『ノノか』

野乃華！』

『ののか！』

『ノノか！』

『ののか！』

『野乃華！』

『ののか！』

湧き出し、辺りに満ちる、聞き慣れた声援の嵐。幼い頃から見守ってくれた、晴の銃弾でやたらに傷つけられた百々山のカミガミが今、大合唱で、私の胸をこみあげさせる。

『やっちまえ！』

シンプル、単純、わかりやすい感情が、私を包んで後押しする。

『許せん！』

そう、彼女は山を蹂躪した。私に当たらなかった幾多の銃弾は、木々を、岩を傷つけて、その悲鳴はいつも、私の背中に降り積もっていた。

今こそ、それを晴らす時。

「はあああああああああ！」

迷わない。

ためらわない。

前髪しかない幸運の女神の、千載一遇のチャンスを逃すなんて愚拳、犯して後悔したくないから！

「天誅！」

乙女の全力は、少女を軽々とぶっ飛ばし、ボロ切れのように、という比喻が陳腐に思えるほど少女は、全速で地面を跳ねて回って転げて終いに、激突した。

……生きてる？

「のの姉、本当に全力で叩きましたね」

「いや、だって、調整は神樹の仕事でしょう？」

「責任転嫁っすか！」

なんてコントしてる場合じゃない。

十分な手応えが必殺の予感をビシビシ伝えてくれたけど、心臓止まったら私はもれなく殺人者だ。頼みの綱は相手も神寄してたことだけで、それでも無傷なんてこと……あり？ え？ ない？

「の、の、の姉」

黄金の霞をまとった少女が、闇の中、立ち上がるうとしてる。

額を切り、身体中の擦過傷から血をにじませ、左手が異様に垂れ下がっているにも関わらず、

「やっぱ、御瑞姫は頑丈だわ」

少女の声で、ソレは語る。

「えっと、これで、良いのか？」

右手の銃に実弾を装填しながら、ソレは語り続ける。

「んで、」

その右手に握った銃を、白目を剥いて気絶している少女のこめかみに押し当てて、ソレは、その黄金の霞の主は、

「こうか」

引き金を、軽く、引いた。

銃声が、衝撃となって、私の心を震わせる。

オマエハ、イマ、ナニヲシタ？

「ん？ 何を睨むよ。ここまで追い込んだのはそっちだろうが。

撃ち込んだのは、代謝を促進させる、言わば回復弾だぜ。ま、それでもこのまま動きゃ、死ぬけどな、こいつ」

少女は白目を剥いたまま。黄金の霞は、その邪気を一層強め、少女の肉体を動かして、来る。

この瞬間、私の中で、緊迫感を煽るBGMと同時に、思考の隅でカウントダウン開始。

「神樹っ！」

「晴は完璧に操られてるっす。倒すとしたら、あのカミだけを斬るしかないっすよー！」

「どっやってー！」

「わかんないっすけど！」

「不能！」

文句を言っても仕方がない。あのカミのスイッチを入れちゃったのが最後の一撃なら、一時の怒気に身を任せて気絶まで追い込んでやった私にこそ責任がある。あるんだけど、

「腑に落ちない！」

「じゃ、見殺しっすか！」

「できるか！」

そう。散々追い回され、好き勝手に撃ちまくられた拳句、晴を助けなくちゃいけないっていう展開も理不尽だけど、だからと言って今、限られた時間内で相手を何とか出来そうなのも、半径五百メートル以内に残念ながら、私しか存在しない。だったら迷ってる暇はなく、恨みはあるけど人命優先が人道に即する道で……人道って、時に人の感情を逆撫でするよね、なんて考えている暇もない。とにかくあのカミ、私を狙っているにしろ、やり方が気に喰わな過ぎる。そう、今、晴のことは忘れてしまえ。全ての怒り、カミにぶつけて八つ当たれ！

直後、相手の姿が、視界からアウト。野郎、乗っ取ったのを良いことに、限界以上の筋力をフル動員かつ！

「背後っ！」

「分かりやすい！」

死角を狙ってくるのと分かっちゃえば、逆に対処はできる。そのまま逃げ回れば、多分負けることはない。けど今、思考の片隅ではリミットの分からないカウントダウンが進行中。彼女の肉体が生物学的限界を迎えるのがいつなのか不明な以上、一分一秒でも早く、あのカミを黙らせるしかなく、

「霊弾！」

「なるほどっ！」

いつの間にか持ち変えていた右手の拳銃から放たれた弾丸は、全て叶の符を貫いた。予想でしかないけど、右手の銃から霊弾、左手

の銃から実弾っていうシステムだったら、今、左肩が脱臼している  
であろう彼女からは、しばらく実弾が飛んでくる気配はない。

だったら！

「神樹っ！」

念を送る。

「……了解っす！」

逡巡、検討の末、実行の価値ありとの答えが来た。

暗闇の中、黄金の光が舞う。

舞いながら、銃弾の雨を降らす。

それは符を貫く弾。

実体には影響しない攻撃。

今、その雨の中に、全力で突撃す！

「うおおおおおおおおおおおおおおっ！」

即興、アドリブ、思いつき。成功どころか実行できるかどうかも  
分からない案にすがって、だからって、やると決めたら迷うな私。

迷いは重石<sup>おもし</sup>。覚悟だけが前進力。今この瞬間のために、己の持てる  
全ての力をただ、ただ、ただひたすらに目的に込めて

銃弾の洗礼に

ひるまず突っ込み

光り輝け、私の身体！

「いつけええええええええええ！」

銃弾が肉体を蜂の巣にする、その一瞬前に、

「神樹っ！」

「っす！」

ズルリ、私の魂は、七星剣と化した神樹の御魂を伴って、肉体か  
ら飛び出した。

全力で地面を蹴った肉体をブースターとして、更に肉体を蹴っ飛  
ばして加速度を追加！ 霊弾が私の身体をスカスカと貫いていくの  
を尻目に、さあ、今度こそ、全力全開、遠慮なし！ 私と神樹の、  
今日の怒りをありっただけ込めて、

「つしやああああああ！」

光り輝く七星剣が、晴に一閃。

その胸を真つ二つに切り裂く軌跡を残して。

ドツと、少女の肉体が、地面に落ちる音がした。

って、そりや、魂が抜けた私の身体が、推進力を失って頭から地面に激突した音で……めちやくちや痛そうなんですけど。あの身体に戻るの、これから？ マジ？

「の、の、姉」

「神樹？」

静かに地面に倒れる晴の身体から、黄金の霞が拡散していくのを確認する時に、一息つく間もなかった。

「限界……っす」

「神樹っ！」

グンツと、それこそゴムに引つ張られたように、私の魂は一瞬で肉体へ。

同時に、神樹の気配がプツツリ途絶えて……痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い！ な、なななななななななな、何よこの尋常じゃない痛みは！ か、かかかかかか、身体中がめっちゃ痛いんですけど！ き、きききききききき、晴を運ばなくちゃいけないって時に！

と、悶絶中の私の視界に、第三の人物の影がインサート。

「姉と人形が、お世話になったそうで」

って、双子の片割れかつ！

「茶吉尼」

痛みに打ちのめされて起き上がることも出来ない私を無視して、その長髪の少女が振り返る先に見る……三間二尺のあの巨人。

ちよ、ちよちよちよちよちよ、ちよつと待ってよ。

神樹はいない。

身体は激痛。

メインディッシュの後に、デザートなんていらなからっ！

「月見里、野乃華」

少女の平坦な声が、私の耳に、今日最後の音として、届いた。  
「さようなら」

直後、私を動かす全ての電源は、問答無用に、根本から、ブツ



## 第二帖 剣拳豪合々京の娘の俠気が凶器々 壱

目が覚めたら、いきなり真つ暗だった。

夢の残滓も何もない、ただスイッチが切り替わっただけのような、意識一〇〇パーセントな完璧な覚醒。

後頭部には枕、背中からお尻、足にかけてはマットが私を乗せて沈み込み、両腕は毛布の上に止め金のごとく投げ出されている。

重力は後ろから。ゆえにお手本と言ってもいいほど、仰向けに寝ていることを自覚する。闇に目が慣れるに合わせて、嗅覚は嗅ぎ慣れた匂いを検知した。視覚と嗅覚、そして身体を包み込む布状物体の感触を分析し終えた触覚が、ここは自室だ、安堵しろ、と寝起きの無情報状態の脳に、緊張の緩和を提言し始めた。

いや、それが問題だろ。

自室の布団に横たわって、周囲に人の存在が感じられず、とりあえず緊急の危険がなさそうなことには感謝するけど、今一番問題なのは、どうして自分が自室で寝ているのかっていう、直前の記憶とのアグレッシブなまでの乖離のほうであって。

神事はどうなったの？

神樹<sup>みき</sup>は大丈夫？

私、どこも怪我してない？

あわてて、仰向け不動状態で、脳内身体スキャン開始。頭皮、顔面、胸、腕、手に腰、つま先まで……覚えている範囲の傷口に相応の痛みを感知するけど、それ以外では、そう、記憶断絶直前の、あの超絶な痛みが感じられない。それはそれで素晴らしいことで、喜ばしいことには間違いないんだけど……とりあえず、今、いつ？

恐る恐る、私は首を動かしてみた。大丈夫、違和は感じない。デフォルトで置いてあるはずの目覚まし時計が存在しないことにギョツとして、果たして勉強机の上に、それは鎮座していた。

ということは、私は自分の意思で布団に入ったわけじゃなく、お

そらく母の手によって、この愛しい聖地への降臨がなされたという事か。枕元に時計を置いてくれなかったサービス不足は責めるに値するけど、このやあかいサンドイッチに身を包んでくれた事に、そして階段を担いで登ってくれたであろう肉体労働は、評価せねばなるまい。

……連続睡眠時間三〇時間は、さすがに私人生最長記録の大幅更新ですよ？

ていうか、さらっと二四時間越えている辺りに、この温くて柔らかくて甘美な状況にも関わらず、わたくし、背筋が冷たくなってまいました。

丸一日後の、真夜中丑三つ時。

意識した途端に、肉体がひどく、喉の渇きと胃のスカラカンを主張し始めた。

ああ、はいはい。あんたはあんたで、私っていう魂が眠ってる間もずっと、黙々と生命活動を維持してきたわけよね。ひよっとして目が覚めたのも、肉体の方の意思が、『いいかげん燃料補給しろやコラッ!』と、魂という上司に逆ギレしたからなのかもしれない……冷蔵庫にまだ、ポカリ残ってたかな？

腹筋の力で、上半身を起こす。きょうび、この程度の動きが出来ないほど身体を作っていない女の子もいるそうだけど、どんな不精よ、それ？ 外見だけどれだけ着飾っても、結局一番最後は、筋肉と内蔵の健康さが物を言うのにな、なんて思いつつ、私の意思は身体を横から縦へと置換していく。うん、よし。魂と身体は、ちゃんと細部までシッカリ癒着している。

思い通りに動く肉体に満足して、その肉体の希求に従って階下へ。十六年過ごした実績は、照明という文明の器具にいつさい触れる必要なく、私を物損事故なく冷蔵庫前まで誘導してくれる。

さあて、ポカリポカリ……あつた。取り上げますは、一リットルペットボトルいっぱいに作られた、スポーツドリンク粉末の水溶性品。お行儀なんて知ったことかと、私は直にそれを口に運び、うめ

えっ！

ただの水道水と、謎の白い粉末を混ぜ合わせただけに、関わらず、その生命の水は、口から食道に至る間に身体中の細胞が競い合って奪っていく浸透現象をひきおこし……一リットル丸々全部、身体中に潤いさせましたが、なにか？

「野乃華<sup>ののか</sup>、気がついたの？」

「うおっ！ ビックリした。」

「なによ、電気もつけないで泥棒みたいに……ちゃんと冷蔵庫閉めなさい。それに、コップくらい使いなさいよ。」

言葉と同時に、蛍光灯という名の照明兵器が発動。闇に調整されていた眼球は突然のルーメン差に真っ白に跳んで……日本全国お母さんっていう生物は、冷蔵庫の開け閉めに連動した精密な監視装置を内蔵しているに違いない。

「大丈夫？ どこも痛くない？」

「ええと、あちこち少しずつつ痛いけど、とりあえず平気そう。それより、お腹減った。」

「……お腹減るなら大丈夫ね。脂肪覚悟で、何か食べる？」

「やな覚悟だなあ、それ。そりゃ、母さんみたいに脂肪倉庫が胸部にしか存在しない設計なら喜べるけど、なんでそういう所だけでも、越境遺伝しなかったんだろ。育ての親の、良いとこだけ似ればいいのに。」

「焼きうどん」

「はいはい」

冷蔵庫の貯蔵を確認済みでの催促に、母苦笑。私が卵、四玉九九円の生うどん、豚コマ切れ（アメリカ産）、キャベツを取り出す間に、ゴマ油を垂らされた中華鍋が、火あぶりの刑に。シンクに回りこんだ私が、剥いたキャベツを千切っては洗い、隣の母は、蛮族もかくやの勢いで、薄い豚肉を適当に手で裂いては鍋に放り込んでいく。

「おはよう」

なぜか、父登場。

「野乃華、キャベツ三枚追加。四玉すすいで」

「へ？」

食べるのか、父？　なんて、余裕こいてる暇はない。うちの調理はトヨタ生産方式。全部同時進行で、どっかが止まれば具材が焦げる。慌ててキャベツを千切って洗って、続いてうどんを次々にボウルに放り込んで、水洗いしたかどうかで、

「頂戴」

「ほいな」

水を切って渡したうどん玉は、そのまま良い感じに炒まったキャベツと豚肉の上へダイブ。うどん玉が纏っていた水分が油と喧嘩して、ジュツと盛大な音を立てる。再び私は、今度は母の隣のコンロへ。熱まってステイしていたフライパンに、生卵を連続投下。広まった白身が白濁しきるかどうかの境で、用意していたコップの水を少量垂らして、ジャワツビチビツツと跳ねまくる油をガラス蓋でガード。濛々と立ちのぼる湯気がガラス蓋に遮られて、目玉焼きを上から押さえる様に蒸していく間に、

「醤油取って」

「へい」

うどん調理終了。塩胡椒を大雑把にふられた焼きうどんに、最後の醤油がタラリと垂らされ、熱を持った麺が香しく食欲をかきたてる。それを三枚の皿に取り分ける頃には、私の方も目玉が焼きあがり。火を止め、繋がった白身を菜箸で切り離して、最後のトッピングに黄色い半熟を載せていき、鰹節を豪快にぶちまけて、完・成！

「お見事」

父の賛辞よありがとう。これでも小学低学年から、強制……もとい自主的に家事手伝いを叩き込まれてきたキャリアがある。母との無言のコンビネーションも、視線のみで大舌戦を繰り広げられるレベルに達しているほどで、目で言い負かされた私がお皿をテーブルへと運び、

「さて」

かくして、真夜中の食堂に、家族の団欒

「いろいろ説明してもらいましょうか」

……もとい、取調室は誕生した。

かつぶし踊る焼きうどんに箸を進めながら、

「んで、結局、おまえはその、なんとかって代表に選ばれたのか？」

「んーと、よく分かんない」

不思議と、会話は弾んでいた。

「あなた、何か頼まれてる？」

「つか、御山でそんな神事、聞いたことないんだが……拳銃で撃たれたってのもな」

「今から一緒に？」

「これから一緒に？」

「殴りに行くのかあ」「」

ノリノリですね、あんたら。深夜つつつか早朝に。

「いや、ガサ入れする準備は出来てたぞ」

それ、意味違う思います。

というか、隠しても仕方ないと思って荒唐無稽ばらしたけど、本当スポンジだなあ、うちの両親。その上、嘘だけを的確に分別回収する高性能発見機まで備えてるし……エスパー？

「で、だ」

父、真顔。レアだ。半生じゃない方の意味の。

「まだ、続くのか、その危険な神事」

「はつきりとは分からないけど、多分……。神剣自体、そういう危険な神事向けに作られてるっぽいし、日本を守るための十本の武器の一つだとか何とか……」

「だよ」

「大変ねえ……で、野乃華はどうなの？ やってみる気なの、その

お勤め」

「いや、まだ全然サツパリ、なんにも分かんないから。大体、今更遅いけど、本当は今日が神事の本番だったんだから。私としては、そっちの方が心配なんだけど、むしろ。何か、連絡あった？ 神社から」

「ああ、そうか」

ポンツと、右拳で左手の平を叩いて相槌をわざわざ打つのは、狭い自宅内では父くらいで、

「野乃華が倒れた後の話、してないじゃん」

「あら、やだ」

「おいおい。」

「私が社務所のお手伝いで残ってたら、望ちゃんたちが血相変えて運んできたのよ、野乃華を。なんかグツタリしてるし気を失ってるしで、とりあえず、その日は神社の方で寝かせてもらったんだけどね、病院じゃ手に負えないからって言われて。」

でも、一晚経っても目が覚めないし、かといって苦しそうにも見えなかったから、手伝ってもらって、自宅まで運んでもらったわけ。あ、あんたを二階に上げたの、望ちゃんたちだからね。お礼言つときなさいよ。」

「それだけ？」

「それだけ」

「ほかに、特に？」

「聞かされてないけど。大体、野乃華が気絶した理由だって、神事の途中で、の一点張りだったから、てつきり神楽舞で目が回ったのかと思ってたのよ。あとは、狐憑きとか」

「うわあ、それでごまかそうとしたのか、なだひめ稲田姫神社。」

「とりあえず、今日明日お休みなんだから、一回神社に行ってきたら？」

「うん、そうする。」

「というか、問い詰めてくるわ、色々。」

同刻、月見里家から遠く離れた古都・京都も鴨川から東側の昔ながらの街並みの一角にて。

稲田姫神社から帰還してから丸一日、こちらは一睡もせず姉である晴きよひの看病を、自分の人形である茶吉尼たきにの調査と同時進行（一対九の割合）で行っていた安倍明あへあかりとその母もまた、疲れ切った身体と脳細胞に栄養を補給していた。

そこが京都で、彼女が巫女で、おまけに陰陽師で有名な『あの』安倍家の血統である以上、陽の当たる温かな縁側で高級緑茶に季節の和菓子（例・栗羊羹）というのが定番になりそうなものだが、そこは深夜で時は平成。

幻のコーヒーと呼ばれるコピ・ルアク（ジャコウネコにコーヒーの実を食べさせ、排泄物に残った豆を集めて洗った超特殊なコーヒー）を贅沢にドバドバとカップに注ぎ、お茶菓子は本場ベルギーから取り寄せたピエール・マルコリーニのシャンパントリュフ。二四時間を超えた連続稼働に疲れきった頭脳に、味覚と嗅覚を刺激する酸味と糖が、それはそれは侵略すること火の如くの表現が相応しい勢いで吸収されていく。

「で、収穫は？」

「分からない……ということが、ハッキリと」

疲労の極みでたどり着いた境地。

ありとあらゆる試みが徒労に終わった結果の、胸を張って断言できる事実が『原因不明』。

明の操る人形であるはずの茶吉尼と、安倍家の巫女の一人で、日本最強の巫女である御瑞姫みずかきでもある晴の、暴走。

それは常識ではあり得ない現象であり、事実、茶吉尼には何の痕跡も見つけることが出来なかった。

本来なら、茶吉尼は、明専用の神器によってのみ、操られる。明が操る神器の中に住まうカミが、明の命令下、茶吉尼に降臨することで、初めて動くことが可能になる……はずだったのである。

だが現実に茶吉尼は、動いてしまった。そして、稲田姫神社の巫女に襲い掛かり、敗北したらしいのである。

それは、安倍家の面子に関わる、重大事件であった。

『あの』安倍家の直系の子孫であり、神器の研究を千年以上にわたって積み重ね、近代科学との融合をテーマに文字通りカミの領域に踏み込んできた安倍家の虎の子の神器が、よりによって見知らぬカミに乗っ取られ、原因不明の挙句、ど素人の巫女に負けてしまった……などと、今更どの面下げて神宮じんぐうに報告することができよう、いや出来ぬ、出来るか、揉み潰すに大決定！

なのだが。

「対策の取りようがないわね」

「あの時の茶吉尼は整備直後で完璧でした」

「おまけに、箱入り休眠状態から、暖機なしのトップギア。これはもう……」

「内部への侵略ではなく、外部憑依の強制駆動かと。実際、内部器官への影響は軽微であり、衝撃のフィードバックによる損傷程度しか認められていません。それに内部器官を活発にすれば、機械的に活動履歴が残ります。つまり茶吉尼は、いつさいの制御下になく、乗っ取られた、という事です」

「それだけが、救いよね。これが明の操縦中の外部干渉だったら、あらゆる神器の信頼性が霧散するもの」

「敗北も、それが原因。茶吉尼本来の性能は、人工筋肉による柔軟駆動。外部からの強制介入では、本来の動きの再現は不可能。けれど、今問題とすべきは、動機」

「あの時、百々山ももぢやまのカミが、何を目的にうちの人形と娘を利用した



のか、だわね」

しよぼくれる瞳を揉みほぐしながら、母・芙由美ふゆみの視線は気を失ったままの晴に注がれる。

「魂を斬られるなんて、想定してなかったわ」

「晴の生き意地の悪さが幸いしました。普通の人間だったら、そのまま肉体との接点を失って、御霊化ごりょうかするところですよ」

「えげつない言い方するわね」

「えげつない事を、されました」

あの時、気を失った稲田姫の巫女を無視して、明は急いで晴を回収した。が、脱臼した肩を嵌めて、目立つ外傷の応急処置を的確にただけで、彼女は茶吉尼の方の原因究明に没頭したのである。

結果、京都へ戻るまでの二時間強、晴は臨死状態のまま搬送された。

精密検査で、肉体と魂の結合が切れていることが分かってても、その場に晴の魂が無ければ、治療のすべは無かったであろう。明の言の通り、晴の魂が高速道路を全力で突っ走るワゴンを追いかけてきたからこそ、今の小康状態が保たれているのだ。恐らく、彼女の意地が無ければ、今頃この場合は、反省会ではなく告別式になっていたに相違ない。

「大丈夫。生への執着は、美德です」

「明が見逃してなかったら、もうちょっと穏便にすませられたんだけど」

「結果オーライです。どんまい、母さま」

「それ、こっちの台詞だから」

とは言え、終わり良ければ、に持ち込めれば、確かに憂いはない。問題は、終わりどころか、まだまだ問題が絶賛進行中の最中も最中、中盤の山場を迎えている現状で、いったいどう進めれば、『終わり』が見えてくるか、である。

「晴も、撃ってるしねえ」

娘を瀕死に追い込まれた安倍芙由美（三八、双子の娘有）として

は、損害賠償の請求に先方に殴り込みをかけるに吝かちかではない、と言いたいところなのだが、実際には『吝かちか在ります』であり、おまけにその元凶が被害者であるはずの晴なのだから、たちが悪い。

「銃弾、ばらまいてるからなあ」

それも一発二発ならともかく、実弾合わせて百発以上の大盤振る舞い。いくらこつちが操られていたとは言え、そんな暴走状態を野放しにしてくれる道理があちらにあるとは到底思えず、むしろ正当防衛と主張されたら、ぐうの音も出ないのが見え透いた才チ。

「おまけに、御瑞姫ともあるう者が、一介のカミに好きなように操られたじゃ、安倍の名誉も地に落ちるわよ」

と愚痴ばかりも言っていられない。

娘の介護と人形の整備。

時間はいくらあっても足りず、むしろ事件が週末であつたお蔭で、明を学校に出さずに整備を手伝わせることが出来る偶然に、感謝せざるを得ない。

「とりあえず、茶吉尼を補修しますか」

内部器官への影響は比較的軽微であつたとは言え、外部装甲の損傷は無残の二文字が似合う状況に、母と娘は怒りを抱えつつも、この先の長い作業のため息を止められないのである。

## 第二帖 剣拳豪合々京の娘の俠気が凶器 貳

結局、寝過ぎの反動で眠れなかったまま、早朝の稲田なだひめ姫神社へ異議申し立てに出向いた私は、

「あ、野乃華、いいところにつ！」

諸手を挙げて歓迎された。

「いや、というか、私は一昨日の釈明を聞くこと……」

言う間もなく、望のぞみに手を引かれて連れて行かれたのは、以心伝心、まさに私が気絶したあの現場だったわけで、

「私たちじゃ運べなくてさ。難儀してたのよ」

当時のまま、証拠物件たる七星剣は、そこに横たわっていた。つというか、

「わたしやクレーンか何かですかっ！」

そこにはいつもの如く、というか、私の心配なんてどこ吹く風で、神樹みきがスヤスヤと寝息を立てていやがって、腹いせに蹴飛ばしてやったけど、やっぱり痛い、私の爪先。

「くうううううううううう」

あんまり腹が立ったので、思わずぶん投げてやりました……それでも起きんか、こん畜生。

「野乃華、仮にもご神体なんだから、丁寧に扱ってよね」

「この程度で壊れやしないわよ、まったく」と収まらない怒りを抱えて七星剣から目を逸らし、白日の下に照らされた現場は、予想以上に荒れていた。

考えてみれば、あれだけ銃弾撃たれて、こっちも全力で地面を蹴っていたわけだから、まあ、決れること決れること。最終的に私は七星剣を握った状態で幽体離脱したんだから……冷静に考えれば、運が悪かったら、身体潰されてたんじゃないか、私？

ま、いいか。

現場にいた叶かなえ、珠恵たまえと合流して、とりあえず喜ぶは、全員の無事。

なんたつて、「殺し合いをしてもらいます」からまだ二日だ。とりあえず、その結果がどうなったかも気になるし、そもそもそんな神事を行うに至った経緯を、私は問い詰めにここまで来たのだから。

「今日、宮司さんは？」

「お昼まで、御山の中の片付けをしてると思うけど」

「んじゃ、そっちは作業を手伝いながら聞き出すとして。」

「とりあえず、七星剣納めてくるよ」

この世界でこれを素手で運べるのは、今のところ私だけ。望たちに別れを告げて、一人目指すは麓の宝倉。

そしてそこには、今回の馬鹿騒ぎに関して、恐らく根幹に関わっている存在が、人知れず、居る。

伊佐利だ。

曰く、神代からこの地に根付いてるとかいう大法螺吹きほらの御神木。だったら七星剣に関して、神樹に関して、何も知らない道理がない。

ハッキリさせるのは、あの黄金のカミの正体だ。

七星剣を包んでいる布を吹き飛ばして私の肉体を乗っ取るうとしたり、人形と巫女さんに憑依して私に襲い掛かってきた、あの黄金の光のカミ。それが七星剣に端を発しているとしたら、いったい何が目的で、七星剣の一応の主たる私に牙を剥いたというのか？ いやそもそも、じゃ、神樹って何なの？ 私がずっと十年間、七星剣のカミ様だと思っていた神樹は？

推測は、できる。というか、した。色々妄想たくましく考えてはみたけど、こういうのはあれこれ考える時間が勿体無く、結局本人に問い質すのが最短だ。

「説明して」

怒髪天を突き抜ければ、肝が据わってやたらと頭脳が回転し始めるのが私という個性で、そのモードが発動したら、相手の都合なんて知ったことかで、あらゆる言語が短刀と化して直入する。

七星剣を肩に担いで、言い訳しようものなら御神木をなぎ倒す覚

悟で。

私は本気。

というか、そういうジェスチャーでもしないと、相手に怒りは伝わらない。

幸い、周囲は無人。いきなり臨戦態勢の私にいつものごとく小さな力ミ様たちが騒ぎだすけど、脳内ノイズキャンセラー発動で、意識的には伊佐利と私の睨み合い。

「とりあえず、落ち着け」

「落ち着いてるわよ、十分に。どの角度で振り抜いたら一番効率的に幹を砕けるかを、シミュレートできるくらいには」

「……吾輩が黒幕じゃない。むしろあの時、暴走しようとしたヤツ力を封じ込めた方だ」

あの時って言うのは、一度七星剣が膨れ上がった時のことだろう。じゃ、

「ヤツカって言うのが……？」

「そう。本来の七星剣の御魂。十種神宝の内、もっとも獰猛で強力な、荒々ぶるカミ。奴は今回の神事を最後の機会と感じたか、強引に封印を排除しようと、あがきよった」

「じゃ、ヤツカを封印したのは、伊佐利なの？」

「神樹という、鞘を無理矢理被せてな」

「それじゃ、結局伊佐利が黒幕じゃない！」

ヤツカは、封印されてたから、他人を巻き込んでまで自由になるうとしたわけでしょ？ そもそも、なんで封印したわけ？ 今までずっと、この地域を守ってきた神剣じゃなかったの？」

「だから、落ち着け」と、伊佐利の魂が御神木から滲み出る。その柔らかな緑色の光は、決して主張せずに、周囲に溶け込んだまま。

驚いた。今までそんなことしなかったのに。

「ヤツカがあのまま解放されていたら、魂を剥がされて乗っ取られていたのは、野乃華の身体の方だぞ」

「だからって、他人を巻き込んだら……」

「そもそも、他人じゃ、意味がない。ヤツカは確かに強いカミだ。神寄かみよった場合、おそらく他のどの神宝かんだからよりも、強力に相違ない。

だがな、人間の魂にとつちや、カミの魂を羽織るのは、皮膚に酸をぶっ掛けられるようなものだ。ヤツカは、強酸だよ。歴代の使い手も皆、やつの魂に侵されて、言いなりにされていった。ヤツは、他人が自分を握るのを許さない。ヤツにとっては、巫女なんてのは、自分を振るう為の道具だ。だから、封じた。野乃華、お前に、ヤツを操りきってもらうために」

と、と、と、待って。ちょっと待って。

色々言い過ぎ。

追いつかない。

「じゃから」と聞えたが早いか、「ぎゃあああああああああああ  
ああ」

喰われた。

視覚的に。

頭から。

伊佐利の御魂が、私の上に覆いかぶさり……浸食する浸食する浸食してる！

理屈なんか知らないけれど、伊佐利の御魂が、私の魂の隙間に浸透して、そのまま身体と魂の間に、まるで水のように滑らかに広がっていく……って、これって、神寄かみよりなんじゃ？

「そうだ。これが、お前の、神寄だ」

気がつくとも、ものの数秒で、私の身体は伊佐利に包み込まれていた。身体・伊佐利・私の魂のサンドイッチ構造で。一昨日の神樹の時と同じ。カミの御魂と重なることで、人体を限界以上に振り回すことを可能とする、カミの御技。

「野乃華、お前はこの神寄を、体得しなければならぬ。カミ』を羽織るのではなく、カミ』に』羽織らなければならない。それだけが唯一、あのヤツカを押さえ込み、七星剣の外法の性能を引き出す、正解だ。お前はそのため生まれ、この地に遣わされた……」

って、やめい、このエロ！

伊佐利の話に真剣に耳を傾けていた私は、いつの間にか伊佐利が勝手に操ってた私の肉体が、七星剣を捨ててシャツをめくりあげ、ジーンズのベルトを緩めてチャックを下ろそうとしていることに気付いた。

「この程度の暴走を抑え込めずして、ヤツ力を制御できると思うな  
って、カッコつけんな！ そんなことして何の得があるっていう  
のよ！ 慌てて伊佐利の御魂を羽交い絞めして、自分の肉体の暴走  
を止めた私に、

「ところで、ブラのホックが見つけれなかったんだが……」

「黙れ、ボケカス！ 必要ないんじゃない、悪かったな！」

「……かわいそうに」  
「憐れむな！」

「ええと、野乃華さん？」

その瞬間、境内の空気が凍りついた。

「何をしているのかな？」

山から降りてきた宮司さんが目撃したのは、御神木の前でシャツの裾をまくり上げ、ジーンズを半脱ぎした、ストリップ真っ最中の女子高校生（夜は巫女）の痴態だったわけで、

「見んなアあああああああああああああ！」

思わず足元の小石をシュートしたら、上手いこと宮司さんの額にジャストミート！ 額が割れてそのまま後頭部から倒れちゃったけど、乙女の照れ隠しとして許されるよ……ねえ？

そんなわけで。

「説明してもらっかな」

社務所に連れ込まれた私は、額のガーゼも痛々しい宮司さんと向かい合わせて正座させられているわけで。

あれ？ おかしいな。今日は確か、私の方が説明を強要しに来た日のはずなのに。

「ええと、それは、そのお……」

さすがの私も、有史以前からこの地を見守ってきたと伝えられている御神木を、女子高生の身体を操ってストリップ紛いのセクハラを強要した変態に陥れるに、抵抗がある。

「実は先ほど、京都から電話があつてね」

キョート？ 脈絡のない単語に、キョトンと相手の顔を凝視。予想できない展開のときは、とりあえず相手の出方を観察するに限る。「君が壊した人形と、病院送りにした巫女さんについて、訴訟の用意があるそうだよ」

「はあっ？」

訴訟？ 訴訟つてあれ？ 検察と弁護士が丁々発止の舌戦を繰り広げるあれ？ 意義ありのちよつと待ったコールで逆転するあれのこと？

「ちよつと待つて下さいよ。」

あれは、向こうが一方的に襲ってきたからです！

宮司さんだつて、あの山の損傷見たでしょ？

百発は撃ち込まれましたよ、銃弾。

人形には神楽舞台穿たれるし。

叶と神樹に助けてもらったからなんとか生き残ってますけど、そうじゃなかったら本気で殺されましたよ！

大体、望と珠恵も、むこうに襲われて退場させられてるんだから、被害届を出すのはむしろウチのほうでしょっ

「……なるほど、そういう事情か」

「は？」

興奮して前のめりになった私を無視して、一人首肯するおっさんは爽やかに、

「訴訟云々はウソ。」

ただ、事実確認をしたいから、近日神社の責任者が話を聞きに来



るそうだね。

私も、大体の事情を知っておきたかったんだが……結局、勝ったの？ 負けたの？」

「つか、おっさん。フェイントかよ。」

「どっち？」

「一応、勝ったことに、なるのか……あぁっ！」

思い出した。というか、結線した。やばいやばいやばい。めちゃくちやばい。ばれたら、殺される。

「何々？ どしたの、いきなり」

考えてみれば、一昨日のあれ、七星剣に封印されていたヤツカが引き起こした、お家騒動じゃん。京都の巫女二人なんて、たまたま居合わせて、便利そうだから利用されただけなんじゃないの？ あれ全部、ヤツカが私を乗っ取るために暴れてたんだとしたら、むしろ京都の方が完全被害者になるんじゃないかね？

「おおおおおおお、落ち着いて聞いてくださいね」

「いや、君が落ち着け」

「一昨日のあれ、全部七星剣のカミ様が操っていたって言うたら、信じます？」

「？ んじゃ何？ 野乃華さん、七星剣のカミ様と喧嘩したってわけ？」

「そそ」

「七星剣のカミ様が、京都の二人を乗っ取って、野乃華ちゃんを襲わせたってわけ？」

「そそそ」

「……」

「……」

「それは……やばいね？」

「ですよね」

「ううん」と唸りモードで両手を組んで、黙考三分。「シラを切る」

ですよねっ！

「折角野乃華さんが、一応形の上では稲田姫神社の御瑞姫みずきとして神宮に認められるっていうのに、そんなスタートじゃ印象が悪すぎる。あ、忘れてた。野乃華さん、これからは正式に、うちの神社の御瑞姫だから。よろしく」

「……御瑞姫って、なんですか？」

「……説明してなかったっけ？」

「というか、一昨日の神事の説明自体、全然」

おおっ、と、右拳で左手の平をわざわざ叩く、少数派がここにも一人。

「忘れてた」

でしょうよ。

「ま、それは置いといて」

置くなよ、というか、今度は何？

「さつきは何で、ストリップしてたわけ？」

おっさん、いっぺん、死んでこい。

同刻、稲田姫神社から遠く離れた古都・京都も鴨川から東側の昔ながらの街並みの一角、知流姫神社境内の倉の中にて。

仮眠のために一度母屋かやに引き上げた明あかりが、母に黙って倉に戻り、いまだ目を覚まさない晴はるのベッドに、細工を施した。

「晴」と、呼びかけ、返事がないのを確認し、バチンと、何かが派手に弾ける音と同時に、安倍晴あべの目はパチリと瞳孔が開ききり、ビクンとエビ反りに仰け反った身体が、しばらくビクビク痙攣して、「目、覚めました？」

「殺す気かつ！」

野乃華から遅れること半日、無事に覚醒を果たした晴に、

「聞きたいことがあります」

「あたしの話を聞けっ！」

「はい、だから、あの日の真実を」

「そうじゃなくてっ！　なんで電気ショック？　というか、どうしてあの時、あたしの魂を見捨てた？」

「見捨てた？　見逃したの間違いでは？」

「開き直んなっ」

「実は、わざとです」

「認めちゃ駄目だろ！　人として！　家族として！」

「起きたてで、それだけ喚ければ十分です。さあ、吐きなさい」

「あたしの人権無視かいつ！」

「終わったら返します」

「いつから明の所有物っ？」

「細かいことは無視」

「細かくねえっ！」

バチン、ビクン、ビクビク

「で？」

「殺す気かつ！」

バチン、ビクン、ビクビク

「で？」

「……」

「も一度……」

「言う、話す、吐くっ！」

何でも言うとおりにするから、それだけは止めて。せっかく生き返ったんだから

「素直が一番」

「絶対にNO」

「で、誰に操られたんです？」

「誰って、何言ってるの？　そもそも、あんたが先に変なこと言っ  
たんじゃない。私は真剣だとかなんとか。んで、いきなり茶吉尼だきにが  
起動して、山の中にすっ飛んでったから、仕方なく追いかけてって

……」

「……」

「明？　ちゃんと覚えてる？」

「追いかけて、何です？」

「いや、せつかく大暴れできるチャンスだったから、稲田姫の巫女  
さん一人からかってたら、あの山のカミ様が『チカラが欲しいか？』  
って聞いてきて……たまには違うカミを寄せさせるのも良いかな、と  
か思ってる。んで、現場に着いたら、茶吉尼は倒されてるし、御瑞姫  
は神寄してるしで、絶好の機会じゃない。こりゃ、遊ぶしかないっ  
て、舞闘挑んで、途中までは良い線行っただけどなあ。まさか、  
相手が植物のカミを操るなんて、思わないじゃんかねえ？　ああ、  
喉カラカラだわ。水ちょうだい、水」  
「……つまり晴は、自分の意思で、仏滅ぶつめつと赤口しゃくぐちを撃ちまくったと？」  
「ん、だから、そう言ってるじゃない」返事をしながらも晴は、  
明が動こうとしないのを見て、自分でベッド脇にあった水差しを取  
り……その時、彼女の後頭部は、双子の妹の眼前に、無防備にさら  
け出されたっ！

晴の発言は、安倍家にとっての脅威である。

何より、頭っから被害者だと信じ込んでいた晴が、実はやる気満  
々の加害者だったのだっ！

それは断じて、公言してはならない、秘中の秘。ことに、これか  
ら稲田姫神社に対して損害賠償請求をしようと言うこの瞬間におい  
ては。

そして安倍明は、お家に不利な証言をするこの証人を黙らせる絶  
好の機会を……捨てた。

自分の命の危機も露知らず、水分補給で喉も潤った晴の好奇は、  
同じカミに操られたであろう妹に向けられる。

「明こそあの時、本当に操られてたの？ それとも、操られたフリをしてたわけ？」

「私の意思で茶吉尼を操って……あんな不様な姿、晒す道理がありません」

「……乗っ取られたんだ」

「……茶吉尼に気絶させられました」

直後、空気が爆ぜた。

「ひっ、だめ、そこは、いたたたたたたた」などと、横隔膜を震わせる反動で全身の傷に深刻なダメージを蓄積しながら、沈着冷静を旨とする双子の妹のありえない失敗に、晴は本気で爆笑した。

「あ、明でも、そんなミス、するんだ」

「一生の不覚です」

「そっかそっか、さっきから気になってたんだ。明にしては、珍しく感情的だと思ったら、そういう理由だったわけね。ひっ、ああ、笑ったわ痛かったわ、大変だね、こりゃ」

「晴ですら、あのカミを利用できたと言うのに……」

「自分は、操られた拳句、人形に、ねえ。ね、明、一つ良い事教えてあげる。今の感情を、悔しいって言うんだよ」

「悔しい？」

安倍晴と明は、双子である。故に互いの感情は、魂を感知することとで、ある程度共有できるのだ。

「あんた、わざわざそれを聞きたくて、私を起こしたんだ」

「……どういう、意味ですか？」

「だってそうでしょ？ 得体の知れないカミに操られて。おまけに茶吉尼まで乗っ取られて。それなのに、あたしは操られるどころか、逆に利用して暴れまわって。明はね、今、自分と稲田姫の御瑞姫と、そしてあたしに対して、めちゃくちゃ悔しいと感じてるんだよ。今まで、こんなに感情揺れたことないもんね。そっかそっか。やっと明も、人並みの悔しさって奴を理解できたんだ」

得意満面で頷いている晴を、明はただ、冷淡な瞳で見下ろす。

(悔しい？ 私が？ 晴に？)

「で、明は、どうしたいの？」

「晴に、勝ちます」

「どうやって？」

「稲田姫の御瑞姫を、倒して」

「そっかそっか。だってさ、ママ上ー！」

「っ！ 母様？」

晴の声に、果たして身を隠して聞き耳を立てていた芙由美ふゆみが、笑みを浮かべて現れた。

「ね、言った通りでしょ？ 電気ショックはちょっと痛かったけどさ」

「どうして……」

再び笑い出す晴と、苦笑いを浮かべて乱れた髪を掻きあげる母を、嵌められた明はわけが分からず、視線を往復させるのみ。

「実はね、明が戻ってくる前に、晴の目は覚めてたわけ。でも晴が、私がいなかったら絶対に明が抜け駆けするからって、聞かなくてじゃあって賭けをしたら、こんな結末だもん。明のせいで、お小遣い半年分、取られちゃったじゃない」

「母さんもまだまだ。あたしと明の双子パワー、みくびつてもらったら困るよ」

「あ？ な？ なあ？」

混乱する明、という天然記念物どころか北海道でオーロラくらいにありえない希少な光景に、芙由美は真正面から笑顔で向き合い、

「ま、とりあえず、晴の馬鹿は置いておいて」

「置かないですよー！」

「よそ様の御瑞姫に、無断で喧嘩を売るような娘に育てた覚えはないわよっ！ で、明は本気で、その、やりたいわけ？ リターンマツチ」

「えっと、その……」

「ああ、もう、言っちゃえ言っちゃえ。家の方針とか安倍家の利益

とか、そんなの考えるだけ損だよ」

「晴は今の百倍は考えなさいっ！ で、どうなの？ 本当に、明がそれを臨むのなら……」と、芙由美は笑みを潜め、真剣な瞳で、娘を射抜く。

「安倍家は、稲田姫神社に戦争売るのも、吝かちかじゃないわよ」

「か、母様！」

「正直ね、今回の稲田姫のやり方、私はものすごく不快なの。あと三カ月で葦原舞闘神事が開催するっていうこの土壇場に、今まで秘匿あしはらしていた一般人を御瑞姫にしたり。晴ならともかく、うちの明を乗っ取るような凶悪なカミを神苑しんえんに放してあったり。これでも、二十年前は御瑞姫だった女だからね。現役は娘に譲ったけど、きな臭いは逃さないわよ」

「きな？」

「きな臭いです、晴」

「ああ」と、娘二人の憐れみの視線を浴びて、それでも芙由美は置みかける。

「幸い、晴のことはばれてないはずだからね。このまま被害者面して押し切って、一方的に請求叩きつけてやる。御瑞姫二人を育て上げた母のチカラ、伊達じゃないって思い知らせてあげるわっ！」

そのまま高笑いをはじめそうなテンションの母を茫然と見やる明の耳元で、晴はボソリと、

「ま、娘二人を傷物にされてさ、黙ってたくない親心、分かってやつてよ」

的確な解説に、明はようやく、母の怒りの源を知った。

「良いなあ。あたしも参戦したいなあ。本当に一週間も安静なの？」

「一週間で嫌なら、茶吉尼に手伝ってもらって、一カ月昏睡コースもあるわよ」

母のウインクに、「その方が静かで良いですね」明は、覚悟を決めた。

「今回は、私が貰います。茶吉尼のスコアボードに、敗北の文字は、

「ありません」



## 第二帖 剣拳豪合々京の娘の俠気か凶器々 参

さつて、どこから整理したものか。

短くまとめるなら、一昨日の神事の開始から、望のぞみと珠恵たまえがどうやって京都の巫女に倒されたか、を皮切りにして、結局稲田いなだ姫神社で七星剣を操れる巫女は私しかいない、という結論に辿り付けば、私が稲田姫を代表する巫女さん選ばれたってことに、一応の説得力は、ある。

それが、何故、七星剣の主である御瑞みずき姫に、月見里野つきみさと乃華ののかが就任したか、の答えだから。

けれど、どうして七星剣の主である御瑞姫を選ばなくちゃいけないか、を訊ねたら……

「イザナギ、イザナミよりも前に、神様がいたって知ってる？」

宮司さんの切り出しに、無言の圧力を。

「いや、野乃華、怖いから、それ」

同席した、望、叶かなえ、珠恵が、呆れ顔で非難する。休日の昼下がりに、天気も良いので梅こぶ茶を手に境内で、巫女さん四人とおっさん一人。お茶受けに栗きんとん。

「じゃ、叶が説明してよ。どうせ知ってるんでしょ？」

「ま、私じゃなくても、珠恵は知ってると思うけどな」

「ねえ、いま馬鹿にした、私のこと？」望の抗議に目もくれず、叶はわざわざ眼鏡をくいと持ち上げて、

「天地初めて發けし時、高天の原に成れる神の名は、天之御中主神。次に高御産巢日神。次に神産巢日神。この三柱の神は、みな独神と成りまして、身を隠したまひき。次に……」

「もういい。喋るな」

「暗記したのにつ！」

誰が古事記をそらんじる言うか。

「つまり、御瑞姫って、何？」と最後のよすがに珠恵を頼り、

「……七星剣が、十種の神宝とくさと呼ばれる、特別な神具かんだからってことは、知ってる？」

「なんとなく」

「……十種の神宝っていうのは、十種揃えれば死者すら蘇らせることが出来るらしいの。」

それらはもともと高天原たかまがはらから、日本を平定するために与えられた、国津神を倒すための武器。

それだけ強力な武器だから、操る巫女にも適正が求められてね、神宝のカミに認められた乙女だけが、十種の神宝を操ることが出来る。

その、神宝に認められた一〇人の乙女を、御瑞姫っていうの。

国津神と戦う、すべての戦乙女いくさおんなの頂点に立つべき存在として……合ってるよね、叶」

「ま、平たく言えばね」

「最初から平たくしてよ」

「でも、御瑞姫の本当の役割は、別にある」自信満々に眼鏡をキラリと光らせて、叶が私の真正面に。

「いや、喋らなくていいから」私は顔を珠恵に向けて、「で、本当の役割って何？」

「イジメだっ！」と喚く叶の言葉はノイズ認定してキャンセル。苦笑う珠恵には悪いけど、神宮オタクの叶に喋らせたら、話に枝が栄えて葉が茂り、接木を繰り返して森に成長、元の木がなんなのかサッパリ分からなくなるに違いないから。

「……私も、聞いただけなんだけどね。」

二〇年に一度、神宮の式年遷宮に合わせて、全国の御瑞姫を集めて、葦原舞鬪神事を開催するの。

で、来年がその二〇年の節目の年だから、稲田姫神社からも七星剣の御瑞姫が、その神事に参加しなくちゃならなくて」

なるほど、判りやすい。

「そんな単純なもんじゃないって！」

「いや、単純明快でいいから。」

つまり、私が御瑞姫として、その葦原舞鬪神事に参加すればいい  
ってことですね？ 要するに」と宮司さんにズームイン。

「いや、まあ、そういう事だけど……。ただ、神事の開始が来年の  
正月でな」

ぶっっちゃけ、あと三ヶ月しかないんですね。

「その、誠に言いにくいんだけど、神事自体も数ヶ月かかる大掛かり  
なものだから、うん、まあ……」

「じゃ、学校辞めますね」

「うん、ま、そうなる……え？」

「いや、これから最低でも半年は、学校休まなきゃいけないんでし  
よ？ そんなだったら、いつそのこと退学しちゃった方が、どっち  
にも支障がなくて良いと思うんですけど」

って、みんな引かないですよ。

「いや、思い切りのいい子だとは知っていたが」

「高校中退でいいの？」念を押してくる望に、

「というか、前から聞こうと思ってたんだけど……望たち、高校行  
ってないでしょ？」

思いがけないカウンターに、望、叶、珠恵の三人が、『痛いところ  
突かれた』って顔色を変える……鎌かけたんだけどな、本当だった  
とは。

「御瑞姫って、お給料貰えるんですか？」

とりあえず、シヨック状態の三人はそっとしておいて、真顔で宮  
司さんに訊ねれば、

「お給料というか、御礼という形で、相当の額が神宮から頂けるこ  
とになってる。ただ、その、な。今までみたいなお遊びレベルの御  
被いじゃなくて、本当に危険なカミの退治もしなくちゃならないん  
だが……」

「でも、他にいないんでしょ？」

「いや、ま、そうだが」

「じゃ、仕方ないでしょ。なりましょ、御瑞姫に」  
それがしなくちゃならないことだったら、する。

私の腹は最初から決まっている。

運命に逆らうなんて、愚の骨頂だ。一つだけ注文するなら、一年前に話してくれていたなら、高校に半年だけ通うなんて無駄な時間とお金、節約でき……ま、無駄とは言い切れないか。少なくとも、学校の図書館で借りまくった本の類は、私の今の思考形成に役立つるわけだし。

やるならとことん。逆らうなら全力。中途半端が一番いけないんだとしたら、高天原の神様の娘の役割が、日本で十本の指に数えられる巫女さんになるなんて、陳腐にもほどがある。今まで見逃されてきたことの方がよっぽど不自然なくらいで、

「あ、でも……」

覚悟を決めた直後でなんだけど、七星剣の御瑞姫として今、致命的な事態に陥っていることに気付く。

神樹、眠ってるまんまじゃん。

おまけにヤツカのこと、何にもケリついてないし。

うわ、頭イタッ。

しかも京都の巫女さんたち、一昨日のこと根に持ってるっていうんでしょ？

課題山積み。

「どしたの、野乃華？」

思考に陥ると周囲なんて目もくれず、気がつくと思わぬ不思議そうな視線の集中砲火を浴びせて……その視線の奥、境内と階段を区切る鳥居の下に、恥ずかしい巫女装束の少女が、忽然と現れた。

「なんで？」

ノースリーブで胸元は深々とVカットな白衣を、内側から押し上げるほどの豊乳を見せ付けるように背筋を反らし、腰周りを覆う朱色の布は、もはや袴という意匠すらかなぐり捨てたミニスカート。

スラリと伸びる肉感的で鍛え上げられた両脚は白ソックスに腿まで包まれ、一見してその衣装が、肉体の活動を最優先に考慮した結果だと大声で主張している。

あらゆる事象を真ん前から全部受け入れるかのような大きくて丸い印象的な瞳の下には、一年中楽しいことしか考えていなくて筋肉がその状態で固着してしまった唇が弧を描いていて、絵画を生業とする人間を狂気に陥れるような緩やかなカーブを腰まで描く薄茶色のストリートロングヘアは、多分長い方が格好良いつてだけの理由の賜。たまごの怪しい電波でも受信するのか、頭頂部からピヨコンと生えた二筋の跳ねっ毛が、彼女が内包する、抑えきれない活動性をビシバシと訴えている。

というか、私たちは、彼女を知っているぞ。

「かみしろひめこ 姫子が……」と、呟く隙すら与えられずに、私の視線に気付いた直後、跳ねた肢体は鳥居の上へ。んなアホなと呆れる間もなく、御山に轟く大音声。

「呼ばれてなくてもジャジャジャジャン。

京は東か、飛鳥は西か。

天未知、地無視、人に無恥。

御用が無くても押し掛け参上。

かみしろひめこ 神代姫子は、冷めても美味いっ！」

馬鹿、爆誕。

「姫子っ？」

毎度おなじみの意味不明の前口上を高らかに、全員の視線を集めて満足したか、跳び上がったばかりの鳥居から着地して、満面の笑みで歩を進めて近づいてくるは、神代姫子、一七歳。

どこの誰だか知らないけれど、互いの嗜好は知り尽くしていて、宮司さんが『お見合い』と称して紹介してくれた全国各地の巫女さんズの一人であり、彼女の持っていた少年漫画と私の持っていた少女漫画の間で奇跡のトレードが成立した結果、もっぱら趣味方面の交流だけが加速していった、認めたくないけど同好の士ってやつだ。

「これはこれは、みなさん勢ぞろいで。ささやかながら、ののんの御瑞姫就任のお祝いってシチュエーション？」

満面の笑みを浮かべて近づいてきた姫子に、突き刺さる十の視線。どうして、それを、知っている！

「えっと、何か間違えた？ ひよっとして、大番狂わせで、望あたりが勝っちゃったとか？」

ただの当てズツポかいっ！

「いや、姫子の予想通り。役者不足ながら、私が七星剣の正式な御瑞姫に決定したよ、って、わざわざそれを確認に？」

「だって、一昨日に神事やるって望から聞いてたのに、誰も結果を教えてくれないんだもん。そりゃ、神社の秘事かもしれないけどさ、決定したら私と一緒に闘うかもしれないんだから、ちよっと冷たいんじゃないかなあ、と」

「戦う？ あんたと？ なんで？」

「なんでって、私も御瑞姫だし」  
「は？」

耳を疑う。

神社の判定基準を疑う。

こっそり立ち去ろうとしている宮司さんが一番怪しい！

「まだまだ、吐いてもらう必要があるようで？」

「いやあ、あとは若い人に任せて……おおっと」

オーバージェスチャーを裏付けて、袖の中から本当に携帯電話の着信音が聞こえてきたから腹立たしい。宮司さんは脱兎のごとく、嬉しさを隠しきれないステップで、社務所のほうへ全力で逃げていく。後が怖いからね、覚えてるからね！

ま、とりあえず、

「馬鹿を承知で聞くけど……これって、もしかして、実話？」といつて取り出したのは携帯電話。

実は御瑞姫とかいう巫女の偉い人であったにも関わらず霊話が出ない姫子から、問答無用に送りつけられる怒涛のメール攻勢の一

つを画面に呼び出し見せつけて、やれ大型百足を倒したとか、やれ鬼の大軍を追い払ったとか、やれ古龍のソコ討伐に成功したとかの、血生臭い報告ばかりを前に、げにも明るく彼女は笑う。

「ああ、五割がたはゲームかなあ」

残り五割は？

「三割、夢才チ？」

二割実話かいつ！

「それって、御瑞姫の仕事？」

「趣味と実益を兼ねてるでしょ？」

ああ確かに、今までみたいなお遊びのお被いじゃないなあ、と戦慄する反面、現代って平成でしょ？ と突っ込まずにはいられない。

「まあ、その辺りは、パンピーにばれないようにやってるしねえ」

「んじゃ何？ 望たちも、そういうヤバ目な仕事に参加してたの？」

「私らは、まあ、足軽レベルだから、単独で大型カミと対峙することは滅多にないんだけど」とは、望の談。

「でも、一昨日の神事に勝ってたら……」

「うん。だから、心情的には野乃華に勝ちたかったんだよねえ。何も知らない野乃華に、いきなり大型狩れっていうのも、正直どうかと思つたし。全く、あそこで乱入がなかったらなあ」

「乱乳？ 揺れて暴れるほど胸ないの？」

姫子の空耳に、場、硬直。

しまった、安倍家のことは内密にしとかないと。

というか、三対二の割合で洗濯板と双丘という、ちったあこつちにも余分な脂肪よこしなさいよ、な不平等に、私と望と叶の眉間に血管が浮き上がる。

「ま、冗談はおいといて」と、いつもの調子でサラリと笑い飛ばして、こつちの神経だけを逆撫でて姫子は、

「結局、ののんは勝てたの？ 安倍の狂姫に」

っ！ なぜに、あんたが、それを知るっ！

四対の眼がパラボナアンテナ並みに見開かれ、そこから放たれる

疑惑という名のメーザー光線の集中放火にも黒焦げせず、

「いやあ、何か聞こえるかなあって、受信アンテナだけ立ててたら、やたらテンション高い、ののんの叫び声が聞こえたからさ」

「そういやこいつ、自分で送信できないくせに、霊波の受信帯域だけは広いっていう、わけわかんない盗聴スキルを有していた気がする。」

「つまり、その顛末を知りたくて、わざわざ出向いてきたと?」

「ビンゴ! だって、現役御瑞姫同士の舞闘なんて、本番前にありえないじゃん。あ、安心していいよ。もちろん神宮には報告してないから」

「当たり前よつ! 神宮にばれたりしたら、下手したら神宝剥奪されるわつ!」

姫子の挑発に、珍しく叶が釣られた。ん? 本番? ジンゲー?

ついていけない単語が増えるたびに、危険度がいや増しに増していく気がするのはいのせいなんだと、思い込みたいけど多分ムダ。

おとなしく現実を受け入れたほうが手っ取り早いことは経験済みで、「一応、人形倒して、二丁拳銃の短髪の方の子も、なんとか黙らせただけど……」

「本当にっ! それって、晴きよも明あかりも、双子そろって撃退したってこと?」

「代償として、七星剣が眠ったまんまです」

「ばれる前にカミングアウトだ。」

さすがに、浮つきかけた空気が、一瞬でフリーズ。

漫画的表現をすれば、顎あごが外れてポカーンといった表情が四つ、大して動揺をしていない私への不信感を隠すことも忘れて、無防備にさらけ出される。

「ど、ど、どどどどどどどどどどどど……」

望がドモる気持も、分かる。七星剣は稲田姫神社のご神体。加えて、日本を守る十種の要の神宝とくれば、その故障に困惑するも仕方がない。だから、



「ま、たぶん大丈夫だと思うけど」

そう前置きして、かくかくしかじか、あの日の顛末を解説す。ヤツカとか伊佐利いさりのことは上手に省いて。最後に、私の運命論的に言えば、起つちゃうことに、解決できない道理はない。巫女としての道を続けるとして、この先も神樹が本当に必要なら、奴はちゃんと目を覚ます、はず。

ダメならダメで、一昨日の神事をやり遂げることが神樹みきの使命だったんだと思えば良い。というか、さっきは宝倉ほくらまで運んだだけで、まだちゃんと話し合ったりしてないわけで、ただ寝てるだけって線も否定できないから、

「ちよつと、様子見てこよっか」

忙しい今日という日に、ようやく、愛剣とジツクリ向き合う時間が出来た。

心配げな望、叶、珠恵と、デフォルトでなんでも楽しんでゃう姫子を引き連れて、向かうは御神木「伊佐利」の足元、七星剣の宝倉  
「まだ寝てる……」

幸せそうに。

その刀身に触れてみる。

激戦を駆け抜け、何度も銃弾を受けとめたにも関わらず、例の布や呪符には綻び一つ見られない。

ヤツカを封じ込めるための鞘。解封されそうになって、ヤツカを飛び出させてしまったけど、今またビツチリと刀身を包み隠して、私がヤツカを使いこなせる日を待っている　十年も前から。

神樹は、ずっとそれを知っていたんだらうか？　知っていて、私とずっと、一緒に過ごしてくれていたんだらうか？　私がヤツカを制御できるくらい成長したら、七星剣からいらなくなるって……。

宮司さんは、多分、知らないんだらうな。

七星剣の本来のカミ、ヤツカは玄人でも扱えない気難し屋で、私がヤツカを操るためには相当の鍛錬が必要で、私が成長するまでの期間、七星剣をずっと封じなきゃいけない神樹。

でも伊佐利は、その理由までは、説明してくれていない。

どうして、ヤツカの本当の力を引き出さなくちゃいけないのか？  
どうして、今のままじゃ駄目なのか？

まあ、グダグダ考えてても仕方がない。

「どう？」と、七星剣を前に黙止熟考し始めた私に、遠慮がちに声をかけてくれたのは珠恵。それで現実に引き戻されて、

「そうねえ……ちょっと、こっち来て」

近づいてきた珠恵の、その華奢な体躯とは裏腹に突き出て豊満な胸に顔が埋もれるように身体を倒して、

「直接、対話してくる」

私は、『私』を抜け出した。

魂の制御を失った肉体が、何の心構えもしていなかった珠恵を案の定押し倒す。空中に飛び出した私に『呆れた』ビームを向けているのは叶だけ。

神樹はなんだかんだでカミ様で、霊に属する存在なんだから、向こうが眠ったまんまなら、こっちも霊体で赴くしかないよねえ、と思いついたが五秒前。

いきなり視界はカミ様一色で、聞こえる声も一段と多くて濃くなつたけど、一切合切振りきって、意識は一気に木々より高く。鳥居以上の高さから見下ろす境内は確かに奇麗で興奮して、目指す標的、全長二メートルの神剣を口ツクオン！

「どりるあああああああああつ！」

神事だ？

御瑞姫だ？

ヤツカだ、伊佐利だ、面倒だっ！

鬱憤鬱屈軋轢不満。

全部まとめて圧縮集中、螺旋を描いて一筋に、疾風の勢いでドリップキックをお見舞いだ！

「カツ井だけえええええええええええつ？」

霊体同士のガチンコは、神樹を容赦なく吹っ飛ばし、なぞの悲鳴

をまき散らして奴は、境内の端まで盛大に……戻ってきたあああああつ！

七星剣から飛び出た勢いそのままに、剣に縛られた神樹の魂は巻き戻されて、勢いそのままお返しで……ブボエラツ！？

神樹の小さな塊が砲丸となってクリーンヒット！ 実体なら間違いなく盛大に吐き出す衝撃を、霊体は素直に運動に変換して、流れ流れてぶつとぶ走馬灯は、おお、眼下一面『田』が見える。

って、どんだけ飛ばされてんだよ、私は！

これが因果応報？ それとも単なる反作用？

神社の神域突き抜けて、えっちらおっちら長旅終えて、

「い、いきなりなんてことするんすかつ！」

神樹に怒られ、

「あんたしか、八つ当たれる相手がないからよっ！」

瞬時に逆ギレ。

「な、何気に寂しい発言を、堂々と胸張って言わないでくださいよっ！ ボクがもしいなくなったら、どうするつもりっすか！」

「あんたがいなくなるかもしれないから、八つ当たってるんできょうが！」

っていつか、このヤロ、サラリと『消える』発言するんじゃないよ。

じゃ、なんだ？ あんたが用済みになるかもって、動揺してるのは私だけなんか？

「の、のの姉こそ、何を今更怒ってるんすか？ そんなの、ボク

らが作ら……の、の、のの」

「あ、て？ え？」

気がつくつと、私の両手が神樹の首を絞めていて、

「伊佐利！ あんたっ！」

自分の中にある違和感。さっき伊佐利を神寄した時の感触が今、靴の中の小石のような存在感を發揮して、私の腕部に干渉している。それを、強引に剥ぎとって、

「隠し事はつかしてると、本当に御神木叩き折るか、御瑞姫やめちやうかんね!」

「我が輩は、折られたところで蘇り、野乃華は抗えど、宿命から逃れることあたわじ」

「舌噛むわよ!」

「代替を用意するだけのこと」

まさしく神の如き物言いよね。腹の奥から煮え立つわ。  
のか

……のか

……のか

「野乃華っ!」

いきなり、視点は肉体にシフト。

完全に忘れてた姫子たちに囲まれて、目の前にいるのは、血相を変えて戻ってきた宮司さんで、

「その、大変なことになった」

魂は大急ぎで肉体とコネクトするけど、まだまだ暖気運転中でハッキリしない意識に向けて、放たれた一大事。

「神宮が、今回の御瑞姫認定に、異議を唱えている。高野<sup>たかや</sup>空海<sup>あけみ</sup>御瑞姫の、査察が入ることになった」

「タカヤ、アケミ?」

誰それ?

「姉御が来るっ!」

姫子が騒ぐ。叶は頬を高潮させてるし、望と珠恵も知らない名前じゃないらしい。

「査察って、何をするんですか?」

とりあえず、気がかりなのは内容。私が起こされたって事は、私に関係あるってことで、

「京都の巫女の介入が……バレてる」

「ああ、つまり……」

「現場検証」

それは、本当に、ヤバイんじゃないんでしょっか？

## 第二帖 剣拳豪合々京の娘の俠気が凶器々 肆

濃かるうが薄かるうが、万民に等しく流れるのが時間というヤツの特性で、この一週間は、特濃という言葉が事更似合う、素敵なウイークでありましたよ。

急転直下の非常事態は、ややこしさを加速度的に増していった、全国の神社の総本山たる伊勢神宮から査察の連絡のあった翌日には、京都の巫女二人の同席が確定。

私たちは私たちで、神事の状況説明用の資料作成に借り出され、デジカメ片手地図片手で、現場写真をバシャバシャと。

翌々日の月曜日には、拍子抜けするほどアツサリと私の退学届が受理され、めでたくも社会的に、未成年無職少女Aが誕生。

かといって、昼間から家でゴロゴロインターネットとは甘くなく、朝から夜まで神社に通い、神宮・御瑞姫みずきの仕組みにしきたり、祝詞や神楽を詰め込まれ、質・量ともに、高校レベルを超越した内容をとにかく鵜呑み。

そんな平日が終わり、まったくと言っていいほど準備が整わないまま、裁きの日は訪れた。

宮司さん、私、望のぞみ・叶かなえ・珠恵たまえはともかく、野次馬根性で姫子ひめこが参列。一直線に参道に並んで、高野空海たかやあけみ女史をお迎えする私たちの向かいには、あの日の京都の巫女二人。プラス、その母親と、なぜか巨大人形までが直立不動でこちらを睨み、歓迎ムードは一触即発。天までが空気を呼んで、暗雲渦巻く絶好の査察日和。

私ってばここ最近、運氣下落傾向にあるんじゃないかなろうか？

ああ、知らない人は本当に知らないだろうけど、運氣っていうのは波の連続で、注意して観察していれば、おのずと自分の幸不の運勢っていうのが見えてくる。

それは言わば、補正值みたいなもので、運氣絶好調の時は、何をやってもプラス補正がかかっていつもより上手くいくし、運氣が底

値の場合は、何をやっても失敗するマイナス補正がバリバリにかか  
る。

ここで注意すべきなのは、自分の運気の読み方を知らない人は、  
運勢が底値の時にバリバリ頑張っちゃって、何をやっても大失敗し  
て力尽きる。もしくは運氣絶頂のときに自分の実力を勘違いしちゃ  
って、波が降下し始めたにも関わらず強引に事を推し進めて大失敗  
の二パターンに陥りやすいつてこと。

つまり今、私は本来なら新しいことなんて一切やらさず、おとなし  
く運氣が回復するまで待てば海路の日和あり、を貫くのが本当の対  
処法なわけで。

でも、ま、こうなったら、なるようになる。

始まったら終わりがあるのは自明で、自分から墓穴を掘りにいか  
ない限り、よっぽど悪い方向には転がり落ちない、と思いたい。

そうして、生唾を飲み込む音すら響くような緊張感の中、時間び  
つたり、その女は現れた　轟音と落雷を引き連れて。

激しい閃光をバツクに、鳥居に姿を現したその影は、巫女を形容  
するに相応しいかどうかと言われれば甚だ疑問なのだけれど、巨大  
な威圧感の塊だった。

単純に背が高い、というだけじゃない。シャンプーのかわりに砂  
塵を浴びてきたかのごとく潤いのない長い髪は、そんじょそこらの  
男からは感じられない野生をピンピン感じさせるし、姫子に匹敵す  
る巨乳の谷間を惜しげもなくガバツと開示しているにも関わらず、  
その谷間に顔を埋めたが最後、胸筋の働きだけで首をもぎ取られる  
ような殺気が、見るものを圧倒する。何よりその、姿勢だ。礼儀正  
しく見目麗しい姿勢を、竹尺を背中に差し込んだ如き一直線の立ち  
姿だとするのなら、彼女はその竹尺を、背筋の働きでへし折ってや  
ろうというほど上体を大きく逸らし、普通に立っているだけで、相  
手を見下ろす捕食者の視線を、右目のモノクルごしに獲得している。

高野空海。神宮から使わされた御瑞姫。

彼女は参道の両脇に並び立つ私たちの顔を一巡すると、銜えてい

たパイプを外し、野獣の笑みで私を激視する。

「稲田姫、野乃華っ！」

破裂するような激しい言葉。声量ではなく、突き刺さる鋭さでもって相手を屈服させる声だ。

「はいっ！」

だけど、負けない。負けずに見返す。男の勝負が筋力なら、女の勝負は眼力で決まる。彼女が境内に入ってくるとき、大勢のカミ様たちが「やれやれ、狙って神鳴るのも一苦労ですう」「愚痴をこぼしたのを聞き逃さなかった私だから、ハツタリかまして場の空気を乗っ取るうなんて魂胆に、屈したりしない。

「知流姫、明っ！」

「はい」

続いて呼ばれたのは、安倍家の長髪の巫女。空海さんと比べると蚊の鳴く様な声には、感情がこもらず、不気味に響く。

「こたびの御瑞姫認定、両者の舞闘をもって再神事とする」

はい？

「空海様！」

「高野御瑞姫！」

突然の申し出に、宮司さんと安倍家の代表者（＝双子の母）が同時に上げる抗議の声。

「異論は認めん。」

両者の報告書には目を通した。双方の言い分には食い違う点が多々あるが、安倍芙由美の言うような、稲田姫側による、謎のカミの煽動は証拠がない。また同時に、安倍晴に襲われた望、野乃華の両名からは、現場での晴の発言に、本人の意思が多分に含まれていたと判断するしかない語彙が多々、報告されている。

謎のカミの乱入が、稲田姫神社による神事攪乱であったにせよ、安倍晴の暴走が本人の意思によるものであったにせよ、神事は行われ、安倍晴と茶吉尼が、そこなる野乃華に撃退されたことは、疑う余地がない。



疑わしきは罰せず。双方の憤りは、実力行使によって、それを発散するが良い。

「月見里野乃華、異論は？」

「……ありません」

「安倍明？」

「……私に同意を求めるは、無意味です」

「よろしい。安倍晴は先の神事の怪我の治療中ゆえ、その代理として明を安倍家の代表者とし、明日夕刻、高野空海が見届けの下、稲田姫神社御瑞姫認定再神事を執り行うこととする！」

あ、カミ様たちが騒ぎ出し……（打ち合わせと言葉が違う。とりあえず、落としどころ）

落雷！

ああ、まあ、カミ様を使役して劇的演出を試みるってのは凄い発想だと思うけど、リハーサルなしの一発本番で、人神のコミュニケーションをスムーズにするのは難しいよね。

一瞬遅れの落雷に、片眉がピクツと反応した空海さんは、私のそんな思いを見越したのか、殺気をこめた視線で、私の臍腑を抉りにかかる。

「何か、異論が？」

ありませんともっ！

むしろ助かったっていうか、見事なお裁きって言うか。

けど、私にとっては、一難去っただけのことです。

「安倍、明……」

視線の先にいる、少女の名前。

感情を見せぬ視線を、まばたきすらせずに私に投げかけ続けている、人形遣いの御瑞姫。

明日、彼女と、闘う。

っていうか、その隣にそびえる、六メートルの巨大な人形と、だ  
けど。

また一難、だわね。

「というか……七星剣、ちゃんと稼働するんでしょっかね？」

極度の緊張を強いられた謁見は、実に十分に満たずに終わった。そう考えると、この一週間の地獄のような資料作成はなんだったのよ、と愚痴も言いたくなるところだけど、実際は気を抜いている時間なんて全くゼロで、

「作戦会議」

「やたら嬉しそうな姫子の発案で、私たち稲田姫巫女軍団+1による、対茶吉尼戦ブリーフィングの唐突開催。」

「作戦会議はいいけど、誰かアレを見たことあるわけ？」

「プルプルプル、と私以外首振る四人で、」

「駄目じゃん」

「あ、でもでも噂なら聞いたことあるよ」

と、これまで何度か、空海さんや他の御瑞姫と、作戦なる対妖怪戦争を勝ち抜いてきた(らしい)姫子の言。

「俊敏にして正確無比な攻撃。軽快にして難攻不洛の装甲。右の拳は神速で獲物を破砕し、左手は異次元から召喚することで、遠距離から防御まで、あらゆる戦場に適応する、死角皆無の戦略的半自律駆動兵器。はつきり言って、並みの相手じゃ、その動きを捉えることすら無理だねっ！」

キラリと齒を輝かせて、サムズアップ。

「……相手を持ち上げてどうするよ。」

「で、実際に戦ったことは？」肝心の問いに、「無い」即答された。

「帰れ」

「ひどっ」

「せめて建設的な意見を頂戴よ。」

「ところで、のののん？」

効いぢやないし。

「必殺技つてあるの？」

「必殺……技？」

「そうっ！」

目をキラキラ輝かせ、さらに身を乗り出して迫ってくる。

「なんとたつて稲田姫の七星剣は、歴代最強の誉れを欲しいままにしている、最有力優勝候補だもんね。

晴ちゃんや茶吉尼だって、七星剣特有の必殺技があったからの  
のんでも倒せたんじゃないの？」

「歴代最強つて？ というか、優勝候補？」

「……知らないの？」

「何にも」

「まったく？」

「全然」

「さっぱり？」

「だって、御瑞姫認定一週間だし？」

「……プリンセスインザボックス」

「誰が箱入りじゃ！」

そんなわけで、茶吉尼対策も重要だけど、いったい御瑞姫って何  
をするわけ？ という根底の疑問を明らかにする方向に、話題をシ  
フトさせようか。

ああだこうだと、望、叶、珠恵と姫子から、御瑞姫とは何ぞやと  
いう事情を聞きだすこと三時間強。

「ああ、もう我慢できない。お腹すいた」

唐突に話題をブツ切りやがったよ、姫子め。

「どうせ今日はこのまま合宿コースだろうからなあ、鍋にでもする  
？」

望の提案に、反対する理由もなく。明日は決戦という緊張感を欠片も滲ませずに、スーパーマーケットにキムチ鍋の材料を買出しに行く巫女五人。

「というか、私たちはともかく、あんたそれで平気なわけ？」

姫子の、胸元全開超絶ミニスカートは、いわゆるコスプレ衣装と間違われても言い訳できない代物で、おまけに彼女は巨乳持ちでもあるわけだから、なんていうか、パツと見、痴女だ。

「でも、地元じゃ、この格好で仕事してるしなあ  
動じやしねえ。」

「仕事って、何の？」

「カミ様退治。ちなみにうちの町のネット掲示板、『今日の姫子たん』コーナーってあってさ、盗撮写真が匿名で続々と……」

「中止させるよっ」

「あれ、知らなかったの？ のののんたちの写真も、ネットで投稿されてるよ。その筋じゃ、超有名人、私ら」

マジですか！

思わず周囲に殺意を撒き散らせど、カメラ小僧は見つからない。

「別に悪いことじゃないじゃん。地域密着型の巫女さんって、今じゃ貴重な存在よん」

逆に明日から引き籠もりたくなったよ、私は。

「じゃ、何？ あんたの町じゃ、みんながカミ様と闘っているって知っているわけ？ この平成に？」

「ま・さ・か！ そんな危険地帯にパンピー巻き込んだら、プロの仕事じゃないよ。あくまで、見えないところで大活躍が私のモットーだし。写真はまあ、神社のPRかなあ。ちょっとしたアイドル気分」

とことん前向きでいやがりますね、この露出少女は。

「逆に言えば、巫女さんの需要って、その程度なんだよねえ、今」  
「どゆこと？」

急にしんみり、遠くを見つめ始めた姫子。いきなりガバツと、私

の首に腕を回して、

「というわけで。今日はとことん、騒ぐぞお！」

恥ずかしいから、右腕振り上げて宣言すんの、やめれえ。」

「あ、この鳥団子の軟骨入り、美味〜」

「てか姫子っ！ 白菜も食べなさいよっ！」

こんなことしてて良いのかなあと思いつつも、豚肉をシャブシャブするのを止められない私。

「この各務原キムチ、イエスだね」

「と、言うかさ。なんで普通にキムチ鍋してるの？ あんたら」

叶のツツコミキタアア！ でもいち早く雑炊の準備してて説得力ねえっ！

「結局、誰も二十年前の七星剣の巫女さん、知らないんでしょ？ だったら、どんな必殺技だったかとか、分からないままやるしかないんじゃないの、明日は」

「でも稲田姫神社って、毎回優勝候補なんだけどなあ、葦原舞鬪神事の。それなのに、誰も技を継承していないって、不自然じゃないの？」

姫子のツツコミはもっともだけど、

「とうがかさ、舞鬪神事って、カミ様への奉納の舞じゃないの？」

優勝云々って、おかしくない？ そもそも、舞鬪神事って、何するの？」

私の疑問にも答えてくれ。

「御瑞姫十人が、五組に別れて闘うらしいって事しか、お母さん教えてくれなかったからなあ。で、最強の一組を決めることで、神事は終了するって」

「優勝することに、意味はあるわけ？」

「特に無いんじゃないかなあ。あるんだったら、最初から教えてお

いたほうが、やる気であるわけだし」

「だったら別に、勝つことにこだわる必要はないんじゃない？」

「あ、それは諸説あってね」

叶、説明モード。

「昔の巫女さんたちって血気盛んでさ。訓練にかこつけて、誰が一番か、決闘が頻発したんだって。」

でもそれじゃ、肝心な時に怪我で動けない危険があるっていうんで、神宮側が神事を利用して、巫女さんたちの名誉欲を誘導したらしいって」

「野蛮人過ぎない？ その巫女イメージ？」

「……姫子みたいなのが、たくさんいた？」

地味に酷いこと言うよね、珠恵って。

「でもそれじゃ、カミ様への奉納が、後付って聞こえるけど？」

「そういう説もあるってこと。これ以上突っ込んだことは、神宮の研究職でもなけりゃ、調べようがないけど」

「そもそも、なんで巫女同士が闘うことが、奉納につながるわけ？」

「相撲だって、元を辿れば、カミ様を前にして行う八百長神事だったわけだから、無理はないんじゃないかな。それに日本じゃ代々、カミ様と人間を繋ぐシャーマンは、巫女独占だったわけだから……カミ様も、むさくるしい男の相撲より、乙女の舞のほうが好みだったってことじゃない？ 野乃華だって毎年、御山の中で舞ってたでしょ？ それと同じだよ」

「でも私たち、普段はカミ様退治してるんだよ？」

「崇拜対象が違うでしょ」

「というかさ、叶」

私は、いまいち腑に落ちていなかった事を、これ幸いと、切り出すことにする。

「なんで稲田姫神社って、祭神が稲田姫じゃないの？ それじゃなくても一応神宮の系統だったらさ、古事記由来の神様、合祀なり分祀してもらうのが、筋なんじゃないの？」

さすがに、叶が黙した。

突然訪れた沈黙を、しかし思いもよらない人物が切り拓く。

「もともと、神様なんていらなんだよ、この神社は」

望だった。あらかた鍋の具材をさらえきった彼女が、仕舞いに白米を投入してコンロに火をつけて、言葉を繋ぐ。

「稲田姫神社は、いわゆる前線基地だから。」

そりゃ、名前の由来は諸説あるけど、一番有力なのは、この神社を基地とする軍団の、代々受け継がれてきた軍団長の称号じゃないかっていう話。実際、他の神社もほとんど、同じように『姫』って名前の神社ばかりだし。

日々カミ様と戦うのが目的の、戦乙女の拠点だもん。それに、伊佐利と七星剣ってだけでも、十分崇拜の対象として、箔はあると思うけど？ こまこまとしたカミだって、全部『御山』として祀っているわけだし」

うん。その説明はもっともだ。

もっともなんだけど、多分、望と私とでは、絶対に共有できない感覚がある。

カミと、触れ合えるかどうか。

日常的に八百万のカミと対話をしている私から見れば、カミは崇拜するものじゃなくて、共生する対象だ。

なのに、日本を守護しているはずの天津神を、私はこれまで、見たことがない。

私の目に映るのは常に、名前もない、国津神とすら言えない、自然神ばかりなのだ。

この、現実との食い違いを、違和感と覚えるほうが間違っているのか。

多分望たちは、目の前のカミを調伏するだけで精一杯だ。

世界に仇なす存在を退ける。それは掃除と一緒で、絶対に怠ってはならない職務であり……職務に従事し続ける限り、現場作業員にはその『意味』までを理解する必要はない。

グツグツと、キムチ汁を吸った白米が、芳しい匂いと共に咆哮を上げ続ける。

「……えと、卵ほしい人」

結論の出ない議論を断ち切って、珠恵の質問に、全員が拳手をした。

煮えきる直前に投入された生卵を崩さないように、各自にキムチ雑炊が振舞われ……五分ほど、フーフーと箸に息を吹きつける音と咀嚼の響きだけが、社務所内を支配した。

「ごっつおさん、といち早く器を置いて、ゴロンと畳に横になったのは、神代姫子。抜け目なく楊枝を抜き取っていた彼女は、それまでの議論をまったく気にしていなかったかのごとく、

「で、結局さ。ののんは、どうするわけ？ 明日の作戦」

とりあえず、人に楊枝向けるの、やめい。ま、私も、埒の明かない議論をしていられる立場じゃないと、覚悟を固めて。

「相手の出方が分からないから、なんともなあ。この前は、動き自体が単調だったのと、勝手に倒れてくれたから良かったけど……参考程度にさ、姫子ならどうする？ あのデカ物相手。御瑞姫の先輩として、よろしく御教授」

姫子の次に食べ終わって、後ろに手をついて寛ぎモードに突入して私は、楊枝でシーシーしている姫子に水を向けた。ああ、ちょっと食べ過ぎたかなあ。

「昔、見越を倒した時は、どうしたかなあ。あ、あん時は、相手が鈍間だったから、脚を折ってやったんだ」

「折れなかったら？ 脚」

実際、七星剣の全力でも、斬れなかったし。この前。

「攻撃は、絶対に受けない。真正面から殴られたら、衝撃で身体飛ばされそうだしね。表面が堅いんだったら、関節狙うか、頭を狙うかなあ」

「……意外にえぐいんだね、御瑞姫って」

「相手、化け物ばっかだからね。双頭なんて、ザラにいるし」



本当に、今、平成？

「他には？ 気をつける点、ある？」

「あ、さっき他の神社の人からメールで聞いたんだけどさ」

おっと、叶の乱入だ。

「戦闘中、明御瑞姫の姿は見えなかったらしいよ」

「見えないって、どうやって操ってたの？ 一応、操り人形なんですよ、あれ」

「でも、基本、山の中が戦場だから、多分無線なんじゃないかな。で、弱点たる操者は、なるべく身を晒さないようにするって事じゃないの？」

無線って。太古からあるにしてはハイレベルなエレクトロニクスなこと。まあ、カミ様のやることだからなあ。理屈じゃないんだろうけど。

「でも、明日は対一でしょ？ 隠れる場所なんてないんじゃない？」

「じゃ、のののんは、明ちん狙いで行くと？ 意外にえぐいね、君も」

「んな事言っていないでしょ」  
思っていたけど。

「姫子ってさ。有効射程が広い敵に対しては、どう出るわけ？」

「なんたって姫子は、私よりも間合いが狭い、拳と拳のインファイアの達人だ。彼女の武器たる神宝は、両手の手甲。信じられないけど、生身での殴りあいを日常にしている彼女の敵は、言い分を鵜呑みにするなら化け物たるカミ様たち。まともに真正面から、正々堂々と試合をしてくれる相手だとは思えないけど。」

「速攻で間合い潰して、一方的にボコる」  
聞いた私がバカだった。

「結局、相手を自分の間合いに閉じ込められるかどうか勝負でしょ、一対一なんて。のののんの得意レンジと、明ちんの守備レンジがどのくらい交錯しているのか分からないけど、相手の死角を狙っ

ていくしか、狙いどころなんてないと思うけど。

そもそも、のののんって、何が出来るの？

剣を振り上げて竜巻飛ばすとか、超音速居合いでリングを切り刻むとか、衝撃波に指向性もたせて地面を走らせるとか、鷹に掴まって空から急降下とか、そういう必殺技、ないわけ？」

「そんなゲームみたいな技、無いわい。私は基本、七星剣を振り回す、だけよ。振り下ろすか、横薙ぎするか、振り上げるか。まあ、力を溜めて強撃するのも、一つの手だけど。刀身でガードして、機を探ったりとか……」

「地味っ娘め」

「胸見て言うなっ！ 大体あんたはどうなのよ、必殺技、あるわけ？」

「それは言えないなあ。将来、ライバルになる可能性もあるわけだし」

ぐぬぬぬ。おのれ、こやつ。

「姫子の技ったら、手甲内で呪符を炸裂させて、拳の破壊力を上げるってのが無かったっけ？ 確か、六発装填式の……」

「叶っ！ なんでバラすの！」

「なんでって、私、百々山ひゃくじやまの女なんだけど」

「おおっ。そうだった。ここ、超アウェイじゃん」

と言うか、姫子がここにいること自体、おかしいんだよね、この部外者め。大体、地元の平和はどうしたのよ。

「ん〜、まあ、私がいなくても大丈夫なんじゃないの？ 他にも、退魔の家系あるし」

つくづく、この子と同じ現実を生きている気がしないなあ。

ま、私も、御瑞姫とやらになったら、そういうカミ様退治に本格的に参入しないといけないんだらうけど。

今までも妖怪相手に戦ってはいたけど、死線を潜るようなのは少なくて、大半は実体もろくにない、霊体が寄り集まって意思を生じたみたいなの、幽霊のような霞の方が多かった。そんなのでも、悪霊

の重力みたいな場を発起して、時には交通事故を誘発する、現実干渉を行ったりする。

けれど、姫子の言うカミは、童話の鬼とか妖怪のように実体と意思を持った、実在の悪意だ。

もちろん、そういうった存在を、今更私は否定しない……むしろ、手厚く保護して共存出来ないものか、と思うくらいで。

無理だろうなあ。互いに縄張りというか、望む環境が異なれば、どちらかの住み良い土地にしか変貌しないだろうし。

ん？ でも、いまだにそういう敵対意思が生きているって言うのは、どういう理屈なんだろう？ 人間を敵視していて、巫女さんたちも撃退上等だったら、一方的に虐殺の上、滅亡させる方が、日常平和の理に適う気がしないこともないんだけど？

そういえば、考えたことなかったな。私の場合は徒党を組まない単体ばかりだったから、偶然強い相手に襲われたとしか思わなかったし。

倒しても倒しても、被っても被っても、悪霊と言われる存在は生まれてくるってことは、もともとそれらは、穢れみたいなものってこと？ つまり、エントロピー増大？

ああ、もう、わけ分かんない。

これ以上、考えるの、よそう。

「んじゃ、姫子。最後に一つだけ、質問」

私は、自分の決意のために、真剣に問う。

「御瑞姫になつて、後悔したこと、ある？」

「ないよ」

「一回も？」

「まったたく」

「なんで？」

「なんでって言われてもなあ……御瑞姫になれるだけの力があつて、周りがそれを望んでいるんだつたら、八方丸く収まってみんなハッピーなんじゃない？」

うん、ま。私が御瑞姫になる理由も、それくらいで十分だろうな。

翌日は、日曜日だった。

学校を辞めてから、毎日のように神社に通いつめていたおかげで、曜日感覚があやふやになっている。そういやこの一週間、テレビどころか新聞すら読んでいないわ。ネットサーフィンなんて贅沢言わないけど、世間の常識くらい知っておかなきゃいけないんじゃないだろうかねえ。

そんな事を思いながら、朝ぼらけの薄ら白い世界の下で、私は七星剣を握っていたりする。

「ちよつと聞きたいんだけどさ。あんた、必殺技とかあるの？」

「なんですか、藪から棒に」

神樹<sup>みき</sup>は、拍子抜けするくらいに、普通だった。

「いや、今日、決闘でしょ。何か切り札みたいなものがあるんだったら、知っておきたいじゃない」

「……なんだったら、また解放しますか、ヤツカ」

「却下よ」

「だったら、七星剣、性能半減つすからねえ。この前みたいな、幽体離脱戦法は、必殺技じゃないんですか」

「あれもねえ。考えて見たら、生身野晒しだもん。失敗したら、あつけなく殺されるし。」

大体あんた、限界とか言っつて、勝手に神寄解いちゃったじゃない。おかげでこっちは、満身創痍の肉体に強制送還で、地獄の苦しみを味わったわよ」

「仕方ないじゃないっすか。前回のは急だったこともあって、全出力の八割を、こっちで負担していたんすから。最初っからフルスロツトルだと、絶対にのの姉がもたないと思って……あと二三回は実戦しないと、のの姉だけの魂じゃ、あの出力は維持できないでしょ

うし」

「……そりゃ、一方的に負担かけて悪かったわね。おかげで助かりましたあっ！」

んじゃ、改めて相談したいんだけどさ。今日の決闘、どうしたら良いと思う？」

「と言っても、のの姉、基本は出来てると思うんすよね。足りないのは実戦経験だけで。あと、気づいていないと思いますけど、基本ポテンシャルは、物凄く高いですよ。歴代の御瑞姫に比べて」

「それは、身体が？ それとも、魂が？」

「魂つす。特注品すから」

だよなあ。私もともと、体育の成績良くなかったし。まあ、球技が苦手っただけで、剣道が授業にあつたら、評価は一変してたかもだけど。

「神寄つす。のの姉に足りないのは、神寄の習熟度だけつす。今日も、ボクに羽織ってください。のの姉の神寄は、ただマスターするだけで、他の御瑞姫とは決定的に違う特技として通用しますから」

「……相手が、飛び道具持ってきたら？」

「逃げましょう」

「……霊体にダイレクトアタックしかけてきたら？」

「旗色悪いっすね」

「……あんた、本当に歴代最強の神剣なの？」

「神宝のスペックだけが、舞闘の勝敗を決定する要素じゃないってことつすよ」

「それ言つたら、安倍家つてのは、生身でも巫女のスペシャリストじゃないの？ 私、ただのアルバイト巫女なんだけど」

「のの姉、自分がこの十年で、どれだけ穢れを被ってきたと思ってるんです？ 尋常な経験値じゃないつすよ。それに、他の巫女には絶対に真似できない特技を、のの姉は生まれながらに持っているんす。それは、無視できないアドバンテージつすよ」

「特技、ねえ」

それはきつと、この魂の事だ。  
カミと、直に触れ合える能力。

自分もまた、高天原の眷属であるが故に。

「現人神ってだけでも自信を持つてくたさいっす。というか、普通それだけで、十分天狗になれるっす」

ああ、まあ、実感とか目に見えるメリットがないだけで、私つてば巫女の中じゃ、相当選ばれた資質だったんだっけ。

危ない危ない。自覚してなきゃ、天然で相手を不快にさせるところだった。

「のの姉」

神樹の声色が、固く、刺さる。

「肉体は、魂の傀儡。

魂とは、即ち気概。

神の御魂は、不敗。

負ける要素は、無。

あなたは特別です」

そうだね。そうだった。

「ありがと、神樹。覚悟できたわ」

私は、高天原の神の娘。

魂からして、特注品。

鍛えずして神樹を従え、集中なしにカミと戯れる存在。

私はそれを、普通の人生と比較して、ずっと負い目だと思っ  
た。

あんなモノが見えてしまうから、みんなのように生きられない、  
と。

でも、違っただ。

私が知らなかっただけで、社会は、日本は、巫女の魂を必要とし  
ている。

それが表社会で認知されていないだけで、マスコミに報道されて  
いないだけで、実は人間社会の縁の下、ずっと支え続けている。

私の魂は、いわば縁の下の大黒柱。もしくは大地に深々と突き刺さる基礎杭にも相当する存在。

それを虐げられていると思うか、公への奉仕と誇るかは、表裏一体の心の構えの問題で。

今、それは、鮮やかに裏返った。

「うん、勝とうか、神樹。神の娘の魂の力、下界の人間にとくと、見せてやらなきゃね」

私は、受け入れると決めた。

迷って立ち止まるくらいなら、迷いが振り切れるまで駆けてみよう。

気持ちさえ上向きならきつといつか、高みへ到れると思うから。

これが私の運命なら、どうせ逆らっても無意味なんだから、いっそ腹を括って返り討ちにした方がスッキリする。

私の魂と神樹と七星剣。

三位一体、出たとこ勝負。

駄目で元々勝てば官軍。

……痛いだけは、勘弁だけど。

「ところで、あんたは、前回の御瑞姫のこと、知ってるわけ？」

「え？」

「いや、宮司さんはじめ、望たちも誰も知らないけど、神樹と依佐利だったら、前回とかずつと前までの神事のこと、知ってて当然かなって。あんた自身、闘ったんでしょ、二〇年前も」

「いやあ、依佐利なら知ってるかも知れないっすけど、ボクは前回のこと、知らないっすよ？」

「はあ？ だつてあんた、ずっと七星剣についてたんじゃないの？」

「いや、ボクはのの姉とセットですから」

「……使えない奴だなあ、おい」

「それに多分、前回までの記憶は、のの姉の参考にはならないと思います」

「また、断言するわね。理由は？」

「前回までのカミは、ヤツカでしたから。歴代の御瑞姫はみんな、ヤツカに振り回されてただけだったと、思うんすよね」

そう言えば、依佐利もそんな事話してたな。

「だから、のの姉は、のの姉だけの戦い方を、体得してください。ボクはそのために、七星剣を制御しているんすから」

私がヤツカを、制御下におけるまで、かぁ。



## 第二帖 剣拳豪合々京の娘の俠気か凶器 伍

「あの、本当に、ここで？」

「これほど最適な場所もあるまい？」

堅牢な決戒に囲まれ、外部からの侵入者はもとより、内部からの脱出も困難。最近では塀はより高く密になり、覗くことすら難しい。決戒内は完璧な別世界で外界の常識は通じず、なにが起きても全て揉み潰すことが出来るしな。市街地の中にありながら、完全に独立した、ある意味では国家ですらある。中にいる人間にとっては、捉え方一つで牢獄と化すほどだ。おまけに、舞うに最適な広場まで完備されている。

どうせ今日は日曜日。誰も来ないことは保証済みだ。そして、日曜日であるからこそ、外からの目に留まることもない」

私の動揺を無視して、高野空海たかや あけみさんの演説は絶好調。

「学校とは、まさに理想的な閉鎖空間だよ。不審者がどうのこうのと理由を付けて、結局は閉じこもる一方で、厄介ごとは全部内部処理。確かに外部からの脅威も減っただろうが、周辺地域からの隠蔽を完璧にすればするほど、中で何が起きても、外には漏れないと来ている。そもそも、純粹無垢な子供などいるものか。学校とは、個々では善良かもしれない人間が、集団を組むことでいかようにも黒く変色することが出来るという実例を、無数に観測できる場所だ。

つまり、いずれは揉まれなければならない社会の荒波に対し、人と持つて知り、いざ事あらば、自分が巻き込まれないように立ち回り、情報収集と根回しと、無能な烏合の衆の『数』の意味する力がどれだけ有効であるかと言う現実を、知りたくなくても知ってしまう場所だと言うことだ」

「いや、私、一週間前までここに通っていたんですけど」

そう、今、私たちは今日の決闘場へと訪れている。

県立金成木高等学校、イコール元・我が母校。

「ほほう。それは奇遇だな。この高校は、稲田なだ姫神社と肩を並べる、この地域一帯の霊脈の要でな。少なからず神宮の庇護を受けている。校庭に一際大きい木があるだろう。あれは稲田姫神社の御神木の分け御魂でな……貴様、御瑞姫みずきになろうという者が、自分の守護地の霊脈も知らなかったのか？」

……何というか、私ってやっぱ、運命？

いや、校庭の木が凄い霊木だつてことは分かってたけど、とかぶつちやけ、毎朝挨拶して談笑するくらいの仲だつたけど……そういうや、依佐利いさりと雰囲気似てたなあというか、世間つてももの凄い狭いつすね！ 私の行動範囲、みんな監視付きみたいじゃね？ そりゃ、巫女目当てのカメラ小僧だつて湧くわよ。

「ま、そういうわけだ。伊勢神宮が口を聞いてくれるからな。少しくらい壊しても構わんぞ」

空海さんは多分冗談で言ったんだと思うけど、対戦相手である女子中学生は、無言でしつかりと頷いて……ああ、やる気満々だわ、ありゃ。

なにしろ、こっちは全長二メートルの長剣。

向こうは、全高六メートルの人形だからな。

御瑞姫のでたらめさは前回の神寄で体験済みだから、本気でぶつかれば、校庭がどうなるかなんて想像したくもないけれど、地獄絵図が勝手に浮かび上がってくる。

まあ、ぶつちやけも、生徒でも何でもないんだけどね。

ちなみに、今日これから神事を行うにあたって、姫子、叶かなえと珠恵たまえが学校の周辺に人避けの符を貼付しに走っている。そうすることで高校に近づこうという意志を強引にねじ曲げて、誰も近づかなくなるんだそうで……戦乙女たちが妖怪相手に『作戦』する時の常套手段「一般人への情報隠蔽技術を、巫女社会では『決戒』と呼ぶらしい。

けど物損したら、隠蔽したつてばれるだろうに。それすら誤魔化

すんだとしたら……意外に巫女組織って、暴力的だなあ。

ま、今はそんな事を心配している場合じゃない。

私が御瑞姫になれるかどうかというより、あの巨大な人形と闘って、無事で済むかどうかという切迫した問題だ。

神樹<sup>みき</sup>は、大丈夫だと念を押してくれた。私の魂が特注品だという理由で。

望<sup>のぞみ</sup>、叶、珠恵も、百々山のカミに、必勝を祈願してくれている。

姫子は、私の勝敗なんて二の次で、御瑞姫同士の舞闘がうらやましくて仕方がないという感じ。他の御瑞姫に肩入れするのが反則なのかもしれないけれど、一宿一飯の恩も忘れて傍観気取り。

対して安倍家の方々は、朝から殺気ビンビンです。

対戦相手である安倍明<sup>あかり</sup>は、外から見るぶんには無表情でいまいち覇気がないけれど、そんな妹の分も興奮しているのが、前回百々山で大暴れしてくれた姉の晴<sup>きよひ</sup>で。というか、瀕死の傷で片腕脱臼していた割に、回復早いぞ。化け物かつ。で、その化け物のお母さんまで、必勝モードというか、必殺モード全開で、視線に敵意をてんこ盛り。

……本当、無事に終わるんだろうか、この神事。

秋の日は釣瓶落として言うけれど、まだまだ西の空にしぶとく残っている陽光に照らされて、かつての学び舎は赤く輝いている。

毎朝靴を脱いでいた下足箱も、四階まで上って行った教室も、毎日のように通って貸し出しカードを量産していた図書館も、一週間前とは変わっていないはずなのに、何故だろうか、すでに部外者となってしまった私の目には、触れてはならない聖域のように感じられた。

校門から進むのは、校舎ではなく校庭で、そこには覚えているとおりの光景が広がっている……依佐利の兄弟だっという霊木も含めて。

平日だったら部活動でにぎわしいグラウンドも、休日には寂寥しか漂わない。

通っていたときは広いように感じていたけど、こうして外部から見ると、空海さんの言い分じゃないけど、刑務所みたいに限られた場所に見える。

外から見えないように、外周をグルリと囲んでいる街路樹も、フエンスも、確かに不審者の視線も遮るだろうけど、同じくらいに外部への流出を拒んでいる。

中で何があっても、か。

校舎側から見て、右手に体育館、左手にプールと部室棟。三方を建物に囲まれて、南側は鉄条網と街路樹に区切られた、東西に長い長方形の舞台。

今私は、巫女服を着て、七星剣をその手に、その舞台に臨んでいる。

一週間前までは、絶対に想像できなかったシチュエーションだ。

そもそも、誰かを七星剣で叩くなんて、考えたことも無かったし。一般人には知られないように、妖怪と呼ばれるカミたちと、血で血を洗う戦争を繰り広げているという御瑞姫。

その当事者に、なるかどうかの試験。

ちなみに私が負けた場合は問答無用で、七星剣は伊勢神宮に取り上げられるらしい。来年からの、芦原舞闘神事とやらを、完遂するために。

だったら、わざと負けるっていうのも、一つの手ではあるんだよね。どうせ、神事は続くんだから。

でも、稲田姫神社と七星剣には、千年を越える昔に縁起がある。

伝統がある。何十人という巫女さんたちが、紡いできた歴史だ。私の勝手に途絶えさせるのは、さすがに抵抗があるんだよね。

それに、今更、遅い。

一週間前、望たちと闘って、晴とも闘って、七星剣と神樹と依佐利と、色々な諸々を聞いてしまっている。

私が、高天原たかまがはらで生まれた魂だからこそ、何かを成すために七星剣を託されたのだと、知ってしまったている。

それは裏を返せば、この道を進んでいけば私の生みの親に繋がるかも知れないという、推論だ。

確証は、ない。

けれど、私がどうして生まれて、なぜこの地で育てられたのか……カミが見えるなんていう特異体質に必然が、もしあるのなら、それを知りたいと思う。

その覚悟はもう、決めたんだ。

高校を中退した時点で。

そう。

ここで負けたら私は、問答無用で無職。逃げ場のない背水の陣。だから最初から、選択肢すらない状況。

勝つ。勝って、進む。

私は七星剣を通して、この日本にまだ、妖怪と組織だって闘っている巫女がいると、知ってしまった。

けれどまだ、それはほんの入り口。

入場料を払っただけで、最初の扉すら潜っていない、お化け屋敷みたいなものだ。

世界の裏が、私を待っている。知りたいのなら実力で越えてこいと、挑戦してきている。

そう、私は、知りたい。

どうして、私にはカミが見えるのか。

どうして、巫女は未だ、カミを調伏しているのか。

どうして、日本を守護しているはずの、天津神を見ることが出来ないのか。

それは、物心ついたときからずっと、図書館で一人、黙々と調べ続けてきたライフワーク。

それも、高校の図書館で、行き止まってしまった、研究途上。

もしこの先を知りたいのなら、大学で考古学か民俗学を専攻して、フィールドワークに出るしかない。

現実を、肌で、知る。

そのために、私は今日、闘うのだ。

果たして私に、知る権利があるのかどうかを。

高天原まで、届く想いなのかどうかを。

そのための、一步。

聳えるほど高い壁も、階段の一段に過ぎないから。

私は、息を深く、大きく、吸う。

冷たい大気が、気道から肺を満たし、酸素を受け取った赤血球が、全身を駆け巡るのを感じて。

その流れが、教えてくれる。コンディション・グリーン。体内環境、問題なし。

続いて、意識するは、魂。

肉体との境をより明確に意識して、どこもほころんでいないか、霊気の繋がりは万全か、隅々までスキャンする。

うん。調子は上々。

そして最後に、七星剣を握りしめる。

(神樹)

(準備オツケーっす)

(今日は、何をさせてくれるの?)

(神寄を。そして、霊を視る目を)

(霊を、視る?)

(相手の人形が遠隔操作なら、そこには霊が介在していると思うっす。逆に言えば、霊を視切ることが出来れば、相手の動きが分かるっす)

(……でも視ると言っても、ホットラインかどうかっただけでしょ?)

(そこを一步押し進めれば……ラインの中を走っている情報まで、視えます)

なるほど。ハッキングか。

(あんだ、そこまで情報処理、できるわけ?)

(その分、肉体制御はの姉に分担してもらっす)

(了解。んじゃ、それで行ってみようか)

今日という日を、私は神寄に費やした。

午前中をすべて、山の中で過ごしたのだ。

自分の限界を。神寄の補正値を。何が出来て、何が無理なのか。

逐一すべて、確認した。

その上で、グラウンドを見る。

狭い。

神寄の全開を披露するには、あまりに狭い舞台だ。

頭の中で常に、グラウンドにおける現在位置をマッピングしておかないと、すぐに壁際に追いやられるだろう。

逆に言えば、こちらの立ち回り次第では、相手を追い込むことも可能だ。

全高六メートルの巨体が、それほど小回り出来るとは考え辛い。

私に狭いのなら、相手にとっては窮屈すぎる場所のはずだ。

姫子のアドバイスにもあった。注意すべきは、間合い。相手のレンジを見切って、決して内部に飛び込まない事。派手な必殺技もない私は、一撃一撃を、大切に決めていくしかない。地味だ。堅実すぎる。姫子にとっては、ケレン味の少ない、つまらない舞に見えるだろう。

だから、良い。それが私の、月見里野乃華の舞だから。

相手を、自分の空気に、取り込むんだ。私の間合いでー私の曲で、相手をキリキリ舞わすために。

時は来た。

私は七星剣を、安倍明は水晶球を、それぞれ携えて舞台に出る。

私は、ごくごく普通の白衣に緋袴。寒さをしのぐために毛糸のパンツこそ遠慮したけど、ヒートテックのスポーツブラでせめてもの耐寒仕様。そして、正式な舞闘であるため略式ではあるけれど、両

袖には五色の布と鈴をあしらって、舞に優雅を備える仕様になっている。

歩みを止め、舞台の中央に向き直れば、シャランと鈴が鳴り響き、その視界には、同じようにこちらに向きを変えた安倍明が映る。

小振りな丸顔に、ちょこんと鼻と唇を浮かべて、不釣り合いなほどに瞳だけが、黒々と丸く大きく、ドールのような無表情に漆黒を穿っている。姉と反しての長髪は、シャンプーのCMモデルとして出演してもおかしくないほど艶やかで、彼女の身の動きに応じて、サラリと雅に揺れる。

身を包む白衣も特徴あるデザインながら、一見して目を引くのは、頭から被って前後に垂らしている長方形の布だ。姉の晴も同じような形状の布を纏っていたから、それが安倍家の意匠ということなんだろうけど、神樹が言うにはその布地に織り込まれた紋様には、永久循環型の霊力向上の祝いが込められている。

そんな彼女もまた、衣装の端々に鈴を結びつけていて、私たち二人が奏でる音色が、静寂の満ちる舞台に、明朗と響きわたった。

舞台の外には、高野空海さんと、安倍家の二人、稲田姫関係者と、  
姫子が固めて。

人形は、まだ、無い。

というか、どこ？

「舞闘、起神！」

一歩、前へ進み出た空海さんが、舞台の閉鎖を宣言する。

あらかじめ周囲に用意されていた神符が、宣言を受けて一斉に直立していく。その高さは三メートル弱。カミを宿されたそれは空海さんの特注で、ある程度までの衝撃は受け止めてくれるらしい。

逆に言えば、手出し無用の……いわゆる金網デスマッチ？

「双方、神宝を！」

私は七星剣を、明は水晶球を、それぞれ両手に持って前にかざした。

「神寄っ！」



空海さんの言に弾かれ、双方の神具から霞が立つ。  
琥珀色の霞が。

(同じ、色?)

理由は分からない。

剣から伸びた霞は、私の魂と肉体の間に、水晶球から伸びた霞は、  
明の魂の外に。

それぞれの神具に宿った神は今、巫女へと憑依し、力となった。  
双方の全身が、琥珀色に輝きを放つ。

「神宝、封解っ！」

その言に、七星剣は応じない。

明の水晶球もまた、変化がない……そう思った直後。

彼女の背後、グラウンドの端に置かれていた長持が、ながもち浮いた。

二メートルほどの長さの、木製の直方体……天秤棒を通して前後  
で二人の人間が運ぶように作られた、時代劇で見るとような運搬用具  
だ。

どうして、それを見落としていたのか。

(隠蔽の祝呪っす)

(祝呪?)

(神の名による、物理現象への強制介入っすよ)

つまり魔法みたいなものか。

そして、驚きは止まらない。

浮かんだ長持が直立したと見えた途端……信じがたい事が、起き  
た。

一瞬の出来事。

そのありのままを言うなら……箱がひっくり返って人形に変化し  
た。

「なんてインチキッ！」

せいぜい、一秒あったかどうかの短時間で、箱が内から開いたと  
思った直後には手足が飛び出してきて、あっと言う間に見上げるほ  
どの大巨人に変形終了！

へ、変形プロセスの再現を要求するっ！

(さすが……安倍家の絡繰技術は天下一品)

「感心してる場合かつ！」

グラウンドに降り立つ、白い巨人。

全身を鋭殻に覆われた、力の化身。

一週間前、ヤツカに乗っ取られ、私に殴りかかってきた時は、七星剣の刃が通らなかった。

外見に、傷跡は見えない。

不安を増長するような隻腕に、鋭い弧を描いて背中にある、三日月状の突起。

何か、ある。隻腕である理由が。それが分からない今はとにかく、相手の出方を探るしかない。

しかし、改めて思う。

反則でしょ。なによ、このハンデ。無差別級にもほどがあるわ。

「文妖、合図を」

直立してグラウンドを囲んだ符の壁を飛び越えて、空海さんの言葉に従って来たのは、スラリと伸びた白い肢体に純白の羽衣を纏った若い女、の姿をしたカミ。

その身が紙で出来ていると聞いたけれど、それがどんな技術なのか、ペーパークラフトなんか足下にも及ばないどころか、体温すら想像できるほど滑らかで柔らかさを備えた人形代が……それでも紙であることを強調するかのように、風に流されてフワリと私と明の間に降りてきた。

文字通り血の通っていない肌は、上質の白磁のようで、腰まで伸びた髪すらも絹のように白いとあっては、瞳の黒さと紅を引いた唇だけが、鮮やかに浮かび上がって視線を惹く。

美女だ。まあ、人形代だから当たり前だけど、その妖艶な雰囲気、の正体が別にあることを、私と空海さんだけは知っている。

目の前にいる文妖こそが、高野空海さんが稲田姫神社に来た日に、背景で稲妻を操っていた張本人。

年月を経た書物に宿る、文車妖妃ひぐるまようひという由緒あるカミらしい彼女が、どういう理由で空海さんと結託しているのか知らないけれど、文妖と、それを操ってみせる空海さんが、並外れた実力を持っていることは、痛感させられている。

このグラウンドの周囲を、一ミリの隙もなく、瞬きするほどの間に、呪符で覆い尽くしてしまった手腕にて。

呪符を作るという点においては、私の周囲にも叶という達人がいるので、それがどれだけ多機能でミスがない逸品であっても、だいたいの製造過程を予測することは、出来る。

作り方とコツさえ分かれば、要する技術が極端に個人に依存していない限り、再現できるというのが私の自慢だ。けれど、目の前の文妖と空海さんがやったのは、一枚一枚は理解できる精密作業だとしても、それを工場のように一瞬で大量生産するという離れ業であって……今の私には、それを理解するだけの材料が手元にはない。

世界は、広いな。

この町において、七星剣を握っている限り、それがどんなに恐ろしそうなカミや妖怪であっても、私には負けるということが、なかった。私にとってはそれが自慢だったし、巫女を続ける原動力でもあったし、周囲と馴染めない自分への慰めでもあって……私は、こゝと巫女という分野においては、日本でも屈指の存在であると、どこかで思い上がっていた。

空海さんと文妖に見せつけられた外周への瞬時配符は、そんな私の天狗の鼻をへし折るのに、地味に有効だった。

彼女たちはそれを、当たり前前として、誇ろつとすらしなかった。今日の前にいる文妖が、なぜか羽衣から片肌だして……紙で出来た肩と鎖骨を見せつけて、紙の身にわざわざサラシ巻いて胸元隠していたりして……人形代だから仕方ないけど、無意味に巨乳にする必要ないでしょ。

「どちらさまも、おひげえなすって」  
仁義きらなくていいから。

「よろしいですか？ よろしいですね？」

私と明に、否があるはずがない。

双方、構えた神宝に、揺れる袖の端の鈴だけが鋭く、承諾の調べを打った。

「ではっ！ 入ります」

スツと、手品のように、文妖の身体が空間に溶けて 世界は変容した。

文妖の消失と連動して発動した外周の符が、囲んだ内部の空気を一変させたのだ。空気が、としか形容できないのは、微風が一瞬で途切れた以外は、眼前の景色が保たれていたからで……それでも肌は、魂は、この場所が靈的に、特殊な力で満たされていることを、敏感に受け止めていた。

そしてそれが、開始の合図であることも。

「のの姉っ！」

先手は、意外な形できた。

「くっ」

明が、左手に水晶球を握りしめて、間合いを一瞬で潰して殴りかかってきたのだっ！

## 第二帖 剣拳豪合々京の娘の俠気か凶器々 陸

安倍明<sup>あへあかり</sup>が、左手に水晶球を握りしめて殴りかかってきたとき、私も神樹<sup>みき</sup>も、あまりの展開に反射神経を失った。

一瞬で間合いを埋めた彼女が、見る角度によって様々な感情を表現するように作られた能面の如くでなく、意識的に筋肉を緊張させることによって、全方向に完全に無な表情を作り上げていた事も、一面では度肝を抜かれた原因といえる。

けれど、私も神樹も分かっていた。

双方が神寄<sup>かみより</sup>をしていて、その手に武器としての神宝<sup>かんだから</sup>を構えていて、裁定者の文妖<sup>ふいよう</sup>によって開戦が宣言されていて、しまいには文妖の消失によって空気が変容したことで、舞闘の幕が上がったことも、頭では理解していた。

にも関わらず、私と神樹が動けなかったのは、人形遣いは、人形で攻撃してくるものと、決めてかかっていたからだ。

全高六メートルという異形で相手を萎縮させ、その圧倒的な攻撃力で圧してくるものと考えて、抗戦を組み立てていたからだ。

なのに、安倍明は、人形を置き去りにして、単身にて殴りかかってきた。

彼女の左手に握られているのは、子供の頭ほどもある巨大な珠である。

彼女の容姿が、いわゆる深窓の令嬢という言葉からイメージされる儚さを纏っていると言っても、その身にカミを降ろすという神寄を行っている以上、その身体能力が破壊に特化していることは、疑う余地もない。

彼女の全力ならば、たとえそれが本来の使い道でなかったとしても、水晶球で殴られればこちらの頭蓋骨が陥没……を通り越えて、粉碎され、飛び散り、血潮と脳漿を母校のグラウンドにぶち撒けるは必至。

避けねばならない。

無理ならば、受けなければならぬ。

そういう判断を、こちらから奪うための安倍明の無表情奇襲であるならば、彼女は相当な策士であり、私はあまりにも素人であったと、反省を胸に抱いて天に召されるが当然と納得してしまうほどに、この奇襲は効果的だった。

当事者でありながら第三者的立場な、『私の肉体』の介入がなければ。

結果として、私は七星剣で、受けたのだ、奇襲を。ただし、私も神樹でもない、『肉体を維持するための自律意識』による反応で。前にも、晴の銃剣に襲われた時、肉体が勝手に動いたことはあった。

けれどそんなのは、一〇〇に一つもない奇跡だと、私は思いこんでいた。

明の全力殴打を受けきつて、それでも衝撃は殺しきれずに両足は地を離れ……そこまできて、ようやく私と神樹は、肉体の制御を取り戻した。

体勢を崩しつつも着地を決めた瞬間、予期していた追撃が来なかったのは、明もまた、自分の奇襲が受けられるとは想定していなかったからだろう。

安倍明は両手を、宙に浮いた水晶球そうつしゆに操珠の表面に置いていた。

そしてまるでドラムを叩くが如く、十指が珠の表面を激しく踊るにあわせ、遂に背後の人形が動き出す。

その名、自律舞闘絡線じりつぶとうからくり・茶吉尼たきに。

安倍家が四百年というバカみたいな時間をかけて作り上げた、御み瑞姫専用の戦闘人形……と聞かされた。

私闘から合戦、市街戦から密林戦闘、電撃戦から掃討戦、果ては退却戦の殿までマルチにこなす汎用性に富み、現場での整備をほとんど必要としないか、ユニット交換による簡易整備で実用に耐えるというゲリラ好みのメンテナンスフリー。

しかも亜寒帯の北海道から亜熱帯の沖縄まで、あらゆる機械を砂塵防御なしでは故障させるといふ沙漠ですらも外装換装の必要がなく、複雑な設定はすべて、ワイヤレスで操珠にて行うというから恐れ入る。

そこまでするくらいなら、各地各様に特化したカスタム人形を複数用意する方がコスト的にも安いんじゃないかと私は思うんだけど、スタンドアロンで完璧な汎用機器を作り出したいという研究者の欲望は、そんな合理性を完璧に無視したらしい。

かくして安倍家の総力を結集して生み出された自律絡繰は、その怨念にも似た設計思想に支えられ、巫女組織最強の人型兵器として、現代まで朽ちることなく存在し、今まさに、踊るような明の運指に応えて、夕日を背に受けながら、その瞳に光を宿したように見え、「無理っす」

いきなり、神樹が悲鳴を上げた。

（な、ななな、なんなのよ、あんた！）

（茶吉尼の運用プログラムのハッキング、無理っす。つうか、安倍家のセキュリティはパねえっす。

独自OSくらいは当たり前だと思っただけですが、並の暗号解読ソフトじゃ太刀打ちできねっす）

（本解読前から匙投げてどうすんのよ！）

（とにかく、言語がやばいんすよ！）

乱数計算とかマトリクス演算ならまだなんとかなったかも知れませんが、純粋に日本語オンリーのやり取りで、なのにウチナーグチとか蝦夷言葉とか薩摩弁だったり、絶滅危惧方言をメイン言語にしてやがるんですからっ！）

（そのくらい、七星剣にアクセスして聞き出しなさいよっ！）

（無茶っす。不規則に方言を変更する仕様で、対応するためには神代から現代までの、全日本語方言のデータベースが必要になります。だいたいマタギ言葉とかサンカ言葉なんて、んな地域限定言語まで分かるわけねっすよ）

言い争っている場合じゃなかった。

驚くほど軽い振動を大地に残して、巨体がこちらに突っ込んでくる！

瞬時に、跳んだ。直後に、巨人の拳がグラウンドを穿っている。

あんなの、まともに受け止めるもんじゃねえ。着地点に七星剣を叩きつけて一気に距離を開くと、明は茶吉尼に追撃させなかった。

必要がなかったからだ。

私と神樹が茶吉尼を見た瞬間、巨人には巨砲を埋め込んだ左手が生えていた。

(聞いてねえ！)

(言ってますんから！)

悲鳴と砲声が重なった。七星剣を地面に突き刺して盾にすると同時に、神剣がへし折れるんじゃないかと思うほどの激突が三度、神樹に直撃する。

(痛いっ！ まじ痛いっ！ 死んだ方がましっくらい痛いっ！)

(今後もう、有効な策以外喋んなっ！)

泣く神樹を引っこ抜いて、私は全速で駆けだした。追撃が二発、こちらの動きを読んできたけど、地面にめり込んで不発。

(実弾っ？)

おまけに炸裂弾でもない、ただの砲丸。なんて古風な。

(周囲を傷つけない配慮じゃないっすかね)

(あんたは敵の肩を持つんかい！)

距離を埋める。

一跳躍で一撃を叩き込める間合いまで。

彼女もこちらの意図を読んで、茶吉尼の左手を消滅させた。どういう原理か知らないけれど、どうせ幽世かくりよとかどっか別次元に収納しているに違いない。似非科学めっ！

(つか、科学じゃないっすから！ 神術っすから！)

どっちでもいいわ、んなこと！

とにかく、こちらの間合いに入った。



躊躇うことなく、七星剣をフルスイング。標的は問答無用で安倍明。

（鬼畜っ！）

（あんたはどつちの味方だっ！）

ともかく、剣は襲いかかる。

相手が受け止めるには、水晶球しかない。

上段から円を描くような、えぐりこむ軌跡は、相手の跳躍を迷わせる効果を発揮した。

ならば彼女は選ばなければならない。

死か、操珠の破壊か。

であれば、彼女は身を守るだろう。

水晶球を盾にして、たとえそれが破壊されなくても、彼女の動きは著しく鈍るに違いない。

その確信を胸に、七星剣は空を薙ぐ。

御瑞姫とは言え骨格は少女。二メートルを誇る鉄板の直撃を、その細身が受けきれるとは思えない。故に、想定していたフィードバックは、相手が吹き飛ぶ瞬間のインパクトのみであり……実際に七星剣がぶち当たって返ってきたのは、二メートルを誇る鉄板の突進を受けきられたが故の、こちらの臓腑を揺るがすほどの反作用！

まるでビルを殴りつけたかのような感触！

歯を食いしばっても尚こちらの全身を襲い続けるのは、相手が強固であるが故の、こちらの攻撃の全反射であり、

「んなっ！」

激震の狭間から見えたのは、安倍明の全身を蚕の繭のように覆い尽くしている、白くしなやかなで、しかして堅い板状物体が織りなしている、強固な円柱構造物。

「いつの間に！」

考察する間は与えられない。

こちらの突進を完全に止めた構造物の向こうから、見覚えのある白くて巨大な拳が襲いかかってくる。

今度こそ、七星剣によるガードは期待できなかった。

六メートルを越える巨大人形が放つ渾身の一撃が、私の肩に突き刺さり……空を、翔けた。

「のの姉っ!」

神樹の悲鳴すら一拍遅い。

御瑞姫と呼ばれる存在の全力の一撃をその身に受けた少女がどうなるか……その典型的な見本が、今の私だ。

すなわち、衝撃にその身は浮いて、なすすべなく空をぶっ飛ぶ。

堪えようとしなかったのが、まだ救い。茶吉尼の拳の衝撃をそのまま飛翔へのエネルギーに変換したため、直に拳があたった左肩へのダメージはあるけれど、全身が被った害は、実に明を叩いた瞬間の反作用よりも少ないくらいだ。

軽く三メートルは浮いただろう。

急速に遠ざかる景色の向こうに、明を守護した円柱状構造物の正体を……茶吉尼の左腕であると知る。

「でたらめがっ!」

私の反撃の一瞬前に、明は茶吉尼の左腕を消していた。

それがこちらの行動を読み切つての先手であつたとしたなら、私はむざむざ相手の誘いに乗せられたつてこと?

空中で身をひねり、両足で着地するも、暴力的な慣性が、グラウンドに直線を残して砂埃をまき散らした。最後には七星剣を地面に突き刺すも、時既に遅し、私の背には文妖と空海女史が配置した符が迫っていて、その紙とは思えない弾力に埋もれながらも、それでも勢いは殺しきれず、我が身は外周フェンスにまで達した。

余裕なのか、明からの追撃は、ない。

すでに彼女は全身を露わにしている、茶吉尼は再び、隻腕にて屹立する。

(神樹、生きてる?)

(策ならないっすよ)

(奇遇ね、私もよ)

(じゃあ、降参しますか?)

(冗談)

私は、既視感にとらわれていた。

(こんなこと、今までだって、何回も経験してきたじゃない)

十年。十年の長きだ。

なにも知らない六歳の私が七星剣を握ってから、十年という年月が過ぎていく。

その間、私が日々繰り返してきたのは、すでに物語の中だけに存在を許されていると思っていた、カミヤ妖怪や幽霊たちとの、壮絶な生存闘争だった。

(泥田に引きずり込まれて、窒息しそうになったりもしたよね)

(河太郎にアナル処女を捧げる危機もあったっすねえ)

(窮奇に囲まれて、全員スカートだけ切られたりしたし)

(鬼火が魂に引火したりとかあったっすねえ)

数え上げればキリがない。

私はこの十年、日々、ピンチの連続だった。

たまに楽な仕事かと思えば、幽霊に呪われて夜中にトイレに行けなくなったり……テスト中に金縛りにあったり。

日常。

そう、日常的に、私はピンチを嗜んできた。

(覚<sup>め</sup>は、面倒でしたっす)

(おかげで、無の境地を会得できたけど)

そう、今では、千差万別のピンチに対して、過去の膨大なデータベースから、有効策を検索できるほどに。

(……でも、いきなり、暗号解読作戦は失敗したですけどね)

(近接戦闘で殴りとばすつても、安直ったあ安直だったと思うわ)

(次、どうするっす?)

(こういう時、必殺技とか欲しいよねえ、切実に)

でもこの十年、私が学んだのは、勝利に方程式なんてないっていう、厳しい現実。

パターンは無限にあり、前回有効だった策が次回に通用するとは限らず。

場所、天候、体調、相手の数……状況を左右するパラメータは無限に存在して、最適解はその都度柔軟に変化して。

今、私は分析す。

相手は人形遣い。

六メートルを越す巨体は隻腕。ただし片腕は、遠距離攻撃と近接防御に切り替え可能。他の換装可能性もあり。

(神樹、相手はやっぱり、霊波コントロール?)

(電波じゃないのは確実っす……常時接続ではなく、特定のコマンドに対して自律駆動しているっばいっす)

(んじゃ、もっかい、行くわよ)

(へ?)

(その推測が、本当かどうか、確かめる!)

戦意を叩き起こす。

嫌がる肉体を、強引に魂にて機動する。

吹っ飛ばされた衝撃も、殴られた痛みも、どちらも神が肩代わりしてくれて、肉体駆動に支障はないから。

蹴る。

大地を。

一直線に。

愚直にまっすぐ、突っ込んだ。

私が、間違っていた。

相手が人形遣いだということを、忘れていた。

人形遣いなんてただの飾りで、人形本体よりも操者を倒す方が簡単だなんて、思いこんでいた。

相手は、そんなこっちの戦法、とつくに体験しているはずなのに！  
考えてみれば、あまりに安直な思いこみだ。対人形遣いを考える上で、相手をバカにしているにもほどがある。

人形遣いを狙う、という私の意図が透かして見えれば、相手はそ

れを逆手に取ればいいだけだ。

そう、安倍明は御瑞姫。 齡十四にして、既に歴戦の猛者。

対カミの対戦経験は数知れず、だったらそこにこそ、付け入る隙を、見いだせ！

戦法はさっきの再現。

左手を換装して砲撃モードになった茶吉尼から射出される砲丸をかわしつつ、徐々に距離を埋めるのみ。

既に、この時点で茶吉尼はオート駆動。

一度認識するか…… もしくは向かってくる相手はすべて排除するがプログラムか。

間断無い砲撃で相手を釘付けにし、それでも肉薄した相手は、拳で問答無用に殴りつけるが基本スタイルと視た。

だったら、そこに、潜り込む。

茶吉尼は、六メートルを越える巨体。

七星剣は、二メートルをほこる鉄板。

長物の弱点は、使っている自分が一番よく分かっている。どれだけ動きが機敏でも、懐に入り込まれてしまつては、迎撃は困難。

だから。

相手の拳を、誘つて、かわせ。

私の攻撃を当てる必要はない。

ただ、相手を無効化すればそれでいい。

そうすれば、活路は、開く！

果たして砲撃は止み、茶吉尼はその左手を換えて、明の防御に、

柔軟なる四枚の白い壁を駆使用する。

そこまで、今なら、視える。

だからこそ、茶吉尼へ、迫つた。

相手の間合いを掻い潜り、さらに七星剣の間合いすら埋めて……

その白い機体に取り付いた！

互いに手の出せぬ死角。

策の尽きた弱者が捨て鉢に相手に抱きついて、猟師も窮鳥を撃た

ずの奇跡を願うかのような愚。

と、相手に思わせることに、意図がある。

通常なら互いに硬直、相手の出方を推測して、仕切直すが常道を、あえて踏み外し、私の右足は、さらに地面を強打した。

グラウンドを凹ますほどの激しい一蹴は肉体を一時的に重力の楔から解き放ち、違わず跳び上がった第一歩を、私は茶吉尼の機体に求める。

さらに、一蹴。

相手に向かった勢いを殺さず、そのまま人形を駆け上がるこの行為に、いかなる意味があるや。

(神樹、通信は！)

(オンライン！)

その一瞬にも、私の視点は六メートルの高みを登り終えて、そのまま巨人の背後へと、飛翔していく勢いを得ていた。

おそらく明はそれを察して、茶吉尼に背後への警戒を打診するに相違ない。

故に、その一閃が、煌めいた。

ありえない一撃。

月見里野乃華の肉体は、変わらず重力を振り切つてなおも空中への憧れを抱いて跳び続けているのに、七星剣の軌道は茶吉尼の頭頂から神速で下つて、白い円柱構造物に守られた明へと、一目散に襲いかかったからだ。

果たして、魂と身体の久遠の絆を強引に引き剥がして起こした霊体での一撃は、茶吉尼の機内を斬り裂き、白い壁の防御もすり抜けて、操者たる明へ、届いた。

知覚した次の瞬間には、私の魂は愛しい肉体へと舞い降り、果たして地面に落ちる前に、ぎりぎりバランスを取り戻すことに成功する。

茶吉尼の背後に着地した私が振り返つて確認したのは、右腕が動かなくなつた明が、無表情のまま、それでも直接的な怒りをこち

らにぶつけてくる、圧倒的なまでの感情の高ぶりだった。

命令受諾の途中で、霊による無線接続そのものを切断された茶吉尼は、システムエラーに陥って多分、再起動による自律駆動へ移ろうとしている。

普段なら操者による強制介入で行われるであろうマニュアル制御も、肝心の片腕が魂を斬られて、一時的にでも不能になってしまえば、たとえ六メートルの巨体を誇ろうとも、文字通りの独活の太木に相違無い。

私は、明ほど、慈悲に深くはなかつた。

動きを止めた一瞬を、躊躇わずに好機と認め、着地点をそのまま基点として再度茶吉尼に襲いかかると、剣を捨ててその脚に抱きつき、

「どおりやああ！」

跳んだ。

巨人を抱えたままで。

神寄という人知を越えた奇跡を体現していても、さらに無茶と思えた所行でも、神樹によって増幅された腕力は、その巨体に見た目通りの重さを全く感じさせることはなく、

「おかえしっ！」

空中で一回転、地面に振り下ろした巨体は頭からグラウンドに叩きつけられ、跳ね、更に飛んだ。

それがどんな機構なのかは分からないけど、それだけの無茶な力学作用の最中にあっても茶吉尼は、けなげな再起動を続けていたらしい。

私という束縛から解放された人形は、空中にありながら四肢の自由を取り戻し、今にも錐揉み軌道を描いて、華麗に着地する。かに見えた。

そこに、符という壁さえ迫っていなければ。

轟音が、闇を震わせる。

巨体の激突を受けても尚、空海女史の作りだした符はゴムのよう

に伸びて、尋常ならざる衝撃を受け止めようと、悲鳴を上げても尚切れず……その強靱さが仇となって、茶吉尼は壁から跳ね返されて、入射の勢いそのままに、再度地面へと、無様に叩きつけられた。

グラウンドが爆ぜ、砂利がもうもうと舞い上がり、大地が度重なる衝撃に、泣くように微震する。

全身全霊、会心渾身の一撃だった。

作戦的には奇襲に近く、かつ、分の悪い賭。

大体、最初っからこちらの作戦はことごとく潰されて、その場思いつきの検証なしな一発勝負。

まったく私の肉体は昔から、その場しのぎのとにかく動くっていう作戦に、よく慣らされている。

立ちこめた土煙は、私たちの身長を超えるほどで、視界が晴れる前に私は、七星剣を拾い上げて、なお、臨戦する。

茶吉尼という機動絡線を、馬鹿にしていけないからだ。

相手は普段から現場使用の、能動受動に関わらず、耐衝撃という点においては、並ぶ物ないほどに重点をおいて設計されているはずの、倒れてはいけない壁である。

常に前線を斬り裂き、突き崩す刃でありながら、背後を永劫に守り続ける、いわば突き進む攻撃的な盾。

であればこそ、一度や二度の落下程度で機動不能に陥るはずが無く、

「明、止めろっ！」

「百々山の巫女、逃げなさいっ！」

晴れ始めた土煙の向こう、呪符の壁を乗り越えて聞こえたのは、聞き覚えのある安倍の母娘の警告で、

「へ？」

空を見上げた私はそこに、ありつべからざる光景を目の当たりにして、思考停止に陥った。

それは、爪の集合体。

白き鋭き爪は群体をなし、その接合部で節となり、五本の首を形



作った白き堅軸は、その根本で一塊の殻に収束され……節々を折り畳んだその姿は歪つな立方体を形作って、全く同じ構造をもつ私の左手を同じ外観に変形せしめた時に用いられる一般名称は、すなわち怒りを直接的に表現するもつとも分かりやすい形状であるところの、拳。

問題は、それが視界を覆い尽くすほどに巨大であり、文字通り空を白く塗りつぶしたその拳から伸びる腕が、晴れていく土煙の向こうで、茶吉尼の左腕に接続されているということ、  
「あり……」  
えないという言葉すら発する前に、音もなく、その拳は降ってきた。

その瞬間私が思い描いたのは、巨大な円筒構造物が宇宙から地上へ落下する有名なアニメの冒頭の映像で、

（本当に大きな物は、ゆっくり落ちてくる物なのかも知れない）  
という錯覚を植え付けられた、その映像のイメージ通りに、拳は、静かに、しかし遅滞なく私の視界を漆黒に覆い尽くして……

文字通り、グラウンドが、砕けた。

茶吉尼の巨大な左拳が、ただ愚直なまでに地面とのキスを果たした瞬間、校舎側にいた空海たちが目にすることが出来たのは、見渡す限りの砂煙だけだった。

巨大な体積をもつ何かが連鎖的な崩壊を続ける音が、暴力的なまでに空気を占有して鼓膜を不能とさせ、暴風とともに校舎の屋上を越える高さまで舞い上がった土煙が、目と口に対して緊急シールドを発動させ、居合わせたすべての人間のあらゆる感覚を奪い去った。

それほどの大惨事にも関わらず、五秒後には文妖が自発的な事態回収を開始し、全天に対して光学迷彩を施した符を散布して高校全体の隠蔽をはかり……高野空海もまた、五感を奪われたまま力ミに働きかけ、空中に飛散した粉塵という粉塵に対して強制霊的介入を發動して、粉塵の瞬時凝集化を促進、噴煙を重力に引かれる砂利へと変換して、一分の後には、視界が確保されるレベルまでに、噴煙を晴れさせることに、辛くも成功した。

「安倍家！ 始末書っ！」

最初に発した命は叱責であり、

「各自っ！ 号令！」

続いて、居合わせた全員の無事の確認、そして、

「文妖、鈴瞳すずめに緊急召集！」

空海たち全員が、砂利にメイクされた顔を拭うのも忘れて目の当たりにしたのは、黒々とした開口部を惜しげもなく地の奥底まで晒した並外れた陥没であり、

「野乃華っ！」

「明っ！」

各関係者の喉から迸ったのは、地獄の底まで続いているのではと思われるグラウンドに穿たれた穴の周囲に存在の認められない巫女の名前であり、

「落ちた、か」

外周百メートルはくだらないであろう巨大な穴を照らす陽は西の空へと消えて……やがて東の空から訪れたのは、すべてを闇へと引きずり込む、容赦のない夜の帳であった。

### 第三帖 国史夢想く根の国の主か逆賊く 壹

なにが起きたのか。

いや、起きたことは分かる。

天空から降りてくる茶吉尼たきにの巨大な拳を受け止めるべく、私はとつさに七星剣をグラウンドに突き刺して、それを柱として天空からの大質量攻撃を受け止めようと画策したんだ。

茶吉尼の拳がどれだけの威力を誇ろうとも、こちらも神剣、軽々と折れ曲がることはあるまいと、とつさの判断。

直後に激突。

私が自分の甘さを呪ったのは、グラウンドに突き刺した七星剣が、茶吉尼の拳に押されるままにズブズブと地面に沈み始めた瞬間で、

「このままじゃ、死ぬっ！」

本気で覚悟を決めた直後に、足下が、割れた。

まるで、七星剣が楔になったかのように、パツクリと。

信じ難いことに、三メートル下には漆黒が広がっていて。

落下時間は、相当に長かった。

崩落範囲は明と茶吉尼の立ち位置にまで及んでいて、私と一緒に落ちる影を認めると同時に、茶吉尼の左腕が白い布状物体に変化。

それは私と明を優しく抱きしめると、残った布片が鋭い刃と化して、地獄へと延々に続くような縦抗の壁へと、猛然と突き刺さったのだ。

それでも、落下自体は収まらない。

明も宙づりになるくらいなら、と考えているのか、落下速度を落とすつつ、私たちは奈落へと邁進した。

いったい、どこまで落ちたのか。

共に落下したはずの土塊に潰されることなく、一番最後に地下に到達した私たちには、月明かりさえ届かない。

反面、

「これって、根の国？」

地下は、存外に明るかった。

いや、正式に言えば、地下は当然漆黒の世界だ。可視光で見れば、けれど、日常的に霊的なものも捉えている私にとっては、そこは霊なる光に満たされた、神工的しんこうてきな世界に他ならない。

私たちが落ちてきた穴そのものが、すでに何者かによって掘られた土木施工物にも見える。

到着点から三方へ、五人くらい横並びで歩けるくらいの広さの通路が伸びていて、そのいずれにも、街路灯のように定距離に発光体が埋め込まれている。

「……高校の、真下に？」

「これも、空海あけみ女史が言っていた神宮管轄である理由なのだろうか？  
「安倍明」

とりあえず、この落下から救ってくれた少女の名を呼んでみる。

「はい、ここに」

彼女は、私の背後に倒れていた。

「よかった。助けてくれてありがとう……どこか、怪我してる？」

落下の衝撃はほとんど無かったにも関わらず、明は腰を抜かしたように、地面に横たわっていた。

といつても、私が見ているのは霊光視界だから、肉体に付着しているはずの魂が、だけれど。

それでも、私が斬った彼女の右手首は、自然復帰してちゃんと繋がっているから、外傷がない限りは動けるはずで。

「あなたは、私が見えるのですか？」

不思議そうに問いかけられた。

「あ、そうか……安倍明も御瑞姫みずひめだったら、分かるでしょ。この世界には、可視光だけでは見えないものもあるって。その逆よ。この地下じゃ、可視光以外の光が満ちているみたいよ」

「……なる……ほど」

頭のいい子だ。それだけの説明で事態を納得できたらしい。

それでも、彼女は動こうとしなかった。

「どうしたの？」

仕方なく、こちらから近づく。

ほんの五分前まで、二人は殺し合いにも近い激闘を演じていたというのに。

私は、七星剣こそ握っているけれど、すでに戦意は喪失していた。安倍明本人には、何の恨みもないと言ったら嘘になるけど、それでも相手は年下の少女だ。

非常事態においては、先輩風も吹かせたくなるもの。

「あ、その、近づかないでください」

か細い声だった。年相応の。まるで迫りくる野獣を拒絶するような。

「いや、怪我しているんだったら、手当しなくちゃ」

私の視界には、股をすり合わせるようにして、ギリギリと逃げる明の姿がよく見えている。足でも挫いたのだろうか。それとも腰が抜けたのか。どちらにしる、御瑞姫にふさわしくない体たらくだ。

「いえ、怪我では……なく……」

怯えた声だ。恥じらいが混じっている。膝をピツタリと閉じて、それでも股間まで閉じきるのをどこか遠慮しているような……。

「いや、そんな、女の子を襲うような真似しないって」

というか、私はなぜにそんな警戒をされねば……もしかして？

「ビツクリして、始まつちやったの？」

恐る恐る尋ねると、信じられないほど素直に、彼女は身体を硬直させた。

「あちゃあ。そりゃ、不安にもなるわね」

（何の話をしているんですか？）

（剣は黙ってる）

（酷っ！）

思考を読みとられると、根がセクハラ魔神の神樹みきのことだ、涎を垂らさんばかりに狂喜するに違いないから、とりあえず、埋めた。

(のの姉！ のの姉！ なぜに突然この仕打ち！)

と言つても、こつちも舞闘に臨んでいた身だ。

ハンカチ、ティッシュにソーイングセットらの常備がエチケットなのは平時であつて、今は明の危機に比べられるようなものなんて……あ、保健室。

思い出した。私今、学校の地下にいるんじゃない。

『叶、叶。聞こえてたら、ちょっと頼まれて〜』

落下のショックも、年下のピンチの救済という仕事を与えられれば消え去つて、私が極めて事務的に、もっとも事務処理に長けている相手に靈話を試みれば、

『野乃華のの！ 生きてるの！』

肉声であれば鼓膜が破かれていたであろうほどの反応に、改めて地上の惨劇を思い知らされた。

『ああ、その、二人とも生きてる。けど、ちょっとデリケートな事態に陥つててね、できれば内密で、窃盗行為を働いてもらいたいのだけ』

『なによ、その、奥歯に物が挟まったみたいなの言いは？』

私も直接確認したわけではないけれど、おそらくそうであろう推測を、必要のないのに歯に衣着せて靈にて送信。

『……保健室つて、どこ？』

いや、本当。何も言わずに動いてくれる仲間がいてくれて助かるわ。

『南校舎の一番端。たしか、事務机の一番下の引出しの中にあつたと思う。あと、予備の下着もあつたら一緒に落として』

『野乃華、一言いっておくけど。今うえ、大穴開いちゃったせいでテンテコ舞だから』

だよねえ。

『私だつて、命の危機を乗り切つたにしては、些細な上に面倒なお願いだつて分かつてるけど』

一応、女の子としては、放っておくのに抵抗ありまくりなわけで。

自分だったら、絶対にトラウマだろうし。というか、身に覚えがあるし。ビビって失禁ならまだしも、下着が赤くなっていたりしたら、そりゃ、絶叫もんですよ、あなた。

『ところで、下はどうなってるの？』

黙っていたら恥ずかしい過去が溢れ出しそうな沈黙を、叶が散らしてくれた。私はとりあえず着地が上手くいったことと、どうやら神工物であろう通路が広がっていることを伝える。

『ひよっとして、これが空海さんの話していた、霊脈ってやつなの？』

『いや、霊脈って別に、物理的な通路を必要としないから……根国路だと思っわ』

『ねくろ？』

『根の国の路。文字通りの意味』

『じゃ、やつぱり……』

『順ろわぬ神々の、住まう国って言ったところかしら』

確証が、来た。

根の国。本当にあつたんだ。

出雲にて八股大蛇を退治した須佐之男命が最後に鎮まったとされる場所。

その子孫である大国主神が、大勢の兄たちに殺され続けたために一度避難し、嫁と須佐之男命の武器と琴を盗んで逃げ出して、その武器でもって兄たちを倒して国を治めた後、国譲りを終えて移り住んだとされる場所。

『ひよっとして、順ろわぬ神って……』

『いわゆる、国津神……私たちの、敵よ』

敵地！

背筋を電撃が駆け抜ける。

姫子たちが、御瑞姫が、戦乙女が、太古から戦い続けてきたと言っ、国を騒がす神々。

それが、天孫降臨の前に葦原中国を平和に、実質的に地上を統治

していたにも関わらず、天照大御神あまてらすおおみかみの要請を受けて、争わずして統治権を譲つたと伝えられている、大国主神を長とする国津神たちだと言つのか。

出雲いすづもの神、大国主神。

国譲りの際、交換条件として雲を突く大社を造れと言い、平安時代の一般教養として「雲太和二京三」つんたわにきよみやま一（出雲が太郎、奈良が次郎、京都が三郎の意）と賞賛されたほど、奈良の大仏殿よりも巨大な社があつたと言われながら、当時の建築技術を侮つた近代の学者たちによつて、その巨大建造物が否定され続け、神話のみの存在と烙印を押された悲劇の神。

けれど、三本の巨木を鉄輪で締め付けた直径三メートル強の太柱が平成になって発掘されたことで、言い伝え通りの四メートルを誇つたとされる高層建築物の実存が明らかにならんとしていることで、少なくとも当時の出雲に、それだけの大政治力があつたことを物語り……天孫降臨後は、数多の国津神を率いて、根の国に退き、地上の政治には口を出さなかつたとされる、平定神。

つまり、今私がいる場所は、かつて神代に天津神に地上を追われた神々が隠れ住んだ場所だと言つわけか。

あれ？

おかしくない？

神話において、国を譲つた大国主神たちは、表世界への干渉を一切やめたはず。

なのに叶や姫子は、この現代においてすら、この根の国の国津神を、敵だと言い張つて戦争を続けている？

だって、平和的統治権譲渡じゃなかつたの？

というか……実在したんだ、国津神。

天津神の娘が言う台詞じゃないけど。

日本の歴史において、この六十年、あれは神話だから歴史じゃないと、捨てておかれた古墳時代以前。

逆に戦前は、天孫たる神武天皇じんむの活躍を高らかに唱つて、天皇が



万世一系の現人神であることを証明するべく、神代すらも歴史として扱っていた歴史教育。

その、極端から極端へと振られた国史教育において、多分そのど真ん中に位置してるのが、国津神たる出雲の親分の、大国主神ではなかるうか。

なぜなら、天皇が天孫であることを証明するためには、天孫降臨が事実だとせねばならず、当然、天孫に統治権を譲った出雲神も、肯定される必要がある。

でなければ、わざわざ国譲りなんて物語を、後世に残す意味がないからだ。

最初から天孫が地上を治めていたことにすれば良いのに、なぜか大国主神が平和つひらけた葦原中国を、横取りしたと伝わる天照大御神。

けれど、戦後の考古学は、天孫降臨そのものを神話として無視して（空から人が降るはずがないという理由）、故に万世一系の現人あらひと神も神ではなく、民衆を代表して神と交渉する巫祝ふしゆくを司った、天と地の調整役であり地上人の代表であったとされて。

すべて神話の作り話だと言うことになれば、天孫降臨どころか、大国主神が葦原中国を治めていたことすらも事実ではないとされ、結果的に出雲神話すべてが、作り話に貶められて、見向きもしなかった戦後考古学。

けれど、そんなのは、地上の学者たちの都合でしかなかった。

現実、地下には根の国があつて、地上を追われた国津神たちが暮らして……そして彼らはまだ、天津神を奉ずる巫女たちと、争っている。

争って……いる？

ダメだ、パーツが足りない。

今の私じゃ、これ以上の考察は無理だ。

とりあえず、

『落としたよ!』

叶が、私を現実に戻した。

『サックス!』

一体どれだけの深さがあるというのか、叶の霊話から、それが手元に落ちてくるまで、愕然とするほどの隔絶があった。

どこで手に入れたのか、白布でグルグル巻きにされた物体の中には、目当ての用品の他に、照明代わりの符も入っていた。さすが叶一を聞かなくても十を用意しちゃう女……でも、換えの下着は無かったみたいで、なぜに高校の保健室に紙オムツなんてありましたか。とりあえず、私は照明符を起動した。詔みことに反応して自動発火した符が、空中に浮かぶ。その、蠟燭のような乏しい明かりが、目に痛いほどに、暖かかった。

照らされ、払われた闇の向こうに、一瞬前とは違う景色が広がっている。霊による視界と、肉眼での視界が、重なった。安倍明は相変わらず倒れたままで、その後ろには茶吉尼が、文字通り糸の切れた人形となつて九重折くくずれていた。校庭に開いた巨大な穴の径は、そのまま地下まで変わらないらしい。符の儂い光ではすべてを明らかにできず、ただし予想と反して縦抗は、穴というより、坂であるらしいことが見て取れた。

ま、とりあえず。

「自分で、できる?」

警戒心を解かない安倍明を刺激しすぎないように、私は叶からの届け物を、慎重に彼女の近くに置いた。

「……」

が、彼女は首を横に振る。

「……普段、どうしているの?」

「は……穿かない、ですから」

おいおい。

「だって、学校とかは」

「忌日しみてびだから、休みます」

……そりゃ、大昔の日本は、生理中の女性を隔離監禁してたけど。

「とりあえず、今はしときなさい。どちみち、ここから出ないといけないんだし」

「え？ いえ、でも……」

「ああ、もう！ まどろっこしい！

「きやあ！」

堪忍袋の緒を切った。

逃げ腰になつていて動けない安倍明に襲いかかり、一度その肩を強引に地面に押しつけて身体を奪った後、彼女の両足首を掴んで左右に開かせ、自分の体をグイとその間に入れ込む。陣取るのと、彼女の袴をめくりあげる動作が、ほぼ同時。照明符の弱い光の下ながらも、予想通り少女の秘所が、不浄けがれているのが見えたから、「うあ、きや、いやあああああ！」

驚き、騒ぐ明はしかし、背中が地面にペツタリで両足を大きく開かれていますため身動きが取れない。その間にこちらも素早く、成すべきことを迅速に行い、

「……何をしてるんだ、お前ら」

一仕事を終えて、さわやかに立ち上がるうとした私の背中に、高た野かや空海女史の、アイスピックのような冷酷な突っ込みが、グサリ。

「おおつ、のののん！ 予想に反してご健在？」

空海女史に続いて、姫子までが降ってきた。

「ご健在どころか、お盛んだ。私がこなければ、こいつら暗がりです女の証を散らしていたぞ」

「散らしません！」

人聞きの悪い。

「お楽しみだったじゃないか」

「大いなる勘違いです」

真実は闇に紛らせ、

「どうして、ここに？」

「二人が心配だったからに決まってるじゃん」

「姫子が、心外だと言わんばかりに口をとがらせた……その両手になぜか、金属製の巨大な鉄甲を装備して。」

対して空海さんもよく見れば、柱のように巨大な物体を右手に握っていて、どう見てもその意匠は、何らかの破壊活動を行うための器具にしか思えない。

「助けに来てもらったのは嬉しいんですが……その、普通にこの坂を登っていく訳じゃないので？」

「お前の疑問はもつともだが……上の穴はすぐに埋め立てを始める。明日は平日だからな」

「い、隠蔽するつもりで？」

「どつちかというと、封印だがな」

空海さんが放った符によって、周囲は目映いばかりの光に包まれた。

完全に暗闇に順応していた瞳が、灼かれたように痛む。

「この坂は、国津神が、信じがたい労力を傾けて掘り進んでいた進撃路だ。かつて奴らはこの坂を駆け上がり、ついでに葦原中国に攻め上がり、地上を乗っ取らんと一大侵攻を企て……我々はそれを撃退し、再度根の国へと押し返した……なた稲田姫神社は、その際に我らの本拠地とした陣の跡であり、この坂の監視という軍事的目的のために造営された砦、というわけだ」

「……嘘、ですよ？」

「通常ならば、あの程度の衝撃で封印が碎けるはずはないのだが……長年の風雨で綻びが出来ていたか……あるいは下から細工されていたか。」

「どちらにせよ、長年放置されていた坂であることは確かだ。」

遅かれ早かれ、こういう事態が起こっていた恐れはあり、一般人に被害が及ばなかったことを、行幸とすべきだろう」

…… ドツキリ、ですよね？

「稲田姫（野乃華）と知流姫（明）には悪いが、すでに封印作業は始まっている。我々は、根国路を通って、別の出口を目指すぞ」

「べ、別の出口って……そんなにいっぱい、根の国と繋がってる穴があるっていうんですか？」

「あの世と繋がっている、なんていう伝説を持つ洞窟なら、五万とあるだろう？ ま、実際に繋がっているかどうかは保証の限りじゃないがな」

「……ぐ、具体的に、目標地点とかは？」

「こんな地下に、GPSの電波が届くと思うか？ おまけに、ここは敵地だ。地図なんてあるはずもない」

「風に向かって走っていけば、きつとどこかに行けるって」

「そんな、さわやか青春ソングみたいなノリで言われたって、騙されないわよ、姫子。」

「なに、敵情視察も仕事のうちだ。舞闘自体がうやむやになってしまったからな、稲田姫、生き残ったらお前を御瑞姫と認めてやろう」  
敵中突破、やる気満々なんですね。

「待って下さい。茶吉尼の磁気探知と偵察式を使役した方が、効率的です。何より、不必要に力ミを刺激すれば、かえって地上に無用の混乱を招きかねません」

「安心しろ、知流姫。すでに地上は、無用の混乱の真っ最中だ。自慢の拳のおかげでな」

うん、よく分かった。

空海さんの耳には、了解の音しか聞こえないらしい。

「全員、臨戦の態でもって、全速前進！」

どちらにせよ、ここで留まっても無意味だ。

安倍明が普通に立ち上がるのを見守って、私もまた、埋めてあった七星剣を持ち上げ、一寸先の闇へと、初めての一步を踏み出した。

遅滞なし。

高野空海たかや あけみの『進軍』は、猛進だ。

最前にて符を放ち、動く影あらば躊躇せず切り刻み、私や姫子に動く隙すら与えない。

それは、彼女が極上のDSであることと無関係ではなく、しかし、  
「後方、十匹」

無心に索敵中の明あかりの眩たききに、私と姫子の足が止まる。間もなく、  
「茶吉尼たきに、斉射」

轟音が、地下洞窟を埋め尽くした。

み、みみみみみ、耳が痛い。  
すごく痛い。

というか、鼓膜が壊れた。

痛いの。  
音なのに、すごく痛いの。

なんなの、この拷問。

よりによって、ガトリング砲の砲身の真横にいなきゃいけないなんて。

「敵、滅」

「よし、進むぞ。稲田なだ、甕みか、耳を塞ぐな」

「む、むむむむむ、無茶言わないで下さいよ！」

「そうだそうだ！ BOZE製のノイズキャンセラーヘッドフォンを要求する！」

度重なる砲撃に、さすがに私と姫子の堪忍袋の緒も切れる。

なぜなら、その砲身を持たされているのが、ほかならない、私と姫子なのだから。

「タンポン丸めて、耳に詰めとけ」

「むつきい！ 姉御だったら、そのくらいの高性能符、ちよちよいのばっばでしょうが！」

「んな軟弱な符、趣味にあわん」

「趣味の問題かよ!」

「ぐずぐずしていると、第二射の必要がありますが」

明の容赦ない宣告に、私たちは無言でその砲身「茶吉尼を持ち上げる羽目になり。」

つまり、要するに、茶吉尼は完全無欠に、文字通りの『お荷物』になっているわけなのです。

それというのも出発間際、空海女史が発した質問、

「ところで、知流姫ちるひめ。その巨像、縮小できるんだろっな」

「無理です」

「……全戦争行動完全対応が売りじゃなかったのか、お前の所は」

「その宣言に偽りはありません。」

そもそも通常の戦闘行動において、狭所に大砲を押し込んで進軍するという選択肢はありません。

例えば室内戦闘における茶吉尼は、拠点防衛の絶対壁として絶大なる信頼に応え、一切の侵略を返り討つて幽世かくりよへ送り、逆の立場であれば、敵の拠点を完膚なきまでに撃ち壊し、室内を野外へと一変させます。

茶吉尼の運用に白兵戦など、そもそもが愚の骨頂。地下の偵察などするまでもなく、アリの巣コロリでも打ち込んでおけば済む話」

「……素直にごめんなさいと言えんのか、お前は」

「運んでください」

てなわけで、移動状態である長持ながもちに瞬間変形した茶吉尼を、御輿ごこしのごとく担ぐ羽目になったのが姫子と私で。

そのままだったら静かな大荷物だったんだけど、空海さんの無用な質問の結果、砲身だけを後方に突出させた歪な御輿と相成って、いざ襲撃となれば、問答無用で霊弾を無数に吐き出す拠点防衛（もしくは破壊）兵器と成り代わり、私と姫子取るものも取りあえず最優先で両耳を塞ぐという動作を、コンマ5秒で完成させられるほど、音の暴力に対して恐怖と被害意識を植え付けられたわけで。

「つか、姉御！ 約束が違うよ。地祇ぢぎを問答無用で殴なぐれるっていうからついてきたのに、ただの荷物持ちじゃ、契約違反だ！」

強制労働に姫子が異議を唱えるも、

「効率の問題だ」

空海女史が応じるはずもなく。

かくして漆黒の通路を巫女四人、長持担いでエンヤコラ、一時間くらいは歩いてきたんじゃなからうか。

その間に、前から五回、後ろから七回。国津神の襲撃があったと言うものの、前述の通り、空海さんの符と茶吉尼の砲撃のおかげで、姿を現す前に撃滅の憂き目にあっている『敵』の姿を、私はまだ一度も目にしていない。

かなえ叶との霊話で国津神の存在を肯定されてから、実は私はウズウズしっ放しで、なにがそんなにウズウズするかと言えばただ一点、

『議論したい』

に尽きる。

つまり、国津神天津神の実存を含め、神代から古墳時代にいたり、天武天皇によって古事記と日本書紀の編纂が命じられるまで、簡単にいってしまえば日本の国史が文字として記録されるまで、暗雲の彼方で実証の方法もなかった古代史は、水戸黄門の「大日本史」や本居宣長の「古事記傳」によってようやく日の目を見たものの、明治維新のどさくさで変な方へねじ曲げられてからは神聖不可侵はうこにして真つ当な学問不能の『神話』と祭り上げられて、皇国史観の八紘はっこく一字へまっしぐら。

その反発として戦後はいっさい省みられることもなく……実は日本の古代史ほど、まともに研究されていない分野もないわけで。

私たちが当たり前のように小学校で学んだ卑弥呼と邪馬台国にしても、実は日本国内には記録が存在しないため実証できず、一時期ブームになった邪馬台国論争（邪馬台国が九州にあったか畿内にあったか）も、実は邪馬台を『ヤマト』と呼びたくて仕方がないというか、朝廷が万世一系でなければ気が済まない学会の意向をもろに



反映されていて、本当は邪馬『一』国だったんじゃないの？ という在野の研究は、実質学会からは無視されて、議論すらされていないのが実状。

そもそも、戦後は古事記や日本書紀そのものが、作り話だから研究するに値しないなんていう扱いで……結果として唯一、古代の歴史を記されているはずの研究書を抜きにして、実は卑弥呼から聖徳太子の間には、四百年近い隔たりがあるにも関わらず、今は歴史的な人物の名前を挙げられない、なんていう体たらくというか、自分の首を自分で絞めているような有様。

つ、ま、り、よ。

自分のルーツを図書館で探しまくった結果、立派な古代史オタクと化した私としては、国津神と天津神を是として根国路ねくろを闊歩する空海女史なんかは、格好の議論の相手なわけで。

知りたい。

語りたい。

語られたい。

思う存分、白い目をされずに、今まで蓄積してきた疑問難問をぶちまけたくて仕方なく、ようやく周囲に静けさが訪れようとする今こそを契機として、

「あの、空海さん」

「……稲田姫、敵地でむやみに本名を明かすな。真名まなは言霊ことだまによる呪いに対して脆い。私のことは勢里姫せり、その馬鹿は甕姫みか、人形遣いは知流姫ちると社名で呼ぶようにしろ。

で、なんだ」

「ぶっちゃけ、教えて欲しいんですけど……ここが根の国だとしたら、やっぱり大國主神おおくにぬしと須佐之男命すさのおがいるんですよね？ ということは、逆説的に、高天原も存在するって言うことに……」

「下らん」

んな。

「おまえは、神秘主義者か」

巫女にあるまじき暴言！

「人が、天から降ってくるわけがないだろう」

「あ、な、ななな、こ、ここここ、この、非国民！」

お、お口が勝手に。

「天照大御神を皇祖神と仰いで、天神地祇てんしんぢぎから魍魅魍魎もっけ、物怪、動物から細菌まで、生きとし生ける全てのモノの繁栄と成長を祈つて、地上にあまねく御綾威みいづを賜らんと日々精進に励むが勤めの、それが、それが巫女の長たる御瑞姫の言うことですかっ！」

「お前な……御瑞姫だから言うんだろうが。戦前の修身教育を受けたわけでもあるまいに、どんだけ歪んだ青春を送ればそんな戯けた盲信に取り付かれるのか……それもあれか、いわゆる厨二病ってやつなのか。日本の未来もお先真つ暗だな。こんなオカルト狂いが巫女の長たる御瑞姫を指すとは……」

「だって、私たちは今、国津神を敵として、ここにいるんじゃないんですか？」

「それは、ただの呼称であって、呼び方なんて正直どうだっていい。相手は実体を持って、殺すことが出来、敵意をもった存在で、それは太古の風土記ふうどきから今現在まで、日本各地で妖怪、鬼、物怪、魍魅魍魎と語り継がれてきた、生活に密着した民俗学的存在であってだな……お前みたいにそれを、奈良時代の政権算奪者たちによる、自己正当化のための捏造書物の内容を真に受けて混同したりしては、我々戦乙女が長年に渡りその心身を鍛え、人生を犠牲にし、人の力を持つてして民の平安を守り通した貴い伝統を……見たこともない天津神による御威光などに置換され、手柄を横取りされては、死んでいった数多の同胞に対して、申し訳が立たんわっ！」

奈良時代の政権算奪者？ 自己正当化のための捏造書物？ それってひよつとして、記紀のことかあ！

「だったら！ そもそも国津神なんていう言葉が残っていること自体がおかしいじゃないですかっ！ 妖怪、鬼、魍魅魍魎、土蜘蛛、お化け、順ろわぬ神、呼び方なんて他にどれだけでもあるでしょ。

けれど、勢里姫も他の巫女も、ここを根の国と呼んで、敵を国津神と呼称する。

意と言と事は、本来三位一体にして不可分なる真実の発現。言のみが独立して力を持つことはあたわず、長久の磨耗にも絶えて残っている言葉なら尚更、そこに込められた『意』と、かつて起こった『事』が真実であることを雄弁に物語るものなんです！

つまり、国津神がいて、根の国があるならば、それをかつて伝えた太古の民は、決して嘘偽りを後世に残したわけじゃない！

記紀を偽書と呼んで、歴史書として扱わない昨今の風習は知っています。

けれどそれによって、古墳時代から飛鳥時代までが、歴史的人物皆無の空白時間になってしまった愚行も、断罪されるべきです。

古事記に書かれた神代の物語は、その話が残っていることこそに大いなる意味が込められているんです。

もっと言わせてもらえば、物語だといって見向きもされない古事記は、いくら太古の出来だと言っても、物語としての破綻が大きすぎるんですよ！

いつそ書かない方がスッキリする内容を、どうしてわざわざ国家的事業として残したのか。

それも、歴史書たる日本書紀を編纂している最中に、わざわざ物語という体裁をとり、『日本語表記』にこだわって、音訓交じりの漢字の羅列を、後世に伝えなくてはならなかったのか！」

「……だから、おまえは、神秘主義者だと言っただ。

どこの世界に、神話と現実を混同する馬鹿がいる。

日本神話の神様たちが人間的だからといったら、ギリシャ神話の神々にしたって同じ。しかしかの神話を現実と結びつけるか、お前は。

天津神、国津神、それぞれの名前が残っているのも、ただ、方便として伝統が残っているだけで、そもそも神話として語られているからといって、その内容がそのまま、神々がいた証拠ではない。

いいだろう。そこまで言うならお前のいう古代神話を、すべての現実の人間に置き換えて、説明できればいいのだろう？

そうすれば貴様も、古代神話そのままに、天から人が降りてきたなどと、世迷い言をぬかすまい」

真っ向対決。

視線と視線がぶつかりあって（といっても暗闇だけど）今にも沸騰しそうな空気を、

「敵です」

明が容赦なくぶち壊し、洞窟に轟く茶吉尼の砲声を、ただただ黙って耐える間に、でも、私は思っていた。

神話を、現実には、置換する？

空海女史は、確かにそういった。

それはつまり、記紀の肯定に他ならない。

でも、かの神話を現実として紐解く作業は恐らく……古代史上、最大のタブーなんじゃないだろうか。

『稲田姫！』

怒鳴るような口調の霊話が、空海女史から飛んできた。

『これ以上、肉声にて貴様に講釈していたのでは、時間がいくらあっても足りぬ。』

『霊符に我が国史を注入して送る故、後はお前が勝手に判断しろ！』  
厭を言う間も無かった。

ベチツと。

およそ紙とは思えない質感と威力をもつて、問答無用で私の額にぶつけられた符から、侵略という言葉以外には表せない勢いと強引さで古代のイメージが流れ込んできて……私の視界はいつしか、古代一色に、染め上げられてしまったんだ。

### 第三帖 国史夢想〜根の国の主か逆賊〜 貳

古事記に伝わる神代とは、おおよそ次のような内容である。

伊邪那岐命、伊邪那美命の夫婦神によって、島や神が大勢産み落とされ、火の神を産んだ影響で伊邪那美命は亡くなってしまったのだけれど、伊邪那岐命はその悲しみを乗り越えて、天照大御神、月読命、須佐之男命の三貴士をおつくりになり、下界の運営をその子供たちに託す。

天上世界である高天原を天照大御神が、地上世界を須佐之男命が治めることになったのだけれど、須佐之男命は、死んでしまった母親に会いたいと泣き続け、父親から「根の国に行つてしまえ」と叱られて、その事を天照に報告するために高天原へ。

凄まじい勢いで高天原に登ってきた須佐之男命を見て、一瞬天照は戦をしかけてきたかと身構えるけれど、勘違いだと分かつて和解。

けど、姉を言い負かしたと気を良くした須佐之男命は、なぜか高天原で大暴れ。終いには屋根から小屋内に馬を投げ込む暴挙にでて、そのために侍女が死んでしまった天照は、責任やら怒りやら悲しみやらで気を落としてしまって、天岩屋に籠もってしまう。

太陽神である天照が引き籠もってしまった影響で、地上世界は真っ暗に。高天原の神々（天津神）は、とりあえず須佐之男命を永久追放した上で、引き籠もりの天照に、なんとか出てきてもらわないと、と右往左往。

結局、天岩屋の前で大宴会。踊り子のストリップショーにテンション上がる神々に、自分を無視して盛り上がられて面白くない天照が、気になって岩屋をちよと開けた瞬間を見逃さず、力持ちが岩屋を全開、天照の手を取って引きずり出して、めでたく地上に陽光戻って大団円。

と、以上が高天原の物語。

ここから、なぜか主人公は須佐之男命に、舞台は地上の出雲地方

にシフトして。

八俣大蛇やまたのおろちを成敗した須佐之男命は、そこでたくさんおおくにぬしの女性を娶って子孫を増やし、子供の一人が大国主神。

大国主神は、大勢の兄に虐められ、何度も殺されながらも神々に助けられ、やがては豊葦原中国とよあしはらなかつくを平定するまでに成長。彼も多くの妻を娶って子孫を増やし、そうして地上世界がなんとか豊かになった頃。

突如、高天原視点にチェンジ。

地上世界は天津神が治めるのが筋だと、自分の息子を遣わすつもりになった天照。

二度ほど天津神を地上に派遣するも、ことごとく大国主神に取り込まれて返答なし。しびれを切らして切り札に、建御雷神たけみかすちを送り込む。

統治権を譲るよう、迫る建御雷神に大国主神、「息子二人が納得したら」とのりくらり。息子の一人の建御名方神たけみなかたは、喧嘩を売るも返り討ち、逃げて逃げて信濃の諏訪湖。

「もう逆らわない。ここから動かない」と命乞い。

もう一人の息子の事代主神ことしろぬしは、争いを好まないのか海に出て、船を傾け入水自殺。

国譲りを迫る建御雷神に、大国主神は動じない。

「よござんしよ。その代わり、出雲には、天に届くほど大きな家を造ってください。そしたら私はそこに籠もって、部下たちにも一切口出しはさせませぬ」

ここに契約は無事成立。

さて息子を遣わそうとした途端、息子曰く、「ちようど息子が生まれたところだから、そっちに統治させましょう」

かくして天照の孫神たる邇邇芸命にいにぎ。五人の部下と三種の神器を受け取って、雲を伝って地上に降りて、たどり着いたは日向ひむかの高千穂たかちほ。そこで現地の娘を娶って、生まれたのが海幸彦と山幸彦。

山幸彦は海神わたつみの娘と恋に落ちて、海神の力も借りて地上を統治。

けれど海神の娘の、出産を覗いてしまった山幸彦。横たわっていた鯨が妻の本当の姿だったことに驚くも子供を受け取り、涙ながらの妻との別れ。

そうして海神と天孫との孫として生まれたのが、後の神武天皇じんむで。「東の地に、俺が治めるにふさわしい場所がある」と、瀬戸内海を通過して大和の地へ。

現地の豪族の抵抗に遭いながら、神剣の力や呪法を駆使して打倒して、ついに神武天皇は、近畿大和の地へとたどり着き……これぞ名高い神武東征じんむとうせい。

ここに歴代天皇の、治世の歴史は始まった、と。

以上が、かいつまんで登場神物を極力減らした、野乃華流ののかの古事記解釈で。

はつきりいつてこの神話、物語として見るには破綻しすぎていて、ぶつちやけ、突っ込みどころ満載。

おまけに、世界中の創世神話と共通した部分も持ちながら、実は創世神話としては致命的なほどに、重大な案件を無視していたりもする。

その一つが、人類の創造だ。

欧米に限らず、南洋諸島や一般に未開と言われている地方においても、創世神話を語る上で、人間の誕生は外せないというか、ぶつちやけ、「人間はどこから来たのか」を語るのが目的のはずの創世神話において、その本来の目的ともいえる要項を平然と無視している日本神話は、好意的に解釈すれば大らかで、冷やかに突っ込めば杜撰ずさんに過ぎる。

実際、「人間」が話題に上るのは、伊邪那美命の死後で、黄泉の国の食べ物を口にしたために醜い姿になってしまったのを夫に見られた彼女は、逆上して夫を殺そうと追っ手を差し向け、殺害が叶わ

ぬやありつたけの呪詛を込めて、

「一日に千人、殺してやる！」

大地母神にあるまじき失言。

「ならば私は、一日に千五百の産屋を立てよう」

ムキになつて対抗心を燃やす旦那も大人げないと思うけど、かくして「人間」という存在は、唐突に物語の中に放り込まれ、かといつて神々は全くと言っていいほど、人間に愛着を持っていない。

そして私にとっての重大事は、神武天皇の東征以降、舞台は一気に人間世界にフォーカスして、天津神の具体的な活躍がほとんどなくなってしまうつて事で。

これ以後、天津神の人間へのちよつかいは神託という形になって、たまに具体的な神の名前が出てきても、それは国津神による呪いだとか、祟りだとかで、少なくとも高天原が舞台となるような出来事は、全く起きず。

……私、本当に高天原の娘なのかしらん。

はつきり言つて、調べれば調べるほど、自信ゲージがどんどん削られていく。

だからこそ私は、御瑞姫みずきに、戦乙女いくさおとめという存在に、自分の人生を賭けたんだ。

恐らく、現代日本で最も神道しんどうが「濃い」場所であろうから。

実態はともかく建前上は、天津神の名前が残っている職場だからけれど、空海あけみ女史は、それを神秘主義だと一刀両断。

ま、そうだな。

私だつて、自分が天津神の娘なんて言われなかったら、ここまで執着しなかつたらうし。

その上、つい先ほど脳内に強制インストールされた情報は、私の淡い期待を粉微塵に粉碎するであろう内容が詰め込まれているといふ。

……正直、怖い。

でも、知りたい。



にわかとは言え古代史マニア、恐怖心や常識より好奇心が勝るからこそそのマニアの称号。

符からの霊力注入に、焼けたように熱かった額の熱も、だいぶん冷めてきていた。

幸い、今すぐの敵襲はなさそうで、私と姫子は相変わらずエツサホイサツサと茶吉尼を担いで行進中で。

『のの姉』

……神樹みこの存在忘れてたよ。

『ああ、ちよつと深く思索に潜るからさ、あと、肉体よろしく』  
『へあつ？』

情けない返答を聞き流し、私は深層心理の奥へ進んで、脳内パーソナルシアターにて、『たかや あけみ 真実の古代史・高野空海編』とでも言うべき古代史個人観の上映へと、意識を埋没させていく。

最近の氷河期が終わったのは、およそ一万年ほど前の事。

もちろん、人類はそれ以前から世界に拡散しており、石や木を道具として加工して、長い長い狩猟採集生活を続けていた。

日本においても、それは変わらない。

日本列島に住み着いた人類の祖先が、シベリア、カムチャツカ半島、千島列島や樺太を伝って北海道から南下したのか、船を駆って黒潮を北上してきた環太平洋、東南アジアからの移住なのかは、現在においても分かってはいないし、恐らくそのブレンドである、というのが、現実的な判断だろう。

そのように、当時の日本列島には、大別して二種類の生活様式があったと思われる。

片や、漁業を生業として船を操り、国境もない大洋を勘と経験を頼りにして、縦横無尽に駆け巡っていた海洋民。

片や、緑水豊かな山野に住み着き、山菜果実に鳥獣、川魚に恵ま

れ、稀なる火山の噴火に怯えながらも、定住生活にて地に根ざした山野民。

同じ狩猟採集生活と言えどもその生活パターンは天と地ほど異なり、海洋民が海をたゆたい、丸太船でも海洋ネットワークとも言うべき広範な地域を住処としていたとすれば、山野民は基本定住にして生態系を重んじ、限られた地域を縄張りとして獲物を狩りすぎることを戒め、そうして小さい集落の中で比較的安定した生活を送っていたと推測される。

ところで、人類がいつから『神』という概念を内に抱くようになったのかは、『言語の発生』と同じく、現在では検証することが出来ない。

ただ想像するのならば、それは全世界に共通している太陽神信仰しかり、原初は自然に対する畏れから発生したであろうこと疑いなく、ならばこそ、まるで生活様式のこととなった日本列島の二種族にしても、太古において発生した原始宗教が、全く違う様式を呈していたこと、想像に難くない。

特に日本の古代宗教として無視できず、中世において道教密教と結びついて盛況を成したのは、プレートテクトニクスの申し子、地震大国にして温泉の宝庫を誇る日本列島で隊列を成す、『火山』の存在である。

有史以来にその活動が休止している山も多いとはいえ、歴史尺度を数万年の単位で見れば、現在でも霊峰として崇敬を集めている火山の多くが、天変地異と形容すべき大噴火を繰り返していたことは地層に黒く刻まれた火山灰の層が雄弁に物語る。

特に鹿児島島の鬼界カルデラにおいては、七三〇〇年前に世界最大級の噴火があり、これによって九州、四国地方は火山灰に埋もれ、生態系に大損害が生じた。そのため、それ以前から南九州に定住していた縄文人たちが移住を余儀なくされたことが、遺跡跡などから想像されている。

現在でも噴火に対して避難以外の手の打ちようのない無力な人類

が、太古においては尚更、予測もできない神々の気まぐれと畏れたに相違ない。

であればこそ、人類は火山に人格を与えて崇拜し、その癩癩かんしゃくとも言うべき怒りを抑えてもらわんと、あの手この手で交信を試みるほかには、自然の脅威に対抗する術がなかったのである。

それほど火山という存在は、太古から現代に至るまで、日本列島に住まう民にとって祈りを捧げずにはいられぬ重大な存在であることは、議論を待たないと信ずるものであり……ゆえに古事記において、せめて富士山への言及すらないことは、想像を絶すると言わざるを得ない。

古事記において、火山として崇拜されていたであろう山の存在は、記述の重要性からいっても日向の高千穂峰（鹿児島県と宮崎県の境）くらいしか見られず、かろうじて出雲神話に、これまた一万年前から大噴火を繰り返して火神岳ひのかみと崇められた伯耆大山ほうきだいせんが出てくるものの、なぜか古事記においては、その神話が省かれている。

その神話の内容は、自分の国が小さいことを憂いた出雲神が、北陸地方や朝鮮、遠くはウラジオストクから大地を引っ張ってきたという豪快な内容で、その際に縄を固定した杭が火神岳であるというものだが……この話、鵜呑みには出来なくとも、ウラジオストクの縄文後期の地層から出雲の黒曜石が発掘されたりと、当時の交流関係を推測する上でバカに出来ない真実を含んでいる。

おまけに土地が増えたという描写も、他国から奪ってきたわけではなくとも嘘ではないこと、豊葦原中国とよあしはらちゆうごくという古代の名称が、何よりの証拠として物語っている。

それを証明するには、「完新世の気候最温暖期」と「縄文海進」という二つの単語の説明が必要となる。

完新世の気候最温暖期とは文字通り、完新世にもっとも暖かかった時期のことで、これが現在より、七千年前から五千年前のことだった。北極付近では四度以上温暖化したと見られており、そのため北半球の氷床は融け、世界的に海水準が最上昇。その影響は日本に

も現れ、当時の海面は現在より三〜五メートルほど高かったと言われる。ちなみに、原因不明。

それが、縄文海進だ。

余談ながら、氷河期は文字通り氷河が形成された時代であり、二万年ほど前の海水準は百メートルも低かったと言われている。そのため、一万年前の間氷期（氷河期中休みのような時期）の始まりとともに徐々に海面は上昇し始め、その記憶が受け継がれて、ノアの方舟に代表される『大洪水』と呼ばれる神話が世界中に残ったのではないかと推測されている。

さて、現在より海面が高かったということは、徐々に現在の海水準に戻ったということであって、ここで唐突ながら、葦あしの説明に入る。

パスカルの有名な『人間は考える葦である』という言葉があるこの草は、河口や湿地に群生する植物である。年月を経れば木のように固くなる茎は、太古は笛として利用されたし、束ねて茅葺き屋根にしたり、紙が出来る前はパピルスとして利用されたりと、人類に深い関わりがある益草だ。

葦の原。

原、という言葉から想像されるのは、さうとう広い面積であろう。少なくとも猫の額ほどの土地を原とは呼ばないし、それを国の名前にするとしたら、相当立派な原でなければ釣り合わない。

そして日本という国は四方を海に囲まれた島国であり、平地は海に面しており、その平地も海拔は低く広がっている。

故に。

縄文海進があつたのなら、縄文海『退』がなければ現在の海水準には至らず、それが緩やかに進行すれば自然、葦が群生するにふさわしい広大な湿地が、沿岸に生じる。

さうして出来た『葦の原』こそが、太古の民が名付けた豊葦原中国の語源であろうし、海が退くことで新しく広大な土地が生じたからこそ、国土を引き寄せたなどという伝承が語り継がれたと、愚考

するのである。

以上が、国生み神話と呼ばれる出雲地方の伝承の合理的な説明であり……かように神話とは、現実の出来事を太古の民なりに理解しようとしみ出されたが故に、真実と想像を織り交ぜられて後世の人間を幻惑させるものの、それが言葉として残っている事には、『作り話』と無視することが出来ない『意味』も多分に含んでいる。

古事記において、大国主神の異称を複数挙げているが、その内の一つの名が、オオナムチ神であるというのも、古代を理解する上で含蓄がある名前だ。

オオナムチという言葉が、オオアナモチの訛ったものだとは仮定するならば……それに『大穴持』と意味を当てることは飛躍だろうか。そして、『大穴』と呼び、神と尊ばねばならなかった存在こそ、地上において巨大な穴を穿ち、時に怒り狂って大地を震わせ、炎と粉塵を吹き上げて空を黒く覆い尽くした火の山であり……つまり大穴持神とは、縄文の民が畏怖し、崇拜した火山の人格化、もしくはその代弁者に与えられた名前だった。

以上の事から察するに、出雲風土記によって残されたかの地の伝承の発起は縄文時代にまで遡ること間違いなく……その事が決定打となり、天孫族よりも出雲族の方が、その出自が古いことを物語っている。

つまり、すでにこの時点において、天津神を創造神とする日本神話の絶対性は崩れ、ともすれば縄文時代の覇権を握っていたのは出雲族ではないかとすら、想像できるのである。

なぜか。

それを語るにはいま少し、縄文から弥生に至る、紀元前後の古代史を紐解かねばならず、それによって権威ある学会によって描かれている現代の古代史教育は、轟音をたてて瓦解することになるのである。

か……のか……のか！

『のの姉！』

はっ？

目の前が、漆黒に埋まった。

あれ？ なんで？

私今まで、出雲にいたんじゃないの？

「器用な奴だな、稲田<sup>なだ</sup>姫。神寄<sup>かみより</sup>したまま眠って歩くとは」

「ある意味天才なんだけど、バカだね」

聞こえるのは空海女史と姫子の声で、その背後には広大な空間が広がっていて、いつの間にか茶吉尼<sup>だきに</sup>を地面に下ろしていて、

「到着しました？」

「「まだ」」

合唱された。

そか、深層心理にダイブし過ぎてて忘れてたよ。私今、根の国で出口探してたんじゃないかね。

周囲は、最初に落ちてきた場所よりも、遙かに広い空間らしかった。天井にも発光体があることから縦坑ではないことは分かるけれど、その光から察するに、天井は茶吉尼が余裕で暴られるほどに高い。今まで歩いてきたのと同じような通路の光が、外周に数十と軒を連ねていて、

「ハブだな」

空海女史が、端的に指摘した。

「あるいは、巨大な会議場とも考えられる。どちらにせよ、ここは根の国における交通の要といった場所だろう。それにしても、静か過ぎるのが気に掛かるが」

「普通なら、わんさかお迎えが出てきそうなのにな」

こら、姫子。残念そうに言わない。

「周辺一キ口徑に、敵影ありません」

「畏か？」

「畏？」

「今、この空間を爆破でもされたら、我々に逃げ道はないからな。だが、そうだとして、これだけの地下空洞をたかが四人を殺すために放棄するなど、愚の骨頂だが」

「御瑞姫四人を葬れるなら、逆に安い買い物かもよ？ 国津神にとつちや天敵なんだし、おまけに茶吉尼まであるし」

空海女史と姫子にとって、この静けさは異常だと感じとれるらしい。

「空間をスキャンしましたが、その可能性もありません……気になるとすれば、大軍が移動しているらしき振動を、検出しました」

明の指摘に、空気が固まる。

「大軍だと？ 規模は？」

「正確な数を割り出すには、微弱すぎます。ただし、遠ざかっています。西方に向けて」

「……正確な方角は分かるか？ 出来れば、その方角の先にある根国路之深痕の特定も頼む」

空海女史の、口調が強ばった。

姫子が珍しく、緊張に身を強ばらせる。

数秒、明が水晶球を叩く音だけが、広大な静寂の中に響きわたった。その硬質な音の羅列に喚起されて、耐えきれないほどの緊張が湧き上がってくる。

「出ました。第二二号痕です」

明の声でもたらされたのは、空海女史の舌打ちだった。

「奴ら、三年前を繰り返すつもりか」

根国路の深痕？ 第二二号痕？ 三年前？

「知流。全神力を解放して、最速で地上への出口を見つけ出せ。私だけでも地上に出て、神宮にこの事を伝えなければならぬ」

「現在、実行中です。脱出口を発見次第、霊符を地上に送付します」

「甕、稲田。場合によっては、お前たち二人はこのまま追撃に……」

いや、地上で迎撃体勢を整えた方が適策か。舞闘神事まで間がないこの時期に、よくも合わせてくれたものだ」

「まだ確定ではありません。情報が少なすぎます」

「いや、そうでなければこの静けさは説明できない。第一階層とはいえ、ここは敵地だ。」

だとして、奴ら、相当広い範囲に召集をかけていると見える」

空海女史の沈黙と同時に、茶吉尼が音もなく起動した。

「警告します」

明の言が、鋭く放たれる。

「第一から第五二三までの霊符、全消失。半径二キロ圏にて、包囲網が敷かれています」

瞬間、臨戦を悟った。

空海女史、姫子が神宝を構え、茶吉尼もまた、その左手に巨大な砲を出現させる。瞬後には空海女史の神宝から無数の符が射出され、それらは空中で爆せて花と咲き、地下に白光をまき散らした。

「なぜ気づけなかった!」

「畏です」

「結局、誘い込まれただけか……いや、敵の戦力を撃破する、格好の機会だと喜ばねばなるまいな」

「推定兵数、五百。こちらの素敵に気づき、進軍を開始します」

「甕、知流、稻田。総員神寄にて、臨戦!

神宝解放を承認!

全神、全霊をもって駆逐せよ!」

「了承!」

白光に照らされた大空洞の底で、姫子の身体が赤々と輝き始める。打ち鳴らされるは両手の鉄甲。白と黒の異形にして非対称な神宝は、これまでに数多くの敵を殴り倒してきたと豪語する、調伏の拳だ。

その傍らで、こちらに背中を向け、黒々とした霞を立ち上らせるのは、空海女史だ。柱のように見えた巨大な神宝は複雑な層状をなしていて、楔型に上方に広がった先端からは、雲母が剥かれるよう



に無数の符が生み出され、空海女史の右腕は、その柱の中に埋め込まれていた。

これが、彼女の、符を大量に作成していた技の正体だったらしい。つまり、符を生む神宝……筆を機械化したようなものだろうか。

「明、もう平気？」

私は、思わず背後を振り返ってしまう。

何を言わんかは、彼女も察したらしい。

「神に臨んで、私事は滅す。稲田姫のおかげで茶吉尼に障害が発生していますが、それはそちらも同じこと」

「ま、万全とは言えないわね、確かに」

すでに、私と明も、琥珀色の霞にて身を包み、神寄は成っている。しかし、ともに数時間前まで、生死を意識するほどの激闘を繰り広げた。肉体にその疲れと、痛みが残っていないといったら嘘になる。

「稲田姫、この地域の長荒神は分かるか？」

「長荒神って、なんです？」

空海女史の頬がひきつる。

「……私まだ、戦乙女知って一週間なんですけど」

「文妖を地上に置いてきたのは失敗だったか」

「文妖って、あの文車妖妃のことですよ？ いったい、どういう仕組みなんです？ ものすごい高レベルな紙細工っていうのは分かるんですけど……」

「簡単に言えば、勢理姫神社で管轄している古書倉に発生した、憑物神だ。その神に人形代を与えて人格を発生させ、膨大な古書の管理と検索を担わせた、人型自律繊維記憶入出力駆動屍鬼。

全国に張り巡らされた霊網を通じて常に膨大なデータベースと直結している、いわば究極の辞書だ。

おい、知流姫。そっちでは、この地域までカバーしていないのか？」

姫子をスルーするあたり、空海女史はよく分かっている。

「確か、両面宿難りょうめんすくくなだったと、記憶しています」

「そうか……厄介だな」

ええと、つまりその、両面なんたらっていうのが、この地方の中ボスっていう理解でいいんだらうか？

「前方を私、後方は知流姫が担当。」

稲田、甕の両名は左右に散り、こぼれた敵を各個撃破だ。

長荒神が出てくる前に、ケリをつけて離脱するぞ！」

### 第三帖 国史夢想く根の国の主か逆賊く 参

「来ます」

明の警告あかりと同時。

大空洞のど真ん中、互いの背を守るように十字隊列を組んでいた私たちは、穴から飛び出すようにして襲ってきた国津神の影を見る。「きもっ！」

五人が横に並べるほどの洞穴から吐き出されてきたのは、大百足の大群。隊列も何もなく、ただ先を争って次から次へとトコロテンみたいに、

『のの姉っ！』

「わあつてる！」

非常識な景色にシヨックを受けている場合じゃない。

すでに神寄かみより、臨戦態勢。握られた七星剣は振り上げられていて、いつでも迎撃、どんと来いつてなもんで。

「星光……砕激！」

一足先に、私の背中側で、叫び声と爆発が連続して起こっていた。振りかえって確認せずとも、それが姫子の迎撃であることは明白のっけから出し惜しみなし、ド派手に殲滅がモットーの姫子に負けじと、空海女史あけみの神宝と、明の茶吉尼だきにも吠えまくる。

既に上空に数百と整列していた呪符が、敵の突入を自動索敵、順番待ちをしていた行列のように、飛ぶ勢いで大百足の群を切り刻んでいく。

対して茶吉尼はといえば、こちらは説明するまでもない。

左腕に換装されたのは、散々私と姫子の鼓膜をいじめてくれた例の機関銃で、まるでモグラ叩きのように、洞穴から大百足が頭を出すな否や、問答無用でその頭部を撃砕、破片と体液をまき散らす。

正直、同僚たちがこれだけ頑張っていたら、私なんて見習いのように大人しく見学していても大丈夫なんじゃないかと思うけど、そ

うは問屋が卸してくれず。

三方向の迎撃があまりに激しければ、比較的物腰が柔らかそうな部分に戦力を集中させるのが戦術の常套……というより、私だって彼女たちと正面きって戦うのなんてゴメンで、実際に私の前に現れる敵の大半は、姫子や空海女史の攻撃から命辛々逃げてきたも同然であり、

「同情するけど！」

手加減なんて、してあげない。

腰の引けた（百足の腰つてどこか知らないけど）相手をなぶる趣味はないけれど、目の前の多脚甲殻生物が生理的に受け付けないモノである以上、私が七星剣を振り回すのは止められない。

なるべく見ないようにしながらも、それでも剣を左右に薙ぎ払うたびに、手応えと生々しい音と体液の臭いが私の五感に襲いかかる。

『神樹っ！』

耐えきれなかった。

私は乙女だ。

明治大正生まれの豪傑な女性ならともかくとして、台所の黒いあんちくしょうをスリッパで叩き潰すことすら難儀する花も恥らう十代の少女に、この生々しすぎる感触の数々は拷問に過ぎる。

『霊体にて、斬るわよ！』

『またですかっ！』

『どのみち、数が、多すぎる！』

一体敵は何匹いるのか。

前が倒されても躊躇せず、次から次へと大空洞に押し寄せてくる大百足たちは、前任者の死体を乗り越えても尚、その進軍を止めようとはせず。

いい加減、これ以上物体が増えると足の踏み場もなくなりそうな物量作戦を、一步も引かずに凌ぎ続ける方も規格外だけど……国津神とはいえ一応生物。闇雲に突貫するのは、日本のお家芸とは言っても下の下の作戦で、立場を無視すれば同情するに余りある。

故に、

『入り口を、塞ぐわよ!』

私は、前に攻めた。

標的は、洞穴から出てきたばかりの相手。その魂を斬ることで、その肉体を傷つけず、巨体をそのまま洞穴を塞ぐ栓とする。

これで六度目となれば、幽体で活動するのも慣れたもの。相手の肉体をすり抜ける不気味さはあるけれど、遙かに身軽な動きは私の想いをダイレクトに反映して、流れるような動きで大百足を、動けぬオブジェへと変えていく。

そうして、五分も経つただろうか。

戦略か、それとも戦術か。

ともかく、敵の攻撃の波は収まった。

残されたのは、大量の百足の死骸ばかりで、空海女史が作り上げた遺体処理呪符が、微少無臭な塵へと、かつての戦士たちを解体していく。

「嫌がらせだとしたら、上出来だな」

「これだけの数が集まると、さすがに酸欠とかが心配になりませんか?」

私のさりげない心配を、

「それが敵の狙いかもしれん」

空海女史はアツサリ肯定。

「否定してくださいよ!」

「興奮すると、酸素消費量が増えるぞ」

口の端が笑っているの、たぶん冗談なんだろう……「こっちはちつとも笑えない。」

「腹三分目つてところかね」

私の心配を無視して、能天気<sup>かみしろ</sup>に準備運動しているのは神代姫子。

「もうちよつと、動きに変化がほしかったかなあ」

「贅沢言うな。敵だつて必死だ」

空海女史がたしなめても、

「そりゃ、姉御が一番数稼いだからウハウハだろうけどさ。こつちは地道に殴ってるんだから、こつ、殴られ方にも工夫をして欲しいっていうか、なんというか」

「……そんなあんたに向かっていかなきゃならなかった、敵の方に同情するよ。」

「の、じゃなかった、稲田<sup>なだ</sup>姫は平気だった？」

「おかげさまで。かすり傷一つないわよ」

「一番安全だろうと、茶吉尼の足下に座らせておいた生身と結合して、私は姫子とは別の意味で、間接等の癒着具合を体操しながら確認中。」

「で、これから？」

「いまだ臨戦中の茶吉尼に何かのプログラムを打ち込みながら、明が空海女史を促す。」

「何か、発見したのか？」

「微弱な風の流れを感知……おそらく、通気抗と思われませう」

「……もしくは、出口の可能性か。最悪、こじ開けてでも、地上へ一報送らないとな」

「敵の二陣、三陣は退却しています。追撃すれば、罨<sup>おぼ</sup>が待ち受けている可能性もありますが」

「どのみち、前に進むしかあるまいよ。知流<sup>ちりゅう</sup>姫、そのデカ物、ここに置いていくわけにはいかんか？ 戦術的に、行軍速度が落ちるのは致命的なんだが……」

「そんな事をするくらいなら、いますぐこの天井をぶち抜きますか？」

「そしたらもれなく全員生き埋めじゃん！

「分かったわよ。主に甕<sup>みか</sup>姫が頑張って運ばばいいんでしょ！」

「先手を打って姫子に責任転嫁。」

「なぜわっち！ 稲田姫肉体休ませてたじゃん！」

「シヤラップ！ とにかく行くぞ、雌豚ども！」

符に拡声された姉御の声が、全身を物理的に震わせた。

雌豚……メスブタ……ぶた……と大空洞がいつまでも共鳴するほどの大音声。

反抗する意志すら砕かれた。

黙って茶吉尼が長持形態ながもちにトランスフォームする。

黙々と姫子と私が、それを担ぐ。

すでに姉御は走り始めている。

全力で。

それを追わねばならない。

全速で。

あらゆる理不尽がこの行軍に込められていたが、それに反旗を翻す蛮勇を、誰も持ち合わせてはいなかった。

迎撃は、ない。

ある意味、賢明な判断だと思う。

先ほどの乱痴気騒ぎから考えると耳が痛いほどの静寂の中、響きわたるのは四人の巫女の足音ばかり……正直、会話する余裕もないです。

空海女史は敵の迎撃を完全に無考慮して全力全開だし、それについていく私と姫子は茶吉尼なんていう大荷物を籠かきみたいに担いでいるんだから、そりゃ、御瑞姫みずきだって人間なもの、息も切れるさ。それでなくとも、私は百キロを数える大剣を背中に背負っているんだから、ハイリスクノーリターン。

「知流姫！　せめてこれ、車輪とか出ないの？」

「出ますよ」

「即答かよ！」

本気で腰が砕けそうになったわ！

「そういう重要なことは、最初に言え！」

さすがの姫子もキレ気味だけど、

「そういう重要なことは、最初に聞いて下さい」  
意にかえすような少女じゃないのが明クオリティ。

無音で水晶球が叩かれると、前説明なしにいきなり茶吉尼の下部から車輪が現れた……木製の。

ガタガタガタガタガタガタガタ……。

筆舌に尽くし難い騒音が足下に生まれた。

踏み固められているとは言え、土の道に段差がない道理がない。

その細かい段差にいちいち引っかけかかって、木の車輪は茶吉尼に地面の凹凸を忠実にトレースし、私と姫子の腕に押さえ難い振動をもたらした。

「ひ、ひびひびひびひびひびひ、引っ込めろ！」

「贅沢な人たちですね」

このままでは道路工事のお兄さんじゃないが、腕に変な後遺症が残ってしまうわ。

結局持ち上げて運んだ方が静かで楽だと分かって、かといって前より疲労は蓄積しているから、ただ単に疲れただけだった。

洞穴はほぼ一直線だが、微妙に高低差があつて、前も後ろも見通すことは出来ない。ジョギングより早いスピードで十分以上走つていれば、五キロ以上は進んでいるはずである。

出口への横道はおろか、敵の影すら見つけることが出来ない。

「臭うな」

そんな、停滞し始めた空気に、空海女史の呟きが穴を空けた。

急に速度を落とした彼女の足が、遂に立ち止まる。

「風でも香ったの？」

茶吉尼を地面におろして姫子、若干呼吸を荒げながら、一枚の符を直立させた空海女史に問う。

「知流姫、索敵だ」

耳を穿つような鋭い命令だった。

「酸素を求めていた肺が呼吸を一瞬忘れるほどの、緊迫を生んだ。汗すら乾く。」



私は無言で、七星剣の柄を掴んでいた。  
姫子ですら、真顔で両拳を握りしめ、ファイティングポーズを取  
る。

静止した時間の中、明の指だけが索敵を踊り、

「アクティブ、パッシブ、共に生体反応ありません」

「だがな、私の鼻は、曇らんぞ」

空海女史の姿勢が変わる。柱のごとき太さを誇る呪符発生神宝に  
右腕を差し込み、それを地面に突き刺す。

「稲田姫。貴様さつき面白い舞を踊っていたな。それをここで再現  
してみせる」

「ま、舞？ ですか？」

「肉体を離脱し、魂のみで神宝を操っていたらどう？ その技で、  
この通路を断ってみろ。ただし、全力でだ」

こちらに振り向いた空海女史のモノクルが、意味ありげに光を反  
射した。

「おまえ、いつまで剣に白い皮をだぶつかせている。

稲田姫の大剣と言えば、豪快だが鈍<sup>なまく</sup>らではないはずだ。

今更門外不出を謳っている場合ではあるまい。

なんなら、筆下ろししてやろうか？」

「あ、えと、別に門外不出というわけじゃないんですが……」

（どうするよ、神樹。今更ながらツツコマれてるけど）

（とはいえ、鞘を被せたままで、全力放出は無理っすから……誤魔  
化せる相手じゃ）

（ないわね）

（……物は試し、ですか）

（やるしか、ないってわけか。どうしたらいい？）

（前みたいは無茶にならないっすから、安心して下さい。こちらで  
調整しながら、少しずつ弁を空けていきます。の姉は自分の魂が  
膨らむのをイメージして、この通路いっぱい自分の存在を拡大し  
て下さい）

(……つまり、ちよろちよろと出てくるヤツカの魂を、私の魂で飲み込んでしまえ、と?)

(そんなイメージで。

喰い破られないようにだけ注意すれば、最終的にボクとの姉の二重の壁で、肉体サイズまでヤツカを押さえ込めるはずです)

深呼吸を、一つ。

「ちよつと、解放に時間がかかるんですけど、良いですか?」

「可能な限り、短くしろ」

「……努力します」

本気モードの空海女史に小細工は通用しない。

「知流姫、こちらのカミを解放するわ。気をつけて」

「……望むところです」

一瞬の緊張が伝わってきた。こちらの意図をくみ取って、静かながら明が闘志を燃やし始める。

前回の解放は事故とは言え、晴と明には多大なる迷惑を与えていた。あんな事件を、こんな狭い場所で起こしたくはない。

なにより、それでは、成長がなさすぎる。

あれから十日とは言え、七星剣との付き合いは十年だ。過去の持ち主は知らないけど、今生でもっともその扱いに長けているのが私であることを証明したい。

そうでなければ、御瑞姫になれない。

……いや、正直言つと、さっきの百足地獄で御瑞姫になる決意が少し折れたのだけど、でも結局それだけが、私の出生の謎に至るただ一つの正解だから。

七星剣を、正中に構えた。

深呼吸を、二つ。

見慣れた、純白の、着膨れな、鞞。

息を、止める。

刀身を凝視。

決意を、込めた。

(神樹、お願い)

(やります)

七星剣を包み込んでいた、不可視の枷が弾け飛んだ。

同時に呪符と呪布が球状に膨らみはじめ、私まで飲み込むと、直径三メートルほどの球となって安定、私の背景はすべて白に埋め尽くされ、両手には、初めてその全容を露わにした七星剣の鋼の地金が、黄金色の霞に覆われて煌めいている。

気合いを込めて両手を握り直して、私は私を離脱した。

繭のように周囲を包んでいる呪符の球に沿うように、かといって破れ目を作らぬように、急いで慎重に、全力で最短距離をとって自分の魂を拡張していく。

七星剣を包む霞が、微かに震えていた。恐らく神樹は、必死でヤツカの暴走と戦っているんだろう。

気は焦るけど抜かりなきよう、私の魂を目一杯まで広げて、チエツクは二回。よし、どこにも綻びはないわね。

(神樹、やっちゃって)

(い、いいいいいい、いきます)

白い繭の中、自分の肉体が握りしめる七星剣を、繭に沿った球体から全方向視点で見つめるこの不思議な感覚。

戒めから解放された七星剣は、鏢のない両刃で、柄と刃の境がない一発铸造様式の、古代剣の意匠だ。

巾広の刃は切っ先まで緩いRを描きながら、中央よりすこし先端方向の部分が、デザインなのだろう、半円状に挟れている。

黒鉄色の刀身に、映える黄金のラインが二本、外縁に沿うように刃上に刻まれていて、最も巾のある根本部分から柄へと至る造形は如雨露型。

私が両手で握っても余る長さの柄は、記紀で言うところの十握か、八握か。

最端部には根付を付けるような円環が取り付けられていて、円環の周囲は蛇がトグロを巻くように、金色の凸線が裝飾されている。

これが、真なる七星剣。

天津神が作り、国津神を平定するために地上に遣わしたと伝えられる、十種神宝の一つ。

その、太古の姿は失われているとは言え、存在そのものは魂という形で代々継承され、十種神宝の一柱、八握剣の魂は、その名も示すヤツカというカミが担って、今まさに、その御綾威が解き放たれようとしている。

『震えよ』

神樹という鞘を被ったままにも関わらず、ヤツカの声が、あの山中で聞いた台詞が、繭の中いっばいに広がった。

『弾けよ』

それは、あの日の再現だ。ヤツカの台詞に神樹の神力が震え、弾かれそうになりながらも、必死で刀身を覆い続けている。

(神樹、とつとと解放しちやいなさい)

(こいつ！ おとなしく、しろつての！)

神樹も必死だ。

彼女にとつても、これはリベンジ。

前回、有無も言えずに戒めをパージされたことに対する後悔と意地が、あの神樹を本気で抗がわせている。

『沸き立たせ』

更なる衝撃が、神樹を襲う。それは神樹の急膨張という形であり、風船のようにパンパンに膨れ上がった神樹の魂の中に、黄金の霞としてあるヤツカの魂が充填され、今にも神樹を破裂させん勢いで暴れ回る。

『燃え上がらせ』

だが、神樹は堪えた。

更なる光を得た神樹の魂は、徐々に膨れた己を萎ませていき、内部に充滿したヤツカの霞を、柄から搾り取るような動きで、螺旋状に切っ先へと追いつめていく。

『煮え立たせ』

度重なる波動にも負けず、神樹は完全にヤツカを押さえ込んでいた。すでに刀剣の八割は本来の外見を取り戻し、逆に追い込まれたヤツカの霞によって、先端部だけが異様なほど膨れ上がって破裂寸前の様相を呈している。

『己が身に流れる熱き血潮に従え』

私も、魂の強度をあげた。

来るべき衝撃さえ分かっていたら、対策を講じれば得られる良好な結果。七星剣の先端方向に若干厚めに魂を寄せ、その弾けの時に備えて緊張を練り続ける。

『その御魂、解放せよ！』

「「やれるもんなら、やってみろ！」」

神樹と私の咆哮が重なった。

同時に、極限まで丸々と膨れ上がっていた七星剣の先端、神樹の魂の一部が破裂。

高圧を得た水流のごとき勢いでヤツカの霞が放出され、繭の外壁、私の魂へと直撃する！

(くあっ！)

敏感な部分を刺激され、絶妙の感触が魂を貫いた。考えてみれば魂を内側から刺激されたのは初めてで、存外に理性をとるけさせるその感触は、当初の意気込みとは別の方向で、私のやる気を刺激する。

一度私の魂に突き刺さったヤツカの奔流は、しかし繭が破れぬことで行き場をなくし、跳ね返された後は散り散りの粒となって繭の中を飛び跳ねる。

七星剣の先端から迸る彼の熱意はいまだ衰えず、狭所に圧縮された霞はまばゆいばかりに白く輝きながら、本来なら清流のごとく空を駆けるその魂も、限られた発射口に殺到することで圧縮限界を迎えてゲル状と化し、

(あ、と、え、これって……)

最悪な想像を、思春期の妄想神経が生んだ。

(つまり、私と神樹の二人で、ヤツカを散々刺激して……発射?)

そしてぶち撒けられたヤツカの情熱は、私の中に拡散しつつもお熱く、それが魂の柔い部分を絶妙に刺激してくれるせいで、形容しきれない感覚のとりけが私の全身に広がっていくこの意味は、

(か・い・か・ん)

しかもそれは、徐々に繭の中、つまり私の魂を満たしていく。

私の魂の中はもう、あふれんばかりのヤツカでいっぱいいっぱいだ。

(え、これって、そのお、いわゆる情事における、中出してやつ?)

『ふう』

思った直後に、やたらと爽やかなヤツカの吐息が鼓膜に届く。

見れば七星剣の先端からの迸りはようやく終わっていて、神樹の魂が最後に残っていたヤツカの残魂を搾り取って排出させると、

『おおうつ!』

「変な声だすなつ!」

心からの怒りが叫びと化した。

同時に、私の魂が本来の肉体へと収束していき、それを迎えるように、神樹が私の肉体を覆っていく。

世界が、爆ぜた。

私と神樹に挟み込まれる形でヤツカの魂が押さえ込まれ、同時に防波堤の役目を果たしていた呪布と呪符による戒めが、一斉に解けたからだ。

大任を終えた封じの布符は、燃え尽きた灰のように空中に霧散していき、後には鋼の七星剣を構えた私だけが残される。

ヤツカの封印を見事成し終えた白き戒めに、心の中で敬礼っ！

「ほお、それが真なる姿か」

「てか、なんで稲田姫、やたら肌がツヤツヤしてるの？」

姫子のつつこみにあえて解説入れれば、肉体と魂の間に神樹とヤツカって言う二柱の神様の魂を挟んでいるから輝いているからであって、

「イカ臭い？」

なんて表現するかね、安倍家の女子中学生は！

「まあ、長年陽光も浴びず、風にも当たらない状態だったんだ。腐るという表現はどうかと思うが、異臭の一つや二つはおかしくあるまい」

珍しく、空海女史が味方に思えるよ。

「とにかくくだ、解放した意味を忘れてはおるまいな」

そうだった。

ヤツカを賢者にするために、外周の封印を解いたわけじゃなかったんだ。

（神樹、全力全開、フルスイング、いける？）

（出力調整はオツケーっす。トリガー、預けます）

（了解）

「危ないから、下がってください」

三人に警告して、十分に距離が開いたことを確認した私は、両足

を肩幅より広く開いて七星剣を下段に構える。

イメージするは、光の剣。

鋼の刀身から放たれる、魂の霊なる剣がどこまでも直進していく様を瞼の裏に描いて、

「暴発したら、ちゃんと避けてくださいよっ！」

両手で握った七星剣を、右方向に徐々に振り上げていき、右肩後ろ、上半身が捻れて、左の踵が浮き上がる位置でステイ。

「一閃っ！」

足、腰、胸、そして腕を捻ることによって蓄えた全身のバネを、一気に解放した。

右上から下って、左上へと切っ先が高速で円弧を描き、遠心力も得て百メートルほどの長さを得たヤツカの神力が、通路を斜めに両断して地下を深く抉っていく。

すべてのバネを解放しきった肉体は左側に捻れる格好でその勢いを止め、

「ナイスショット！」

その姿勢にふさわしい声援が、姫子から放たれた。

「どうだ、手応えは」

「うん、なんとというか……肉を切ったようなイメージが」

「肉？」

姫子の疑問は当然だ。

私だつて、ヤツカの神力を通して伝わってきたイメージに、違和感を拭いきれないんだから。

「いや、通常だったら、霊の手応えって、せいぜい蒟蒻程度で刃はサクッと通るんだけど……すごい違和感が」

「相手の大きさと、そこまでの距離は」

「それが、変なんですよね」

私は、神樹と心の中で分析、討議して、やっぱりその結論しかない、と納得した上で、固唾を飲んで見守っている空海女史たちへと答えを差し出す。



「この地下一体、刃が届く範囲すべて」

「は？」

「私も確証持てないんですが……なんせ相手はカミですから。すでにこの場所が、カミの体内である可能性があるわけです」

「ちよつと待て。それは無理があるだろう。たとえ相手が我々を畏にはめたのだとしても、だったらこの中で、その入り口に当たる部分を知覚し得た者はいるか？」

空海女史の問いに、応を唱える娘はいない。

誰もが同じ穴から落ちてきて、ほぼ一本道を突き進み、その間に誰一人として、目に見える景色に違和感など覚えなかったのだから。「でも、さ。たとえのの……じゃなかった、稲田姫の言うとおりだとしてもだよ？　ここが相手の体内なら、暴れたら私たちの勝ちじゃないやね？」

「しかし、今さっきの稲田姫の斬撃に、なんの応答もないぞ」

「人形の分析でも、この土壁に生命反応は認められません」

三人の瞳に不信が宿って向けられるけど、

「私だって、言われたとおりにはやっただけですから……そもそも、

勢里<sup>せり</sup>姫が言い出したことですよ？　臭<sup>せり</sup>うって」

「む。たしかにそうだが……じゃ、今度は麿<sup>せり</sup>姫、いつてみるか？」

「私に、殴る以外に能ないっすよ」

「貴様が無脳なのはよく分かってる」

「あれ？　なんか今、ニユアンス違う漢字が……」

「天井は危険だからな、横壁に穴を穿ってみせる。その後、知流姫の人形の砲撃で、その穴を更に掘る」

「姉……勢里姫、意地になってませんか？」

空海女史の眼力に、姫子屈服。

「んじゃ、みんな、ちよつと下がって」

軽くため息を付いて、姫子は左足を前にして右拳を引き、一瞬で臨戦を発した。

赤い霞がその身を覆い、瞳は真摯に壁に向く。

ゆつくりと前に伸ばした左手は、五指開いて壁に対し、グツと四股を踏んだ下半身は、更に重心を低くして、地面を抉って力を蓄える。

「瞬撃のお……」

右拳に螺旋の霞が収束し、鉄甲の表面装甲が、音を立てて開いて光を吐く。

「ファーストオオオオオ……」

直後、右拳が、爆発した。

装甲の開いた右鉄甲から強烈な神力が吹き出し、地面を抉った左つま先を軸に、姫子の身体がその場所で二転、三転、

「ブリットオオオオオオオ！」

回転に舞う彼女の長髪の美しさにみとれかけた私は、瞬間の閃光に網膜を灼かれた。

白く飛んだ視界の向こうで、力が土壁に激突する音が響き、それは時を待たずに爆風として全身を叩き……思わず楯にした七星剣に、瓦礫が強烈な速度でぶち当たっては砕けた。

周囲は砂埃に充滿され、息を吸うのも難しい。ただでさえ風がない場所でこんな粉塵まみれでは、

「貴様は、限度を、わきまえろ！」

空海女史と明が発動した符が、一時的な突風を生んで、周囲の砂煙を一掃した。

「心中する気かつ！」

「いやあ、全力でやれって言われたんで」

「照れるなっ！ 褒めとりやせんわ！」

埃まみれた姫子の鉄甲は、既に閉じて平常通り。そして彼女の隣には、奥が見通せないほどの人間大の横穴が、黒々とした口を見せて出現していた。

「人形、必要ありませんね」

「おまえは、なぜに、掘り進んだかな」

空海女史の半眼に、

「いやあ、出力に指向性持たせたら、意外に柔い土壌だったみたいで……」

すかさず明が探索用の符を飛ばして、水晶球にて調査を開始すれば、

「不自然ですね。奥行き五百メートル。これだけ横一直線に掘り進めば、何らかの地盤変化があっても良さそうですが……」

「それだけ、私の拳が鋭かったってことで！」

姫子が嬉しそうにサムズアップで騒いだが、明、ド無視。

「拳一撃でトンネルが出来るくらい、柔い地盤ですよ？　ここが地下何メートルか知りませんが、相当な土圧が掛かっているのは間違いないですね……もぐらやミミズやオケラが穴掘るのはわけが違います」

「オーケイ、分かった知流姫。で、結論は出ているのか？」

「非常識で良ければ」

そう言って、明は私たちと向き合う。

「この時空は、閉じられました」

### 第三帖 国史夢想く根の国の主か逆賊く 肆

安倍晴は、目の前の土木工事を、黙って観察する以外にすることが無かった。

高校のグラウンドに開いた大穴を急ピッチで埋める突貫工事を担当しているのは、一人と一体。

片や、高野空海が地上に残した、文車妖妃ふぐるまようひこと書物に宿ったカミである、文妖ふしよう。彼女は符を量産することにかけては御瑞姫にも劣らぬ性能を有しており、封印と耐水、耐圧、耐神力しんの祝いを重ね掛けした特殊封印符を大量生産することで、とりあえずの穴の封印を実施し、地下五メートルの部分に、紙製の蓋を貼り巡らして、根の国との断絶を完成させた。

今は工事の第二段階に発展しており、それを担当するがもう一人……高野空海の召喚に応じ、空中から滲み出るように現れた巫女、庚かのえの掃姫そうきこと、紀里姫神社の御瑞姫、伊奈羽鈴瞳いなはすずめだ。

彼女は、同じ御瑞姫である晴から見ても、この現代という常識に照らし併せて、あり得ない特技を、その神宝かんだからに有していた。

異次元管理である。

鈴瞳の持つ葉隠はぐくれという神宝は、現実の物体を異次元空間に取り込んで自由吐き出す能力を持っていて……現に今、晴の目の前で伊奈羽鈴瞳は、葉隠に取り込んで置いた生コンを、猛スピードで穴の中に注ぎ込んでいる。

中学生の晴から見たら、想像もつかない大人の一部としか感じられないのが、鈴瞳という女性の二十歳という年齢だが、  
「うち、なんでこんな不幸なんやろう」

重機を束にしたって出来ない仕事を一人でやってのける巫女は、愚痴がちだった。

「コンクリ強制凝固させたら、今度は盛土せなあかんやろ？ その上砂利敷いて、整地して……こんなん、普通に一晩で終わる仕事ち

やうやん。おまけに呼び出した本人は地下に潜ってるって、阿呆かい！」

愚痴を言いたいのも分かる。

晴には逆立ちしても出来ない仕事だ。

目の前で、あれだけの大穴が塞がっている光景を見せつけられながらも、まるで現実の話だとは思えず……まして同じ御瑞姫の仕業とは考えたくもなかった。

(六年後の自分でも、無理だ)

単純な戦闘能力ならともかくとして、御瑞姫としての格の違いを、晴はまざまざと感じさせられていた。

「ちゃんと見ときなさいよ、晴」

そう言っただけで彼女の頭に手を乗せるのは、母の芙由美で、

「あんだだっ、何かあったら、土木作業の指示くらい出さなきゃいけないんだから」

「それも御瑞姫の仕事だったの？」

「上に立つ者は、万能じゃなきゃ駄目なのよ」

基本戦乙女は、常識の外に生きている。

カミガミのテリトリーが山の中や地下洞穴など、人間の生活と重ならないように努めているのだから、基本、巫女の活動も、人間の生活とは重ならない。

晴は今まで、短いながらも御瑞姫として、そうして社会とは隔絶された舞台でばかり、舞っていた。両手の拳銃を振り回して。

その生きざまこそが御瑞姫と信じて疑わなかったし……単純に戦場での働きのみが、御瑞姫の優劣を決めるのだと確信していた、のだが。

「え？ 何？ 聞こえない！」

「あんなね。ここに来て母の助言を無視するか！」

突如両耳を塞いで大声を出し始めた娘に、母親の手刀が突っ込みとして入る。

「あたっ！ 違っつて。明！ 明が連絡してきてるの！」

「あ、明？」

涙目の娘の訴えに、母は得心する。魂を分けた双子である晴と明は、電波でも霊でもない、それこそ量子力学的としか説明のしようがない遠距離心話を可能とするからだ。

そう言われれば、空海女史が地下に潜ってから三時間が過ぎようとしているが、定期連絡が遅れていることにも気づく。

「閉じこめられたあ！？ どこに！ っていうか、どうやって助けるって言うのよ！ おい、おーい！」

「とりあえず、加流姫かるとひめに一通り託しました」

明の事務的な報告に、

「なあ、知流姫……わたしがどうして必死になって走っていたか、覚えているか？」

「出口を探していました」

「その前に、地上への連絡手段を探してたんだろが！」

空海女史の突っ込みはもつともだ。が、

「加流姫かるととの心話は、我が神社においても秘中の秘。あなたが今まで知らなかった事が、なにより門外不出だった証だと思えますが」

明の態度は変わらない。

確信犯というか……そもそも他人の意向など無関心というか。

「だったら、なぜ、今になってそれを明かした」

「緊急事態だからです」

明の言に迷いはない。

「両面宿儺りょうめんすくなという名を、もっと早くに意識するべきでした。

かのカミは、大和王朝黎明期に、飛驒地方に拠点を置いた国津神。その名が示すは、人間を背中合わせに貼り付けたような、顔が二つ、手足が四本ずつという異形と語り継がれています。考古学的には双子であったのではないかと考えられています。

しかし、現状を鑑みるに、それらの説は言い伝えに振り回された、虚像であつたとしか言えません。

両面宿儺。両面。その面が何を意味するかと言えば、今ではこう言うしかありません。

かくりよ　うつしよ  
幽世と現世。

かのカミは、背中合わせの両面世界に、同時に存在できる希有な存在だったのでしよう。その存在を許されるために、恐らく距離的な制約があるとは言え、両世界に干渉する能力があると考えれば……現状の推測になります」

「……つまり、お前は……ここが両面宿儺の腹の中だと言いたいのか？」

「いえ、そうではなく……ここは既に、幽世なのです。分かりやすく言えば、まるで風船をひっくり返したかのごとく、私たちは周囲の洞穴ごと、幽世に幽閉されたかと」

空海女史が、私と姫子を交互に見た。「信じられるか？」と、その瞳が珍しく、疑問を浮かべて同意を求めている。

「剣は……その可能性を肯定しています。長らく現世にすぎたために、幽世の感触を忘れていたと」

「こつちは意見なし。たとえそうだとして、問題はどつやって脱出するかって事だし」

「今は、それを地上に託した段階です。何らかの手段が、文献に残されていることを祈るのみですが」

明の声に、珍しく感情が乗った。

不安という、隠しきれない……姉への不信感が。

「んじゃ、偵察行こつか、のののん」

「ふえ、は？ あ、おん？」

いきなりの姫子の無茶振りに、訳も分からず手を差し伸べられて、掴んでしまった私がいる。

「どこに行く気だ？」

「いや、ジツとしてるのって苦手だし。あかりんの推測が正しいん

なら、どこまでが相手の有効距離だか、計ってみよっかなって」

「……お前には、体力温存という言葉がないのか」

「マグロは泳ぎ続けてないと死んじゃうんだよ」

私は出できれば休ませてほしい。

「んじゃ、ののんは後ろをよろしく。私は前だけを見据えて進んでいくぜっ！」

私の意向を全部無視して、姫子は勝手に全速力で走って行きやがった。

「……まあ、ボチボチ、行つてきます」

「ん、まあ、付き合つてやれ」

そういつて空海女史が差し出してきた一枚の符を受け取って、

「なんです？」

「カーナビみたいなもんだ」

本当、なんでもありだな、この人。

感謝を返して、私は姫子と反対方向へ。

自分の来た道を引き返すというのは、気持ち的には抵抗があるんだけど、考えてみれば考古学なんて、ドゥプリと振り返る行為だよなあ、と改めて考えた。

（え〜と、神樹？ ヤツカ？）

今やむき出しの鋼となつた七星剣を背負つて、その慣れない感触に語りかけた私の声に、これまた聞き慣れない、ドスの利いたの太い男の返事が来る。

（なんだ？ というか、汝は誰だ？）

最初はもの凄い高圧的で、とても言葉が通じる存在じゃないと思つていただけ、さっきの解放で何かが変わつたのか、今のヤツカはその辺にいそうな、気難しいオッサンレベルの威圧感しか感じない（えつと、そつちはヤツカでオツケー？ 私は月見里野乃華……というか、この場合は言葉を改めた方がいいのかな）

ちよつと待つてと前置きして、私は契約の言霊を頭の中で結んでいく。



「其の大御剣に鎮まりし、八握劔命の宇豆の御前に、恐み恐み申す。常磐に堅磐に守り幸はへ奉り給ふ御綾威を、崇め奉り、謝び奉る、稲田の屋代の姫たる我が名、月見里が長子、野乃華と申す。今し、御前に願ひ奉るは、神道を誠の道と戴き持ちて、各も各も持ち分くる職務の随に勤み励み、一向に平和しき世を作らんがため、

夜の守日の守に、共に魂ぢはひ給わんこと、聞こし召せと、恐み恐み申す」

（しかと、汝が事上げ、聞き及んだ）

（無上の感謝を。）

で、型通りの儀式を済ませたところで、質問、いいかな？）

（分かることしか答えぬぞ）

（あなたを葦原中国に天降らせたのは、饒速日命？ にぎはやひのみこと それとも、天之日矛？ あめのひこ）

（……待て、それは汝が生まれる遙か昔の出来事ぞ）

（だから、よ。というか、この名前に心当たりがあるってことは…

…あなたは本当に、渡来したの？ 出雲に？）

（……野乃華よ、汝は、何を知らうとしている）

（事実を。ただ、事実のみを。太古において何があつたのか、今と繋がっている歴史と言つ名の糸をただ、素直にたぐらんが我が願ひ）  
長い、沈黙が生まれた。

まあ、相手にとつても、想定外の質問だったに違いない。

私だつて、他に聞くことがたくさんあるって分かつてる。

神樹という鞘こそ消えていないものの、それでも鋼の刀身をさらけ出した七星剣に何が出来るのか。

この現状を共に考察し、少しでも現状打破のために動けることがないのかを探ったり。

姫子じゃないけど、七星剣特有の必殺技なり特別な使い方があるのなら確認しておかなきゃいけないし、そうでなくても、先代までの稲田姫の御瑞姫の情報くらい、聞いておいてしかるべきなのだ。

なのに。

私はその全てをすっ飛ばして、彼の起源に迫った。

十種の神宝。

十種神宝。

天璽瑞宝十種。

『先代旧事本紀』によれば、邇邇芸尊ににぎのみこととは異なる天津神である、饒速日命にぎはやひが天降った時に皇祖から授けられた神宝であり、十種全てを揃えることで死者をも蘇らせるという逸品でありながら……現物は存在せずと公表され、何よりその出自が謎に包まれた、眉唾モノな一品でもある。

何より、天津神から地上に遣わされたというその由緒が、やばい。私も、珠恵たちに御瑞姫について教えてもらってから調べたのだけど、天津神と言え、平たく言ってしまうえば天皇家の祖だ。天皇が天子である依り所であり、太古であれば政と祭を執り行う大前提でもあったはずの、要するにスーパーパトロン。

天照大御神から地上の統治を任された、邇邇芸尊の直系という後ろ盾があるからこそその天皇家の権力なわけで、となれば普通、天津神との直通パイプは天皇家が独占したがるもの。

でありながら、饒速日命は邇邇芸尊とは別ルートで地上に降り立ち、その子孫は初代・神武天皇が大和へ東征するより早く、時の豪族と共同で大和地方を治めていたとすら伝わる。

結果的には、饒速日命の子孫の裏切りもあって、初代・神武天皇からなる日本の統治がスタートし、饒速日命の子孫は神宝と一緒に天皇の配下に加わって、天下太平に尽くし、物部氏という太古の有力血筋を残すのだけ……この伝承、記紀ではサラリと流されたりして、ましてや十種の神宝が、三種の神器と並ばれて語られることなんて、無い。

本当なら、そんな伝承がわざわざ残っていること自体不思議なんだけど、それを言い出したら記紀なんて矛盾だらけで信用に足らないって事になってしまう。

そして、その神器を、もう一つややこしくしている神が、もう一柱。

その名が、あめのひばし天之日矛。

ただし、こっちは出自がもう少しハッキリしていて、韓国から嫁さんを追って日本海を渡って出雲に上陸した神。

それだけならまだしも、この神、荒ぶる日本海を渡りきった秘策として、八種の玉津寶たまつたからなんてものを持ち込んできたからややこしい。その八種の玉津寶と十種の神宝のうち、奥津鏡と辺津鏡の二つの神宝が、もろ被りしているからだ。

一覧にすると、こう！

十種神宝

玉津寶

生玉いくたま

珠（名称不明）

足玉たるたま

珠（名称不明）

蛇比礼おろちひれ

浪振る領巾なみひれ

蜂比礼はちひ

浪切る領巾

品物比礼くまぐまのもの

風振る領巾

八握劍やつかのつるぎ

風切る領巾

沖津鏡おきつかがみ

奥津鏡

辺津鏡へつかがみ

邊津鏡

まかるかえしのたま  
死返玉

ちかえしのたま  
道返玉

もうこうなつてくると、オカルト系の妄想はスパークしちゃって、二人は同一人物で天皇家は韓国発で、高天原は韓国で、みたいな暴論になったりしそうだけど、とりあえず、今は関係ない。

十種の神宝は、そういう具合に、胡散臭いのだ。

大体、私の七星剣はまだ剣という形態をしているから、十種の神宝の一つの八握剣だって同定できるけど……明の人形や姫子の鉄甲、空海女史の筆もどきになると、本当に十種の神宝と関連があるのかすら疑わしい。

ま、信じる者は救われるって事で、愚直に迷わず、お上の言っていることを鵜呑みにして疑問にも思わないのが、本来の日本人のあり方なんだろうけど。

私、高天原の娘、らしいからなあ。

十種の神宝の真相は確かに気になるし解き明かしたいけど、今一番知りたいのは、高天原が実在するのか否か、その一点だ。

だから、ヤツカが本当に饒速日命と一緒に来たのなら、高天原は実在したって言う得難い証言をゲットできるわけだし、もし天之日矛が主だったのなら、それがどうして十種神宝になったのか、その経緯が激しく気になるわけ。(.....)

.....)  
目に見えるほど長い沈黙がって、さすがに長いわっ！

(あの、ヤツカ？ 答えにくい質問だったら、ハッキリ言ってくれ



旨で)

(人間？ 汝が？ それはおかしいだろう。だったら、そもそも肉体に宿っていた魂は、どこに消えたと言うんだ？)

(へ？)

(人間とは、魂が宿ってこそその靈<sup>ひと</sup>処である。我らカミは、魂の存在であるからこそ、現世では儚い。特に祭事<sup>まつりごと</sup>に干渉しようものなら、器が必要不可欠だ。ゆえの巫女であり、神降ろしの儀式による神託がありうるのだが……汝のように日毎夜毎に肉体を支配するとなれば、当然、本来の魂は弾かれることとなる……滅したのか？)

呆然となった。

ヤツカの言うことは、正論だ。

けれど、私は私として一六年、欠く事なき記憶の連続を有している。産道を通り抜けた記憶こそないけれど、私は最初から、この身体を受肉して生まれてきたっていう確信をもって生きてきた。

え？ 高天原の魂ってそういうもの？

じゃ、母さんは、それを承知で私を今まで育ててきたの？ 本来赤ん坊に宿っていた魂を蹴飛ばして、得体の知れない魂がお腹の中に宿っていたって？

記憶に、ない。

あるわけがない。

だって私が魂の秘密を知ったのはこの夏のこと、それまで、なんの違和感もなかったのに……。

(ちよつと待った。その質問には沈黙で応えるわ。で、私の魂のこゝとを皇の血を引くって言ったけど……それってつまり、皇祖のカミの系譜に連なるって意味？)

(……なにやら、深い事情がありそうだな。天孫、饒速日命が地上で神隠れされ、その弟たる邇邇尊が遣わされて後、この葦原中国に天照の血を引く者は降臨していないと聞いていたが……)

(ちよつと待った！ じゃ、やっぱりヤツカは、饒速日命が天照大御神から戴いた十種神宝で間違いないのね！ 古事記じゃなく、先

代旧事本紀の天孫降臨の方が、真実だったって事なんだ……)

(真実かどうかはどうであれ、本来地上を治めるべき饒速日命が志を遂げぬままにお隠れあそばされた事は、高天原の意に沿わぬ凶事であったからな。当時はまだ出雲王朝が恭順しておらぬ国乱の時であつたため、その死が隠匿されておつたとしても、不可思議ではあるまい)

(ヤツカ、今、サラリととんでもないこと言つたわよ。

出雲王朝って、実在したの？ というか、じゃ、日本は昔から大和王朝だけに統治されてきたっていう記紀の言い分はどうなるのよ？)

(汝は不思議なことを言うな。国を興すということとは、幾多の小国を平らげ、大国同士が雌雄を決することでしか成し得まいに。

最初に大国を興したのは、確かに出雲国だったがな、やはり鉄剣の威力にはあらがいきれんかつたよ。

天孫が鉄器という利器をもって天下を平けたのは、時代の流れ、自明のことであつたと言えよう)

「ちよ、ちよちよちよ、ちよっと！」

思わず声が出てしまった。

なんてことを言い出すかな、こいつは。

誰もが疑問に思いつつも、学会に睨まれて公言できなかつた事を、平然と言つてのけやがった。

(その天孫って、もしかして、筑紫に都を築いたりしてない?)

(そりゃ、そうだろう。そもそも、海士族は対馬が本拠地だったからな。当時は新羅や百済との領土争いも盛んであつたし、漢や魏との交流もあつたから、狭い対馬ではなく、対岸の筑紫に都を築くのは、当然の話である?)

ヤツカの言い分が、いちいち正論で困る。

当時の文化水準から言つたら、日本が中国の恩恵を受けていないわけがない。

だとして、いまだ航海技術の発展してない時代。日本海を無事に

渡るだけでも事なのに、わざわざ九州に上陸してから、瀬戸内海を経由して大和まで、なんていう労力を強いる理由なんて、ないのだ。中国から一番近い九州で、たとえば飯であったとしても、接待したほうが理に叶っている。現に後の時代では、北九州を対中国の玄関口として、接待のための街を作っている。

なのに、本居宣長（もとおりのりなが）（当時誰も見向きしていなかった古事記を半生かけて解読し、未だにそのオタク度合いでは並ぶものがない、古代史オタの元祖というか教祖というか、もはや神）を始めとした国学者は、大和天皇家こそが日本で唯一の王朝であると信じて疑うこととせず、世界のあらゆる古代王朝が、河口もしくは海に面した交通の要所に成立しつつ、文明の成長に伴って、戦争という政治交渉に対応するために、内陸部や丘の上という戦いやすい場所へと都市を移動させていったという歴史の必然を、全く無視している。

いや、宣長翁は、さすがに別格だ。

彼は確かに、大和王朝こそを唯一の国主と盲信してこそいたけれど、魏志倭人伝を始めとする古書の記述にも着目し、邪馬台国が九州北部にあったことを、既に江戸時代中期に喝破していたのだから。しかも宣長翁は、邪馬台国が大和王朝とは別の系統であることから、見抜いていた。

彼は卑弥呼という女王が九州にいたことを認めつつ、彼女はあくまで、大和王朝とは別の意図で、勝手に中国と交流していたのだと読み取っていたのだから。

宣長翁が歴史家としても別格なのは、その研究に私心を盛大に投入しながらも（人生全部費やしたとも言う）、自身の説にそぐわない記述を隠蔽しなかった、その学問への真摯すぎる姿勢にある。

ま、真摯レベルが天を突き抜けて、『古事記最高！』『古事記こそ真実！ 異論は認めねえ！』っていう、盲信を超越した五体倒置も辞さない信仰を公言してはばからなかった人らしかっただけだ。邪馬台国と卑弥呼を九州に設定したのも、そうじゃないと整合性が取れない上、古事記に卑弥呼の記述がないことの説明が出来な



つたから、らしいし。

歴史というものが、勝者によって都合よく紡がれるものであるということとは、今更強調するまでもない。

たった六十年前の太平洋戦争ですら、日本に対する間違った歴史認識が蔓延しているのが現状なのだ。

太古であれば尚更、文字として歴史を残す能力を持っていた数少ない学者たちが、自分たちの権力を盤石にするために筆をふるっても、決して、自分たちが非を犯したことを声高に歴史書の中に書き付けることなど、公にはするはずがない。

日本で最古の書物と言われている古事記と日本書紀にしても、実際それよりも前に文字媒体での記録物が存在していないはずがなく、現に書物は残っていないけれど、書名だけは伝わっている。

何が言いたいかというと、世の中には、漢字が輸入されて古事記が成立するまで、日本に成文文化はなかったと主張されていることだ。

確かに、沖縄やアイヌ圏など、中世まで狩猟中心生活を送っていた文化圏では、文字が成立せずに口頭伝承がすべて、という地域もある（沖縄はその後、日本語を文字ごと輸入した）。

けれど、中国で紀元前の歴史が残っているにも関わらず、国際的交流を持っていた日本に八世紀まで文字が伝わらなかったというのは、設定的に無理がありすぎる。

だからと言って、すぐに神代文字に飛びつくわけにもいかないのだけだ。

竹内文書、つえつふみ上記、ほつまつたえ秀真伝、えとせとら。

神代文字と伝えられる書物は数あれど、それらは現在、歴史家に偽書として扱われている。

まあ、内容も去ることながら、それらが話題になったのが江戸時代からで、残っている現物も、比較的新しいものだったというのが、ねつ造説、つまり偽書と決めつけられた理由。

信者側は信者側で、古書を長期間保存するのは技術的に困難で、

写本による継承の結果として、時代的に新しい写本しか残っていないのは当然、と主張。

おまけに飛鳥時代以降の漢字流入によって、神代文字の使用が禁止されたために、朝廷に近い地域の神代文字書物は没収、もしくは廃棄されて、時代が江戸に下るまで、地方でヒソリと保存されるしか生き残る道がなかった、と。

その点、宣長翁は、神代文字など存在しなかった、と一刀両断。根拠は、古語拾遺っていう古文献に、漢字以前の文字はなかったって明言されていたから。

ま、その弟子を自称する平田篤胤ひらたあつたねは、研究に研究を重ねた結果、これならアリじゃね？ っていう神代文字を選別したりもしたけれど……現実問題として、それらの文字は日常的に継承されていない。ま、もし神代文字が存在して、その文字で記述された古い書物があったとしても、古事記もしくは日本書紀を編纂した朝廷にとって都合の悪い過去の記録は、破棄、焚書された可能性は、ないわけじゃない。

南米文明の貴重な書物を全焼しやがった宣教師のような悪例は、ごまんと歴史に残っているわけだし。

それはさておき、朝廷に古文書を破棄しなければならなかった理由があったとすれば、その王権委譲が、正当な手続きでなかった場合だ。

自分たちの行いを正当化するために、歴史書を新たに作り、過去の記録を抹消する。

そうして歴史がねつ造される事は、何も太古だけの特権ではない。現に日本でも、今現在、邪馬台国が筑紫に存在していたことを認める学術書は、発行されていない。邪馬台国どころか、出雲に王朝があったことすら、歴史家は公の場で認めていないのが実状で、二千年という長い時を経てまだ、天皇家が隠匿し続けた王権算奪劇の封印は、頑なに守られている。

にも関わらず、在野の民間伝承や、古い神社の縁起をよくよく調

べれば、縄文時代から弥生時代にかけての各王朝の力関係などが見えてきて、隅々まで情報統制が行き届いていないところが、抜けているというか、懐が広いというか、とにかく、面白い。

その最たるものが、出雲の神在月の伝承で、どうして日本中の神様が十月に出雲に集まるのか、その納得のいく理由を、古事記だけでは見つけれない。

それどころか、天照大御神のルーツとすら言われている対馬の阿麻<sup>ま</sup>？留明神ですら、十月には出雲へ参詣していたことが伝承に残されていて、本当の太古には、天照大御神が、出雲神・大国主神の部下だったらしいことが、見えてくるのだ。

かつては、文字通りの、国の主であった大国主神。

その彼が治めていた出雲という国は、石器文明華やかなりし縄文時代において、良質の黒曜石を産出することで、その基礎を確かなものにしたと、推測されている。

その、出雲産の黒曜石が、遠くウラジオストックにも輸出されていたらしいというのだから、今から二千年以上昔の人たちの冒険心には頭が下がる。

丸太船一つで大洋を駆け巡り、日本式縄文土器に似た物が南米で発掘されたりするのが、古代史のスケールなのだ。

(ねえ、海士族って、昔は出雲のために働いていたりした?)

(そうだったかもしれん。対馬の海士族は、もともとが漂流民ばかりだったからの。それでも、船を操ることにかけては、どの民にも負けぬ腕前を誇っておった。出雲どもがその勢力を拡大できたのも、海士族の海運がなければ、成り立たなかったかもしれん)

だからこそ、私は、クリティカルな質問を繰り出す。

(それが、大国主神に反旗を翻して、下克上を達成した原動力?)  
(……少し、違つかの。

もともと、海士族が対馬に本拠地を置いたのは、そこが船をもつてしか辿り着けぬ島だったからだ。

人の住める土地は限られており、彼らはそれまで住み馴染んでお

つた地を、火の神の怒りで失った。それゆえ、対馬に逃げ延びたのじゃ。

大陸から、青銅や鉄の技術が伝わってきたときに、彼らが対馬に住んでいたことは、不幸中の幸いと言うか、神の采配というか、とにかく、偶然ではあったが必然的な出来事じゃったのだろう。

それまでの生活を一変させる金属の登場は、同時に米という、貯蔵可能な食物の、大規模集中生産を可能にさせよった。

水稻生産を可能にするには、高度な土木技術が必要不可欠じゃったからな。畦を作り、水路を整備し、倉を建て……稲を生産するための専門的技術集団集落、村の形成が必要不可欠じゃった。

海士族が窓口を担当し、筑紫において本格的な村の経営を始めつつ、他地方への鉄器の輸出と大陸人の移住を制限したのは、慧眼じゃったと言える)

(あれ？ 青銅器はそういえば、関西地方にも広まっているもんね。銅鐸とか有名だし、銅鏡も発掘されているし)

確か出雲地方でも、何百本という単位で、銅剣が出土して、歴史家の度肝を抜いていたはずだ。

(それだけ、鉄という金属が、海士族には魅力的じゃったのだ。なにせ、青銅など問題にならぬ強度を誇っておるからの。

おまけに、食料の備蓄に成功し、順調に人口を増やす目処がたっておった。

大陸にて、鉄の生産過多で森林が壊滅し、難民が流れ込んできておったのも、一助を担っておったかもしれん)

(……そして、機を見て饒速日命に部下をつけて、関西へと降臨させた……)

(まあ、そのまま饒速日命が使命を全うできておれば、また流れも変わったかも知れぬが、死んでしまったの。

天照大御神も奇襲作戦が失敗して、さすがに気落ちしたらしい。

部下を大国主神のもとに派遣して、内部からの懐柔を画策したのじやが……)

(ことごとく、部下が丸め込まれたのよね、確か)

古事記でも、二度、天照大御神は部下を出雲に派遣して、ことごとく、大国主神に寝返らされている。

(まあ、結局業を煮やして、たけみかずち建御雷神、あめのとりふね天鳥船神を大将にして、攻めかかったわけがな。我らも饒速日命の忘れ形見として、裏方として暗躍してなあ。

大国主神こそ、老齢だったために見逃したが、その息子の一人を海戦で打ち倒して、もう一人を諏訪まで放逐して、王権委譲を完遂したわけじゃ……)

(……ふつう、それってクーデターって言うよね？ 少なくとも、国譲りなんていう悠長なもんじゃないわ)

(昔は、みんなやっておった事じゃろ?)

そりゃ、戦争にルールなんてないからなあ、今だって。昔なんてもつとえぐいことしていただろうし。

(つまり、そうやって出雲王朝が滅んで、筑紫王朝が生まれたと?)

……そりゃ、大国主神から見たら、呪わずにはいられないわね、天津神を。かつては部下だったわけだし)

(たとえ主従の関係だったとしても、出雲と筑紫では距離が離れすぎておる。

それに大本を考えれば、海士族が独占しようとしていた鉄器を、出雲朝が許してくれなんだのが原因での。

当時はまだ圧倒的な戦力差があったからな、大国主神が本気で筑紫を攻め込んできたら、ひとたまりも無かつたらうて)

(そうなの?)

(出雲の方が力があつたから従っておつた。民も増え、武器を手に入れたから、攻めていった。単純な話じゃろ)

(うん、簡単な話なのは良いんだけどさ)

私は、拭いようのない違和感を、ヤツカの話から感じていた。

(結局、高天原って、どこなの?)

(なんじゃい、藪から棒に。

汝は、天孫降臨の事情を知りたかつたのではなかつたのか？)

(いや、そうなんだけど。ヤツカの今の話だと、対馬に住んでいた海士族の人が、筑紫の地で繁栄して、出雲朝を手中にしたっていうことでしょ？ それって、別に、神様いらないんじゃないんじゃん？)

(汝に最初に言ったであろう。)

高天原の魂は、単独では現世に影響できぬ故、巫女に一時的にその身を借りることで、地上の政に干渉してきた、と。

つまり、天照大御神にせよ、饒速日命にせよ、邇邇芸尊にせよ、我ら十種神宝にせよ、巫女という憑依対象がおって初めて、この地で活動できるのじゃ。

大国主神たち国津神にしたって、もともとは出雲の山神であつたり、彼らの祖霊の力を借りての王朝維持であつたからの。

言い方を変えれば、人の身を借りての、高天原と葦原中国の間での、全面戦争が出雲攻略戦であつたわけじゃ)

(じゃ、国津神を全部根の国に追いやつたっていうのも)

(事実じゃ。人間に力を貸し、天津神に仇なす神はすべて、地下へと封じた。その際には須佐之男命の力も借りたがな)

ここにきて、いきなり須佐之男命の名前まで出てくるし！

(じゃ、ここには、須佐之男命と大国主神の、二柱の神が、いるんだ、やつぱり)

(ま、須佐之男命はさすがに残念がっておつたがの。もともとは奴の土地であつた出雲を武力制圧されたとあつて、心中穏やかでなかつたであろうに、よく堪えたもんじゃて)

(でも、須佐之男命は、天照大御神の弟なんでしょ？ そりゃ、大国主神のお父さんでもあるんだから、心中複雑だつたと思うけど…  
…もともと、天津神じゃないの？)

(須佐之男命は、根っからの国津神じゃぞ？ 名前からして、須佐の男なんじゃから、国の名を冠した土地神であることは、当たり前じゃろうが)

えっと？

なんか、すごく重大な案件を、またまたサラリと流された気がしますよ？

だって須佐之男命って、伊邪那岐命いざなから、天照大御神と月読命と一緒に生まれた、三貴士の一人じゃないの？

そりゃ、高天原で悪さして、天の岩戸事件を引き起こした張本人で、永久追放もされたけど、その後で出雲の八俣大蛇を討伐して、天叢雲あまのむらくもを天上に差し出したりもして……って、そもそも、それがおかしいんだ。

さっきの話で、大国主神は、石と木と土の時代であった、縄文時代の統治者だつてことがハッキリしたわけで……須佐之男命は、そのお父さんに当たる神じゃないか。

片や天照大御神は、水稻農業の守護神、太陽を司る農耕神として長く信仰を得てきたわけで……当然、水稻農業の方が、縄文時代より、遅い。

えっと、じゃ、つまり……古事記も日本書紀も、須佐之男命が自分たちの神より、もっと古い神様だつて知っていた上で、わざと嘘をぶち上げたつて事？

須佐之男命を天照大御神の弟に仕立て上げて、自分たちの出雲侵攻を、いかにも姉が弟の領地を譲り受けた、みたいに印象づけるために？

ああ、でも、なんか、分かる気がするわ。

全く同じ事を、時代は奈良時代以降まで下るけど、仏教もやったからなあ。

仏教の卑怯なところは、仏様が一番偉いことを印象づけるために、日本の神様たちを、「仏の卵だ」っていう大嘘をこいた事だ。

日本の神様すら、まだ仏になるために修行している段階に過ぎず、だから天照大御神よりも阿弥陀如来の方が実力が上だ、なんて根拠もないのに広めたものだから、一人の仏様がいろんな神様の芸名を得ることになっちゃって、神仏習合といえれば聞こえが良いけど、もともとのルーツが全然別なんだから、無茶設定にもほどがある。

つまり、太古の筑紫王朝も、まったく同じ嘘をついたわけなの？  
須佐之男命を天照大御神の弟にすることで、天照大御神の神格を  
一段上に棚上げしたと？

……せじつ。

理屈は分かるけどさ、なんというか、こすい手だよなあ。

なんて、思っていた矢先に、

「きゃあ！」

ポインッ！

日常ではあり得ない柔らかかオノマトペを高らかに、何かが私とゴ  
ツツンコ。

私の顔は、その柔らかな二つの山に埋もれるような格好で、あれ  
？ この匂い……

「姫子?!」

「のののん?!」

「あんた、何やってんのよ、こんな所まで戻ってきて」

「のののんこそ、いつの間に先回りしたわけ？ それとも、寂しく  
なって追いかけてきたとか？」

現実に引き戻された私は、姫子の胸元から顔を引っこ抜くと、自  
分の前方と後方の通路を交互に眺め、

「私は、まっすぐ来たただけだよ」

「私だって、一直線にがむしやらに突進してきたよ？」

と、いうことは、

「完全に、球体の中に閉じこめられてるってことか」

「まさしく、神技だね」

私は空海女史から貰ったナビ符を確認する。直線距離にして五百  
メートル、スタート地点から離れている。しかし、体感で1キロメ  
ートル以上歩いているわけで、

「姫子、あなたずっと走ってた？」

「YES！」

だとしたら、私の三倍は距離を稼いでいるだろうから……単純計



算で4キロメートル強の通路が円上に走っているわけか。

『勢理姫、こちら、麿姫と合流しました』

『霊話を試みる。』

『報告ご苦労。こちらでも把握している。大雑把に言って、直径二キロ強といった空間と見て良いな』

繋がった。

『そちら、搜索中に異常はあったか？』

『ずっと妄想にふけていたなんて言えない。』

『姫子、何か見つけた？』

『んにゃ。ずっと同じ通路だったっしょ？』

『綻びなどは、見当たりませんでした』

『だろうな。こちらも今、馬鹿が殴り開けた洞窟を精査しているが、現世に繋がりそうなヒントはまだ見つかっていない。用心しながら戻ってきてくれ』

私は了解の返事とともに霊話を切断すると、姫子にその旨を伝えようと思い、ふと、彼女の胸元に注目した。

その巨乳が、何かを私に想起させたのだ。

つい最近、同じような事があったような、そんなデジャブを覚えて、

「あー！」

思い出した。

「ん？ どしたん？」

「ちよつと、その胸、借りてもいい？」

「エロい事に使うんならオツケ。まじめな意味なら却下」

相手が馬鹿なのを言い訳に、私の身体は問答無用で傾き始めていた。

『幽世だったら、魂の方が搜索に向いているよね』

私の肉体が姫子の無駄に放漫な乳房に埋もれていくのを眼下にしながら、魂にて抜き出た私は、この世界の本当の境界を知りに行く。『相変わらず、思いつき優先っすね』

背には神樹と、

『だから、補佐が要るのだろう』  
ヤツカが揃って貼り付いている。

『ここではヤツカの方が専門家よね？ 霊剣らしく、何か都合の良い直感とか働かない？』

『儂、葦原中国育ちだからなあ』  
使えない奴め。

歴代の御瑞姫をさんざん振り回してきたっていう依佐利いさりの評を信じる限り、相当なワガママなんだろうが……解放時の演劇がかった台詞と今のオツサン口調、いったいどっちが地なんだろうか？ それともあつちは荒霊あらいたまで、こっちが和霊にぎたまなんだろうか。

とにかく、目的は正確な空間半径の調査なので、外へ外へと動いていくことにする。

『ところで、あんまり良く分かっていないんだけどさ、現世と幽世の違いって、この世とあの世みたいなもんだと思っただけいいわけ？』

『あの世というのが、死後の世界という意味で使っているなら、否だ。』

死者が赴くべきは黄泉比良坂であり、黄泉の国だからなあ。ま、それも出雲の地での伝承だが』

『あれ？ そうか。ん？ 根の国と黄泉の国って別物？』

『根の国が死者の国じゃなかったのは、実際に見た通りっすよ。根の国は、国津神を地下に封じ込めた、神の牢屋みたいなものですか』

ああ、そうか。ここでも記紀の嘘が出てくるのか。

記紀では、大国主神を根の国に押し込んだときに、『死者の魂を管理する王』という名目が使われる。

でも実際は、政争に負けた前王朝の主を、地下へ幽閉したってだけの話なわけで。

『だとして、わっかんないな。』

だったら、幽世って何？ 根の国でも黄泉の国でもないってこと

？』

『幽世は、魂の世界だ。いずれ魂が行き着く場所とも言える。現世とは重なってもいるが、隔絶もしている。世界の裏側だと言っても良い』

『山中がカミでうるさいのは、山では現世と幽世が重なって存在しているからつす。逆に平地では、限られた場所にしか幽世が現出していませんから、カミが出やすい場所とそうでない場所が生まれるわけつす』

『霊脈っていうのも、関係しているわけ？』

『霊脈は、言ってみれば幽世から幽世への回廊みたいなものだ。幽世を俯瞰して見る事が可能ならば、それは瘤と瘤を細い線で繋いだ、網の目のような世界だと言えるだろう』

『幽世は、魂の再生産の場所でもあるつす。年月を経た魂は、最終的に己と他を隔てる境界が融解して、純粹な命ちとなつて、幽世で全と一つになるつすから。だから、幽世は命ちで満ちた世界だとも言えるつすね』

『命ちつて、何？それが魂の原材料だつてこと？』

『そもそも魂とは、命ちが詰かめまった瓶かめみたいなものだ。命ちが密集して皮となり、その内部を命ちが満ちし、一個の固まりとして現世に出ていける状態こそを、魂と呼ぶ』

『ま、本来なら出ていけない現世に、存在するための皮つすよね。ただ無理している分、どうしても徐々に、皮が薄くなつていつてしまつて、せいぜい百年しか保たないつすが』

……それが、寿命つてことね。

あれ、じゃ、カミつて何？

純粹な命ちのみだつたら、周囲にとけ込んじやつて、個別認識できないんじゃないの？

『皮が溶けて消えると言つても、人間世界の尺度の話ではないからな。それこそ、数百年の単位で、徐々に境界が希薄になつていくもんでな。』

カミというのは、そういった希薄な皮の魂たちが、惹かれ合って一つの意志のようなものを生じた融合意志体じゃ。

幽世でも命の濃い場所と薄い場所が存在し、カミとはそういう濃い場所で、たまたま溶け残っていた皮が、お互いに補完しあいながら魂を形作っておる。

ま、その際、どうしても魂の合う合わないがあるからな、波動の似たもの同士が集まることで、まるで特定の性格を保っているように振る舞うが、逆に言えばもともと魂が持っていた性質を、ある性格は強め合い、ある性格は薄まって、そうやって日々、特定の方向へ濃く行っているがためじゃな』

『じゃ、強引に話を戻すけど……この場所にずっといたら、私たちの魂も溶かされて、命<sup>ち</sup>つてもものと同化しちゃったりする？』

『安心しろ。その前に肉体が維持できなくなつて、餓死する』  
なにをどう安心しろというのか。

ま、一日二日でどうかなる場所じゃないってことか。胃酸の中に放り込まれたんならともかく。

それにしても、なかなか見えないな、境界。垂直に上ってきていると言つても、指標となるものがないから正確な距離が分からないけど、それでも百メートル以上は上昇しているはず。

土をすり抜けるように移動しているから、当然周囲は真っ暗で……そついや、地下水とか全然感じないよね。根の国らしい神工物にも出くわさないし。

もう少し、進んでみるか。どうせ、他に出来ることなんてないわけだし。



### 第三帖 国史夢想く根の国の主か逆賊く 伍

安倍晴は思った。

(私、なんでこんな事してんの?)

時は午後八時過ぎ。それが日曜日ともなれば、月曜日から始まる日常のために、皆自宅でくつろいでいるであろう時間帯に、

「ほら、駄々こねんな! とつとと行くぞ!」

十歳の少女のツインテールの右側を引っ掴んで、誘拐紛いの強制召還。

「痛い痛い痛いっ! 今夜はあたしの大河ドラマデビューなんだぞ! あと五分で出番なんだぞ! リアルタイムで拝ませろ!

馬鹿!」

「あゝ、はいはい。すごいすごい。ブログにや適当に書き込んでいてやるから気にすんな」

「炎上させる気かあ!」

目的の少女は東京のアパートで一人、生意気にも手料理を夕食にして、テレビの前で正座待機していたところを発見した。

さかほこ えりん  
逆鉾慧凜。十歳。

現役の巫女でありながら、チャイドルコンテストで入賞して以来、子供向けファッション雑誌やテレビ番組などで知名度をあげ、ついに大河ドラマの子役デビューまで成し遂げた現役売れっ子チャイドルであり、御瑞姫は小学四年生。最年少。

あどけなさしか感じない丸い顔に、クリクリと丸い無駄に大きな瞳が保護欲喚起の切り札で、くせつ毛をあえて生かしたワイルドヘアに、爆発しているように広がったツインテールが、一部の大きなお兄さんたちには大評判だと風の噂で聞いたことがある。

今のうちに年の近い数人とユニットを組んで歌手でもさせたら、数年で武道館狙えるんじゃないかと思うほどのポテンシャルを、無駄に秘めた幼女だ。

でも、本業御瑞姫。

実家の神社の経営がやばいからと始めたアイドル業が、逆に生活を圧迫し始めていたりするけど、それでも御瑞姫。

現役で十人しかいない、妖怪退治のスペシャリスト。というか、現場の最強責任者。

故に、神宮の召還は絶対命令であり、拒否権は存在しない。

正直、同情は、する。

生まれた時から、ほぼ御瑞姫に選ばれることが確定している安倍家と異なり、慧凜の場合は特殊な事情から御瑞姫に選ばれているからだ。

御瑞姫は、世襲ではない。

しかし、魂の性質は遺伝するものであり、神社の格や、神宝の性能などによって、ほぼ世襲が伝統になっている家もある。

具体的に言えば、神宝を研究しつくすことで、科学技術による性能向上を日常としている安倍家の晴と明あかり。加流姫神社と知流姫神社ちる。ちなみに神社が二社なのは、神宝は一社に一柱という厳格な掟があるからだ。

（まったく、自分の家を二つに分けてまで神宝独占って、どんだけ強欲なんだか、ご先祖）

次に、中世から退魔士として名を馳せ、里全体が退魔の家系である中で、特殊な血を継承している鸕みか姫神社、神代家の姫子。

（退魔御四家で近親交配しまくって、血を極限まで濃くしたっていう噂があるからな、あそこ。競争馬でも、んな事しねえぞ）

神宮に最も近い地位に位置し、神代の時代から符術を体系化して、国中の古文書という古文書を収集。神代文字の研究機関などを運営する、実質的な戦乙女と御瑞姫の指導者となっている、勢理せり姫神社、高野家の空海あけみ。

（……一姫鬪千いっぎとうせんを文字通り実行するからなあ、姉御。千姫斬りを達成したとかっていう、桃色の噂も名高いけど）

そして古来より弓道の聖地と呼ばれ、山中にて修行場を有してい

る楯姫神社たてひめの那須家も、強制力はないものの、ほぼ、世襲を貫いている名家である。

(那須家の佳紅矢かくや、同年代だけど見たことないんだよねえ。有象無象の区別なく、容赦しないズドン系って話だけ)

以上五家。

逆に言えば、御瑞姫の世襲がなっているのは、十人という定員中、半分だ。

そして慧凜の逆鉾家と言えば……これまで一度も御瑞姫を輩出したことがないばかりか、戦乙女として戦場に立つ巫女すらいない、完全な事務方の家系だと聞いている。

(そもそも、神宝が特殊なんだよね)

慧凜が神宝に選ばれ、御瑞姫となったのは、行き倒れになっていた猫神様を拾ったのが縁だと言うのだ。

本来、どの神宝も各神社にて厳重に管理され、敵対カミが現れたとなれば浄化に駆り出される物だ。

それが慧凜の持つ神宝の場合は、神宝を守る猫神が気まぐれで各地を巡るといって、特殊な性格をしている。

そのため、それまで縁もゆかりもなかった慧凜が、突如として御瑞姫などという責任のある地位へ、指名されてしまったのだ。それも小学生という若さで。

(あ、でも。稲田いなだ姫神社の野乃華も、一般人なんだよな)

それもつい先日までアルバイト扱いで、正式な巫女ですらない。

他九人が、お家の事情で神道に精通しているのに比べたら、異例中の異例とも言える大抜擢である。

(けど……私を黙らせて、茶吉ぢきち尼まで投げやがった)

七星剣という、十種神宝中で最も戦闘能力の名高い舞具を継承したとは言え、二週間足らずで御瑞姫二人と対峙して負け知らずといふのは、ルーキーズラックなんて言葉では誤魔化せない。

(なんか、裏があんのかねえ)

晴の記憶の中にある野乃華の戦闘スタイルは、アマチュアとして



は強いほう、という印象だ。

だが、彼女はそれから一週間ちよつとで、明に本気を引き出させる舞闘を披露した。符の向こう側で行われた舞を見ることは出来なかったが、音から聞く印象では、序盤は圧倒的に明と茶吉尼が優勢だったにも関わらず。

（そっぴや、私、魂斬られたんだっけ？）

その当たりがヒントになるのだろうか。

どちらにしろ、明を地下から助け出せば分かる話だ。

鈴瞳の指示にしたがって、慧凜のツインテールを引っ張っているのも、とどのつまり、妹の救出に必要なだからである。

その、右手の先の慧凜。

（こいつ、まともに小学校行けるのかな）

御瑞姫でアイドル。とても両立できるものでない稼業を掛け持って、それまで妖怪の存在すら知らなかった少女に与えられたのは、持ち上げることすら困難な大鎚だと聞いている。

力任せのパワーファイター。地面ごとカミを抉って吹っ飛ばす、ブン回し系巫女。

オンラインアクションゲームに例えれば、破壊力のある攻撃で敵も味方も葬むランナ、ど迷惑なキャラクター特性と言えよう。

それもこれも、神宝の守護神である猫神があつての御利益らしいのだが、

（ま、いいか）

「うらっ！」

晴は容赦なく慧凜を持ち上げると、

「ほらよっ！」

アパートの壁に黒々と開いた穴に、勢い良く少女を投げ込んだ。

『鈴姉、一姫確保〜』

『ご苦労はん。あとはこつちで貰うよって、今度は佳紅矢はん頼むわ』

慧凜をマルツと飲み込んで、一瞬で口を閉じた黒穴の隣に、今度

は無音で別の黒穴が開く。

「本当、何してんだろな、私。日曜日に」

思い、穴を潜ろうとした背後から、テレビの音が聞こえてくる。

(あ、電気代もつたいねえな)

振り向いた晴は、その液晶テレビの中に、今さっきぶん投げたばかりの少女の姿を目撃した。

「これ……戦災で焼け出された乞食の役じゃね？」

自慢のくせつ毛は、火事で焼け出された縮れ毛として処理されて哀愁を誘い、一人、爆笑の渦に見舞われた。

おまけに、台詞もなかった。

登山口から延々三時間は歩かなければ辿り着けぬ頂に、たてひめ楯姫神社は建立されている。

別名を矢宵神社とも呼ばれるそこは、宝物の一つに那須与一の縁の品を数える、弓の神を奉る社だ。

周囲を複数の峰で囲まれた神域の所々には、的石や射場が設けられ、かつては修験の場としても名を馳せたことがあり、今では中学校の弓道部の聖地として、知る者だけが知っている穴場として、一部に有名だった。

故に、その宮には宿泊施設が併設され、更にその名を誇りとすべきは、山の恵みとして温泉が、湧き出ていることである。

温泉地であるから選ばれたのか、それともかつての巫女が衝動に駆られて山を射抜いたら温泉に当たったのか、伝承は黙して開山の祖を語らない。

しかし他の神社と比して、修行施設としての側面を前面に押し出しているという点で、楯姫神社は現役戦乙女たちにとって、やがて御瑞姫へ至る過程として、憧れの地となっている。

その、崇高にして高名な神社の宮司である那須射綱なす いづなは、両手にシヤンプーとリンスを握りしめて、一の鳥居にて待機していた。

周囲に明かりはない。

時折獣の動く音が、微かに空気を震わせるかどうかという闇の中。射綱は、全神経を両耳に集中させていた。

向かう先は、母屋と離れ。

母屋では今、彼の妻が、大河ドラマに夢中になっているはずだ。

好きなドラマを見るためならば、事前にトイレを済ませて、飲み物と菓子類を完全装備でテレビに向かうのが、彼女の常の姿勢である。故に、この時間帯に彼女がテレビの前から離れることはあり得ないのだが、それでも射綱の目的を察知すれば、どんな行動を起こすか想像に難くなく、警戒をしておくに越したことはない。

同時に、離れに向けられているアンテナは、どんな些細な音も聞き逃すなど、澄んで澄んで澄みきっていた。

楯姫神社の離れ……その方向には、那須家の誇る露天風呂が設置されている。

そして今、その露天風呂では、彼の一人娘である佳紅矢かくやが、脱衣の後、入浴する手筈になっていた。

射綱の両手に握られているシャンプーとリンスは、今から五分前に、その露天風呂に忍び込んで失敬してきた、娘のお気に入り品々である。

神社の娘で、巫女であるという条件を差し引いても、佳紅矢の髪は、長い。

それはまだ、幼さの残る小学一年生の時だ。射綱に髪質の美しさを褒められた彼女は全身で喜びを表し、

「じゃ、かぐや、ずっと髪の毛のばすの〜」

それ以来、彼女は整えるために鋏を入れることはあっても、極端に髪を短くすることを止めた。

今では腰を越えて、最近とみに丸みを帯びてきたお尻にまで達しており、それでいて素直な髪質は、しっとり艶を含んで、スラリとした直線で彼女の後ろ姿を彩っている。

故に、その美しさを保つために、彼女はシャンプーとリンスには

特に心を砕いていた。実際には母親の教育の賜なのだが、新商品が発売されるたびに試用し、里の美容院に通っては情報を仕入れ、時には卵白を使うことも辞さぬほどの熱意で、その長髪は保たれている。

故に、射綱の両手に今、シャンプーとリンスは握られていた。

嫌がらせではない。

愛ゆえに。

愛ゆえに、射綱は、娘の愛用のシャンプーとリンスを握りしめて、母屋の外で待機しているのだ。

那須佳紅矢、中学一年生、一三歳。御瑞姫。

思春期を迎え、大人の階段に足をかけたかどうか、という少女は、一般的な中学生女子の例に漏れず、第二次性徴期を迎えて……その内側から輝くほどの若さは、射綱のハートを真正面から撃ち抜いた。誤解が生じるであろうから特記するが、射綱は決して、ロリコンなどではない。

それどころか、女といえば妻しか知らぬ一穴動物。昨今にしては珍しいほどの堅物である。

当然、その命の灯火が消えるまで、女は妻一人だけと心に誓っていたし、今更家族を裏切つてまで、外の女性に心を割くことなど、考えにも及ばなかった。

そんな父のハートを、あろうことか娘が射抜いたのだ。

もつとも動揺したのは、射綱だった。

元々父親に懐いていた佳紅矢ではあったが、射綱はどちらかといえばこれまで、厳格な父を演じていたつもりであり、佳紅矢のことを当然ながら、娘としか見てはいなかった。

娘としてかわいいと、女としてかわいいでは、心の動きがまるで違う。

心を奪われるという体験に免疫のない射綱は、年甲斐などという言葉どころか、父親という立場すらかなぐり捨てていた。

理性では、道徳的に問題があることを、自覚している。

感情では、障害が大きいほど愛情が燃え上がると、興奮していた。なるほど、古代の人々が、近親相姦を厳しく戒めたのには訳があったのだ……大っぴらに認められたら、ハマって抜け出せなくなる。かくして射綱は、スタートダッシュの体勢で、全力待機を己に強いていた。

佳紅矢のヘルプに駆けつけるために。

ぶっちゃんけ、娘がシャンプーとリンスを求める声を上げるのを期待して。

合法的に、道義的に正しい目的で、少女の入浴現場に踏み込むために！

が、

「きゃああああああああああああああああああ！」

何の前触れもなく静まり返った山中の空気を切り割いたのは、娘の本気の悲鳴だった！

「な、なにながあった！」

「なにながあったの！ 佳紅矢！」

あろうことが、大河ドラマに集中しているはずの妻まで庭に飛び出してくる！

（しまったああああああ！）

射綱は瞬時にシャンプーとリンスを袖筒の中に隠したが、それは同時に、娘の入浴現場に単独で踏み込む、週に一度のチャンスをおいにしたことを意味する。

（などと、言っている場合ではない！）

娘がピンチだ。

裸で（たぶん）ピンチだ。

駆けつけねば。

全力で。

妻より早く！！

庭を一直線に駆け抜ける。

「んな！ なんてあなたが外に？」

止める間を与えない。

誰よりも早く。

とにかく一番に露天風呂に。

そうすれば、まだ、佳紅矢は、全裸だ！

「佳紅矢！」

が、全力で地面を蹴る射綱の隣を、神速で駆け抜けていった黒い影がある。

その影は四足と背骨をバネに庭を跳ね、闇に紛れる体躯から伸びる豊かで長い尾でバランスをとりながら、軽々と射綱を追い越していった。

「くっ！ ヤッフサ！」

それは、那須家に仕える大神だ。おおかみ

元々はこの山を統べる獣であったが、若い折に射綱に屈し、佳紅矢が生まれてからは専属のボディガードとしてあらゆる脅威から娘を守らせてきた。

その、獣が駆ける。

駆け抜ける。

射綱を置いて。

裸の佳紅矢の元へと。

「ぬおおおお、負けるかあああ！」

最初から目的は不純だが、しかし娘の悲鳴がただならぬものであるのは確か。

背後からは弓と矢筒を背負った妻の足音も聞こえて来ており、

(なぜ、気づけなかった?)

邪な心を抱いていたとは言え、ここは神域で、決戒も施されている。

霊体と実体をスイッチするヤッフサでさえその侵入を察知できなかったとあれば、相手はただ者ではない。

「佳紅矢！」 「佳紅矢ちゃん！」

そして、父と母がほぼ同時に脱衣所に飛び込み、

「待て！ 俺も連れて行け！」

一足早く現場にたどり着いていたヤツフサの叫びが闇夜に轟いた瞬間。

「佳紅矢っ！」

射綱たちが目撃したのは、裸の佳紅矢とその巫女服を脇に抱えた中学生巫女の姿であり、

「あゝ、ちよと一大事なんで。御瑞姫、借りてきますね」

彼女は、空いている方の手の平でシユタツと挨拶を飛ばすと、そのまま片足を突っ込んでいた黒穴の中へ、ヤツフサと共に消えていったのだった。

「てて様々。それは……かか様の愛用シャンプーですよ」

愛娘のか細い声が、最後に修羅場の開幕を告げていった。

素っ裸の佳紅矢を抱えて、晴が金成木高等学校のグラウンドに戻つてくると、すでに鈴瞳すずめの工程は、生コンの強制乾燥に突入していて、空中には投入予定の捨て土砂が今か今かと山のように待機していた。

「仕事はええな」

大人の本気に戦慄を覚えるも、

「せめて服着させて」

脇に抱いた佳紅矢の泣きに我に戻る。

全裸の中学一年生女子は、解放されるや瞬く間に巫女装束を身に纏って半泣きで、強引についてきた大神にすがりついて警戒態勢。

今宵この時、全日本的にごくごく普通の日曜日の宵時に、勢ぞろいで十人の御瑞姫のうち、沖縄と北海道を除く八人が、地方神社である稲田姫神社区域に集結した。

内四人は、地下に閉じこめられて。

地上の一人は、いまだ傷が完治せず。

地上のもう一人は、校庭に空いた大穴を埋めるために虚空から土砂をやけくそ気味にぶちまけながら。

「さて」

と、この異様な時間でただ一つ、感情も理性もコントロール可能な人形代たる文妖ふようが、理由も動機も説明も釈明もなく拉致されてきた御瑞姫二人に、恭しくも頭を垂れて、

「うるるかむ　とう　でいす　くれいじい　たいむ！」

晴に背中から撃たれた。

「意味不明なことすんなや」

「場を和ませようとしたのですが、これ弁明」

胸元にポツカリと穴が空いたのも数秒。上から紙片をペタツと貼りつければ傷も癒え、文妖は一同に向き直る。

「では、作戦の説明を」

持ち上げた左手を、ビシツと空中に叩きつけて。

「百々山の百科事典こと、稲田姫の眼鏡巫女、叶かなえ様から」

「は？ 私？」

いきなりのご指名にカツと頬を染める叶に、

「こういう説明事には適任かと判断します、つまりこれ、省エネ」

「手抜きかよ！」

晴の突っ込みに無反応で応じる文妖だが、問答無用で拉致されてきた二人の少女の緊張をほぐすには至らない。

むしろ、

「ヤツフサ」

佳紅矢の手には鳴弓射狩禍めいきゅうしかるがが。

「トラジマ」

慧凜の掌には、虎猫型の手乗りぬいぐるみが現れて、

「いい加減真面目にやらんと圧死させんぞ、慧凜が！」

甲高い幼声で吠えた。

大神オオカミたるヤツフサも眼光鋭く文妖たちを睨み付け、御瑞姫二人の



戦意が一気に、場の空気を凍らせる。

「太く大きなため息一つ、停滞しそうな気をかき混ぜて、叶が一步を踏み出した。」

背後の大穴を一度見て、振り返った叶は深々と一礼して、

「お初にお目にかかります。」

照姫、かのと辛の慧凜様。

楯姫、みずのと癸の佳紅矢様。

私は稲田姫神社に仕える叶と申します。

さて、背後の大穴を見ていただければ一目瞭然、現状この区域は根の国との接続切断作業が進行中です。

現刻より三時間前に、稲田姫と知流姫が根国路へと落下。勢理姫と甕姫が救出に向かいましたが、通信が途絶えました。

幸い、四名の無事は確認できましたが、現在彼女たちは国津神・りよつめんすくな両面宿難の罠に陥り、かくりよ幽世へと隔離されています。

お二人をこの地へお招きしたのは、四人の救出作戦に、御瑞姫のお力がどうしても必要だからです」

「まあ、作戦は単純なだけどさ。現状、向こうの位置がサッパリ掴めてないのが問題なんだわ」

説明を受けたのは晴だった。

「私と明は双子だから、何とか相手の無事は感じられる。けどそれを、現実の座標に落とし込むのが無理でさ。現状、四人の正確な幽閉位置を探るために、五里霧中ってわけ」

「なにそれ。じゃ、慧凜たちは、姉御たちの尻拭いに呼ばれたわけ？　こんな時間に？」

小学生巫女が憤る。

「御瑞姫四人も欠いたら、戦力半減だろ？　救出は最優先じゃん？」

「揃いも揃って間抜けすぎ。殺されたんならともかく、幽閉って、どっただけ油断してたんだよって感じ」

「とにかく、彼女たちの座標を確定しだい、作戦に移行します。」

詳細はこの符に込めて起きましたので、お手数ですが魂たまに挿入さしいれ

て下さい」

そう、叶が二枚の符を取り出した、瞬間だった。

「え？」

眼鏡巫女の動きが突如固まる。

微動だにしないかと思つた直後に、その表情が驚愕に歪み、

「何やってんのよ、馬鹿！」

あなた、自分の危機が分かつてんの！

幽世と現世に魂と肉体が分かれたら、もう二度と戻れなくなる  
ことくらい、小学生でも理解できるでしょうが！

とつとと戻れ！ このどたわけ！！」

本気の罵倒が全力で迸った。

唐突なご乱心に、晴をはじめとした巫女たちはただ、呆然とする  
しかない。

「失礼。」

現時刻を持つて、問題はすべてクリアされました。

これより、救出作戦を、開始します」

姿勢を整え、宣言する叶の表情は、晴れ晴れとした笑顔を湛えて  
いる。

境界は、アツサリと突破できた。

幽世と現世を隔てる膜は、七星剣でパツクリと斬り裂いて。

「なんかもつと、こう、緊迫感？ みたいな？ 抵抗の一つくらい  
あつてしかるべきだと思つていただけ？」

そうして地下から地上へ抜け出た私の視界は、夜の森に占められ  
ている。

星明かりしか見えない。

かといつて私、叶みたいに無駄知識蓄えてないから、星の位置から現在座標を逆算するなんてこと出来ないし。

「神樹<sup>みき</sup>、ヤツカ、現在位置分かる？」

聞いても無駄だと分かっていたけど……やっぱり無駄な問いかけだった。

仕方なく、最大出力で、霊話を試みることにする。

体感的には、地下を十数キロは移動した気がしている。今まで、せいぜい数キロ程度の霊話しか試したことがないから、果たして最大出力でも、叶に届くかどうか不安だったけど、

「あ、叶？」

案ずるより生むが易し。

拍子抜けするほどスナリと、私と叶のホットラインは繋がって、「何やってんのよ、馬鹿！」

「あんだ、自分の危機が分かってんの！」

幽世と現世に魂と肉体が分かれたら、もう二度と戻れなくなるくらい、小学生でも理解できるでしょうが！

とつと戻れ！ このどたわけ！！」

本気で罵倒された。

思いつきり罵られた。

何で？ 何なの？ 私、何か悪いことした？

心配しているだろうなって思っで一報入れただけなのに……号泣するぞ、この野郎。

『まあ、相手の言うことも一理あるっすけどね』

と神樹。

『確かに今、幽世と現世の境界を強固に閉じられれば、お主は肉体との接点を永遠に失う羽目になるな』

ヤツカも叶の味方して。

「ふん、もう、いいいいよ。戻ればいいんでしょ！ 戻れば！

みんなして、私をバカにしてさ。良かれと思って地上に出たのにさー」

本当、この世には私だけの味方っていないのかしらん。

思うけれど、ここで我を押し通すほど手の施しようがない馬鹿でもないから、私は泣く泣く幽世へ戻ることにした。

ま、結局肉体は閉じこめられたままだからさ、魂だけ現世に戻っても仕方がないんだけど。

で、ベソかきながら空海女史たちのところまで戻ってみれば、

「でかした！ 野乃華！」

思いっきり誉められた。

てか、空海さん、私の本名呼んでますが？

「晴とのラインを確保しました。あとは、準備が整えば、いつでもいけます」

明がなんだか猛スピードで水晶球を叩いてプログラミングをしていて、

「かあつ！ 結局手柄はののんが一人占めかよ！」

意味不明に姫子に絡まれた。

ちなみに姫子は、魂の抜けた私をズルズルと引きずって戻ったらしく……合一した肉体の、踵がやたらと痛くて泣ける。

「えっと、つまり、どういうことですか？」

「何を言っている。おまえが地上に抜け出たことで、こちらの絶対座標がほぼ特定できた。」

あとは、御瑞姫の力、見せつけてやるだけだよ」

あれ？

じゃ、なんで私、叶に本気の罵倒くらったりしたん？

理不尽にもほどがありません。

で、ところで、

「御瑞姫の力って……なにを企んでいるんです？」

私の質問は空海女史にスルーされ、なぜか横スライドで現れた姫子が、やたらと得意げな顔で、

「山を一つ、吹き飛ばすのさ」

……それ、学校のグラウンドレベルの被害じゃ済まないと思うん

じゆたじゆた

第三帖 国史夢想く根の国の主か逆賊く 陸（前書き）

人物照会

『野乃華』：主人公。天津神生まれ。不幸。『神樹』：七星剣の鞘。

変態。『ヤツカ』：七星剣の剣。横柄。

『晴』：安倍家の双子の姉。銃狂。『明』：安倍家の双子の妹。人形狂。

『姫子』：御瑞姫。オタ。バカ。熱血。

『空海』：御瑞姫。天上天下唯我独占。筆女。『鈴瞳』：御瑞姫。

超有能超不幸。箒女。

『慧凜』：御瑞姫。小学生。鎚つ子。『佳紅矢』：御瑞姫。中学生。弓娘。

『望、叶、珠恵』：戦乙女。稻田姫神社勤務。野乃華の友人。

### 第三帖 国史夢想く根の国の主か逆賊く 陸

作戦発動承認と同時に、神宮から神社庁を通じて、各公共機関へは自動的に通達が駆け回る。

それは1000年の積み重ねが有無を言わさぬ阿吽の呼吸というもので、月見里野乃華の捨て身の境界突破によって得られた座標から半径10キロメートルは、半自動的に落石、もしくは崩落事故として処理され、一般人の無期立ち入り禁止体制が敷かれた。

とは言え、元来が縄文系狩猟民族に崇拜されていた国津神の活動範囲は、ほぼ9割が山岳地帯という偏りを示しており、今回も林道という名の未舗装の道路が一本通っているに過ぎない、住民も寄らぬ山奥が舞台として設定された。

校庭の最終仕上げを文妖に託して、鈴瞳、晴、慧凜、佳紅矢の四御瑞姫は、近隣地区の戦乙女100名を引き連れて、早速現地入りする。

現役御瑞姫たる鈴瞳が最高責任者として指示を出し、引退御瑞姫である晴の母、芙由美がアドバイザーとして全体の調整に回る。

とは言え、最前線が根の国で、しかも幽世となれば、地上は夜の帳が降りた、沈黙と闇が支配する深森に過ぎない。

「作戦会議するよって」

簡易天幕の下、顔をつき合わせるのは御瑞姫4人と芙由美の計5名。

「叶はんと晴はんからの報告を地図に示すと、ここから約五キロの地点を中心として、直径2キロの球体幽世が、この山の地下に発生しているってことになる」

説明するのは鈴瞳だ。彼女は自分が被っている市女笠から垂れ下がっている、半透明の布上に作戦地図を投影して、説明を続ける。

「作戦目的は、球体幽世に捕らわれている御瑞姫4名の救出。」

そのための作戦内容をこれから説明するけど、要は、球体の外部

と内部から同時に攻撃仕掛けて、球体幽世の一点に急激な負荷かけて、境界を破壊するってんが、今回の狙いな。

境界に穴空けたら、そこから符を突入させて道作って、空海あけみはん達脱出させてコンプリート。

そんなわけで、もし作戦開始と同時にカミ様たちが攻めてきても、ここにいる面子は、計画遂行を絶対優先して欲しいんよ。

内容は先に配布した通り、うまく行けば境界破壊まで5分程度やと思っとる。

だから、優先順位を間違えんといて。

まずは、4人を救出する。

その後で、今夜の鬱憤は全部晴らしてくれてええから」

鈴瞳が、全員の瞳を見回した。

各自の脳内にはすでに、現地図から作戦スケジュールまで、完璧に行き渡っている。霊波にてリアルタイムに同期する作戦指示は、鈴瞳と空海が完成させた最新の武器だ。

「全員、時計合わせるで！」

各員が、胸元に忍ばせた作戦符を意識する。

すでに頭脳にインストールされている作戦スケジュールの、空白部分であった時刻が、点滅を開始した。

「現時刻を持って、御瑞姫救出作戦を開始するで。

決行は、30分後。

各員、直ちに、持ち場に散ってな！」

「御心のままに！」

質問をする余地もなく、各人の脳内には秒単位で作業指示が表示されていく。

それは作業遅延すらリアルタイムに反映されて、同時にその補佐に回ることで、最終作戦決行時刻の死守を成す。

晴は母と別れて、鈴瞳の符に指示された射撃ポイントへと、全速で駆けていく。

(明、あかりこっちで作戦開始したけど、そっちの準備、いける?)



(甕<sup>みか</sup>姫が、さつきから「暇だ、仕事よこせ」とうるさいのですが、何か時間つぶしのネタがあれば)

(……駄目元で、鈴姉に聞いてみるわ。それで、これこそ駄目元で聞くんだけどさ……境界面上に、双方が認識できるマーカーって設置できない?)

(地表にむき出しになれば、そちらでマーカーを打ち込むことも可能では?)

(それだと、視界の確保に時間がかかりすぎるんだよね)

鈴瞳の作戦は、剛胆だった。

御瑞姫の力によって、球体幽世を地上に露出させ、境界面定点同時挟撃による、次元境界を破壊するというものだ。

それは、球体幽世が露出するまで、地上の土砂草木を吹き飛ばすという荒行に他ならず、そのために、空中に舞う土砂や埃が邪魔して、有視界射撃が可能になるまでのタイムロスが生じる。

当然、鈴瞳はその時間を考慮して作戦スケジュールを立てていたが、定点射撃を得意とする晴でも、二丁拳銃でのキロ単位のスナイプは、絶好調でも尻込みする難業だった。

おまけに現状、晴は負傷中である。

それも、これから助けようと言う野乃華のために受けた傷であるのだから、正直モチベーションは高くない。高くないが、だからと言って仕事を疎かにする御瑞姫は存在しない。

(成功率は、どうしても上げておきたいじゃん)

(言いたいことは理解しましたが……本心は違いますね?)

さすが双子、と晴は唸る。

が、表情が見えない心話では、5割は騙し通せると、晴は読んでいる。

(あたし、一応怪我してるしさ、ほら、アスリートは3日休むと一ヶ月はリハビリにかかるって言うじゃん)

(分かりました、検討します)

その返答に、晴は相手に見えないガッツポーズを決めた。

(茶吉尼も、投げられた衝撃でどこか壊れている可能性を否定できませんし)

妹との通話を一旦打ち切り、晴は鈴瞳に作戦の一部変更を上申する。

それが実行可能かどうかは、直接幽世内部と連絡が取れる、晴にしか分からない。

鈴瞳は作戦の危険性に躊躇したが、晴の強調する成功確率に押し切られ、同意せざるを得なかった。

『今更強調するのも馬鹿にしてるみたいで気が引けるけど、人命、最優先な』

『分かってるって！ んじゃ、時間通りに作戦決行で』

その『人命』がいつたいたいどこに掛かるのか、当人が知るのは、作戦決行の五分前であった。

望はその背に、二本の杭を背負って、山道を駆け上がっていた。

杭の長さは約2メートル。先頭に五角形の大きな金属板がはめ込まれており、中央より少し前方には、翼のような形状の部品が3枚、渦を巻くように配置されている。

神水にて清められた、白い木肌の杭の太さは、望の腕よりもまだ太く。

重さよりも長さが面倒な杭を、照明符の頼りない光に導かれながら作戦場まで運ぶのが、望たち、戦乙女の職務だった。

「ていうか、なんでこれが、矢なのよ」

太さといいい長さといいい重さといいい、常識的に考えて『杭』である。もしくは『柱』だ。

しかもそれが、二百本。

獣道を夜中に運ぶのは、仕事だと割り切っただけでも理不尽だ。

(ま、御瑞姫の方がもっと理不尽だけどさ)

照姫と楯姫の二人が、テレビを鑑賞中と入浴中に、拉致同然で召集された姿を目の当たりにした望は思わず、

(御瑞姫にならなくて良かった)

心中呟いた直後に、自己嫌悪に陥った。

(仮にも昔は、御瑞姫を目指してたつていうのにさ)

中学入学くらいまでは、彼女も御瑞姫になるかも知れない、という覚悟を抱いていたのだ。

野乃華はあくまでアルバイト扱いであったし、稲田姫神社に伝わる七星剣の武勇伝は、戦乙女の中では伝説であり、憧れでもあったから。

稲田姫神社の常勤の戦乙女は望、叶、珠恵の3人娘だが、非常勤の戦『元』乙女は、町内あわせて200人を越える。

巫女と言えば処女、というのが世間の通説ではあるが、実際、神力を通す回路を一度でも開通した女子は、生涯を通じて強靱な力の発現を可能とする。

その力に処女云々はあまり重要ではなく、

「昔の女性の仕事は、子供を産むこと、だったから。」

だから初潮を迎えてお赤飯して、儀式的に水揚げ済んだら、即結婚して、とにかくまず、たくさん種付けてどんどん子供産んで、気がついたら体力衰えていて前線引退だったんじゃないかな」

古文献を読みながら、叶が淡々と語っていたのが印象的だった。

現代では事情が異なるが、年頃になった戦乙女はほとんど俗世に帰属させて、こういう非常時にのみ、家庭の事情が許す限り召集されるのが、一般的になりつつある。

(私たちが舞闘神事の節目の年に当たったの、運命感じてたのになあ)

あと数年経てば、望たちも前線を後輩に託して、地元の有識者のツテで伴侶となる男性を紹介されるか、自由恋愛に目覚めて都会に出ていくかという人生を送るはずである。

そういう意味で、今回の舞闘神事に挑む七星剣の主は、順当に言

えば、望、叶、珠恵の三人の誰かが選ばれるはずだった。

が、実際にはいつまで経っても神宝の継承の儀式は行われず、いつの間にか野乃華と七星剣がセットで語られるようになっていて……  
(最初から、出来レースだったんだよね)

悔しいとか悲しいという負の情は、とっくに流れて消え去っている。

ただ、御瑞姫や戦乙女の、こういう戦場働きを知らなかった野乃華に、同情の念は覚えていた。

(なんで、3年前とか、もっと早くに正式な御瑞姫に任命しなかったんだろ?)

野乃華本人の熟練も去ることながら、神宮としては、御瑞姫9人で全国の守護をしなければならなかったのだから、七星剣の継承の儀は急務だったはずなのだ。

(ま、その代わり、私たちがお手伝いで派遣されてたけどさ)

それでも、御瑞姫は一姫鬪干いっきとくせん。戦乙女が何人集まろうと、代わりが務まるというものではない。

(最低限地元の事件は地元で解決してたし?)

野乃華が七星剣を握っている限り、稲田姫神社は、頑ななまでに外部へ応援を要請しなかった。時に地元の非常勤の戦乙女に助力を請うことはあったが、基本的に野乃華と七星剣をメインとして、この地を平定してきたのだ。

(ま、そういう意味では、御瑞姫としての最低限の働きはしてきたわけか)

が、結果的に野乃華は、今回のような大規模な作戦に関しては、どこへ出しても恥ずかしい素人だ。

一応、一般人のアルバイト扱いだったから仕方がないとは言え、どうせこうなる運命だったのなら、早い段階でカミングアウトしていた方が、お互いに幸せだったんじゃないか、と今更ながら思えてきた。

(ま、野乃華は野乃華で、普通じゃなかったけどさ)

何せ、何もしなくてもカミが見えるという変態体質だ。戦乙女の中にも稀にそういう目を持つている巫女はいるが、  
(談笑するってレベルは、さすがにないわ)

おまけに最近は、気軽なお散歩気分で幽体離脱までするようになった。通常の人間にとって、魂が離れるのは人生の最後に一度きりである。

(……結局、生まれながらに御瑞姫の素質があったってことなのかな?)

望に分かるのはここまでである。

まさか野乃華の魂が、高天原生まれであるなど、想像できるはずもない。

「珠恵、まだ大丈夫?」

望は埒もない想像を振り払って、一緒に獣道を上っている珠恵の体調を心配した。

珠恵は、戦乙女を努めているのが冗談であるかの如く、身体が弱い。野乃華とは違う意味で、散歩のような気軽さで吐血して幽体離脱の危機に陥る、生きているのが不思議なコンディションで、巫女を努めているのだ。

が、それこそが、彼女が巫女である証明でもある。

今、珠恵の全身は、金色の霞に包まれていた。

神力の輝きだ。

彼女は、人の身には余るほどの膨大な量の神力を、その身に宿すことが出来るのである。過ぎたる神力は肉体を損傷させるほどで、故に彼女に力仕事を期待することは出来ない。

が、現状のような集団行動において、珠恵は優秀なバッテリーとして重宝される。

現に望たちが暗闇の中、全速に近いスピードで矢を運んでいられるのも、珠恵から供給される神力のおかげである。

「……うん、最近、やけに調子がいいから」

「なら、いいけどな」

調子が良すぎるのも、不安になるほどだ。

今日の彼女の輝きは、いつもの倍にも思えるほどで、供給される神力の質も量も、望たちに一切の疲労を感じさせないほど、濃厚なのにクセがない。

と、叶からの指示が飛んできた。

叶もまた、今日のような戦場では、運搬などの力仕事には従事しない。

むしろ叶の本領発揮は符による通信網の充実であり、総大将たる鈴瞳の命令を、忠実に現場レベルまで浸透させるのは、彼女の多数並列情報処理能力によるところが大きい。

『望の隊が突出して遂行が早いよ。無茶しなくても間に合うから』  
(んなこと言ったって、珠恵が絶対調なだけで、むしろ楽なくらいなんだけど)

このままでは、予定より10分早く、矢を運び終えてしまえそう

だ。  
望は珠恵の調子が続くのなら、ほかの隊への協力も可能であることを進言して、叶への返信とした。

(ま、結局、私は自分が出る程度を、全力で果たすだけだよな)  
戦乙女には、戦乙女の仕事がある。

望、叶、珠恵の誰が欠けても、この作戦の完全遂行はあり得ないのだから。

(だから、友達として、野乃華を助ける)

今は、とにかく、200本の矢を運びきってしまうことだ。

その矢をどうするのかは、御瑞姫に託して。

「にしても、なんで急に、元気になったわけ？」

望は再び珠恵に問いかけたが、

「……この前の神事以来かなあ？ 食後の野菜ジュースが効いてきた？」

珠恵にも、絶対調の理由は、分からないだった。

「あと、五分です」

明が淡々と告げるのは、一山を吹き飛ばすという荒唐無稽な計画の開始時間で。

「んで、あたしは、いつ、働けばいいわけ！」

両の拳を握りしめて姫子が詰め寄るのは、助けられるだけなんて暇すぎて死んでしまうわ、なんていう、相手にするのもバカバカしい理由からだったりする。

「カウントダウンはこちらで。方角を指示しますので、さっきの全力全開パンチを地上に向けて放つて下さい」

「うっしやあ！ あたしの見せ場キタ！」

なにがそんなに嬉しいのやら。

私と空海女史は、珍しく同時にため息をつく。

地下に閉じこめられて、既に五時間以上が経っている。私は、つくづく人間という生き物は、地下なんかじゃ生きられない生き物だっって痛感していた。

日の光は臨めなくても、新鮮な空気だけでも早く吸いたい。考えてみればこの閉鎖空間、長時間いればいるほど酸素が減っていつて、結局破壊しない限り遠くない未来に死が確定していたわけで。

五分後なんて言わずに、今すぐ作戦開始して欲しいわって、ん？なぜだろう、熱い視線を感じて、その主を捜し求めれば、

「安倍明？」

心話とかいう、姉との作戦会議に夢中なはずの人形遣いが、私にジイツと熱々な視線を照射していた。

「な、なに？」

瞬間、悪寒が背筋を駆ける。

これは、確信だ。

長年の不幸経験が回路を敏感にして、短時間後に自分が被る悲劇を、警告して止まない。

「是非とも、稲田姫に協力してもらわなければならぬ事項があります」

瞬間、一步、後ずさっていた。

ガシッと、両肩を後ろから掴まれる。

「どうやら、稲田姫にしか出来ないことらしいぞ」

頭越しにのし掛かるプレッシャーは、意味もなく楽しそうな空海女史の声で。

「はい。この中で、いえ、全御瑞姫中唯一、幽世と現世うつしよの境界を軽々とまたげる存在……それが稲田姫ですから」

その瞬間、なぜか明の瞳がキラリと怪しく光った気がした。

「境界同時定点挟撃にはどうしても、作成遂行上、的が必要になるのです」

え、それって、つまり。

「なるほど、助けてもらうからには、それ相応の協力が不可欠だわな」

両肩を握る力が一段と増し、同時に背後から強烈な重量が襲いかかってくる。

「心配には及びません。私たち姉妹……動かぬ的を外したことはございせんから」

わ、私に生きた的になれってかあああああああ？！

「稲田姫、考えようによっちゃ、これは貴重な勉強の機会だ。逃げずに立ち向かえ。そうすれば、お前は、御瑞姫がどういうものか、一目で理解するだろう」

空海女史の熱い吐息が耳を焼く。

「ああ、もう！ 結局おいしいところは、ののんが全部もっていきんだから！」

そこ、おい、悔しがるとこじゃないでしょ！

「だったら、コツ教えたげるから、あんたがやりなさいよ、姫子」

「駄目だよ。あたしには、山をぶち抜くっていう大事なお役目があるからねっ！」



右拳をガッツリ握って、笑顔の姫子はやたらと楽しそうにこちらを見る。

「時間がありません。急いで下さい」

考える余地すら与えてくれないのかよ。

よよよ、と私は膝から崩れ落ち、同時にその魂は、いとも簡単に肉体から乖離していた。

「本当、間近で見ると見事な技だな」

「こんな簡単に抜けるようじゃ、そのうちツッコまれただけでも、幽体離脱するんじゃないの？」

空海女史と姫子が心底関心しているけど……これってそんなに凄いことなんだろうか？

と、明の視線が魂の私を捉えた。

行け、と目だけで促される。

行くわよ、行くけどさ。

示された方角に向けて進路を取り、頼みの綱である七星剣だけをシッカリと意識して。

「大丈夫、実弾しか撃ちません」

……それ、私の耳には、射殺フラグにしか聞こえないんですけど。

再び、私が境界面上にたどり着いたのは、まさに私たちの救助作戦の開始時刻だった。

境界面上から地上まではまだ分厚い土砂の層があり、私は一旦境界を斬り裂いて、地上へと身を進める。

空海女史が言う、御瑞姫とは何なのか、それを見物できる、またとないチャンスだと気付いたからだ。

私は未だに、御瑞姫ってというのは単に戦闘能力の高い個人だっという認識しか持っていない。

もちろん、それは姫子の馬鹿から受ける印象が大だし、空海女史

の符の作成性能やらを知った今では、どうやらもつと大変な職務らしいことも、薄々感じ初めてはいる。

けど、百聞は一見に如かず。

いったい、御瑞姫っていうのがどんな存在で、何が出来て、何を成さねばならないのか。

姫子は単純に山を吹き飛ばすと言ったけど、そんなの一介の人の身で本当に可能なかどうか。

不可能を、成すとすれば、どんな手段で。

私にそれが出来るとは思わなければ、目指すことくらいなら、まあ、まだ、臨んでみようと思うから。

再び、魂は地上へ還る。

既に深夜だ。当然森は暗い……が、動物たちが異常に騒がしかった。

騒がしいというか、これは、悲鳴だ。

いったい、何をやろうとしているの？

木々の生い茂る地上からは何も分からない。私は危険を承知で、更に高度を上げた。

だいたいの作戦概要は聞いているから、どの方角を注視すればいいかは分かっている。けど、具体的な方法までは聞いていないから

……見えた！

現地から約3キロ離れたそこに、人工の灯が煌々と点っている。

そこが作戦本部に相違なく……私は、空中に大きなVの字を描く、多数の浮遊物体を目撃した。

「何なの？ あれ？」

「全工程定刻集結。

これより、作戦を決行する」

佳紅矢の脳内に、鈴瞳からのゴーサインが点った。

かみより 神寄を成し、白銀の霞に身を包んだ佳紅矢の両手は既に、めいぎょう 鳴弓射狩禍を携えていつでも発射態勢が整っている。

「佳紅矢、いけるぞ」

そんな彼女の右側で、四足を突っ張るようにして身を起こしているのは、おおかみ 大神のヤツフサだ。彼女にとっては生まれた頃からの友人であり、数多くの戦場を共にくぐり抜けた、教官でもある。

「命令受諾。これより、射に入ります」

同時、彼女の周囲の風が止んだ。

広がった白銀の霞が、一種の防風壁の役割を果たし、射手を覆っていく。

既に、空中に展開してある矢は、200本強。

やじり 鏃の部分が幅広い五角形を成す、全長2メートルの戦略矢だ。

その目的は鏃を楔として地面に撃ち込み、の 籠（シャフト部）そのものに封印されている決戒呪を展開することで、戦闘領域を外界から隔絶すること。

主に民家が近い場合にとられる応急処置だが、敵の数が多く、谷の深い山奥が舞台となる時に、戦場を限定する目的でも使用されるが、今回は、そのどちらでもない。

彼女に与えられた射的ポイントは、すべて地下。

鏃のみならず、矢そのものを地中深くに撃ち込んで、岩を割る楔のごとく、地上に切取線を穿つのが、今回の使命である。

「照合」

射狩禍を握る左手に力を入れれば、弓の両端から光の弦が20、束になって右手に収束される。

改めて両足の裏に地面を意識して、彼女は一切の思考を止めて、ただ、矢を射る装置へと己を高めた。

目標ポイント、そこに至る射筋、そして必要な張力。

すべて肉体が覚えており、身に宿るカミが導いてくれる。

あとは、射るのみ。

「参ります」

静かな宣言と共に、佳紅矢は胸を大きく開く。

空中高くVの字に整列していた矢列が、同時に素早く動き出した。最初に放たれる20本が、弓と平行に一行に並び、一度瞳を閉じた佳紅矢の両手に、最初の一本がコトリ、触れた。

瞬間、風が野を貫く。

ギターを早弾くかのごとく踊る佳紅矢の指運に導かれ、瞬く間に20の矢が、途切れる間もなく一斉に放たれたのだ。

深闇を真一文字に、烈白なる矢の列が割断した。

しかし根本での微妙な調整によって徐々に己の行き先を見定めた矢列は、一キロほど宙を駆け抜け、バラバラな方角を目指して猛スピードで地上へと突き刺さっていく。

その間にも、既に佳紅矢の右手は次の矢束のための弦が握られており、休む間もなく、続けて20の矢が放たれて空に直線を描いた。

全て、少女の指が紡ぎ出した『現実』である。

彼女の指が弾く弦が奏でるは、音ではない。たった1ミリの角度違いが、数キロという着地点の誤差を生む、高速射の芸術だ。その指の速度は、最速では視認すら出来ぬ音速であり、その速度で奏でられる鳴弦は、高周波と化して衝撃すら伴う。

やがて、少女の指から弦の輝きが消えて……文字通り、全ては矢継ぎ早に放たれた。

円を描くかのように地上へ降り注いだ矢は、球体幽世を取り囲むように、誤差数センチという精度で地上に突き刺さり……腐葉土層を貫通して非透水層である岩盤すら割り進むと、

「震いませ！」

矢自体が同時に強烈な振動を始めることで、土砂層は一気にもろく、崩れやすい様相を呈し始めたのだ。

「で、でたらめだ」

思わず呟いた。

空中でVの字を描いていたのが全部長大な矢だったことも去ることながら、どう見ても中学生にしか思えない少女が、その矢を全部、機関銃のごとく瞬く間に全矢瞬間射出してしまった。

こ、荒唐無稽にも程がある。

人間よりも大きな矢を風を切る速度で絶え間なく射ち出したのみならず、その矢が全て地中深く突き刺さった後、なぜか地上の土砂がいきなり流動化するなんて……。

「人間業じゃないでしょ……」

『人間業で済むなら、御瑞姫なぞ必要あるまい』

いや、ヤツカのツツコミは正論だけどさ。

なんて言っている間に、空間そのものが突然、爆発した。

「な、何！」

爆風が大気を押し上げて一瞬の真空が生じ、同時に矢を撃ち込まれて緩くなっていた大地が、網の目のように根を張る木々もろとも、間欠泉のごとく空中へ吹き上がる！

「ダイナマイト?!」

叫んだ直後に、直感がそれを否定する。

生身なら鼓膜が破れていたであろう大音量が、すぐに連続して爆じけた。

振動する大地。

噴出する土砂。

空を覆い尽くす大木の群。

それらが空中で、不自然に姿を、消す?!

そんな異常な大地を跳ねるのは、小さな白き影だ。

白影は両手に、その身より大きな槌を握りしめ、遠慮なしに全力の一撃を、地面に叩き込んで大地を抉り取っていく。

というか……どうみたって小学生だろ、彼女。いまだ成長途上の

その身から信じられない怪力を発し……まあ、神寄の時点で生身の筋力関係ないけどさ、女子小学生に肉体労働させなあかんほど、低年齢が進んでるっていうんですか、おい、乙女限定の巫女職は。

おまけに、どういう原理か知らねども、土砂草木を空中で無にする空間制御術。

ビックリしている間にも、地上の土砂層は次々と剥がされて……本当に、球体幽世が、むき出しにされようとしている。

「も、戻らなきゃ」

我に返った。

私にも任務があるんだ。

任務というかイジメとしか思えない仕事だけれど、これら全ては前座に過ぎないのだから……。

というか、バカ過ぎでしょ、御瑞姫。

何考えてんの。

いくらカミの力を体現してるからって、やって良いことと悪いことがあるでしょ！

地面に楔を打ち込んで、吹き飛ばして、土砂を消去する？

そりゃ、言葉にすれば一行で済むけど、それを現実にする人がありますかっ！

甘かった。

甘すぎた。

神剣握ってもう10年。

私的には妖怪退治も平気になつて、仮にも御瑞姫二人と戦つて、とつくに一人前の実力があるなんて自惚れていた。

とんでもねえ。

御瑞姫って、半端ねえです。

どんな化け物になれって言ってますか、空海女史。

というか、『人』に求められる仕事じゃないでしょ。

文字通り『神業』じゃないの。

御瑞姫。

人の理を越えし、神の御技を体現せし者。

むしろ、神の奇跡を具現する、現人神。

カミに対抗するためとは言え……その身に降ろした力はあまりにも、巨大すぎる。

いや、というより……私たちは、そんな力を駆使しなければ抗げないような敵を、相手にしなければならぬ？

生身であれば背筋が凍ったであろう想像を追い払って、私は指定された地点へと身を飛ばす。

晴と明の、標的となるために。

私が闘った姉妹に、挟まれる格好で。

……一応、実弾しか撃たないって言ってたけどさ……どう考えても、悪意しか感じられない配置だよな、これ。

と、悪い予感に酔っている間にも、小学生巫女がドンドン遅延なく、地上を空中に吹き飛ばし続けていく。

もう、考えている時間はない。

どちらにしろ、安倍姉妹のトドメがなければ、球体幽世からの脱出は成し得ない。

空海女史の言い分ではないけれど、これは、必要な犠牲であり……同時に、私だけが可能にする、特技だ。

幽体離脱がポピュラーな技じゃないとは言え、それが可能な理由は簡単だろう。

私が、天津神あまつかみの娘の魂だから。

ひよつとしたら、本来の『月見里野乃華の魂』を排除して取り付いた、外来のモノだから。

御瑞姫を目指し、ヤツカを解放し、少しでも出生の謎に近づけたと思っていたのに、現実には余計に謎が増えただけだった。

それも、自分の出生そのものが、罪かもしれないという、難題だ。国津神は存在した。

そして恐らく、天津神も存在する。

国津神を信奉していた出雲王朝は、天津神を信奉する北九州筑紫

系王朝によつて、滅ぼされはしないまでも、主権を放棄して軍門に下った。

そして地上は、天津神を崇める巫女によつて平定され、現在に至るも、土着の国津神は根の国に封じられて、時々反抗を企てている。筋書きは見えてきた。

それでもまだ、見えないものは存在する。

なぜ、今、私はここに必要なのか？

その秘密に辿り着くまで、まだ、死ねない！

さて、覚悟を決めたのはいいのだけれど。

晴と明は、私の霊波をガイドビーコンとして利用するのだそうである……保険として、空海女史や、この地に来ているであろう望たちへも、何かしらの信号を発信することにした。

もちろん、それで何かが変わるわけじゃないのだから……万が一の場合、目撃者がいたほうが、なんとというか、気休めじゃん。

ま、もちろん、晴も明も、衆人環視の中での作戦活動だから、大っぴらに私に復讐なんてしないだろうけど……明なんて、影に紛れてコツソリ仕事人なのが、似合ひすぎて困る。

一体何発の実弾が撃ち込まれるのか知らないけれど、片やハツピートリガーな両手拳銃の硝煙狂い、片や人形にガトリング装備の、目的の為なら手段を選ばぬ作戦決行機械だ。

……双子、なんだよね、二人。

一体、どんな歪んだ家庭で育つたら、そんな性根の腐った人格が形成されるんだか。

ま、とはいえ、御瑞姫に常識が通用しないのは、今現在も痛感進行形でありまsing。

大槌を振り回して天へと土砂を投げ飛ばす小学生巫女の活躍は、順調に終末段階へと近づいている。

空中で土砂が消える謎は解けないけれど、きっとそれも、御瑞姫の誰かの特異な能力に相違ない。

さて、そろそろ禪を締めようか。



丹田に力を込めるイメージで、私は球体幽世の指定ポイントで霊波を放つ。

まだポイントは土砂で覆われているけれど、射撃は地面の噴出と同時に始めるらしいから。

……てか、そんな状態で実弾届かないでしょ。

絶対、霊弾撃つてくる。

自分に都合の悪い予感だけは、的中する自信がある。

『神樹、ヤツカ』

だから、準備は怠りなく。

『蜂の巣になりたくなかったら、全力で私を守れ！』

『とことん不幸ですよ、のの姉』

『知らぬ恨みを買って入っているのじゃあるまいな』

『あゝ、もう、私が死んだら困るの、あんたらでしょうが！』

うか、そもそもヤツカが蒔いた種じゃん！』

『儂が蒔いた種？ なんのことだ？』

『とぼけんな！ 自分があの二人を襲って、私を手に入れようと暴

れたこと、忘れたって言うの？ だから安倍姉妹が、復讐のために

こんなプラン提案して……』

『もつと、あの二人を信用しても、バチは当たらないと思うっすよ

？』

『バチが当たらなくても、弾が当たるわよ』

『ふむ？ 儂はがそんなことをしたと？ いつ？』

会話が、成り立たない。

『なに言ってるのよ。あんたが、封印を嫌がって暴れたって、依佐

利も言ってたじゃない』

『だが、七星剣は再封印されたのだから？ いったん外に出た儂は、

どうやって剣に戻ったのだ？』

あ。

れ？

『神樹？』

『そう言われれば、そうっすね』

あんたも忘れてたんかい！

『じゃ、なに？ 今ここにいるヤツカと、あの日暴れたヤツカは、別物ってわけ？』

『平たく言えば、良いヤツカと、悪いヤツカになるんじゃないかと

……』

『じゃ、悪いヤツカは、いつたい今、どこにいるわけ？』

『今はそんなことを議論している場合じゃあるまい。』

一方は儂が楯になるとしても、背後はどう守るつもりじゃ？』

『え？ そりゃ、神樹を固まりにして』

『死にます死にます死にます！ ボクが死にますよ、それ！』

『主を救うための命でしょ？ 当然』

『んな爽やかな笑顔で死亡当然宣告しないで下さいよ！』

『じゃれあいも結構だがな、ここを凌いでも両面宿儺じよつめんすくなとの決着をつ

けねば、元の木阿弥だぞ』

そうだった。

これがトリのイベントってわけじゃない。

あくまで、これは、私たちの救出という中間点であって、元凶をなんとかしないと、解決にはならないんだ。

両面宿儺。

かつて飛驒の国にて、順ろわぬ民を率いて大和政権と対峙したと言われる、国津神。

おそらく、それは、土蜘蛛つちくもや蝦夷えみしと呼ばれた土着民同様、縄文時代からの狩猟採集文化を継承していた人たちに違いない。

空海女史から貰った日本史を斜め読みするに、どうやら古墳時代の和政権の外敵は、水稻栽培という生活基盤の変化に、『順応しない民』との争いに終始しだらしく。

それと言うのも、農具や機械が発達した現代でも、米作りというのは手間暇がかかる重労働であり……それに比べたら狩猟採集生活の方が、蓄えは出来なくても生きていくには困らなかつたからだ。

結果的には、備蓄が出来て、故に大量の人口を養える農耕民がジワジワと生活範囲を広げていくことで、縄文文化を継承していた人々を山へ追い詰め平地を占めていくことになるのだけれど……大和政権の影響から逃れた北海道と沖縄では、西暦600年代まで連綿と、貝塚や漁獵文化が続いていたことから、日本という国が豊かな土地であったことが想像できる。

が、結果として、文明を築いて国という形を作り上げたのは、水稻栽培を広めた農耕民族であった、弥生人だ。

シベリアから南下してきた狩猟民と、黒潮に乗って北上してきた海洋民がぶつかって出来た縄文という古代日本を、大陸から稲と鉄文化を携えて移ってきた西の民が塗り変えていったのが、弥生古墳時代。

そして弥生の民こそが天津神を信奉し、縄文の民と国津神を、根の国に追いやった張本人に違いない。

けど、弥生人＝中国人でも、ないんだな、これが。

古事記も日本書紀も、伝承は日本を中心として大陸の匂いは漂わせず。

きつと弥生人と言っても、狩猟採集生活から農耕へと切り替えた縄文人もたくさん存在しただろうから。そうして混血を続けながらも、稲を主食として農耕に生きた人々が、弥生人なのだろう。

空海女史とヤツカの話を総合するに、どうも筑紫王朝を作り上げた雲王朝と国津神を根の国へ追いやった人々は、海洋民族の末裔であった可能性が高い。

となると、南国から黒潮に乗って北上してきた海洋民が、なんらかの理由から対馬を本拠地としていて……そして彼らが信奉していた天照大御神こそを、国の主神として伝承を練り上げていったのだろう。

今、私が想像できるのは、そこまでだ。

そしてそれは、あくまで、人間の歴史にすぎない。

日本人と、国津神のルーツは、それでなんとか説明がつく。

けれど、肝心要の天津神が、いまだに漠然として掴めていない。いったい彼らはどこにいるのか？

高天原なんて、本当に存在するのか？

だったら、私はいつたい、どこから来たのか？

『なにを呆けている、うつけ！』

ヤツカに叱られた。

うん、いつまでも思索にふけっていられる状況じゃない。

『そろそろ、始まるっすよ！』

『とにかく、生きるよ！』

それが避けられぬ運命ならば、諦めたりせず全力で望む。

それが、月見里野乃華だ。

目の前の土砂が、振動と共に派手に空中へと舞い上がった。

大槌を振るう巫女が、遂にこのポイントへとたどり着いたのだ。

叶から、作戦開始の波動が来る。

そして、銃弾が、来た！

地上からの射撃と、球体幽世の内部からの銃撃が、コンマ秒の精

度で同時に、私に向かって着弾っ！

半端ねえ！！

連続で放たれた銃弾は6発。

その全てが数センチの誤差でほぼ同位置に、同タイミングでぶつ

かり合ったのだ。

片や晴は、ここから3キロほど離れた山の中、いまだ土砂が吹き上がる視界ゼロの標的に対して。

片や明は、地下2キロの地点、外の景色など見えず、姫子がトンネルを穿ったとはいえ、どこにどのタイミングで来るのか分からない晴の弾丸を完全に掌握して。

すでに、人間業を通り越して、神業ですらねえ。

こんな芸当、双子だから、なんて理由で済まされたら、全国の双子からどれくらい苦情がやってくる。

御瑞姫で且つ双子。

それも日々、神宝の科学的制御を研究しているっていう、安倍家の面目躍如だろう。

しかも私にとって信じられないことが、本当に全弾、実弾だったことだ。

あれ？ 私が間違ってた？

というか、御瑞姫救出っていう一大作戦において、私情を絡めて復讐してくるなんて考えた、私の方が彼女らに謝るべき？

なんて考えている間にも、再び6発、全部実弾で射撃が来る。射撃そのものでは、境界面は破れない。

だがこうして一点に負荷をかけ続けることで、幽世を制御している両面宿儺に、プレッシャーを与え続けることが目的だ。

それにしても、御瑞姫……おそろしい娘たちっ！

私本当に、こんな化け物みたいな娘たちに混じって大丈夫？

と、一瞬、我が身の将来を案じられるほどの安堵を覚えた瞬間だった。

『のの姉っ！』『野乃華！』

同時の警告！

『噂をすれば』『来たぞ！』

霊弾っ！？ やつと?! (不謹慎)

神樹とヤツカの緊迫した声に振り向けば、しかしそこに、私は期待と裏腹の最悪の光を見た。

「ヤ・ツ・カ？ なんで!!」

光輝く黄金色の魂が、獲物を捉えてまっしぐらに突っ込んでくる!

「なんで今頃、あいつが、ここに?」

『簡単な推理で悪いが、深く静かにどこかに潜行して、好機を狙っていたのだろう、あいつらしい』

「納得しとらんで、自分の半身なら、あんたが説得なり拘束してよっ!」

七星剣の精の、あまりに無責任な言い分にキレかけるも、

『アレにあるのは衝動のみで、知性など与えておらんよ。欲しけれ

ば、実力で捕らえてみよ』

挑まれた。

七星剣に。

主としての器を。

『手伝ってもらおうよ』

『抵抗はせぬ』

元凶が、来る。

全ての元凶がやって来る。

そうだ、これこそが、元凶だ。

私と安倍姉妹の人生を狂わせ、母校のグラウンドに風穴空ける発端となった、そもその元凶だ。

ヤツカ。

その、暴性を現した荒魂<sup>あらみたま</sup>。

あいつさえ、あの時暴走しなければ、今私たちは、こんな目に遭っていないかった。

安倍姉妹がこんな無茶な作戦に、参加させられたりしなかった。

私と神樹が、的になってなんて、なかった！！

「やってやるわよ！」

原点に戻っただけだ。

本当に、解決しなければならなかった問題を、思い出したただけだ。

「私は、今まで、逃げていた。」

当面の危機は去ったと、目を閉ざしていた。

考えれば簡単だったんだ。

荒ヤツカは暴走し、外に溢れ……そして、行方をくらました……

それが事実。

それは消えたわけでも、野心を捨てたわけでも、もちろん改心したわけでもなく……私たちは現実の忙しさにかこつけて、本来解決すべき、もつとも根元の問題を、忘れようとしていた。

それが、ただ、顕在しただけ。

これは、ただ、逃避の代償。

最悪のタイミングの、最善の対処。

今こそ、七星剣を、手に入れる！

あの魂こそが、七星剣の、エンジン！

あれを制御せずして、七星剣の主にはなれず……私は、御瑞姫を、名乗れない！

「来い！ ヤツカ！」

私は、逃げも隠れも……来たっ！

真正面からの突撃を、全魂を込めて受け止める。

今、最外にある魂は、私だ。

依佐利に強酸と賞された荒ヤツカの魂が、私の魂に絡みついて、痛みを伴って浸食してくる。

「くうっ」

けど、私は、更に力を込めて、受け入れた。

外部の痛みは酷くなる一方で、内部からは神樹とヤツカ力が満ちてくる。

これは根比べだ。

3対1の、意地の張り合い。

私の神寄の真骨頂。

外に羽織るではなく、中に取り込んでしまえ。

だから、まずは、押さえ込む。

勢いを殺して、翻って、飲み込んでしまったために。

「くっ、けどっ」

猪突猛進は止められない。

まるで猛牛の如き突進は、徐々に私たちを後退させる。

止められない？

けど、止めるしかない。

今ここで押さえ込まなければ、ここを突破されてしまったら……

荒ヤツカは私たちをスルーして、私の本体を乗っ取っちゃう。

好機。

荒ヤツカにとっては、またとない好機だ。

主のいない肉体と七星剣を手に入れて、好き勝手に暴れられる絶好の機。

この瞬間をどこに潜んで待っていたのか知らないけれど、なかなか知性を持った、いけ好かない暴力バカじゃないのさ、こいつ。

「こんの、大人しく、しろっ！」

ガツチリと両手を回して受け止めた荒ヤツ力は、正面突破が困難と見たか、フェイントを絡めて左右へとその魂を大きく振るわせる。触れているだけで魂が蒸発していくような痛みがあるのに、その動きに振り回されて、私の表面は、もうボロボロだ。

けど、一人じゃない。私の中には、神樹とヤツ力が存在している。どれだけ表面が荒らされようとも、内側から癒される温かさがある限り、意識は激痛の中、保ち続けられる。

そして、

「!?!」

私の魂を浸食した荒ヤツ力が、傷口から滲みだした神樹の魂に触れて、一瞬怯んだ。

さもありません。

神樹こそは、荒ヤツ力を封じこめるために生み出された、目的特化型のオンリーワンカスタムソウル。

10年という長きに渡って荒ヤツ力を封じ続けた実績は、触れる相手の魂を衰弱させる、呪いといしか言いようのない特性を持っている。

途端、荒ヤツ力の暴れ方が激しさを増した。

目的を、振り払う方向へ切り替えたようだ。

このまま私を溶かしても、中にいる神樹によって殺されることを悟ったのか。

なにが、知性は与えていない、よ。生存本能の方がよっぽど、理に叶った行動を迷わず選択してくれるもんだから始末が悪いわ。

「の・が・しゃ・し・ねえ！」

『のの姉!』『野乃華!』



神樹とヤツカの警告が耳に刺さる。

直後、晴と明の銃撃の雨に全身が晒され……荒ヤツカが、悲鳴を上げた。

なに？

『やっぱり、撃ってきたっす、霊弾！』

んな、このタイミングに限って？

『背後の弾は防いでやったが、前方はなんとも守れぬぞ！』

けど、届いたはずの弾丸は、私の魂に刺さっていない……代わりに、私が全身全魂で抱き込んでいる荒ヤツカの黄金の魂に、深々と挟られたような弾痕が一瞬、残る。

『続いて、全部霊弾っす！』

『容赦ないな！』

神樹とヤツカの意識が、背後から飛んでくる明の霊弾の防御に注がれる。

同時に私は、抱え込んでいる荒ヤツカを押さえ込むことだけを考えた。

衝撃が、前後を襲う。

七星剣の態を成した神樹たちが受け止めた銃撃と、猛獣のごとく怒り狂う荒ヤツカの剥き出しの魂に弾雨が突き刺さった、悲鳴。

「怪我の、功名！」

なんとという偶然か。

それとも神の采配か。

私への復讐に放たれた霊弾が、あろうことかあの日二人を操った張本神へと報復の牙を剥く奇跡。

明らかに、荒ヤツカの抵抗が弱まった。

私はより密着を高めると、意識的に自分を痛めつけて、神樹の魂が表面に溶け出すように調整していく。

だが、相手も諦めない。

背後からの霊弾と、全面からの封印の呪いに晒されながら、なおも自由を求めて暴れ狂う黄金色の魂。

「な・に・が、そんなに気に入らないってのよ！  
なんでもかんでも力任せで、そんなの罷り通る世界じゃないでし  
ようが！」

言葉の通じぬであろう獣の魂へ、叩きつけるは、怒り。

「私にあんたを知らない。」

あんたの歴史を知らない。

国津神との戦争も知らない。

どんな凄惨な闘いがあつたか知らない。

けど、私は知ってる。

あんたが私と、晴と、明と、望と珠恵に何をしたか、知ってる。

あんたは望を傷つけた。

あんたは珠恵を傷つけた。

あんたは人形を傷つけた。

あんたは晴をボロボロにした。

あんたは、私を、怒らせた！

だから、私にあんたを、逃がさない！

七星剣の主として、あんたという力を、野放しになんてしてやら

ない！

使つてやる！

こき使いまくつてやる！

雑巾のようにボロボロになるまで闘わせてやる！

あんたを、暴りたいだけ、暴れさせてやる！

あたしは、野乃華だ！

月見里、野乃華だ！

天津神の娘！

いずれ高天原に……登りつめる女を、馬鹿にするなああああ！」

晴からの霊弾が荒ヤツ力を穿つ。

明からの霊弾が七星剣越しに背中を押す。

私は、押し返した。

カミを、押し返した。

銃弾の雨が弾ける。

幽世境界に火花が咲く。

荒ヤツカが最後の力を振り絞り、全身を縄のように変じて戒めを逃れようとする。

私はそれを、掴み、絡め、食らいついた。

噛みついてでも、逃すもんか。

『神樹、ヤツカ！ 裏返って！』

一瞬の静止。

私と荒ヤツカの、均衡の刹那。

私は散り散りとなって宙を乱れ……神樹とヤツカの輝きが、荒れ猛る黄金を飲み込んだ。

戻る。

人に。

神寄る。

人が、カミに。

私は、私として、ヤツカを取り込んだ。

「……やつ……た……」

刹那、世界が音もなく、砕け散った。

伊奈羽鈴瞳の戦況予測は、的中した。

佳紅矢による戦略矢が放たれると即座に、地下から多数のカミが反撃に現れたのだ。

あらかじめ展開されていた戦乙女は、即座に迎撃体勢に移行。

矢を放ち終え、作戦における責務を果たした佳紅矢も間髪をいれず、山野に溢れ返った妖怪たちを駆逐していった。

異変は、地上だけではない。

幽世球体内部においても、姫子が右の拳で山中をくり貫き、明の

射撃のための道を開いた直後に、外部から百足軍団が投入された。明は作戦中、野乃華は幽体離脱で的になっていれば、戦力半減である。

が、それを憂うような空海と姫子ではなかった。

「姉御、今度こそ、暴れていいよね！」

迫りくるカミに、喜々として姫子がはしゃぎ、

「遠慮も情けも配慮も貯蓄も手加減も迷いも躊躇も敵意も使命も不要だ。」

殴れ、存分」

「任されたっ！」

姫子の両腕は風と唸り、血風と悲鳴の嵐を巻き起こし。

通路を埋め尽くした空海の符が、触れたモノは微生物であろうと分解して原子に帰した。

地上では慧凜が大鎚を振るって妖怪たちを薙ぎ払い。

佳紅矢が放った大量の矢は、国津神の波動を感知して息の根を追うを止まず。

前線に配備された望は、神力に輝くバットをフルスイングで妖怪の頭を破壊し、珠恵の鳴らす鐸の響きは、カミガミを萎縮させて巫女の戦意を鼓舞し。

野乃華が、自らの存在を賭してヤツカと対峙し、それを取り込んだと同時に 戦場は、アツサリと崩壊した。

不意に解除された幽世の戒めは、現世との整合と果たせず、大規模陥没の体をなして瞬時に地上を地下へと飲み込み。

機を見逃さず投入された符の路は、空海たち四人を余さず保護して地上へと引つ張りあげ、野乃華もまた、その混乱に惑うことなく肉体と合結。

地滑りを起こした一帯に対して、鈴瞳と佳紅矢は即座に表土を縫いつけ、被害の拡大を防いだ。

静寂が夜に戻るまでに、十数分。

鈴瞳の号令と、叶の広域指示によって、全軍に非常事態の終結が

宣言され……山は、穏やかな賑わいに包まれた。

「あの、結局、両面宿儺は？」

神寄を解き、ヤツカと荒ヤツカを七星剣に閉じこめた野乃華は、眼前にいた空海に、率直な疑問を投げつける。

「あれは、枯れてたな」

「はあ」

「寿命だ。二度と無茶はできまい」

断言されては、問いを繰り返すのは幼稚だ。

空海は野乃華を視界から外すと、緊張に肩をいからせたまま、長身の細身の巫女に近づいていく。

穏やかな顔立ちの女性だ。糸のように細い瞳で全体を見据え、細やかな指示を飛ばして撤収作業を進めている。

「鈴瞳」

空海の硬質な声に、振り向いた巫女は疑問を浮かべた。

「今すぐ、二十二号痕を精査しろ」

「野乃華っ！」

跳ねる声に、弾かれたように私は振り返った。

土砂と血と汗にまみれた、見慣れた友の姿がそこにある。

「うわ、みんな、ひどい格好」

「必死こいて助けたつてのに、第一声がそれかい！」

望のツツコミに、みんなで笑った。

本当に久しぶりに。

胸から安堵がこみ上げてくる。

ああ、本当に、助かったんだ。

「ありがとう。ごめんね、心配かけて」

「そんなのは仕事だからいいけどさ……それ、七星剣？」

叶らしい返事と、そして興味の対象に、私は背負っていた得物を誇らしげに掲げて、

「遂に、七星剣、御開帳したよ！」

地黒の鋼に黄金の彩りを走らせる刀身に、感嘆の声がそこかしこで上った。

「……これで、名実ともに、野乃華が御瑞姫だね」

珠恵が、おめでとくと、笑顔で褒めてくれた。

私も、ありがとくと、本心で返す。

「あ、ちよつと聞きたいんだけど、いい？」

空海女史に尋ね損ねた、両面宿儺について聞いてみれば、

「ああ、それなら、あそこに」

望が指差した彼方には、骨と皮だけのやせ細った二人の老人が、ミイラのように呪布にグルグル巻きにされて吊り下げられていた。

「あれが……今回の首謀者？」

双子、なのだろうか。二人羽織のように前後に重なったその姿には、哀れという感情しか覚えない。

「昔はスゴイ実力者だったんだらうけど……さすがに1000年以上も地下に幽閉されてりゃね。」

現代じゃ、信仰だってほとんど残っていないだらうし」

叶の説明を、珠恵が引き継ぐ。

「……今回の幽閉をやりきって、真っ白に燃え尽きたらしいよ？」

御瑞姫を閉じ込められただけでも、奇跡みたいなものだったって」

道理で、納得もいく。

幽世に隔離されながら、何者からの襲撃もなかったのは、単に余力がなかったからなのか。

それはそれで、もっと暴れたら何とかなったのかと悔しいけれど……今はただ、胸いっぱい吸い込む空気が美味しい。

もしかしたら根の国に封印された国津神も、求めるものはその程度の、ささやかなものかも。

大昔の禍根も、そりゃ当然あるだらうけど、生き物として最後に

残るのは、単純に美味しい空気と水に触れたっていう、素朴なものだと、今回の件で痛感もした……もうこんな時代なんだから、共存共栄したってよさそうなものなんだけどねえ。

「おおっ、ののん！ まさか生きてたっ！」

再会の喜びも世の無常も吹き飛ばして、バカが突然抱きついてきた。

「生きてて悪いかっ！」

自慢の爆乳を惜しげもなく押し付けて、本気で痛い抱擁っていうか、これむしろブリーガーだよ殺す気かっ！

「あんたのせいで土砂まみれだろうが、バカ姫子ッ」

ニールンと拘束を抜け出して、腕を掴んで腰に乗せ、バネを溜め溜め、とやっ、と投げりゃ、

「忍法、風車っ！」

空中で膝を抱えて縦回転が、クルクルクルクルクル、姫子そのまま、回り続けて墮ちてこない……アクションゲームか何かじゃないんだから、重力を簡単に無視すんなっての、かわいそうでしょ、重力が。

「ていつ」

誰が何と言おうと馬鹿にされている気しかなかったので、遠慮なく七星剣にて突きを食らわしてやった。

「はしっ」

と、器用なことに空中真剣白羽取り。おまけにそのままの格好で倒立を決めて悦に浸っていらっしやる姫子のバカのため、

「はいっ」

私は両手を離した。七星剣から。

当然、今度こそ落ちる。

「ひどいひどいひどい。横暴だ、いじめだ、DVDだ！」

「DVDって何よ?!」

「どめすていつく・ばいおれんす・ダイナマイツ!!」

相手にした私も馬鹿だった。

「仕返しよ、仕返し。たくっ、あんたのせいで、頭からつま先までドロだらけなんだかね！」

そう、私が幽世境界で的になって悪戦苦闘していた間……肉体は可哀想なことに、姫子が掘って出来た土砂の山の中に埋もれていたのである。そりゃ、地下は地下で百足の襲撃があつて大変だつたらしいけど、このまま埋めておいた方が見つからなくて良いっていう判断で放っておかれたりしちゃ、感謝もするけど激怒したつていいじゃない。

……つくづく今回、私は肉体を粗末にしてるなあ。

こんな事ばかりしてたら、そのうち身体の方から三行半を突きつけられそうだよ。

「なんやてっ！」

作戦終了と撤収作業の喧騒の中、しかし警戒は解かれて緩んでいた空気を、一人の御瑞姫の絶叫に切り裂いた。

名前も知らない、見たことのない女性だ。

私たちよりも年かさの、多分二十代だと思われる彼女は、いかにも巫女らしい穏やかな風貌に、今は驚愕と焦りと怒りを浮かべて、空海女史と対峙していた。

ピリリと、空気が強張る。

なにか、良くないことが起こつたらしい。

「どうだった？」

「悪寒的中やと。」

二十二号痕の地下封印が、ことごとく破壊されつつある。

封印突破は全方位にわたつとつて、地震波と霊波の測定から推測するに……10万は下らんわ」

「地上到達時刻は」

「新しい封印やし、あそこは念入りに施工したはずやから……このままのペースで行けば、よくて3日後。最短で、明後日早朝」

「ギリギリだな。とにかく、今すぐ神宮に非常召集を命じる。」

陣を張って周囲を決戒し、最大火力をもって地上で迎撃する。



総員、撤収終了しだい、次の舞台へ移るぞっ！」

最後の台詞は、その場集った全員に向けた放たれた。察しは、つく。

いや、一瞬にして帯電した空気によって、これから向かうのが今とは比べ物にならないほどの激戦であることを、肌が敏感に悟った。

「おりよ？　なんか面白くなってきた？」

サルみたいに飛び上がって喜ぶ姫子に蹴り入れて、

「叶、二十二号痕って、何？」

私は、これまでにない決意をもって、現実に立ち向かう覚悟を、七星剣とともに握り締めた。

次回 『第四帖 萬神騒威く八十万の神の凱旋か殲滅く』

第四帖 萬神騷威く八十万の神の凱旋か零落く 壱（前書き）

人物照会

『野乃華』：主人公。天津神生まれ。不幸。

『神樹』：七星剣の鞘。変態。

『ヤツカ』：七星剣の剣。横柄。

『晴』：安倍家の双子の姉。銃狂。

『明』：安倍家の双子の妹。人形狂。

『姫子』：御瑞姫。オタ。バカ。熱血。

『空海』：御瑞姫。天上天下唯我独占。筆女。

『鈴瞳』：御瑞姫。超有能超不幸。篝女。

『慧凜』：御瑞姫。小学生。鎚つ子。

『佳紅矢』：御瑞姫。中学生。弓娘。

『望、叶、珠恵』：戦乙女。稲田姫神社勤務。野乃華の友人。

#### 第四帖 萬神騷威く八十万の神の凱旋か零落く 吉

よかるう、ならば妖怪の話だ。

……ちよつと待って、引かないで。これは必要なプロセスなんだから。

物事には順序と程度ってものがあって、まあ、古来から創作には往々にして陥りやすい罫があるのだけれど、例えば世界設定を説明しすぎて、肝心のストーリーが動き出すときにはお客さんが飽きてしまうかストーリー自体がなかったり、はたまた別の例として、話の掴みたるダイナミックを優先しすぎて世界背景がまったく分からず、固有名詞を覚えた頃には話が終わりかけてて、結局よく分からなかったり、大した内容じゃなかったり。

えと、つまり、最初に適度な説明は必要であり、議論の前提は把握しとかないとダメってことなのね？

じゃ、なぜ妖怪の話なのか。

「根国路之深痕？」

「そう。冥界の盟主として地に封じられた国津神たちが、過去に地上侵略を企てた突破口」

「それが、開いたってどういうの？」

「それも、大した規模らしいのよね」

語る叶の声音は慎重で事の重大さを物語るのだけれど、その口元が喜びの笑みを浮かべているのは、ぶつちやけオタク的イベント大好き血潮が騒いでいるだろう内心がスケスケで……今にも眼鏡が光って高笑いしそうなオーラ、ただ漏れなんですけど。うん、根は悪い奴なんだ、彼女。仕事は真面目で有用なただけど。

「それって、今までもよくあったことなの？」

「直近の侵攻は3年前にあったけど……今までは何十年に一度って頻度なんだよね。御瑞姫と戦乙女はそのたびに水際で叩き潰してきたんだけど、今回ののは、本気度が違っつていうか……」

「なんで分かるの、そんなの？」

「地震計からの判断だと、地下を移動する大群の規模が大きすぎるの。陽動作戦で私たちを釘付けにするあたり、手も込んでるし。何より、今年の御瑞姫は、弱い」

「！ 私のことかっ？！」

自覚してるけど、身内から言われるとショックだわ。

そりゃ、即席だし、神剣だって解放したばかりだし、戦闘経験も少ないけどさ……本人目の前にして戦意を挫くようなこと言わなかつたって良いじゃんかよっ！

「ああ、まあ、のののんが貧弱なのは置いといて」

あんたまで、のののん呼ぶな。

「考えてみてよ。今いる御瑞姫8人。内4人は小学生と中学生だよ？ そりゃ御瑞姫は何より素質が一番大事だけど、ローティーンじゃどうしても人間力に不安が残るでしょ。声を大にして言えないけど」

と、周囲をはばからずにズバツと言っちゃうのが叶クオリティ。

「それに……戦乙女にも少子高齢化の波が押し寄せてきてるんだよね。全国の信心離れの影響で予算が縮小していることもあるけれど、引退する戦乙女に対して、後継の巫女がない神社が増えてきているの。」

もちろん、それは前々から危惧されていたことだし、だから空海さんと鈴瞳すずめさんをトップに、戦術研究会を立ち上げて、対国津神戦における戦乙女の効率的な運用を論じ始めたばかりだったのに……それもまだ仮説の段階で、これから実験に移ろうって時にこの襲撃……タイミングが悪すぎるわ」

戦術研究会であんた……巫女の口から出る単語じゃないでしょ、ふつつ。

まあ、ふつつじゃないんだけどさ、もう。

「で、つまり、どうなの？」

「ぶつつけ本番、と言いたいところだけど、基本的にやることは決

まってるんだよね」

と、叶はおもむろにタブレットPC機能付の呪符を取り出して、そこに「内線」と「外線」という二つの単語を指書きして。

「電話？」

「軍用語」

ふつうに女子高生の会話しようよ、ねえ。

「内線っていうのは、簡単にいうと袋の鼠状態ね。周囲を敵に囲まれた状態で、どう対処すればいいか。」

この時、戦力を分散させて、全方向同時防御なんてやるのが愚の骨頂。内線状態っていうのは外からの補給も限られるわけだから、どうしたって短期決戦に持ち込むしかないわけ。ま、第二次大戦のドイツや日本がまさに内線状態で、敗因は戦争の長期化なんだけど、それは置いておいて。

戦法はシンプルに、戦力集中による各個撃破。敵の包囲の間をついて、全戦力を一挙投入、包囲網を破って休まず敵の後背について、司令部や情報施設、補給線を壊滅させて休戦に持ち込むのがベター。今回の場合、敵さんがこれに当たるのね」

「じゃ、外線が？」

「そ、私たちのターン。内線の逆、包囲殲滅作戦こそが、外線の要。この場合は、包囲に穴を開けないのが肝要なのね。敵に各個撃破をさせないために、情報を密にして全軍一斉進軍で包囲網を徐々に狭めていって、四方八方から袋叩き、相手をこてんぱんにのしちやえば、ミッシェンコンプリート。」

ただ、これは情報共有も去る事ながら、まとまった戦力と補給が必要になるから、完全な遂行に困難を伴うのよね。

私たちが頭を悩ましているのが、まさに戦力不足。

その点、前回の反省から自動戦闘人形代や、安倍家の量産型絡繰の配備を進めているから、若干マシになってると思っただけ……」

「えっと、つまり、地の利はこっちにあるけど、戦力は圧倒的に敵さん有利？」

「そういうこと。加えて言うなら、完全に役割が逆転してるよね。」

御瑞姫みたいな少数精鋭は内線軍にこそ必要だし、人海戦術は、外線軍が喉から手を出して欲しがるコンテンツだし」

「……それ、本当に勝てるの？」

「負けたら一般市民に被害甚大よ。そもそも、始まる前から負けを意識してたら、勝てる戦も勝てなくなるし」

そりゃ正論だけどさ。

「そんなわけで、私はこれから対策本部に行つて細部の詰め作業があるから」

颯爽と裾を翻して、叶は去つていった。

緊張して伸ばしていた背筋から力を抜いて、両手を後ろについて足を伸ばすと、疲労が、どっと押し寄せてきた。

徹夜で根の国をさまよつた拳げ句、午前中は現場の後処理に追われ、間髪入れずに特急列車に押し込まれて現場に輸送され、約半日。

今、全国の巫女に緊急召集命令が下り、特別列車によって、続々とここに巫女が集められているという。

気がつけば日は傾き、周囲は闇色を濃く……しかし山中は煌々と灯りがともし、人々が絶えず、決戦準備に駆け回っている。

何でこんな事になったのか？

肉体は疲労でズブズブになっているけれど、脳みそはギンギンに興奮していて、残念ながら眠れそうになく。

支給された疲労楔ぎ符から、新鮮な神力が流れ込んできて、体の中で尋常ならざる新陳代謝を誘発して、細胞を生まれ変わらせているのが分かる。

明日の朝には、すべての疲労が霧散するとの、空海女史のお墨付きだ。

本当は、無理矢理にでも睡眠をとって、脳も休ませなきゃならぬのだけど、配給チヨコで糖分を補給しつつ、あえて、思案の時にあてよう。

何で、こんな事になったのか？

その根本の問いが、冒頭にある。

妖怪とは何なのか？

それは、敵を知る問いだ。

そもそも、国津神の出生は明らかじゃない。

古事記、日本書紀、風土記などを照らしあわせても、横の繋がりがハッキリとせず、各地域でそれぞれのカミが古来から祭られていた、というのが実態だから。

なら、現状はどう？

北は北海道から、南は沖縄まで。天照大御神を祭神とする神社が全国津々浦々にその威光をあまねく届かせ、ついでに出雲の神であった大国主命までもが、国津神すべての長として、オオナモチと名を変えたりして、各地のカミの代表として祭られている。

つまり、大和政権が古墳時代から飛鳥、奈良、平安時代を経て日本全国に版図を広げていくに連れ、支配の証として、天照大御神と大国主命の輸出拡大をしたのは明白。

そして、その版図拡大に際して、地方で反旗を翻し、決死の抵抗を続けたのが、いわゆる『順ろわぬ神』たち……土蜘蛛、蝦夷、隼人や熊襲と呼ばれたモノたちだ。

そして、今でこそ妖怪と言えば千差万別、絢爛豪華なイメージがあるけれど、当時の記録から読みとれる妖怪といえば、巨人、鬼、狐、蛇龍、怪鳥といった動物を模した化け物であり、峠を通り抜ける旅人の5割を喰ったと伝わる荒ぶるカミに関しては、その姿形が伝わっていない。有名な又エにしても、文献に残っているのは鳴き声だけだし、九十九神という概念が生まれてくるのは、民衆に器物が行き渡る中世の頃。安倍清明を代表とする陰陽師が活躍した平安時代になると、怨霊という概念が発達して、むしろ人間が鬼になるパターンが主流になって、山姥などが怖れられ、いわゆる呪術が発達してくる一方で、鬼などは徐々に、その活躍の場を御霊に譲って表舞台から消えていくのよね。化け猫や、山犬、狼等々、人の生活

に近い動物の怪異單や、狐や狸や猫・犬神の憑靈は、近世まで民衆文化の中で脈々と受け継がれていって、明治政府による「カミ降ろし禁止令」が出たほどだけど。

加えて言えば、今でこそ妖怪の代名詞となっている天狗、河童の出生は、意外なほど遅い。

天狗に関して言えば、大元は爆音を轟かせて落下してきた隕石に発し、天を駆ける狗の声や、山中の謎の倒木の音とか、空から降ってくる石礫とかの伝承は、昔からあったりして。それが仏教の布教に結びついて、天台宗の教えの中で、仏に敵する存在として鳶とびを素体に、密教や修験道の広がり次第に有名な山伏姿を獲得。その間に山岳民族、いわゆるサンカを取り込んだとかどうとか異民族の影も見えるけど、しかし、赤ら顔に高い鼻といったディテールを獲得したのは、実は江戸時代に入ってから。ちなみに天狗隠しといわれる現象は、農作業中に赤子が猛禽類に攫われる事案が存在したからだそうで、天狗が鳶を素体としたのは、そういう経緯もあるっぽい。

河童はもっと新しく、ハッキリと文献にその名が認められるのは15世紀。そのころはカワウソが変化したものと紹介されていて、今のような緑肌の頭に皿という姿を獲得したのは江戸時代の事。当時本草学と呼ばれた博物学の書物に、実在かもしれない生物として紹介され、一般に広まった、と考えられている。もちろんその背景には、牛馬や人の水難事故が絶えず、その事に対する怖れが、水辺の怪物を生み出したっていう民間信仰があつての事だけだ。

有名な鳥山石燕の百鬼夜行図などは、こういう流れを受け、書物を読む習慣が町人にも広まっていた文化を温床として、爆発的に大衆に受け入れられていったらしく。

彼の描いた妖怪図は、しかし洒落や創作が多く、実際の妖怪を描いたわけではない。ただ、彼の妖怪図を通して見えてくるのが、当時の大衆に、九十九神や幽霊まで楽しむ素地ができていたって事。それらを怖れながらも、本気でブルっていたわけじゃなくて、むしろ



る親しみを持つて受け入れていたって事。

けど、当時は、『妖怪』という名前は生まれていなかった。

世の中の怪しいこと、不思議な事を収集し、それらが『妖怪』として世に紹介されたのは、明治時代に入ってからだ。

文明開化、西洋化こそが正義とされた19世紀、『妖怪』を科学的に分析することで、単なる迷信、知識不足、勘違いである『妖怪』、本当に不思議なモノである『妖怪』という分類が生まれたけれど、そういう流れを受け継ぎながら、『妖怪』が生まれた文化の背景、民間信仰の歴史に注目したのが、有名な民俗学者である柳田國男。

彼は『妖怪』を、祖霊などの神が零落した姿であると考えて、日本各地の伝承を収集していった。

今ではその考えは否定されて、『妖怪』とは信仰されていない民族学的な伝承、という風に定義されて、信仰を受けている『神』とは別個の存在とされている……が、当然の事ながら、それは実存の生物としての扱いではなく、あくまで歴史的にどうやって概念が発生、波及してきたかの研究であって、多角的、広域的な調査から、より一般的な出来事として分析しようと言う試み。

ま、一方で、吸血鬼や蟹や蝸牛の怪異を綴った最近の怪異單だと、怪異は信仰ありき、信じられているからこそ力を持つて言う設定もあるから、現代に妖怪がはびこっていないのは、私たちの心のせいって見方も出来るし、他の作品では荒ぶれば妖怪、和れば神って分類もあるから表裏一体のものなのかもしれないけど……で、である。

様々つらつらダラダラと語った結果に一体何をオチとするのかと問われたら、だったら、私たちが戦っている、戦ってきた妖怪たちは、一体何なの？ という話になるわけで。

私個人の経験でも、泥田坊、川太郎、覚、鎌鼬、天狗の石礫、自縛霊の方々……根の国で見た大百足、幽世に閉じこめられた両面宿儺と、実存を疑うには実例が多すぎて、ましてや信仰心の影響など皆無ってほどに彼らは力余って憎さ倍増。

となると……ここは真面目に受け止めなきゃならんのではないか、と思うわけですよ。妖怪＝零落したカミという考え方を。ぶっちゃけ言えば、根の国に墜とされた国津神たちが人に牙を剥いた姿である、と。

そもそも、水木しげる翁が『墓場鬼太郎』を執筆した当初に思い描いていた『妖怪』とは、人に対する自然からの復讐という姿であって、テレビアニメになった時点で、「子供向けだから人間の味方にしましょう」と改悪（改善？）され、現在に至ってしまったという経緯がある。

つ・ま・り。元来から『妖怪』というものは、人間に恨みを持っている、人間を否定する、人間を騙す、社会に損害を与える、という属性を持っているものであり……それは逆れば、人間が天津神の威力を借りて、国津神を地下へと追い墜としたのが原因じゃないのか、と思に至るわけだ。

じゃ、事の発端は、人間にあるのか？

それは、まだ分からない。

けど、知らなければいけない気がする。

私は、私だけは、そこまで踏み込まなきゃいけない気がするのだ。だって、私は、カミが好きだから。

物心ついた時からずっと、遊んできたから。

泣いて、笑って、怒って、呆れて……見守ってもらってきたから。ずっと、共存を願ってきたから。

うん。決めた。

これからどんな困難が立ちふさがろうと、たとえ彼らに悪意しか残されていないなかったとしても、私は対話を試みよう。

戦場で、そんな余裕はないかも知れないけれど、それでも心は、常に求め続けよう。

巫女とカミの長い長い戦いは、これからもきつと、終わらないのだと分かっているも。

「それを、誰かが、断ち切らなくちゃ」

「んお、のののん、まだ起きてんの？」  
いきなり、姫子が天から降ってきた。

「なに、武者震いってやつ？ 血の気が多くて興奮して眠れない？」  
「そりゃあんだら……ねえ、姫子……私たちって、御瑞姫って、戦場でいつたい何をするわけ？」

身を起こして胡坐をかいた頭上に、姫子のタウンとした乳が、グニユニユンと乗りかかってきた。重い。

「キッタハツタの、ちぎって投げて、丁々発止のキリンググマツスイーン」

「身も蓋もねえ」

「のののん、一つだけ忠告しとくよ。

迷ったら即死。

引いたら即死。」

目の前に壁があつたら、その壁を砕く以外に道はなし……だから、ただ前を見て、進み続ける」

「たとえ倒れても前のめりって？」

「やつこさんたちは本気だよ。ためらいないよ。決死の覚悟決めちゃってるよ。だから、倒すしか道はないよ。私ら、ずっとそうやってきたし……人は怨嗟でオニと化し、オニは全て滅ぼされなければならぬ……分かってるよね？」

「……理解はしてる」

一度鬼と化せば、人間にはもう、戻れない。それは人の理を脱した存在だからだ。言の葉は届かない……妖怪も、怪異また、基本的にはそういうもんだ。

「ま、あたしは殴るの好きだからいいんだけどね」

「あなた、好き嫌いで仕事してるわけ？」

「仕事を仕事って思ってるうちは、ただの奴隷と同じだよ？」

時々こいつは、わかったような口をきくなあ、多分直感だけで言ってるんだらうけど……獣に近いほど、直感で正解を見抜くから侮れぬ。

「はいはい、忠告ありがとね」

姫子を持ち上げ、しかし言葉には力なく、別の疲労を感じた瞬間……緊急放送が大気を震わせた。

『索敵終了……敵の推定戦力、約30万』

異様などよめきが、山中に、響きわたる。

「開戦は明朝かな、こりゃ」

二ヒヒと笑う姫子の声が、今だけはやけに、頼もしく聴こえ、

「あ、鎧着なくちゃ」

今更ながら、望と交わした約束を思い出し、立ち上がる。

それは、こんな軽いやりとりで。

500人を越える巫女が、次々と観光バスや、幌を張った軽トラツクに乗り込んでいくのを目の当りにして、

「壮観っていうか、気持ち悪いな〜」

紅白二色に占められた貨物広場を、（……）こんな目で見回しながら、しかし立ち止まっているわけにもいかず、運よく振り分けられた貸切バスに吸い込まれていたら、

「あ、野乃華、待った！」

周囲のみんなが思わず振り返るほどの大声で、望に呼び止められたのだ。

ザワザワと広がっていった喧騒は、

「あれが、百々山の御瑞姫？」

「最強の七星剣の使い手？」

「20年近く継承者がいなかったって」

「でも、安倍姉妹を退けたっていうし」

「あら、意外と小柄なんだ」

「見た目普通だね〜」

「でも貧乳」

「いや、むしろ抉れ……」

目を合わせないように、それでも露骨に口に出すのは、やっぱり女社会だよなあ。

気にし始めたらキリがないので、淡々と無視して望を迎え入れ、「望と珠恵は別なの？」

「あんた、自分がVIPって自覚ないだろ」

昨日今日で御瑞姫になったばかりの、いわば「本当の私デビュー」状態なんだから無茶言うな。

「叶が裏で調整してるから、現場は一緒になると思うけど、今のうちに渡しとく」

「なに、それ？」

望が背中に担いでいたのは、大黒様みたいな巨大な白袋だ。受け取ると、中身は固くて薄い金属製品の集合体で、ガチャガチャと甲高い音がうるさく響く。

「うちの御瑞姫の正装。仮にも最前線に行くのに、そんな軽装じゃ危ないっしょ」

つまり、鎧みたいなもんか。

「でも、私だけ？ 望たちの分は？」

「私らは、危なくなったら逃げられるから。でも、野乃華はそんなわけにいかないでしょ」

そんなものなん？

「まあ、ありがと。とりあえず、受け取ってく」

「あと、これも」

差し出されたのは、桃色の布帯。

「？ 千人針とか？」

「いつの生まれだ、おい。お揃いの鉢巻。百々山組の証っていうか、絆っていうか……つべこべ言わずに巻いとけ！」

喋っていて恥ずかしくなったのか、最後には頬を染めて無理矢理胸元に押しつけてくる。

「勝手に死んだら、根の国まで殺しにいくから」

「あゝ、その時は向こうのお茶菓子用意して待ってるわ」

「んなことされたら、私まで帰れなくなるじゃん！」

あの世の物を口にしたら、この世に帰れないってのは世界共通ルールだからね。

「てか、私が死なないように、肉の壁になるのが、望たちの仕事じゃないの？」

「そういうのは、専用の符とか絡繰に任せてあるから、ていうか、サラリと友達を犠牲にすんな！」

軽くジャブが飛んできて、笑顔でそれを弾き返した。

そうそう、シンミリした空気は、私らには似合わないかね。

「じゃ、また後でね。」

ヒラヒラと手を振って、わざと気の抜けるような声で望を見送って、

「ゴメン……私はみんなの期待に、応えられないかもしれないよ？」

今、その桃色の鉢巻を握り締める。

込める決意は、でも多分、すれ違っていて……だからこそ、より強く、握り締めて。

高野空海と伊奈羽鈴瞳の二人は、索敵情報を叩き台として、現場での最終打ち合わせに余念が無い。

「湖を飲み干したか……なかなか、敵にもおもしろい奴がいるじゃないか」

符を飛ばして上空から撮影した写真には、先回の会戦の折、水責めにて湖底へと沈んだはずの根国路之深痕の黒穴が、くつきりと漆黒の影を盆地に穿っていた。

「周辺自治体への根回しは完了したよ。あと10分以内で、戦場の決戒も締まるわ」

市女笠の中、笠から垂れ下がる投影幕の情報に指先で指示を出し

ながら、鈴瞳は更に、対策本部となったテントの中の机上に、リアルタイムの地図を映し出す。

普段は人も通わぬ原生林。古来より異界と恐れられ、地元猟師すら足を踏み入れない、曰く付きの地だ。それもそのはずで、太古の国譲り以来、何度も戦場となってきた第一級警戒点であり、御瑞姫をはじめとする巫女のみならず、国津神にとつても、馴染みあると言つて過言ではない、”いつもの”戦場が、机上に再現されている。

「齋宮様の調停は？」

「お婆の寄合からの返答はまだやわ。ま、今更威力偵察つてオチもないやろうけど」

「相手の声明は出ていないのか？」

「御瑞姫4人を幽世に閉じこめておいて、身代金の要求もなかった相手やよ？ 限定戦場の掟に従つてくれとるだけ、マシつて思つた方がええんやない？」

「……前回、掟を超法規的解釈して、戦場を水で埋めたのはこちらだしな。敵さんにしたら、仕切直しといったところか」

「けど前の時は、あれ以外には防ぎようがなかったし……けど、今回はうちらも負けてへんよ？ 辛酸も苦渋も味わつたし、きつちり外線の仕事をするだけやん」

鈴瞳の指が踊ると、立体スクリーンと化した机上に、敵の予想進路と味方の配置が、三次元映像となって現れた。

「となると結局、いつもの要求か。里山を始めとする山の文化の継承、放置し放題の野生動物の一定の秩序化、休耕となつて荒れ果てた田畑の復活、ついでに祖霊信仰の復活。まったく、そういうのは日本政府に書面で送りつけてやってくれ」

「ま、道真公しかり、豊臣時代末期や幕末の大地震しかり、政情が不安になると地震や噴火で大暴れして、人心を正してきたのが、崇り神としての大国主はんの本分やもの。お天道様から見下ろしてるだけで、神託のひとつもくれない天照はんとは大違いやわ」

「我々がそれを言うかよ。ま、慢心しきつた今の人類、神の裁きの

「一つや二つ、落ちた方が身のためとは思うが……残念、それを防ぐのが巫女の勤めだ。心身清めてお告げを聞いて、聞ける要求だったら呑むし、無理難題なら力技で神殺す。それが昔話の常道だ。相手が言葉でなく、数で恫喝を押し通そうと言うのなら、こちらも相応の礼で迎えねばならん。」

「で、どう展開するか、だが」

空海は、机上に展開されている架空の陣型に触れながら、垂れ幕の向こうで演算を繰り返している鈴瞳を見る。

「奇策師鈴瞳としては、どうでるかな？」

「誰が奇策師やねん。常勝の獅子って呼んでもらいたくて、ケレン味たっぷりな策を連発するのは空海はんの方やん。うちはせいぜい、不敗の魔術師として、王道の定石を打ち続けるだけやわ」

「定石、ね」

空海は口元を笑みの形に歪めつつ、湖水の水が抜けて盆地のような泥地となった湖底に、自軍の駒を両手でテキパキと配置すると、

「これでいいだろ？」

満面の笑みで胸を張る。

「……全軍一カ所にまとめてどうすんのん？ 外線軍は包囲殲滅が鍵や言うつのに」

「だから、あえて常道を外して敵の出鼻を挫くよ。地上に頭を出した瞬間に、全軍総攻撃で敵を壊乱させ、その混乱から回復をさせずに、周囲の山を発破して土砂崩れさせて生き埋める、でどうよ？」

電撃戦だろ？」

「ほんもんの電撃戦は、相手の指揮系統が混乱している隙に、更に戦線を進めて、それを連続して続ければ相手は手も足も出さず暇なく敗走するつつう、あくまで理想論やろ？ それだって、味方の情報通信網が完璧で、戦車の機動が十全に機能すればっていう条件下での話であって……連合軍の被害を省みない圧倒的な物量に押し切られたっていう、どっかの宇宙の独立戦争みたいな結論」

「鈴瞳、それ逆。どっかの宇宙戦争の方が後だバカ。んだよ、窪地



なんてどうせドロドロで再生不可能なんだから、埋め立てちまえばいいだろ」

「安全に思い通り発破する方法が確立されてたらの話な。どんな山奥だろうと、生態系つてのは繋がってんやで？ うちらがバカやった見返りに、一般市民に影響が及んだら、今度こそ特別費削られるわ」

「お前、今朝自分たちが何やったか、棚上げしてるだろ」

「あれとは規模がちやうやん。第一、あの時吸い上げた土砂は、全部現地に戻したし……そりゃ、元通りとは言わんけど」

「んじゃ、どうするよ、魔術師さんは」

否定されるのは想定済みと、空海は一步、戦図から退く。

「もう、遊んどる暇なんてないんやで」

それでも鈴瞳は、市女笠を取ると、自ら駒を配置し直した。

部隊は5分割。

あらかじめ情報は埋め込まれていて、鈴瞳の指先に反応して、それぞれの駒に担当者と担当社の名前が連なっていく。

「限られた人数でやる限り、こうするしかないやろ」

「理に適いすぎて面白くないな」

「味方を驚かすために戦術考えているわけやないから」

空海の不満に苦笑を返して、鈴瞳は周囲を見回した。

場を集っているのは、現地で監査チームを組んでいた地元の戦乙女たちと、彼女たちを束ねるために集まった、元御瑞姫らである。

「作戦を説明します。全員、集まってください」

鈴瞳の、糸のように細い瞳が、一瞬煌めきを放つ。

女たちは真剣に頷くと、餌に飛びつくペットのごとき勢いでテールへ群がり、逐一指示を受けていく。

「机上の空論なのは変わらないがな」

一人、その光景を面白そうに眺めながら呟く空海は、

「さて、敵はこちらの思惑通りに動いてくれるかな？」

予言とも不安ともつかぬ言魂を残して、無人兵として活用できる

呪符を作成するため、テントの外へと静かに踏み出していった。

まだ日も昇らぬ午前4時。

仮眠以上には眠れなかった私の目の前を、

「なぜ、電線」

正確に言えば、電線を巻き付けたドラムを持って、巫女がまだ、右往左往している。

現場は、最終仕上げを迎えて、混乱を通り越して、阿鼻叫喚を地でいっていた。

環境保全地域にでも指定されているのか、信じられないほど原生の姿を留めている山林は……しかしなぜか人の手によって通路が縦横無尽に網の目を張り、所々に塹壕が掘ってあり、銃眼を施したトーチカが築いてありと、明らかに昨日今日の突貫工事ではない歴史を匂わせて、初めての私を圧倒する。

戦争準備に追われて特に多忙なのが、食糧班のようだ。テントに運び込まれた物資はほとんど各部所へ散っていった、その手慣れた様子から、今日のような襲撃が初めてではないという事実が、今更のように実感できる。場合によっては本日最後の食事ともなり得るわけで、その真剣さは、思わずたじろぐほどだ。

「でも、なぜ電線」

ことほど左様に無線技術が発展している現代に。しかも巫女には霊話という特殊技能もあるだろうに。

「技術が発展すれば、それにまつわるアンチも発展するのは常識っしょ。ジャミングかけられたら一環の終わりだよ？ 私ならミノフスキ 粒子まき散らすけど」

「だから、有線通信？」

「こそ、ま、半分は姉御の趣味だろうけど」

姫子が、両手に握った配給のおにぎりを交互に口に運びつつ、解説を続ける。

「にしても、敵も物好きだよ。3年前、姉御は敵を盆地に集めて、溜めておいた前日に降った雨を一気に放出して、一面を湖に変えちゃったっていうのに……それを全部地下で処分して、再戦を挑んでくるなんて」

「いやいやいや、それは恨まれて当然でしょ」

どつりで、地形がおかしいと思った。戦場を取り囲む10ばかりの山々の下半分が、なぜか立ち腐れを起こしていて、窪地が泥地になっている理由が納得できる。

そんなことばかりしてるから、恨まれっぱなしなんじゃないの、私ら？

「でも、3年前でしょ？ 安倍姉妹も佳紅矢たんも小学生だったし、慧凛たんは御瑞姫ですらなかったしねえ。のののんだって一般人で、これで御瑞姫半減つしょ？ 多少の無理は仕方がないと思うよ？」

「姫子はどうなのよ？ あんたなら、中学生でも十分戦力だったんじゃないの？」

「残念。その時は地元で鬼が暴れてて、こっちまで手が回らなかつたんだよねえ」

本当、こいつだけ住んでいる世界が違うんじゃないだろうか？

一体、どんな土地で育ったら、こんなおかしな常識が身に付くんだろう……知りたくもないけど。

「だから、3年前の主戦力は、姉御と鈴姉だけでね？ 二人とも高校生で、御瑞姫としての経験も浅かったから、もう苦労したそうさ……姉御が右目やられたのも、その時って話だし」

3年前……私は中学1年か。思いだそうにも忘れてるほど、恥ずかしい記憶に満ちた水色時代。けど、中学時代に会得した知識の数々が、今の私を落ち着かせてくれているのは事実。

もし、3年前に強制召喚されていたら……無理無理無理無理、絶対にノウ。

そもそも、こんな時代錯誤な合戦が現実存在するなんて、夢にも思ってたし。

妖怪と戦うだけでも十分、遅れってるうと思つてたくらいなんだから……でも、叶たちはその頃から、こういう世界に足を踏み入れていたんだよなあ。

叶は、少子高齢化を理由にしていたけど、単に現実にもぐわなから、巫女のなり手がなくなつたつて考えないのかなあ。それとも、幼少時からこつちの世界に染まつちゃうと、そういう思考回路すら形成されないんだろうか？

ま、おかげで、今も私は、この世界で言いようのない阻害感を得ているのだけれど。

これは……天津神の魂とは関係ない隔たりだよな。

そもそも、天津神の娘としての私は、一体この状況で、何を為すのが一番”らしい”のだろう？

やっぱり、天照大御神の御威光を背負つて、地を這う国津神を有象無象の区別なく焼き払うのが、国を平らげるための正義？

それとも、順ろわぬ神すら抱擁して、大和王朝の懐の広さを示すのが、後々の治世のためには必要なのだろうか？

……でも、問答無用で叩き潰してきたのが、大和王朝だからなあ。つて駄目だ、なんか今、国津神の味方ターン入ってる。今朝あんだけ苦しめられたにも関わらず。

「ほい、ののの。御瑞姫の召集かつたから行くよ？」

「いたいいたい」

思考の渦に捕らわれていたら、耳を思いっきり引つ張られた。

「迷つてる暇なんてないつつつたつしよ」

「んな事言われても……こつちは昨日まで一般人だつたつつの！」

「それは、単に、知らなかつただけだつて。こつちは血と汗にまみれて、誰にも感謝されない戦いに身を投じてたんだからさ……ようこそ、くそつたれな職場へ」

「だあ、わかつた。わかつたから耳放せ、バカア」

途中でなんとか姫子の手を振り払つて、テントに行くと既に会議は始まつていて。

空海女史、鈴瞳さんを上座に、戦図を挟んで右側に安倍姉妹が、左側には名前を知らない少女が二人。たぶん、手前が慧凜ちゃん、奥が佳紅矢ちゃんだろう……手前の娘は、一度テレビで見たことがある気がするから。

そして、私と姫子が戦図の下手に位置取り、挨拶も抜きでいきなり、戦術会議は始まった。

「え」と、各自の持ち場は戦図を見てもらうとして、役割を説明するわ。

まず、空海はんとうちは、指令塔として本体の戦乙女を率いる。これは敵の突進を受け止める壁の役やね。

で、姫子はんと、慧凜ちゃん。二人は左右に分かれて、打撃部隊として、敵部隊に食いついてもらう。遠慮なくぶち上げていいかね？ 敵は後ろからドンドン補充されるから」

「質問」。呪符や神力や食糧の心配はしなくてもオケ？」

姫子の心配はもつともだろう。

「安心して。人は割けんけど、二人には侍従型の屍鬼しきをつけるから。欲しい物はなんでも言いつければ、即座に動くよう手配する」

「両手が塞がっても、食べさせてくれる？」

「……どんな状況を想像してるのか分からんけど、食べる余裕があれば、命じてみれば？」

よしよし、と満足げに頷いて、姫子は質問を終えた。鈴瞳さんは気にせずに続ける。

「で、明はんと、佳紅矢はん。二人は左右の山の稜線に分かれて、長距離射撃で全体の援護を頼むわ。狙うは前線よりも、後背部を重点的に。前線を潰しても、後ろから補充されれば無限地獄やからね」  
「質問します。普通は前線の援護をするのが、砲撃部隊の役目では？」

安倍家の中学生次女は、相変わらず無表情で事務的に言の葉を紡ぐ。

「普通ならね。けど今回、こちらは前線を押し進める必要があまり

ないんよ。むしろ持ちこたえる事が肝要。あと、忘れてもらったら困るけど……敵が反対方向に進路を変えたら、その時は明はん達の砲撃が最前線やからね？」

「質問を重ねます。敵がこちらの部隊に向かってくるといった保証は？」

「裏をかかれる心配は、確かにあるよ。だから、晴はんと野乃華はんを、遊撃部隊として独立させてある。

二人は、ほぼ単独で動いてもらうことになると思うけど、だからこそ、高速での機動を発揮できると考えてる。

突出し始めた敵部隊の頭に噛みついて、相手の軌道を変えるのが主任務やね」

手を挙げざるを得なかった。

「具体的な指示と支援は？ 敵がこちらの意図に反して突出をやめずに包囲された時の保険はオーケー？」

「そうならんように、二人の行動には遠距離砲撃を同期させる。また、安倍家の絡線を優先的に配備するから、万一の場合は盾として利用してくれて構わんしね」

戦図を見下ろして思索する。

「予想される……行動範囲を見せてもらってもいいですか？」

要望には無言で応えられた。私と晴を示す駒が、窪地を囲む全域を担当区域として地図を各色で埋めていく。

「つまり……いつでもどこでも縦横無尽に臨機応変に対応しろと？」

「ま、退屈はしないよね」

晴の声にも不満の色が乗る。どう考えても、これじゃ私たちが貧乏くじだ。

「この配置の根拠は？」

「適材適所だ」

空海女史は一刀両断。抗弁は無意味な空気が濃く漂う。

「速度と威力のバランスを考慮すると、姫子を遊撃に回すのは、効率の面から考えてもつたいないしな。慧凜は問答無用で固定砲台だ

し、明が動き回るには茶吉尼が邪魔……つまり、消去法だな」

適材適所言った口はどこ行った？

「まあ、野乃華の場合は得物が巨大なことに若干の不安が残るが……若さでカバーできるだろ」

「それ、むしろ姫子の方が、小回り利いて便利なんじゃ？」

私は正論を吐いたつもりだけれど、

「手綱を取れない相手を野に放つのか？」

相手の方が説得力があつて轟沈した。

「おお、信用されてるよ、あたし」

喜ぶなバカ。それは理解されてても、信頼されてないってことだろ。

ま、でも私でも同じようにするだろうな……姫子が集団行動になじめるとは、とても思えん。

最適でなくとも、妥当な判断か。

どちらにしろ、

「敵が、こちらの思惑通りに動いてくれる勝算は？」

「三分といったところだな」

絶望的ではないが、樂觀はできない、といった所か。

「この符に、逐次作戦指示を伝えていくよつて」

配られた符を見ると、表面に乗った墨汁が電波を受信して、自由に文字を形作るシステム。と、眺めている間に動き始めた符が、しやくとり虫のようにこちらの手を這ってきたかと思うと、勝手に肌に同化してしまった。

「うわっ、きもっ」

無くす心配はなさそうだけど……ちゃんと取れるんでしょうね。

「で、作戦決行時刻は？」

質問はいきなり断たれる。

「御瑞姫様っ！ 湖底に変化が！」

外からの叫びに、全員がほぼ同時に飛び出した。

白く染まり始めた東の空をバックに、目撃したのは、天空高くそ

びえ立つ8本の生足。

30メートルはあろうかと言う巨大な生足は、しかし永久脱毛でもしたのか、すね毛一本見あたらないモデルのような滑らかな御美脚で、

「あれ？ だいだらぼっちって女神いたっけ？」

シンクロナイズドスイミングを想起させる綺麗なシルエットに一瞬失われた現実感は、

「総員！ 対衝撃防御……！！」

空海女史の、腹の底から放たれた警告と同時に現実となって襲いかかり、8脚同時の足踏みは、衝撃波を伴って大地を踏み抜き、打ち上げられるような震動が脳天へ突き抜けて、開戦という覚悟を、容赦なく一帯にぶちまけた。



#### 第四帖 萬神騷威く八十萬の神の凱旋か零落く 式（前書き）

前回までの荒筋

氷河期に海峡を歩いて渡ってきた大陸系狩猟民族と、黒潮に乗って沖繩・大隅半島に流れ着いた漁獵民族、そして東シナ海經由で稲作を伝えた農耕民族が複雑に交配を重ねることで、日本人は出来上がった。

大木信仰と狩猟採集を生活の基盤としていた出雲系を代表とする縄文人たちは、農耕と鉄文化の獲得で人口を増やしてきた筑紫系弥生人たちに徐々に呑みこまれ、稲作の東進は各地の狩猟民と衝突を繰り返しながらも、順調に進捗。

神武天皇の東征から始まった大和王朝によつて、日本の農耕化は国家事業として加速され、地方との衝突は激化。農耕文化を拒む民族は『土蜘蛛』などと敵視され、武力制圧されて山へ山へと追い込まれていく。

それに平行して、各地豪族の姫は『神の血を分ける』という名目で大和に集められ……天津神を奉じる祭こそが国家祭祀として、各地方へ拡散。

世代を重ねることで朝廷の教えは日本各地で定着……しかし尚も、各山などを中心とした村々の信仰は根強く、中央の目が届かない地方では、古い神と新しい神が複雑に交わって共栄関係へと発展。

ここに更に、中国から仏教が伝来し、天皇が信仰に嵌ることで日本の宗教観は複雑化。最初こそは、神社の片隅に神宮寺として設置された寺院だったが、朝廷の後ろ盾を笠に着て増長。日本の神は仏の卵である、などと詭弁（本地垂迹）を弄して神道を呑みこもうとしたが、神社側の激しい抵抗にあつて神仏習合という形で手打ち。

時に荒ぶり、時に崇る日本のカミは、生活に密着した今生の関わりだったが、来世での救済を前面に打ち出した仏には実害がなく、祈りに応じて幸福が保証されるという手軽さ（それは日本の曲解だ

が)もあつてか、急速に民衆へ伝播。

かつての素朴な山岳信仰も、獵師が追い詰めた獣が仏に化ける、という開山伝説の後付で仏教へと塗り替えられ。

別々に信仰を受けていたはずのカミと仏も、いつしか交じり合つて複数の名を持つ存在へと変化。

外来のモノであつたはずの仏は、土地に根付いてより信仰を篤く集め、人々は明治時代になるまで、神と仏を分け隔てなく、崇めるようになった。

……そんな在野の信仰の変遷の裏では、伊勢神宮を守る巫女である齋宮を頂点とした、御瑞姫たち巫女軍による国津神の駆除が粛々と行われ、天津神の巫女による平定が常態化。しかし、根の国に墮とされた国津神の抵抗はしぶとく、全国各地で開けられた根国路乃深痕での衝突は一定周期で繰り返され、歴史の裏側で、今日まで、連綿と攻防を重ねてきた。

そして現在、月見里野乃華は、七星剣のカミであるヤツカを押さえ込み、見事神器の主となったが、同時期に根国路乃深痕の蠢動が発覚。御瑞姫たちは休む暇も与えられず現地へと召集され……作戦会議の夜が明けた。

#### 第四帖 萬神騷威く八十万の神の凱旋が零落く 貳

8脚の足踏みは、見事だった。

奇襲によつて、こちらの陣営を乱し。

急激な震動で一部の地表が液状化、表層の樹木を伴つて窪地に流れ込み。

結果、戦場のイニシアチブを掌握。

戦陣を展開しておいて、相手の奇襲に文句を言う権利はない。

むしろ、相手が穴から這いだして、窪地に陣形を整える時間を与えたかと言えば、Noだろう。その前に徹底的な砲撃を加えて、出る杭は打ちまくり、相手の戦意を挫く策を取るはずで……そりゃ敵だつて、この地形の不利は知りすぎるくらい知っているんだから、何らかの策は弄するわな。

故に、こちらも即応した。

「いきなり反対側っ！」

右手甲に、さきほどもらったばかりの符から文字が浮かび上がり、盆地の反対側に行けと、早速の無茶ぶりだ。

それでも、走り出さないといけない。

七星剣を取り、初めて纏った鎧を鳴らして、視界にソートされたヴァーチャル矢印の示す方向へ、全速力で山肌を蹴つて、行く。

混乱から立ち直つた巫女たちは、反撃の砲撃を窪地にたたき込み始めていた。

怒声がそこかしこで上がり、応ずるように爆音が連続する。昨日一日でこんなに展開を終えていたのか、と驚くと同時に、行く先々で通路が地滑りのために分断されていて……単なる足踏みとはいえ、戦略的效果はなかなか天晴れと、賞賛せざるをえない。

「野乃華っ！」

悪路を抜け、孤独に山道を飛び跳ねていたら、いきなり横合いから殴るような声が飛んできた。

「望っ？」

「あんた！ 一緒に行くって約束してたでしょ！」

んなこと言っただって、あのタイミングで、望を探してる暇なんてなかったんだもん。

全速で行くコチラに追いついて、望はしかし、それ以上は聞かなかった。息が乱れているのは、よほど無茶な走りをしてきたんだろう。

だけど、こっちはまだ神寄をしていない。危急の事態が生じたら、問答無用で加速をいれる必要があるだろう。だから、

「足手まとい！」

「…………つよ…………がりを」

ばれてるし。

とは言え、望をフォローできるほど精神的余裕はない。本当に駄目だと判断したら、彼女の方から折れるだろうと信賴して…………さらに速度を追加した。

「ちよ…………」

望の抗議は置き去って、視界の端々、樹木の隙間から見える窪地に、敵が展開を始めているのを見る。

それに対して、こちらの山から茶吉尼の砲撃の音が、あちらの山からは極太の矢杭が撃ち込まれるのが見えたが、染み出した敵の影を押さえ込むには圧倒的に量が足りない。

『ていうか、あれ、決戒のための砲撃だし』

叶から、靈話による解説がきた。

『杭と砲弾を神力で結ぶことで、檻を作り出して相手の行動を限定すんのよね。ほら、一昨日も射ってたでしょ、あのぶっとい楔矢。あの矢を地面におっ立てることで、籠かごに刻まれた祝いが発動して、カミを縛る波動を発振するの』

『じゃ、私がわざわざ回り込んでいるのは、どんな目的があったの指示なわけ？』

『…………保険？』

なんつうアバウトな。が、右手甲の指示は揺るがず、視界に映るヴァーチャルな矢印は、相変わらず前進を促している。

まだ接敵はない。

しかし、声は届いている。

雄叫びは戦意の高揚を呼ぶ。ウォーは、戦場での咆哮を語源にすると言われているほどだ。獣が主力をなす国津神であれば尚更、魂を震わす叫びが戦場のあちこちで放たれ、共鳴を呼び、轟き渡る。

音に対するは、大音量しかない。

敵に応じて、巫女側から、太鼓や法螺貝の低音が押し下る。遠くまで届けるなら金属的な高音が適当だが、肌すら震わせる低音に期待するのは、戦意の挫きだ。

『こつちの音色には、神力の祝いが込められているからね。特に珠恵の波動を嫌がるカミは多いし、逆に巫女は高揚するし、一石二鳥だよね』

故に、敵も黙ってははいない。

音源を潰すために、実力行使にでる。

具体的には、湖底の泥を掬って、楽団の位置を見当つけて、やたらめったら、投げ始めていた。

「うわあ、ガキの喧嘩じゃないんだから」

『遠目に見てると楽しそうだけど、あの泥の固まり、平気で10キログラム越えてるからね……まともに当たったら骨折するよ』

あ、よくよく比率を考えたら、泥投げてるの巨人族じゃん。なにげに泥田坊が泥弾を形成して供給体制作ってるし。ぬぬぬ、侮れぬ。だから、迎え撃つよね、当然』

まるで叶の言葉が号令になったがごとく、三方向から泥弾撃墜の射撃が走る。

空中で泥を散らせるのは、佳紅矢かくやの射と、明あかりの砲、そして晴きよの銃だ。

「あいつ、もうあんなところに」

正反対の方向に向かっていた晴は、窪地を挟んで、こちらを上回

るペースで戦場を駆け抜けていた。その上で、正確無比な射撃を披露して、仲間の被害を食い止めている。

……性格には難あるとしても、御瑞姫としての仕事は一流にこなしてんだなあ。

それも、中学生なのに、だ。もっとも、安倍家つてのは生まれながらに御瑞姫になることが決まってる家柄らしいから、一般的な感覚じゃ測れないところがあるとしても。

「もう、全部彼女らに任せちゃっていいんじゃない？」

そうも言いたくなる。なにせ、こっちは昨日今日で戦場にかり出された素人だ。妖怪相手なら多少は良心の呵責が緩むといえ、それでも殺し合いの場にノコノコ顔を出すほど、空気が読めないわけじゃないし……むしろ、足を引っ張りかねないわけで。

だってさ、いきなり日本を守るために戦えって言われても、その、現実感乏しいじゃん？

『その辺、どうよ、神樹？』

『ふえ？ 今までずっと無視しておいて、いきなり前振りなしの同意求めますか？』

『うん、ごめんごめん。素で存在忘れてた』

『抑揚なしの棒読み謝罪ひでええええ！』

記者会見とかじゃよくある事じゃないの、心ない「心からのお詫び」なんて、うん、日本人の習慣習慣。正面衝突を避ける処世術つてやつ。

『そんな悪しき慣習は滅びるべきです』

『んなこと言ったって、私も一応建前上は人間の味方だし、日本の美德っていうか伝統は守らにやだし？』

『建前つて……じゃ、本音は？』

『セレブモリア充もDQNもニートも売国もLRウイングも、歴史を疎かにする日本人なんて全員滅びればいいのに』

『……ある意味バランス取ってる？』

誰も知らない戦場に送り込まれて、私たちだけが一方的に貧乏く

じを引かされ続ける現状の日本なんて、大っ嫌いだ！ だいたいそもそも、日本中の至る所に水田が広がっているという景色そのものが本当は『不自然』なの分かってる？ 森林を切り拓いて川の流れを変えて自分たちの都合のいいように環境を弄り倒して、里山って言えば聞こえがいいけど、実際は枯れ枝や枯葉を堆肥や燃料として村へ持ち出しちゃった結果、山の中の養分が少なくなってアカマツしか生えないような低栄養土にされたから動物達が寄り付かなくなっただってというのが実情で……おまけに戦後は戦後で、杉と檜が売れるからって言って広葉樹を切り倒して針葉樹ばかりの山にしちゃって、材木が売れなくなったら用なしと言わんばかりの放置プレイで山が荒れたって、そんなの人間の勝手であって動物達が怒るのは当たり前じゃない？ なのになんで、私がそんな頭の悪かった大人たちの尻拭いをするために、血と汗を流さないといけないのよ！

『いや、本音って………』

おいておいて。

『いや、本………』

おいておいて。

『………』

おいておいて。

『沈黙すら許されない!?!?』

『神樹のせいで話が脱線しまくりじゃない』

『結局単なる八つ当たりだ、これええ!』

分かってるんなら黙って八つ当たられる。

こっちや、考えれば考えるほど、誰のために戦ってるのか分かんなくなんだよ。

いや、だからこそ姫子の助言か。

いつそ戦を楽しんでしまえ。仕事と割り切ってたら心がもたないぞ、と。

それも処世術だよねえ。自分たちの戦争こそが正義だなんて断言

できるほど恥知らずじゃないし、聖戦だって昂揚するには圧倒的に信心が足りないし、いつそ開き直った方が楽にاندらうし。

『野乃華っ！ 進路変更！』

おう？！ 矢印の向きが90度変わった、上方へ。

『敵の航空戦力が出てきた！』

前方の立ち木にジャンプして、幹に両足で着地することで急制動をかけ、

「あれか」

戦場を見る。

泥弾が迎撃されたことで、敵は戦術を変更してきた。天狗や怪鳥による航空戦力群でもって、こちらの砲撃部隊を直接潰しに来たって事か。

「望、今度は上に行けって」

「人使い荒すぎだろ、JK」

だから、ついてくんなくて助言したのに。JKって女子高生の略だよ、常識的に考えて。

「こつちの上ってことは、明あかりか！」

樹齡100年はあるつかというブナの大木が、私の衝撃を吸収して悲鳴を上げ……だが復元力を逆手にとって、一気に空高く跳び上がる。

「バカ、置いてくな！」

望の文句はもつともだ。

酷いことしてるって自覚もある。

けど、こんな過酷な仕事……分かち合わされた相手が不幸過ぎるし。

『神樹、神かみより寄っ！』

『っす！』

慣れてしまった神人合一。

取り込んだばかりのヤツカの荒魂が、私と神樹に挟まれて暴れ回るのを感じる。同時に、和ヤツカが、それを中和していく過程もリ



アルに伝わってきて、

「行くか」

琥珀色の輝きが、肌を内から輝かせる。

神を羽織るでなく、神に羽織る、私だけの神奇。

世界は即座に色を変える。

私が変わる。

飛ぶように、木々を蹴って跳んでいく。

頭上騒がしくなってきた。

人の喧噪と、鳥の鳴き声が、不揃いなリズムを刻んで空気を削りあっている。

視界は、急に開けた。

左腕が大砲のままの茶吉尼に、天狗たちが頭上から群がり、戦乙女たちが撃ち落とそうと懸命に祝詞を上げている。

「知流姫（明）っ！」

「稲田姫（野乃華）？」

明は、茶吉尼のコントローラーたる水晶球で、必死に一羽の天狗と格闘していた。その天狗を七星剣の腹で思い切りぶん殴り、

「今の内に左腕を！」

「終わりました」

言う間にも、見上げる茶吉尼の左腕が虚空へと存在を薄くして…  
…間髪入れずに白板が4枚、生物のようにウネりながら、空中の天狗たちに突き刺さっていく。

それだけで、場の空気は一変した。

鳥の化け物のような怪鳥らは、戦乙女が放つ符によって羽根を散らし、天狗たちも茶吉尼の一撃を受けては、上空へと待避していく。  
「続きを！」

「やっています」

明は感謝も謝罪もしない。ただ、やるべきことだけを為す。茶吉尼の左腕には即座に大砲がセットされ、こちらの戦意高揚楽団への泥砲弾を、片っ端から撃ち落とす作業が再開される。

『しばらく、この護衛でいいの？』

が、叶からの応答はない。

右手甲にも新たな指示はなく、視界の矢印も不動だ。

まさか、本部に何かあった？

見れば、上空の天狗たちは散開し、異なる戦場へと翼を傾けていく。

「ちょっと借りるよ」

返事を待たず、私は茶吉尼を駆け上がり、

「だ、茶吉尼を踏み台に！」

苦情もスルー。地上6メートルの展望台上から眼下を眺めれば、

戦場の半分ほどが容易に視界に収まって、

「向こうが苦戦してる？」

戦場を挟んで反対側の峰に烏たちが群がって、漆黒に空を埋めていた。矢の射も途絶え、おまけにコチラにいた天狗たちが増援に向かっている。

「大丈夫です。加流姫（晴）が向かっています」

地上から明の叫び。

「それより、窪地で相対が生じています」

「ん？」

言われたまま視線を下げれば、窪地は既に、黒山のカミだから。

その先端が我が本体へと伸びつつあり、

「あ、爆発した」

それが姫子が慧凜ちゃんか、まるで間欠泉のごとく、地面ごと妖怪たちが数匹、勢いよくぶち上げられていた。

「派手だね、どうも」

一番高いモノで10メートル、大きく放物線を描いて同胞の群に落ちていく敵さんには同情も覚えるけど、

「降りて」

いきなり、茶吉尼が私を振り落とした。

「うおっ?!」

急な足場の消失に無重力を覚えた眼前は、しかし陰ったかと思つと、鋭い爪を輝かせた鳥の足が一閃、虚空を裂いて上空へと引き返つていく。

……ひよつとして、危機一発？

受け身をとつてクルリと回つて体勢を立て直し、見上げた空にいたのは、特大の怪鳥。

天狗たちは諦めて反対側に去つたんじゃないかと、大物に場を譲つただけだったか。

鳥類にあるまじき、翼長のみならず首と尾羽根まで極端に長い怪鳥は、重力を腕力でねじ伏せたか、奇怪な軌跡で宙を舞い、間抜けな表情を浮かべては『以津真出エ』と震える声で鳴く。

「あれはっ！ 怪鳥・以津真出っ?!」

いや、明さん、こんな時ばかり感情籠もつた演技じゃないから。それが礼儀と教わりましたから」

「……全つ然、余裕だよ、君ら」

「この世に不思議なことなんてありません」

「……月のモノには狼狽えてたくせに」

ボソリと呟いた瞬間、ゴツソリ空間を穿たれた……茶吉尼の右腕に、主に私の頭部が位置していた座標を。

「あ、ああああ、危ないじゃない!」

「おや、どうしました、稲田姫？ フレンドリーファイヤーでも名誉の戦死つて扱いで報告しますからご安心を」

だれがそんな名誉の心配をしますかっ!

「古伝照合、ライブラリチエック 個体名、なつほ 夏羽と呼ばれるモノです」

ケロリと明はこちらを無視して、視線は頭上へロックオン。

「稲田姫は、早々にこの場を離れなさい……あれは、場を乱します。一体何を、と聞く間もなく、現実が動き出す。上空からの声が空間に満ちるや否や、茶吉尼がいきなり稼働停止に陥ったからだ。

『れ、霊場の法則が乱れて』

「ジャミングかよ!」

すでに明は茶吉尼へと駆け寄り、水晶球をダイレクトに接続することで、巨大人形の制御を取り戻している。

「この場は凌ぎます。貴女は行くべきです」

「けど！」

茶吉尼の肩によじ登り、こちらを見下ろす彼女の瞳は真剣で、

「足止めが彼らの目的です。意図に沿ってやる義理はありません」

正論なれば黙るしかない。

本部からの連絡が途絶えている今、ここに長居をするのは損失だ。おまけに、

「稲田姫、本部から直電です！」

空海女史がこだわった、有線電話が私を呼ぶ。こういう事態を見越していたのか、受話器を受け取ったコチラへの命令は単純明快。

「離脱しろ。貴様の仕事は別にある」

「具体的にどこに？」

「追って指示する、今は動け」

全く、人使いが荒すぎる。

見上げれば、巨鳥と巨人の怪獣大戦争が繰り広げられていて、

「……確かに、付け入る隙もないかもね」

イキイキと茶吉尼を手繰る明を残して、再度、山中へと走り出す。

世界が、線を引いて流れていく。

後方へ、後方へと、省みられることもなく。

急な斜面を転がり落ちるように移動しながら、でも私は、後ろ髪を引かれるような粘りを、ずっと感じていた。

山が、喜んでいる。

カミたちが、この戦を、悦んでいるからだ。

古い山だ。巫女による要塞化処置が所々施されているとは言え、生活感のないそれらの設備はササや苔に呑み込まれ、むしろカミガミの隠れ場にすらなっている。

そんな、原生の姿を留めた山が……はしゃいでいる。この戦を。天津神を奉ずる巫女たちと、国土の奪還をはかる国津神たちの必死の攻防を、まるでイベントか野球観戦のような軽いノリで、浮かれている。

なんだ、この違和感？

国津神は、土着の信仰神のはず。

大和王朝によって服従を命じられ、時には武力制圧されて地に封じられた、妖怪たちの大元のはず……この山のカミガミは、そんな国津神たちの同属、もしくは母胎じゃないの？

確かに、山の精霊たちには特定の名前がない。歴史があつたとしても村単位の崇拜がせいぜいで、彼らはどちらかという野生の動物に近く、感情はあつても知性は希薄で、静かに人々の営みを観ているだけの傍観者。人への干渉は悪戯程度で、本気で崇る力は無く。私はずっと、そんな彼らを、国津神の原形だと思っていた。素朴なカミガミだからこそ、系統だった信仰を持ち、組織化した神道によって取り込まれて、名を与えられ崇拜を集め、徐々に力を得たのだと考えてきた。

もつと言えば、カミという存在を、天津神と国津神という、単純な二択で捉えていた。

なのに何故 この山のカミガミは、この戦争を、まったくの他人事として楽しんでいる？

いや、むしろ、戦という荒ぶる場を歓迎し、数多の存在の跳梁跋扈を、まるで祭りのような高揚感で無邪気に受け入れている。

それはまるで、国津神・天津神という区分さえ関係ない……どんな系統にも属さない無関係の第三者のような、けれど確かに存在し、この国土に遍く広がり……私と日々語らい、共に生活してきたのに……その実、あらゆる世界から見捨てられ、忘却の彼方に押しやられていたような……

「あ？ 野乃華！」

「間が悪いなあ、あんたは」

思考の渦に呑み込まれ、ほとんど反射神経だけで山道を飛び跳ねていたら、途中で望がバテていた。

「執念深さだけが売りなんでね……急いでどうしたの？ 何か動きが？」

「逆。邪魔だから他に行行って追い返された」

まあ、嘘ではない。

「そりゃ、ちようど良かった。さっきから、野乃華と連絡がとれなくなっただって、叶がヒスっててさ」

『ヒスってないわよ！』

「ああ、夏羽とかいう怪鳥のせいで、山頂一帯がジャミングされてたせいだね。盆地じゃ遂に激突が始まったし、そろそろ忙しくなりそうよ」

言う間にも、右手に新しい指令が届く。

「……敵さん、正面突破が困難と見たか、後方から迂回も始めやがったわ。向かわないと！」

「人気者は辛いねえ」

望が立ち上がるうとする。膝が笑っているにも関わらず。

「あんたはお呼びじゃないでしょ」

「肉の壁、欲しいんじゃないの？」

「楯にしたって持ち運ぶのが重いわよ！」

「誰が重いって?! 野乃華よりは軽いわよ！」

瞬間、女の意地が睨みあい……空しくなって即座に停戦。

全く、そこまで尽くされるほど、私に価値なんてないのに。

「別に、野乃華の命が心配で意地張ってんじゃないわ、よ！」

望が気合いで背を伸ばす。

疲労楔ぎの符を一枚、ドンと胸に貼って深呼吸、気の流れを整えた彼女は、

「こつちや、あんたが学校でノホホンしてる間も、死ぬ思いで訓練してきたんだよ。御瑞姫だか何だか知らないけどさ、素質ってだけで活躍されちゃ……この16年の努力が報われないでしょ！」

「はいはい、邪魔だけはしないでよ」

「そつちこそ、頼りないと判断したら、後ろからバツサリよ」  
笑いあうしかない。

さて、じゃ、気を取り直して。

『神樹、ヤツカ、索敵を』

『確かに、軍勢が移動してるっす……振動から察するに、大型四足  
獣』

そうか、だったら。

確かめてみよう。

この違和感を。

長年の疑問。

私の特技。

カミよ。

来よ。

心を、鎮める

気を、巡らせ

一は、広がり

全は、集まる

見よ、遠くを

聞け、近くを

我よ、膨らめ

繋げ、命ちの経

「な、何っ!？」

望がおののく。

無理もない。

私は今まで、これを人前に解放したことがなかったから。

「気を落ち着けて……呼んだだけだから」

「呼んだって、何を？」

「八百万のカミ……今この瞬間も息づき、踊り、人々に知られぬまま自然に溶け込んでいる精霊たち」

瞬間、私の周囲に流れ込んできていた風が膨れ上がって、上昇に転じた。

声が、満ちる。

気が、溢れ出す。

この山に棲む、ありとあらゆるカミが繋がって今、この点へと収束する。

『の姉、何を?!』

「力を借りるだけよ……森羅万象の声を聞き、彼らと望む結果を掴むために」

「……なに、考えてるの?」

具体的に、何かを考えているわけじゃない。

ただ、試したくなつたから、試すだけだ。

私たちが奉ずる天津神。

私たちが封じる国津神。

その、どちらにも属さぬ、古い古いカミが、この地にはこんなに溢れているというのに。

「確かめたいの……何が、正しいのか。ただ、それだけ」

この国の、大和というカタチすべてを、例え否定することになるうとも。

「私には、こんなにもハッキリと見えるカミたちが……」

声を集める、流れを通す、熱いほどのカミの息吹を全身に浴びて、「どうして、無視され続けているのか?」

左足裏から流れ込んできた神力は、左半身を満たすと頭脳を貫き、右半身を暴れ下って、右足裏から再び山へと抜けていく。

通つたッ!

今、私は、この山の一部として、カミガミの中に繋がりに……瞬間、全身から虹色の輝きが、盛大に吹き出して。



ブナの巨木によじ登り、山の主たるツキノワグマは、枝又にこしらえた棚に座り込み、周囲の枝から秋の実りを口に運びつつ、眼下の騒ぎを優雅に高見す。

「来た来た来たあ」

泥沼をラッセルして、

「猪祭りだ、ヒヤッホーイ！」

横一列、怒れる猛進が姫子を押し潰さんと迫ってくる。成長すれば100キロにも達する巨体を短い四肢で加速して、筋肉質な鼻で泥地を拓きながら、猪たちの口元にきらめくは唾液という潤滑液を輝かせた鋭い犬歯。

「フンッ！」

しかし、見据える姫子は怖じ気ない。

構えを一新、脚を開いて重心落とし、半身にて右手を引き絞れば、彼女の両拳を覆う手甲『零』と『千』、紅き霞を立ち昇らせ、迎撃準備完了、口元がクワツと開く。

「甕姫が神代、その一喝は天裂き地割り星墜つる！ 日輪霧散月光  
割断大地鳴動大津波！ 穿ち砕き千切り捻るが我が千手！ 寄らば  
功名怯みて安堵、貴賤なかりき与つは平等、なれど来るなら、ぶつ  
飛ばすっ！！」

装甲が鳴り、符が輝き、排気のために放熱板が開いた右手甲『零』

『初撃臨界』

「瞬撃のお、ファーストオ……」

迫り来る「面」に、「点」が迷わず迎え撃つ。

光凝縮によって物質化させた神力符が零の中で爆散、溢れ出すエ

ネルギーを全て拳の破壊力に変換して、左足を軸に奇転する姫子の拳は、迫る猪の横つ面をぶん殴り、併走していた十数頭もろとも、直線だったベクトルを直角にへし折った。

「爆砕のお、セカンドオ……」

吹き飛ぶ猪の群れをバツクに、更に姫子の舞いは続く。

眼前、開いた空間に右足の踏み込みを入れ、零に追加の指示を下し、手甲の中で二枚目の神力符が炸裂、再撃は、前線を真後ろから追っていた第二陣の顎を舐めるような低空から捉え……ぬかるんだ泥地ごと、数頭を頭上高く打ち上げた。

広がる混乱を横目に、神楽は肅々と、熱量を増して進む。

「獄炎のお、サアドオ……」

セカンドの勢いを得て空中に跳ねていた彼女が、回り回り回って得た遠心力に、躊躇なく神力符による加速を追加、眼下、御瑞姫の狂態を眺めるしかない猪たちの群れの中へ、

「ブラストオオオオオ！」

赤々と燃える流星と化して突き刺さった。ぬかるんだ大地はその一撃に、まるでゼリーのよう大きく凹み、しかし許容限界を迎え、大量の猪たちを巻き込んで、勢いを空へと散らす。

「ぬつはあ！ 遠からん者は音に聞け、近くは寄って目にも見よお！ だが、悪党に名乗る名前は、ないっ！」

動くモノの絶えたクレーターを睥睨し、神代姫子は天に向かって一本指をピンと伸ばした。

静止した一瞬 四方八方から猛初速で射出された鋼糸が、姫子の腕を絡めとる。

「うおっ?! なんじゃこりゃあ！ 硬え、硬えくせにしなやかえ？」

片手を突き上げた不自然な姿勢のまま、身動きを封じられた姫子の耳が捉える、サクサクと細い針で布を突き破るような小気味良い音の連続は、間もなく、八脚にて巨体を木々の狭間に浮かせた、鬼の形相の蜘蛛となって現れた。

「つ、土蜘蛛っ?!」

しかし、その驚愕にフオローはなく、軽業的なバランスで木の幹に脚を突き刺すその蜘蛛の、不気味に膨らんだ腹からヌルリと、蠍のような「アルビズ?!」のような尾状器官が、迷うそぶりも見せずに、囚われの御瑞姫に向かって鎌首を持ち上げる。

餌の豊富な樹上を飛び交うモモンガが、しかし枝の先端に捕まって、ジツと機を窺っている。飛び移るべき樹を見定めるためではなく、人とカミが織りなす騒ぎを、その瞳に吸い込むために。

「狼怖い狼怖い狼怖い!」

「なにが怖いもんかよ。赤頭巾なんて嘘八百。家畜ならともかく、人間を襲う狼なんてのは、狂犬病にかかった奴か、餌付けされて人間に慣れた奴だけだ……そもそも秋津島にや、狂犬病なんて昔は無かったしな」

さかほこ えりん 逆鉾慧凜の悲鳴は、お供であるトラジマに軽々しく流された。

姫子が右翼ならこちらは左翼、彼女が対峙するは横一列に鋭利な瞳を輝かせる狼の群れだ。

かつて日本列島の生態系の頂点を担っていた彼らは、鹿などの大型草食動物のみならず、ニホンザルすら補食し、それによって鹿や猿による農作物の食害が抑制されていたことから、長い間守り神として尊ばれていた。

が、明治期の鹿の乱獲によって餌が少なくなり、家畜保護を目的とした毒物などによる積極駆除も相まって、百余年前の捕獲を最後に、絶滅種の扱いを受けている。その後、大正期から終戦後高度成長期まで、日本人による狩猟は山々を荒らし尽くし、平行して奥山伐採と集中的な人工杉の造林によって、一時は猿すらも、絶滅が危

惧された。その反動か、動物愛護精神の萌芽と材木需要の減退などが重なり、また人口の都市集中によって人々の視線は山から都市へシフト……今や天敵の消えた森山では、鹿や猿、猪が増加の一途を辿り、人里に降りては畑を荒らし、所によって新芽や樹皮を食い尽くすことで森そのものが消滅するという、獣による環境破壊が進んでいる。

群れなし、少女を取り巻く彼らにとって、自分たちを絶滅に追い込みながら、山の荒廃に目を向けない人間は、憎悪の対象なのだろう。丸く陣して距離を埋めようとしない統制された動きながら、その瞳には隠せない殺意が宿っている。普通の少女であれば、その殺気だけで失神してもおかしくない、それほどの覇気。

が、すでに慧凜は神寄、臨戦態勢。白く纏った霞は神力の証で、小さな身体に合わせ巨大な鎚を、軽々と持ち上げているからこそ御瑞姫の称号……どれほど恐怖を覚えようが、敵に見せる背中はない。

何より、生まれも育ちも二十一世紀の彼女にとって、明治どころか二十世紀すら昔話の範疇だ。鹿、猪、猿のみならず、熊すら人里に降りてくるのが当たり前前の世の中で、狼たちの憎しみを彼女が受け止めるには……あまりにオツムが弱すぎた。

故に、トラジマは慧凜を操る。

「所詮自然は弱肉強食。滅んだってことは、自己責任。今更化けて出てくるなんて、逆恨みもはなはだし！」

「なるほど！ じゃ、遠慮しなくても……」

「よしっ！ やっちなえ、慧凜！」

「合点承知！」

食肉目である山猫にとって、群れで効率的に狩りをする狼たちは終生のライバルであり、目の上のタンコブ、排除すべき対象だ。犬猿の仲でなくとも、トラジマは生理的に彼らを受け入れるわけにはいかぬよって、

「飛んでけえ！」

恐れを払拭され、大義名分すら得た慧凜は、喜々として大得物『火愚鎚』をフルスイングッ！空振るも、発生した風圧が周囲に唸り、大木すら枝をしならせれば、狼たちの頭を押さえられる。

犬属は利口だ。効率的な狩りを信条とし、勝てぬ戦は挑まぬよう、遺伝子に刻み込んでいる。

慧凜の一振りには、だからこそ、事態の硬直を生む……かと思われた。

「んなっ！」

局所的な地震が泥地を揺さぶり、火愚鎚を振りかぶっていた慧凜がバランスを崩してタタラを踏んだ直後……文字通り大地の底から雄叫びを上げて、一对の鹿角が泥底から突きあがった！

不幸、巨大な角の一撃の、おまけの暴風をまともに受けて、トラジマだけが宙に舞う。

なんとか踏ん張って慧凜が体勢を整えた時には、見上げるほどの巨駒が、鼻息を荒げて戦場の中心を占めていた。

「でつか！ 鹿っ?!」

慧凜の知識では真実に届くはずもなく、おまけに相手は、沈黙考の時を与えてくれるほど優しくなかった。出現と同時に慧凜を敵と認めた乱入者は、息を整える間もなく、巨大な角を地面スレスレに構えて突進してきたのである。

「あぶねっ！」

緊急回避は間に合った。

泥に装束がまみれる躊躇など、する暇もないほどの反射的行動が、かろうじて慧凜の命を救う。

「四肢は日本羚羊のそれとして……あの頭部、エルクか!?!」

トラジマも、実物は見たことがない欧米のエルク。身の倍はあるほど左右に広がった立派な角が、まるで籠のように膜状に成長することから、和名をヘラジカと名付けられた、シカ科大型草食動物。対して四肢は、カモシカのような美脚、の形容の元となった、ウシ科に属する羚羊のそれである。日本の山中においては、険しい断

崖絶壁すら軽々と渡っていくその姿を、空を飛ぶと勘違いされるほどの身軽さを備えた列島固有種、特別天然記念物。

合成獣、ではあるまい。あれこそまさしく、

「……国摩呂くまろが、まだ生きていたか。カミだ！ 気をつける、慧凜！」

トラジマの忠告は、しかしカミの突進を追いかけていた少女に届いたかどうか。

突進の終了に併せて天高く振り上げた大鎚を、全力で叩きつけた彼女は……クルリと大軀を回転させながら後ずさりした相手の動きに追従できず、痺れる両手で急いで鎚を持ち上げようと目がく姿、まさに無防備。前髪をフワリと浮かせるほどの近さで、生暖かい荒い鼻息が慧凜の鼻先を撫で……

「逃げるっ」

相棒の悲鳴より早く、頭を低く下げてブルドーザーのように角を構えたカミの突進が、逆鋒慧凜の小さな身体を、軽々と秋空へ高くはね飛ばし、轢き逃げていった。

青天の霹靂へきれきにも似た上空の騒動に耐えかねたか、巨木の樹洞から飛び出したコウモリたちが、黒々と空へ染み出していく……だが、彼らは逃げるために外を指したのではない……薄く広がった彼らは、耳を現場に向け、周波数を変移しながら、騒動の中身を詳細に分析し。

「楯姫（佳紅矢）、いったん退く？」

「そ、そんなこと言われても、どうやって？」

蒼天を埋め尽くす勢いで殺到してきた天狗たちに追いつめられ、晴と佳紅矢は背中合わせに、事態の打開を思案する。

「一点突破しかあるまい……このまま封じられては、全体の作戦に  
関わるぞ」

狼たるヤツフサの言は尤もだ。天狗たちの目的も御瑞姫二人の封  
殺なのか、積極的な攻勢ではなく、適度な距離を保って戦線を自由  
自在に脈動させ、佳紅矢と晴に照準を合わせる隙を与えない。

戦乙女たちも、先から襲撃してきた大烏などの対応に追われてお  
り、事態は完全に膠着状態に陥っている。

「くっそ、もう我慢ならない！」

意を決したのは晴だった。彼女の右手甲には、少し前から連続し  
て早期解決を促す指示が飛び込んできており、何より、上空から彼  
女たちを嘲る天狗たちの嘲笑が、癪に障って堪忍袋の緒を切った。

白衣にタスキかけた弾帯から取り出したのは、12発限定の祝  
弾の1つ『辰』。実弾主体の黒い拳銃神器『仏滅』を華麗に開くと、  
流れる動きで祝弾を装填、ニヤリ、口元に勝ち誇りの笑みを浮かべ  
て、

「水司みなしたる異形の雷帝、辰！」  
トリガーを引き絞る。

目映い光を伴って、祝弾が蒼空を裂き……瞬後、爆雷が大気を弾  
き飛ばした。

晴天に生んだ霹靂。

神力によって弾丸に封じられた大電荷が急激な電位差を空間に生  
みだし、均衡破れた電界に、電子の奔流が流れ込む。

祝弾を中心に雷光が渦を巻き、戦場は一拳に嵐に見舞われた。放  
電の閃光が間断なく空気を白熱させ、荒れ狂う電子の流れに焼かれ  
た上空の天狗たちの悲鳴と、焼けた羽根の匂いが場に溢れ出す。

言うなれば、戦術的天災兵装。

人為的に生み出した神罰が空を焼き、カミを裂き、ピリピリと帯  
電した大気に皆が息を吞んで佇んで、

「楯姫、あとは頼んだよ！」

晴は、包囲網を突破して山を下っていった。

「惚けている暇はないぞ、今のうちに蹴散らせ！」

ヤツフサの叱咤に、佳紅矢は弾かれたように弓を取る。

敵は、もはや烏合の衆だ。

活気を取り戻した戦乙女たちが反撃を激しくし、佳紅矢もまた、握り直した鳴弓『射狩禍』を弾き、脅威の排除に従事した。

見上げれば、雷弾が暴れた空が、ポツカリと開いている。

「これが、安倍家の、力……」

奇跡すら制御せんとする、人間の業。

神への畏れを忘れ去り、科学信仰に傾倒した人類の傲慢は、しかし、夜の闇すら人工の明かりで退ける現代においてもなお、天罰という名で処断される。

天、にわかには掻き曇り、

「え、何？」

雷鳴轟き、稲光が煌めいた。

「祝弾の反動？ いや、違う！ 警戒しろ、佳紅矢！」

ゴゴゴゴと、臓腑を震わす低音が、押し潰すような威圧感を伴って、上空から降りてくる。突如吹き渡る風は生温く、ジツトリと重く手足にまとわりつき、魂を直に震わせるは神力の波動っ！

「籠っ！？」

それは、暗雲を掻き分けて顔を見せた。

鹿の角持つ異形の頭部。鱧にも似た口元から真つ赤な舌を覗かせて、金色の瞳が怪しく光る。鱗と剛毛に覆われた長大な胴が、雲の切れ目に又ラ又ラと動きを見せ、その全長は計り知れない。

「津頼ついでか！ 貴様、性懲りもなく」

「獣風情が、まだ地を這っておるか、ヤツフサ」

龍狼、相睨み……オロオロと対応に困る佳紅矢を置き去りにして、緊張感だけが際限なく高まっていく。



指令所は、すでに蜂の巣をつついたような騒ぎになっている。そんな巫女たちの狼狽をあざ笑うのか、猿の群が栗の木によじ登ってイガを剥きつつ耳を澄ませ……地上では、テン、イタチらが、何かを嗅ぎつけたか、脱兎の勢いで駆け巡っている。

「弾幕を絶やすな！ 敵の進路は限られている！ 今を凌げば、御瑞姫たちは動き出す！」

空海あけみの怒号が、巫女らの戦意を鼓舞する。

明、姫子、慧凜、佳紅矢の四人が、銘有りの大型カミの襲撃を受けて動きを封じられた今、敵の戦力は怒濤の勢いで本隊に襲いかかってくる。つてきていた。

「稲田姫（野乃華）と加流姫（晴）は何をやっている？！ 第1陣の後背について、敵を壊乱させるっ」

空海すら、休む間なく符を増産し、前線の固持に努めていた。彼女の神器『韻画凰砲』は筆である。その柱のような巨大な円筒の中で空海が指を踊らせば、数十という符に彼女の意志が伝達され、瞬く間に迎撃符と成って射出されていくのだ。

「簡単に言っけどな」

そんな彼女の背後で陣を管理している鈴瞳すずめの処理は煩雑を極めて

いる。彼女をグルリと半円状に、2メートルの高さに整列して取り巻く白い帯は、すべて整然と並べられた情報符だ。その数は刻一刻と増えていき、事務的に処理できる情報は後方の情報軍に自動的に配分されるとは言え、鈴瞳の瞳に映る符の列は、流れが加速されることこそあれ、止まることを知らない。

十指がちぎれるかと思うほどの勢いで浮かぶ符を叩くたび、的確な指示が飛び、情報が集積され、量産絡繰による支援砲撃が弾道軌道を描いて空を貫く。

が、情報を処理すれば処理するほど、両軍の情勢を数値化したグ

ラフは国津神優勢に傾いていく。減り続ける備蓄、漸増する被害、地の利を活かして凌いではいるが、それも御瑞姫が万全であるというのが前提だ。

敵がエース級を各御瑞姫にぶつけてきた今となっては、比我の戦力差だけが物を言う。想定されていなかった事態ではない。ミスがあったとすれば、晴と野乃華という遊撃隊を、稜線の救援に回してしまったことだ。

晴が物理的に、野乃華が電子的に隔離されてしまったため、タイムラグが生じ、その隙につけ込まれる形で、本隊への総攻撃を受けてしまった。

「楽できるなんて、思ってたかったけどな」

迎撃を考慮して、戦力は集中的に運用している。こちらの方が少数であるからと言って、戦線を薄く延ばす愚は犯していない。

最前を尽くしても、最良の結果となるわけではない。

むしろ世界はいつだって冷淡で、どこまでいっても世知辛く、こちらの思惑の斜め上を爆走しつつ、時に優しい顔を見せつけて派手に裏切ってくれるが常道。

「こちらの砲撃が弾かれていますっ！」

最前線から悲鳴が上がる。

送られてきた映像に、空海と鈴瞳の口元が、同時に笑みを浮かべた。

「塗り壁の集中運用によるグレートウォール作戦かつ！」

横一列、隙間なく並んだ塗り壁の、文字通りの歩く防壁が、時に砲弾によるめきながら、着実に本隊との距離を埋めてくる……。

私は、見た。

すべてを、観た。

この山に住まう、ありとあらゆる動物たちの、目と耳と鼻を駆使

して…… 55万3千6百53柱のカミたちとの、神体連結をもつて、それを可能となさしめた。

「もう、野乃華のやることについていけないわ」

望は驚愕し、動揺し、最初こそ喚いていたが……すぐに事態に順応して今や諦観の極みに達している。

無理もない。私が自分の魂を解放して、この山の霊脈ダイレクトアクセスに直結、それによつて、身動きする必要なく、この山中で繰り広げられている状況を把握する……と説明したつて、一笑に付されるのがオチだ。

現実に目の当たりにしたところで、望にその恩恵が与えられるわけでもないんだから、私が潜神ダイブしている間、彼女は虹色に輝きだした同僚の姿を、眺めていることしか出来ない。

『のの姉のやることは、いつもいつだつて思いつきで即断即決、テストなしのぶつつけ本番で、付き合わされる方が災難す』

『まったくだ…… 我は剣を制御するが本業、流れ込んでくるカミガミの思考をせき止め、余計な物を排除し、必要な情報だけを巫女に流すなどという作業に没頭するは、屈辱ですらある』

そう、この荒行は、私一人の実力じゃない。神樹、ヤツカ（荒・和）という3柱の神のバックアップがあると、確信していたからこそその暴挙。でなきゃこんな短時間に、膨大な神との対話を完遂することなんて出来やしない。

「で、何か分かったわけ？」

望の投げやりな問いに、

「うん…… 負けてる」

率直な感想を伝えた。

「嘘っ！？ じゃ、こんなところで悠長に休んでいる場合じゃないじゃない！」

それに関しては概ね同意。ここから一番近いのは逆鉾慧凜ちゃんの前線だけど……さて、本部の意向はどうなのか？

『叶、そっちは持ちそう？』

『塗り壁が想定以上に厚くて押し返せない……そこから敵の後ろに

回り込んで何とかして！」

『了、解！』

山との接続をワイヤレスに切り替える。  
同時に気持ちも、戦闘態勢に移行する。

「これより稲田姫2名は、窪地に特攻、本隊に肉迫する敵の後背を衝き、その勢いを削ぎ落とす！ で、どうよ？」

「どうもこうも、行くだけっしょ！」

やるべき事とやりたい事が一致して、望が元気に立ち上がる。

頷き合い、一步を踏み出して。

さあ、戦果を、上げて行こうかっ！

『のの姉！』

『空海とやらが動いたぞ』

冷や水をかけられた。

神樹とヤツカの警告が同時。

「いったい、何だっというの……よ？」

変化はすぐに訪れた。

世界が、突然、色を変えたのだ。

「これって……」

「神力の光？」

白と黒に明滅する粒子が、波紋のように揺れながら空間に満ちていく。質量の感じられない輝きは、紛うことなく霊的なものだ。そして、その波動に、私は覚えがある。

「空海女史と……鈴瞳さんの、神力？」

『水金治火木土天命戒が発動されたわっ！』

タイミング良く（悪く？）、叶の興奮した解説が入る。

「水金治火木土天命戒？」

私の疑問に、舌打ちしたのはヤツカ（和）だ。

『厄介なものを発動しおって。コレは呪いだ。水の気と金の気が、火木土の気を押さえ込み、一時的に霊場の属性を完全支配する……操られるぞ、野乃華』

「操られるって」

『五行相克を知っておるだろ？』

「木は土に克ち、土は水に克ち、水は火に、火は金に、金は木に克つっていう、あれだよな？」

『そうだ。ゆえに、王の紀里姫（鈴瞳）は丙と丁を抑え込み、庚の勢里姫（空海）は甲と乙を抑え込む』

「ん？ じゃ、私は？」

『稲田姫と知流姫は、己と戊の二面関係だろうが！』

「って、御瑞姫ってそんな五行十干関係にあったのか？ あ、あれ？ 神寄の時の霞の色が違うのって、そういう理由だったの？」

『知らずに御瑞姫になったのか、お前は！』

「いや、誰も教えてくれなかったし。ていうか、

「それなら、土属性の私と明は、直接支配されないんじゃない？」

『それを拡大解釈し、木を支配すれば間接的に土を抑えられるというのが、水金治火木土天命戒の真骨頂だ。この神力溢れる空間では、全てが水と金に有利に働く』

「なんつう反則技か。」

「言われれば、確かに、この空気は気持ち悪い。身動きが封じられる気がする。」

間接的被害って言う私でこれなら、直接影響を受けてる姫子と晴は、一体どんな苦痛を感じているんだか。

「が、私はまず、元凶にスポットを当てた。」

「山のカミガミを通じて、本部近辺の動物達の目を借りれば……濃い、この場所とは比べ物にならない濃厚な白黒の神力に覆われた本部が見えてくる。」

「その中心で、手を繋いで神力を噴出しているのは、紛れもなく空海女史と鈴瞳さんだ。」

「2人の格好が一変していて、言うなれば白い割烹着と、黒いメイド服に身を包んだような……もう巫女ですらないんですけど。」

「そんな2人から放たれる、白黒マーブルの力の奔流が、本部へと

肉薄していた塗り壁たちを、怒涛の勢いで押し返している。

「す、凄い」

『見とれてる場合じゃないでしょ！ 野乃華も早く、敵の後背を突いてよ！』

叶に怒られる……同時に、肌に触れる二色の神力の、圧力が高まってくる。

これは、確かに厄介な。

とにかく、迷っている場合じゃない。

「気を取り直して、行くよ、望！」

「もう、何が何だか分かんないけど、とにかく合点！」

双方ともに譲らぬ攻防が、更に混乱の度合いを増していく。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0722h/>

---

巫女舞闘伝ののか一閃

2010年10月24日22時40分発行